東九州自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

－ 15 －

石堂大石ヶ丸の氷室
福間菜切古墳群第２次
中村西峰尾遺跡
中村山柿遺跡第２次
松江黒部遺跡
川内下野添遺跡第１･２次
大村上野地遺跡
荒堀山田原遺跡

福岡県豊前市・築上郡築上町所在遺跡の調査

２０１４

九州歴史資料館

序

福岡県では、平成19年度より東九州自動車道（苅田北九州空港IC以南）に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施してきました。本報告書は、平成22年度から24年度にかけて行った、築上郡築上町に所在する石堂大石ヶ丸の氷室、福間菜切古墳群、豊前市に所在する中村西峰尾遺跡、中村山柿遺跡（2次）、松江黒部遺跡、川内下野添遺跡（1･2次）、大村上野地遺跡・荒堀山田原遺跡の調査の記録です。

中村西峰尾遺跡、松江黒部遺跡、大村上野地遺跡、荒堀山田原遺跡からは縄文時代の集落跡や狩猟場跡など、福間菜切古墳群からは古墳時代後期の終末期群集墳、中村山柿遺跡・川内下野添遺跡からは古代～中世の集落跡、石堂大石ヶ丸の氷室からは近世の氷室跡といったように、各遺跡からは、縄文時代から近世にかけてのさまざまな遺構・遺物が発見されました。

本報告書が教育、学術研究とともに、文化財愛護思想の普及・定着の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査・報告書の作成にいたる間には、関係諸機関や地元をはじめ多くの方々にご協力・ご助言をいただきました。ここに、深く感謝いたします。

平成26年3月31日

九州歴史資料館

館長　荒巻　俊彦

例　言

1．本書は、東九州自動車道建設に伴って発掘調査を実施した、福岡県築上郡築上町石堂所在の石堂大石ヶ丸の氷室、同石堂・福間所在の福間菜切古墳群（2 次）、豊前市中村所在の中村西峰尾遺跡・中村山柿遺跡（2 次）、豊前市松江所在の松江黒部遺跡、川内所在の川内下野添遺跡（1･2 次）、豊前市大村所在の大村上野地遺跡、荒堀所在の荒堀山田原遺跡の記録である。東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告の第 15 集にあたる。

2．発掘調査と整理報告は、西日本高速道路株式会社の委託を受けて、福岡県教育庁総務部文化財保護課・九州歴史資料館が実施した。

3．本書に掲載した遺構写真の撮影は各遺跡の調査担当者が行い、遺物写真は北岡伸一が行った。空中写真の撮影は（有）空中写真企画に委託し、ラジコンヘリコプターによる撮影を行った。

4．本書に掲載した遺構図の作成は各調査担当者が行い、発掘作業員が補助した。また、中村西峰尾遺跡の一部の図については（株）日航コンサルタントに委託し作成した。

5．出土遺物の整理作業は、九州歴史資料館において、小池史哲・城門義廣の指導の下に実施した。

6．出土遺物及び図面・写真等の記録類は、九州歴史資料館において保管する。

7．本書に使用した分布図は国土交通省国土地理院発行の 1/50,000 地形図「中津」を加筆改変したものである。また、本書に使用した調査区位置図は椎田町・豊前市発行の 1/2,500 基本図を加筆改変したものである。本書で使用する方位は、世界測地系による座標北である。

8．平成 23 年度から、福岡県教育庁総務部文化財保護課の文化財発掘調査業務は、組織改編のため、九州歴史資料館に移管された。

9．石堂大石ヶ丸の氷室の調査・報告は城門義廣が担当した。福間菜切古墳群 2 次、中村山柿遺跡 2 次、川内下野添遺跡 1 次・同 2 次、荒堀山田原遺跡の調査は小澤佳憲が、報告は小澤・大森真衣子・細石朋希が担当した。中村西峰尾遺跡の調査・報告は新原正典が担当した。松江黒部遺跡・大村上野地遺跡の調査は高橋章・藤島志考が、報告は藤島・秦憲二が担当した。また、本書Ⅳ－４－（3）の須恵器胎土分析については、岡山理科大学白石純教授に共同執筆をお願いした。各執筆分担の詳細については各文末に記載した。本書の編集は小澤が担当した。

目　次

Ⅰ　はじめに …… 1
1　調査に至る経緯 …… 1
2　調査の組織 …… 4
Ⅱ　位置と環境 …… 6
1　地理的環境 …… 6
2　歴史的環境 …… 7
Ⅲ　石堂石ヶ丸の氷室の調査の報告 …… 11
1　遺跡の概要 …… 11
2　調査の経過 …… 12
3　遺構と遺物 …… 12
(1)　氷室跡 …… 12
4　総括 …… 15
Ⅳ　福間菜切古墳群第２次調査の報告 …… 17
1　遺跡の概要 …… 17
2　調査の概要 …… 17
3　遺構と遺物 …… 19
(1)　地形 …… 19
(2)　８号墳 …… 21
(3)　９号墳 …… 25
(4)　10号墳 …… 27
(5)　そのほかの出土遺物 …… 30
4　総括 …… 32
(1)　福間菜切古墳群の全体像 …… 32
(2)　築上地域における古墳玄室の平面形態 …… 35
(3)　福間菜切古墳群出土須恵器の形態的特質 …… 39
Ⅴ　中村西峰尾遺跡の調査の報告 …… 53
1　遺跡の概要 …… 53
2　調査の概要 …… 53
3　遺構と遺物 …… 57
(1)　検出遺構 …… 57
(2)　基本土層 …… 57
(3)　方形区画遺構の測量調査 …… 58
(4)　北半部の調査 …… 63
(5)　外郭土塁の調査 …… 66
(6)　上層の調査 …… 67
(7)　下層の調査 …… 73
(8)　C14年代分析資料出土遺構 …… 78
(9)　出土遺物 …… 79
(10)　線刻石 …… 90
4　中村西峰尾遺跡における自然化学分析 …… 99
(1)　放射性炭素年代測定 …… 99
(2)　動物遺存体同定 …… 103
5　総括 …… 105
(1)　縄文時代の遺構と遺物について …… 105
(2)　須恵器散布遺構について …… 105
(3)　線刻石について …… 105
(4)　方形区画遺構について …… 107
(5)　C14年代測定結果について …… 109

Ⅵ　中村山柿遺跡第２次調査の報告 ……111
1　遺跡の概要 ……111
2　調査の概要 ……113
3　遺構と遺物 ……113
(1)　概要 ……113
(2)　掘立柱建物跡 ……115
(3)　土坑 ……117
(4)　落ち込み状遺構 ……119
(5)　そのほかの出土遺物 ……119
4　総括 ……121
Ⅶ　松江黒部遺跡の調査の報告 ……123
1　遺跡の概要 ……123
2　調査の概要 ……123
3　遺構と遺物 ……126
4　総括 ……126
Ⅷ　川内下野添遺跡1･2次調査の報告 ……127
1　遺跡の概要 ……127
2　調査の概要 ……127
3　１次調査出土の遺構と遺物 ……132
(1)　竪穴式住居跡 ……132
(2)　掘立柱建物跡 ……136
(3)　土坑 ……140
(4)　溝跡 ……144
(5)　柵列 ……146
(6)　性格不明遺構 ……146
(7)　そのほかの出土遺物 ……147
4　２次調査出土の遺構と遺物 ……151
(1)　竪穴住居跡 ……151
(2)　土坑 ……152
(3)　柵列 ……152
(4)　谷状落ち込み ……153
(5)　第２次調査の出土遺物 ……153
5　総括 ……155
Ⅸ　大村上野地遺跡 ……157
1　遺跡の概要 ……157
2　調査の概要 ……157
3　遺構と遺物 ……159
(1)　土坑 ……159
(2)　溝跡 ……162
4　総括 ……162
(1)　遺構について ……162
(2)　大村上野地遺跡出土の打製石鏃について ……163
(3)　下層グリッドについて ……163
Ⅹ　荒堀山田原遺跡 ……165
1　遺跡の概要 ……165
2　調査の概要 ……166
3　遺構と遺物 ……167
(1)　土坑 ……167
(2)　溝跡 ……167
4　総括 ……168

図版目次

図版 1　1　石堂大石ヶ丸の氷室調査着手前（南東から）
2　完掘した氷室跡（南東から）　3　氷室跡完掘状況近景（南東から）
図版 2　1　福間菜切古墳群第 2 次調査地遠景（南東から）　2　調査区近景（東から）
図版 3　1　8 号墳完掘全景（上が西）　2　9 号墳完掘全景（上が西）
3　10 号墳完掘全景（上が西）
図版 4　1　調査区全景（西から）　2　8 号墳検出状況（西から）
3　8 号墳石室・閉塞検出状況（南東から）
図版 5　1　8 号墳完掘状況（南東から）　2　8 号墳玄室完掘・遺物出土状況（南西から）
3　9 号墳検出状況（東から）
図版 6　1　9 号墳石室・閉塞検出状況（東から）　2　9 号墳完掘状況（東から）
3　9 号墳玄室完掘状況（南西から）
図版 7　1　10 号墳石室・閉塞検出状況（東から）　2　10 号墳完掘状況（東から）
3　10 号墳玄室完掘状況（北から）
図版 8　福間菜切古墳群第 2 次調査出土遺物その①
図版 9　福間菜切古墳群第 2 次調査出土遺物その②
図版 10　1　中村西峰尾遺跡上空より豊前市街地をのぞむ（南西から）
2　調査地周辺地形（東から）　3　調査地周辺地形（上が北）
図版 11　1　遺跡より大分県姫島・国東半島方面をのぞむ（南西から）
2　調査地遠景（北東から）
3　調査地遠景（東から）
図版 12　1　調査着手前遠景（北から）　2　調査着手前遠景（北東から）
3　調査地遠景（北西から）
図版 13　1　調査着手前全景（北東から）　2　調査着手前全景（北から）
図版 14　1　上層遺構（北東から）　2　上層遺構拡大　（北東から）
図版 15　1　第 1 トレンチ全景（南から）　2　第 10 トレンチ全景（北から）
3　第 10 トレンチと外郭土塁（東から）
図版 16　1　第 14 トレンチ全景（東から）　2　第 8 トレンチ土層（西から）
3　基本土層（東から）
図版 17　1　北石垣（発掘前東から）　2　東石垣（発掘前北から）　3　北石垣（発掘前西から）
図版 18　1　北石垣北東隅石（北東から）　2　北石垣中央部（北から）
3　北石垣断面（西から）
図版 19　1　円周土塁（東から）　2　円周土塁開口部（南から）　3　空堀（西から）
図版 20　1　外郭土塁（発掘前南から）　2　外郭土塁土層（北から）　3　上層全景（北東から）
図版 21　1　1 号土坑縄文土器出土状況（東から）　2　2 号土坑（北から）
3　3 号土坑（西から）
図版 22　1　4 号土坑（西から）　2　柵列（東から）　3　柵列柱穴 4（東から）
図版 23　1　須恵器散布遺構（北から）　2　須恵器散布遺構拡大（北から）
3　須恵器集中部（南から）
図版 24　1　焼土土坑（西から）　2　下層調査風景（北西から）　3　下層調査状況（北から）
図版 25　1　下層遺構全景（上が南西）　2　下層遺構拡大（上が南西）
図版 26　1　5 号土坑（東から）　2　6 号土坑（東から）　3　7 号土坑（東から）
図版 27　1　8 号土坑（東から）　2　9 号土坑（東から）　3　10 号土坑（西から）
図版 28　1　11 号土坑（南から）　2　集石土坑（東から）　3　環状石斧出土状況（西から）
図版 29　1　獣骨出土状況（西から）　2　線刻石 1･2 発見状況（南から）
3　線刻石 1 全景（南から）
図版 30　1　線刻石 1A 面　2　線刻石 1A 面大船　3　線刻石 1A 面大船舵部分
図版 31　1　線刻石 1B 面　2　線刻石 2 全景（西から）　3　線刻石 2A 面
図版 32　1　線刻石 2B･C 面　2　線刻石 2B 面　3　線刻石 2C 面
図版 33　1　線刻石 3　2　線刻石 3 拡大　3　線刻石 4

図版 34　1　線刻石 4（拡大）　2　線刻石 5 表面　3　線刻石 5 裏面
図版 35　中村西峰尾遺跡出土縄文土器・石器①
図版 36　中村西峰尾遺跡出土石鏃①
図版 37　中村西峰尾遺跡出土石鏃②、石器②
図版 38　中村西峰尾遺跡出土須恵器
図版 39　中村西峰尾遺跡出土陶磁器①
図版 40　中村西峰尾遺跡出土陶磁器②、鉄・ガラス製品・銭貨
図版 41　1　中村山柿遺跡第 2 次調査地遠景（南から）　2　調査区近景（東から）
図版 42　1　Ⅰ区全景（東から）　2　Ⅱ区全景（東から）
図版 43　1　1 号掘立柱建物跡（西から）　2　2 号掘立柱建物跡（西から）
3　3 号掘立柱建物跡（南から）
図版 44　1　4 号掘立柱建物跡（西から）　2　1 号土坑（東から）　3　2 号土坑（北から）
図版 45　1　3 号土坑（北から）　2　4 号土坑（東から）　3　5 号土坑（東から）
図版 46　中村山柿遺跡第 2 次調査出土遺物
図版 47　1　松江黒部遺跡全景（上空から）　2　同上（北西から）　3　調査区全景（上空から）
図版 48　川内下野添遺跡 1･2 次調査区全景（合成―上が北）
図版 49　1　川内下野添遺跡の立地環境（南から）　2　川内下野添遺跡の立地環境（東から）
図版 50　1　1 次調査Ⅰ・Ⅱ区（上が北）　2　1 次調査Ⅰ区（上が北）
図版 51　1　1 次調査Ⅱ区（上が北）　2　1 次調査Ⅲ区（上が北）
図版 52　1　1 号竪穴住居跡（南西から）　2　1 号竪穴住居跡カマド（東から）
3　2 号竪穴住居跡（南西から）
図版 53　1　2 号竪穴住居跡カマド（南東から）　2　3 号竪穴住居跡（南東から）
3　1 号掘立柱建物跡（東から）
図版 54　1　1 号土坑（東から）　2　1 号土坑土層（西から）　3　2 号土坑（北から）
図版 55　1　2 号土坑土層（南西から）　2　3 号土坑（南東から）　3　4 号土坑（北東から）
図版 56　1　5 号土坑（北から）　2　6 号土坑（南西から）　3　8 号土坑（南から）
図版 57　1　11 号土坑（北から）　2　12 号土坑土層（南西から）　3　13 号土坑（北から）
図版 58　1　1 号溝土層（北東から）　2　SX － 01（北東から）　3　SX － 02（南東から）
図版 59　川内下野添遺跡第 1 次調査出土遺物その①
図版 60　川内下野添遺跡第 1 次調査出土遺物その②
図版 61　1　2 次調査区（西から）　2　調査区全景（上が西）
図版 62　1　14 号土坑（東から）　2　谷状落ち込み内 1 号トレンチ土層（南西から）
3　谷状落ち込み内 2 号トレンチ土層（西から）
図版 63　1　川内下野添以降第 2 次調査出土遺物
図版 64　1　大村上野地遺跡全景（北から）　2　調査区北壁土層（南から）
3　調査区西壁土層（東から）　4　同上 2（東から）
図版 65　1　1 ～ 4 号土坑（西から）　2　5 ～ 8 号土坑（東から）　3　9 号土坑（西から）
図版 66　1　1 号溝（東から）　2　下層グリッド 4（南から）　3　下層グリッド 5（西から）
4　下層グリッド 6（西から）　5　遺跡出土石器
図版 67　1　荒堀山田原遺跡の立地環境（東から）　2　荒堀山田原遺跡の立地環境（南西から）
3　調査区全景（上が西）
図版 68　1　1 号土坑（南東から）　2　2 号土坑（北から）　3　3 号土坑（北から）

表目次

第 1 表　東九州自動車道中津工事事務所管内における埋蔵文化財発掘調査地点一覧 …… 3
第 2 表　築上地域の後期群集墳における主体部の規模 …… 36
第 3 表　胎土分析資料一覧（その①）…… 45
第 4 表　胎土分析成果一覧（その②）…… 46
第 5 表　中村西峰尾遺跡出土石器一覧（その①）…… 80
第 6 表　中村西峰尾遺跡出土石器一覧（その②）…… 81

挿図目次

第 1 図　東九州自動車道路線の概略と調査地点（中津工事事務所管内分）…… 2
第 2 図　周辺の歴史的環境（1/50,000）…… 8
第 3 図　石堂・福間地区における調査地周辺の旧地形図（1/15,000）…… 11
第 4 図　石堂・福間地区における調査区周辺地形と計画路線（1/5,000 ）…… 12
第 5 図　石堂・大石ヶ丸の氷室周辺地形図（1/200）…… 13
第 6 図　氷室実測図（1/40）…… 14
第 7 図　福間菜切古墳群第 2 次調査着手前の地形図（1/200）…… 16
第 8 図　表土除去後の地形と古墳の分布（1/200）…… 18
第 9 図　8 号墳墳丘測量図（1/100）…… 20
第 10 図　8 号墳石室実測図（1/60）…… 22
第 11 図　9 号墳墳丘測量図（1/100）…… 25
第 12 図　9 号墳石室実測図（1/60）…… 26
第 13 図　10 号墳墳丘測量図（1/100）…… 28
第 14 図　10 号墳石室実測図（1/60）…… 29
第 15 図　福間菜切古墳群第 2 次調査出土土器実測図（1/3）…… 30
第 16 図　福間菜切古墳群第2次調査出土鉄器・石器実測図（1/2）…… 31
第 17 図　福間菜切古墳群 1･2 次調査区内古墳分布図（1/600）…… 33
第 18 図　築上地域の後期群集墳における玄室サイズ …… 37
第 19 図　関連遺跡群の分布 …… 39
第 20 図　京築地域出土須恵器坏身の形態バリエーション …… 40
第 21 図　高台部断面形態の変異 …… 42
第 22 図　窯跡出土資料の胎土組成比較 …… 47
第 23 図　坏身の形態属性と胎土組成の相関性 …… 47
第 24 図　各遺跡出土資料と各窯跡出土資料の相関性 …… 49
第 25 図　中村地区における発掘調査地点位置図（1/5,000）…… 54
第 26 図　中村西峰尾遺跡の調査範囲とトレンチ位置図（1/2,500）…… 56
第 27 図　基本土層図（1/60）…… 58
第 28 図　地形測量図（1/600）…… 59
第 29 図　方形区画遺構平面図（1/1,000）…… 61
第 30 図　方形区画石垣（部分）実測図（1/50）…… 62
第 31 図　トレンチ実測図その①（1/200）…… 64
第 32 図　トレンチ実測図その②（1/200）…… 65
第 33 図　外郭土塁土層図（1/40）…… 67
第 34 図　上層遺構配置図（1/500）…… 68
第 35 図　上層遺物出土状況（1/500）…… 69
第 36 図　1 号土坑実測図（1/40）…… 70
第 37 図　2 ～ 5 号土坑実測図（1/40）…… 71
第 38 図　柵列実測図（1/100）…… 72
第 39 図　須恵器散布遺構実測図（1/10）…… 73
第 40 図　下層遺構配置図（1/500）…… 74
第 41 図　下層遺物出土状況（1/500）…… 75
第 42 図　6 ～ 10 号土坑実測図（1/40）…… 77
第 43 図　11 号土坑･焼土土坑･集石土坑実測図（1/40）…… 78
第 44 図　中村西峰尾遺跡出土石器実測図その①（2/3）…… 82
第 45 図　中村西峰尾遺跡出土石器実測図その②（2/3）…… 83
第 46 図　中村西峰尾遺跡出土石器実測図その③（1/3）…… 84
第 47 図　中村西峰尾遺跡出土縄文土器実測図（1/3）…… 85
第 48 図　中村西峰尾遺跡出土須恵器実測図（1/3）…… 86
第 49 図　中村西峰尾遺跡出土陶磁器実測図（1/3）…… 87

第 50 図　中村西峰尾遺跡出土金属・ガラス製品実測図(1/3)…… 88
第 51 図　中村西峰尾遺跡出土銭貨拓影(1/1)…… 89
第 52 図　線刻石 1 ～ 3･5 出土位置図(1/250)…… 90
第 53 図　線刻石 1 実測図(1/20)…… 91
第 54 図　線刻石 1A･B 面実測図、拓影（1/6）…… 92
第 55 図　線刻石 2 実測図(1/20)…… 93
第 56 図　線刻石 2A 面実測図、拓影(1/10)…… 94
第 57 図　線刻石 2B･C 面実測図、拓影(1/10)…… 95
第 58 図　線刻石 3･4 実測図、拓影(1/5)…… 96
第 59 図　線刻石 5 実測図、拓影(1/4)…… 97
第 60 図　試料1･2暦年代較正曲線……100
第 61 図　試料3･4暦年代較正曲線……101
第 62 図　試料5･6暦年代較正曲線……102
第 63 図　中村西峰尾遺跡出土の動物遺存体……104
第 64 図　富山市公卿石線刻拓影(富山市考古資料館紀要より転載)……106
第 65 図　築上町浜宮の競馬(椎田町史より転載)……108
第 66 図　中村山柿遺跡第 2 次調査区遺構配置図(1/250)……112
第 67 図　1 ～ 4 号掘立柱建物実測図(1/60)……114
第 68 図　1 ～ 5 号土坑実測図(1/40)……116
第 69 図　中村山柿遺跡第 2 次調査出土遺物実測図(1/3)……118
第 70 図　松江黒部遺跡における発掘調査地点位置図 (1/5,000)……124
第 71 図　調査区周辺地形図(1/400)……125
第 72 図　松江黒部遺跡遺構配置図(1/200)……126
第 73 図　川内下野添遺跡における発掘調査地点位置図 (1/5,000)……128
第 74 図　川内下野添遺跡 1･2 次調査区遺構配置図(1/300)……129
第 75 図　1 ～ 6･10 号竪穴住居跡実測図 (1/60)、1･2 号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)……133
第 76 図　7 ～ 9･11 号竪穴住居跡実測図(1/60)……135
第 77 図　1･2･4 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)……137
第 78 図　5 ～ 7 号掘立柱建物跡実測図(1/60)……139
第 79 図　3 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)……141
第 80 図　1 ～ 7 号土坑実測図(1/40)……143
第 81 図　8 ～ 13 号土坑実測図(1/40)……144
第 82 図　川内下野添遺跡第 1 次調査各遺構出土土器実測図(1/3)……145
第 83 図　川内下野添遺跡第1次調査ピット・Ⅲ区黒色包含土層出土器実測図(1/3)……149
第 84 図　川内下野添遺跡第 1 次調査包含層等出土土器実測図(1/3)……150
第 85 図　12･13 号竪穴住居跡実測図（1/60)、14 号土坑実測図（1/40）……152
第 86 図　西側落ち込み部トレンチ土層図(1/60)……153
第 87 図　川内下野添遺跡第 2 次調査区出土遺物実測図(1 ～ 10 は 1/3、11 ～ 14 は 1/2)……154
第 88 図　大村・荒堀地区の調査区位置図(1/5,000)……158
第 89 図　大村上野地遺跡遺構配置図(1/300)……159
第 90 図　調査区壁土層図(1/40)……160
第 91 図　1 ～ 9 号土坑実測図(1/40)……161
第 92 図　9 号土坑出土遺物実測図（5/3）……162
第 93 図　荒堀山田原遺跡第 1 次調査区遺構配置図(1/200)……164
第 94 図　1 ～ 3 号土坑実測図(1/40)……166

Ⅰ　はじめに

１　調査に至る経緯

東九州自動車道の概要　東九州自動車道（以下､｢東九州道｣とする）は､福岡県北九州市を起点とし、大分市、延岡市、宮崎市を経由し鹿児島市に至る基幹道路として計画された、延長約 436 キロメートルの高速自動車国道である。

九州における高速道路網は、最も早くに計画された九州縦貫自動車道が、佐賀県鳥栖市より南側において九州島の西寄りを南北に貫いており、九州島中～南部における西側の交通の利便性は早くに向上した。一方で、東側に位置する大分・宮崎地方の利便性はさほど改善されなかった。

東九州道が開通すれば、九州地方の８カ所の基幹都市圏のうち東九州地方に位置する５カ所の基幹都市圏の間を相互に結ぶ、東九州地方の高速交通ネットワークが完成することになる。さらに、縦貫道･大分自動車道･宮崎自動車道などと接続することで九州地方全体の広域的な連携が向上し、地域産業及び地域経済の活性化を促し、沿線諸都市の発展等に資することが期待されることから、地域における重要な基幹交通として、全線開通が期待されているところである。

県内における東九州道の工事　福岡県内では、すでに 2006 年には九州縦貫道からの分岐地点である北九州 JCT から､苅田北九州空港 IC までの 8.2 ｋｍが開通している。苅田北九州空港～県境間は、2005 年 10 月に日本道路公団の分割民営化により誕生した西日本高速道路株式会社（ＮＥＸＣＯ西日本）九州支社により工事が進められており、苅田北九州空港ＩＣから豊津ＩＣまで（福岡工事事務所管轄）は平成 25 年度末に開通予定である。豊津ＩＣから椎田ＩＣまでは一般国道自動車専用道路として 1993 年 12 月に全線開通した有料の椎田道路（椎田バイパス）を利用することとなっており､椎田ＩＣから宇佐ＩＣまで（中津工事事務所管轄）は平成 26 年度末に開通予定となっている。

東九州道建設に先立つ発掘調査　東九州道の整備計画策定からの文化財調査（第１図）にかかる経緯については，先行する報告書に詳しく記載されているために本書では割愛することとし、以下、本書で報告する各遺跡についての個別的な調査に至る経緯を記述したい。

石堂大石ヶ丸の氷室であるが、旧椎田町発行の遺跡分布地図に石堂古墳群として周知化された終末期古墳群が工事地に隣接して存在することから、平成 23 年７月 20 日に試掘調査を行った。試掘の結果氷室とみられる石組を伴う掘り込みが発見され、調査に至った。調査の結果、近世～現代と推定される氷室１基を発見した。

福間菜切古墳群は、周知の埋蔵文化財包蔵地である福間菜切古墳群の範囲内にあたり、工事地のすぐ横を通る椎田道路の建設時にも計６基の古墳が調査されていることから、平成 22 年４月 28 日に確認調査を行い、古墳の所在を確認したことを受けて調査に至った。調査の結果、古墳時代後期の小円墳３基を発見した。

中村西峰尾遺跡は、周知の埋蔵文化財包蔵地ではなかったが、工事前の樹木の伐採終了後に現地調査を行ったところ丘陵の頂部に広く平坦な造成面があり、石垣を伴っていたことから、平成 23 年３月 14･15 日に試掘を行い、明確な遺構や遺物こそ見られなかったものの、中世山城の可能性を考えて調査に至った。調査の結果、平坦面や石垣は近代以降の造成による可能性が高いことが判明したが、造成の下層から縄文時代の土坑を検出し、縄文土器や打製石器が出土した。

中村山柿遺跡の第２次調査は、圃場整備事業にともなって豊前市教育委員会が平成 17 年度に調

第１図　東九州自動車道の概略と調査地点（中津工事事務所管内分）

第１表　東九州自動車道中津工事事務所管内における埋蔵文化財発掘調査地点一覧

地点	遺跡名	所在地	対象面積(㎡)	試掘年度	調査面積(㎡)	調査年度	報告年度	既刊報告書番号	備考
2	石堂大石ヶ丸遺跡	築上郡築上町石堂	9027	H21～23	200	H23	H25	15集(本冊)	
3	福間菜切古墳群	築上郡築上町石堂	16644	H21～23	1000	H22	H25	15集(本冊)	
4	頭無古墳群 西一町田遺跡	築上郡築上町上ノ河内	19420	H22				-	遺跡なし
5		築上郡築上町上ノ河内	2840	H21				-	遺跡なし
6	中村西峰尾遺跡	築上郡築上町上ノ河内・豊前市中村	26972	H22	15000	H23･24	H25	15集(本冊)	
7	中村山柿遺跡	豊前市中村	16579	H21･22	700	H22	H25	15集(本冊)	
8		豊前市中村・馬場	10354	H21				-	遺跡なし
9		豊前市中村・松江	42434	H24					
10		豊前市松江	9905	H23				-	遺跡なし
11		豊前市松江	26570	H21･23				-	遺跡なし
12	松江黒部遺跡	豊前市松江・四郎丸	14462	H21	600	H23	H25	15集(本冊)	
13		豊前市四郎丸	12986	H21･23				-	遺跡なし
14		豊前市四郎丸	2390	H21				-	遺跡なし
15		豊前市四郎丸	9735	H22				-	遺跡なし
16		豊前市四郎丸	10432	H22				-	遺跡なし
17	川内下野添遺跡	豊前市川内	15972	H21～23	3600	H22･23	H25	15集(本冊)	
18		豊前市川内	16040	H21～23				-	遺跡なし
19	鳥越下屋敷遺跡	豊前市鳥越	4963	H23･24	760	H24			
20	大村湯福遺跡	豊前市大村	8762	H23･24	1300	H24			
21		豊前市大村	0						
22		豊前市大村	0						
23		豊前市大村	0						
24	天地山遺跡	豊前市大村	6777	H20・22				-	遺跡なし
25	大村上野地遺跡 大村シトキ田遺跡	豊前市大村・荒堀	10527	H20･22・23	2600	H23	H25	15集(本冊)	一部豊前市により調査
26	荒堀山田原遺跡	豊前市荒堀	21821	H21～24	1000	H22	H25	15集(本冊)	
27		豊前市荒堀	9823	H21･22				-	遺跡なし
28		豊前市大西	23122	H21～23				-	遺跡なし
29	塔田琵琶田遺跡 大西遺跡 西ノ原遺跡 時末遺跡	豊前市大西・永久・塔田・久路土	63733	H21～24	35000	H23～25			一部豊前市により調査
30	久路土馬踏遺跡	豊前市久路土	9463	H23				-	遺跡なし
31	鬼木溝添遺跡	豊前市鬼木	12636	H23				-	遺跡なし
32	鬼木鉾立遺跡	豊前市鬼木	25256	H21・23	5500	H24			
33	緒方古墳群 七ッ枝遺跡 春屋敷遺跡 道ノ本遺跡	築上郡上毛町緒方	12456	H20～23	3500	H20～22	H24	8集	上毛町試掘
34	龍毛遺跡	築上郡上毛町緒方	11732	H20･21・23･24	5000	H21･24	H24	8集	上毛町試掘
35	下尻高遺跡 ハカノ本遺跡	築上郡上毛町緒方・尻高	11517	H20･21	7200	H20･21	H24	7集	一部上毛町により調査
36	安雲山田遺跡	築上郡上毛町安雲	10135	H20	9400	H20			〃
37	安雲山田遺跡	築上郡上毛町安雲・宇野	24970	H20･21		H20･21	H24	7集	〃
38		築上郡上毛町土佐井	22252	H20				-	遺跡なし
39	土佐井遺跡2C-4区	築上郡上毛町土佐井	21860	H20～22	4400	H22～23	H25	16集	
40	土佐井遺跡2A-2区	築上郡上毛町土佐井	13476	H20～22	600	H23	H25	16集	一部上毛町により調査
41	土佐井小迫遺跡 唐原山城跡	築上郡上毛町土佐井	7887	H21･22･24	1500	H22･24	H25	16集	
42	ガサメキ古墳群 穴ヶ葉山南遺跡	築上郡上毛町下唐原	33002	H21･22･24	4000	H22・24	H25	16集	一部上毛町により調査
43		築上郡上毛町下唐原	25215	H21･22･23				-	遺跡なし
44	大久保楢迫遺跡 (新池南古墳)	築上郡上毛町下唐原	13452	H22	7500	H22	H25	16集	一部上毛町により調査
45		築上郡上毛町下唐原	11997	H24					遺跡なし
46	皿山古墳群	築上郡上毛町下唐原・上唐原	23977	H22～24	12000	H23･24			
47	四ッ塚山古墳群	築上郡上毛町上唐原	7193	H22･23	6600	H23			
48	鏡迫古墳群	築上郡上毛町上唐原	4577	H25	2000	H25			
49	榎町遺跡	築上郡上毛町上唐原	14250	H24	8940	H24・25			
50	榎町遺跡	築上郡上毛町上唐原	4735	H23	1050	H24・25			一部上毛町により調査

査を行った中村山柿遺跡第1次調査地に近接し、平成21年10月5･6日に試掘調査を行った結果遺構・遺物が確認されたため調査に至った。調査の結果､中世の掘立柱建物からなる集落を検出した。

松江黒部遺跡は、用地買収の進捗に従って平成22年1月20･21日に試掘調査を行った結果、遺物の出土はなかったものの多数の小ピットを主体とした遺構群が発見され、調査に至った。調査の結果、性格不明の土坑やピットを少量検出したが、時期を示すような遺物は出土しなかった。

川内下野添遺跡第1･2次調査地点は、東に大富神社という由緒ある神社が存在し、付近に周知の埋蔵文化財こそないものの遺跡の存在する可能性があることから平成22年11月24･25日に試掘調査を行った結果、遺構・遺物を確認し、発掘調査に至った。調査の結果、古代の竪穴住居と掘立柱建物からなる集落の一部を検出した。

大村上野地遺跡は南側に貴重な旧石器時代の遺物を出土した青畑向原遺跡があり、北側には中世宇都宮氏一族の城館と伝えられる大村城跡も近接しており、平成10月28日と11月9･0日に周辺を含め広い範囲の試掘調査を行った。その結果、大半は大きく削平されていたものの一部に遺構が残っていることが確認され、発掘調査に至った。調査の結果、性格不明の土坑やピットに伴って少量の遺物が出土したが、遺跡の所属時期や性格は明らかにはできなかった。

荒堀山田原遺跡は周辺に周知の埋蔵文化財包蔵地こそ見られないものの、低平な台地の緩やかな東斜面上に位置しており，遺跡にとっては好立地である。平成22年10月27日に試掘調査を行った結果、遺物こそ採集されなかったものの柱穴などの遺構が確認されたため調査に至った。調査の結果落とし穴状の土坑を3基検出した。形状から縄文時代以前に属するものと思われるが出土遺物がなく詳細は不明である。

2　調査の組織

平成22年～24年度（発掘調査)、25年度（整理報告）に関わる関係者は次の通りである。なお、県の組織改革により、平成23年度以降は埋蔵文化財調査業務全般が九州歴史資料館へと移管されている。

	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度
西日本高速道路株式会社九州支社				
支社長	久保晶紀 (～9.30) 本間清輔 (10.1～)	本間清輔	本間清輔	本間清輔
中津工事事務所長	上羽坪勲	上羽坪勲 (～6.30) 三瀬博敬 (7.1～)	三瀬博敬	三瀬博敬 (～6.30) 宗方鉄生 (7.1～)
副所長（技術担当）	大串久之 (～9.30) 森田忠敏 (10.16～)	森田忠敏 (～9.30) 小島二郎 (7.1～)	小島二郎	小島二郎
副所長（事務担当）	平松善司	中村重俊	中村重俊	中村重俊
総務課長	宇都良典	宇都良典	宇都良典	門田憲明
用地課長				岩田勲志 (7.1～)
用地第一課長	戸上政明	藤江　正	藤江　正	岩田勲志 (～6.30)
工務課長	田中　満 (～9.30) 渡邉浩延 (10.1～)	渡邉浩延	渡邉浩延 本多正和 (2.1～)	本多正和
豊前工事長	桑野　修	川畑一弘	川畑一弘	川畑一弘
上毛工事長	當房周三	當房周三 (～6.30) 荒平裕次 (7.1～)	荒平裕次	荒平裕次

	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度
福岡県教育委員会				
総括				
教育長	杉光　誠	杉光　誠	杉光　誠	杉光　誠
教育次長	荒巻俊彦	荒巻俊彦	荒巻俊彦	城戸秀明
総務部長	今田義雄			
文化財保護課長	平川昌弘			
同副課長	伊崎俊秋			
同参事	小池史哲			
同課長補佐	日高公徳			
同調査第一係長	吉村靖徳			
同参事補佐兼				
調査第二係長	飛野博文			
庶務				
同管理係長	富永育夫			
同庶務担当主査	仲野洋輔			
調査担当				
同調査第二係主任技師	小澤佳憲（調査担当）			
九州歴史資料館				
総括				
館長		西谷　正	西谷　正	荒巻俊彦
副館長		南里正美	篠田隆行	篠田隆行
総務室長（企画主幹）		円城寺紀子	円城寺紀子	円城寺紀子
文化財調査室長（企画主幹）		飛野博文	飛野博文	飛野博文
文化財調査室長補佐（企画主幹）			吉村靖徳	吉村靖徳
文化財班長（技術主査）		小川泰樹	小川泰樹	小川泰樹
庶務				
総務班長		塩塚孝憲	長野良博	長野良博
庶務担当		近藤一崇	近藤一崇	
調査・整理報告				
参事補佐		高橋　章（調査担当）	新原正典（調査担当）	
		新原正典（調査担当）	小池史哲（整理担当）	
		小池史哲（整理担当）		
技術主査				秦　憲二（報告）
				小澤佳憲（報告）
主任技師		城門義廣（調査担当）		城門義廣（報告）
臨時調査員		藤島志考（調査担当）		細石朋希（整理担当）
		大森真衣子（整理担当）		
調査指導員				新原正典（報告）

なお、発掘調査にあたっては、地元の方々、調査に参加された方々、築上町・豊前市教育委員会の関係者の方々など、多くの方より御協力を賜った。特に、築上町教育委員会の高尾栄一氏、豊前市教育委員会の棚田昭仁両氏には、発掘作業員の確保にあたって大いに協力いただいた。ここに記して感謝いたします。

Ⅱ　位置と環境

１　地理的環境

立地の概要　各遺跡は九州島北西部に位置し、行政区分としては福岡県築上郡築上町（石堂大石ヶ丸の氷室・福間菜切古墳群）、豊前市（中村西峰尾遺跡、中村山柿、松江黒部遺跡、川内下野添遺跡、大村上野地遺跡、荒堀山田原遺跡）に属する。福岡県では、しばしば行橋市・京都郡・築上郡・豊前市からなる県東部地域を、京都郡・築上郡の頭２文字をとって京築地域と呼び、この点からいえば京築地域の中央南寄りともいえる。

地形と地質　京築地域は、北東側に広がる周防灘に面し、背後に山が迫る幅のせまい海岸平野から形成されている。この海岸平野は、東は周防灘により遮られ、西側は英彦山系の支脈で南東に延びる国見山－経読岳山群と、北に蔵持山－戸城山－障子ヶ岳と延びて平尾台へと連なる山群により画され、中央を国見山から東へと広がる丘陵群によって南北に分断されている。北の京都平野は今川・祓川など、南の豊前中津平野は岩岳川・佐井川・山国川などといった大小の河川群によって開析・堆積され形成されたものである。地質的に見ると､北側に位置する京都平野東側の蔵持山・障子ヶ岳・平尾台などの山地の基盤層は石灰岩や花崗岩からなり、一方南側に位置する豊前中津平野の西を画する国見岳・経読岳・八面山～国東半島といった山地の主な基盤層は阿蘇火砕流由来岩のほか大野・豊肥・九重火山岩類など、形成時期の異なる火山岩が複雑に入り乱れる。

遺跡群の立地　京築南部地域の山地が平野に接する部分では、しばしば緩やかに延びる山裾が中小の河川によって開析されて細長く海に向かって延びる尾根状丘陵を、あるいはせまく細長い開析谷を形成している。東九州自動車道は、この海岸平野の比較的上位を通っており、しばしば丘陵地を切り開き、あるいは平野の中位を突っ切る。その中でも、今回報告する遺跡が多く分布する地域である京都平野と豊前中津平野の境界付近に展開する丘陵群は、国見山から東に細長く延びた尾根状丘陵がもと海に接していた部分であり（地図に示される平野のうち、現在 JR 日豊本線が通過する部分から海側のほとんどは新田開発による陸化地帯である)、東九州道は尾根上に立地する石堂大石ヶ丸の氷室や福間菜切古墳群、中村西峰尾遺跡、松江黒部遺跡、また尾根状丘陵裾部から谷状平野縁辺部にかけて位置する中村山柿遺跡や川内下野添遺跡などを破壊しながら東進する。

一方、それらよりやや南に位置する大村上野地遺跡や荒堀山田原遺跡は平野部分がやや広がった箇所に位置しているが、こうした場所では尾根状丘陵がその高さを大きく減じて台地状になり、あるいは平野中に埋没した微高地としてその姿をとどめる。両遺跡はこうした中で尾根状丘陵先端部に形成された舌状台地の上や緩斜面上に位置し、東九州道は盛土・橋脚の上を通過する。

遺跡群の地質　各遺跡が立地する土地の地質は、いずれも火山岩由来の赤土であり、そのうち尾根上に立地する遺跡では地山の中に巨石塊が多く含まれしばしば露出して転石状を呈する。福間菜切古墳群などではこうした巨石塊は古墳の石室に使われ、中村西峰尾遺跡では大小の安山岩に船などのモチーフを描いた線刻石が発見され大きな話題を呼んだ。一方、低地では粘性の高い良質な赤土が多く取れ、低地における土地開発の進行の中で水田の床土として採取された結果、遺跡はしばしば大きく破壊された。そのような状況の中で、大村上野地遺跡や荒堀山田原遺跡では断片的に残された遺跡を調査することができ、貴重な資料となった。

２　歴史的環境

概要　本書で報告する各遺跡がある福岡県築上郡築上町・豊前市は、福岡県の東部に位置し、律令制下においては南に隣接する大分県北部（宇佐郡、現在の中津市・豊前高田市の一部）とともに豊前国を形成した。豊前国には田川・企救・京都（みやこ）・築城・上三毛（かみつみけ）・下三毛（しもつみけ）・宇佐の７郡が知られるが、今回報告する各遺跡はこのうち築城郡の南端から上三毛郡の北半にかけて所在する。以下、本報で報告する各遺跡ごとに、周辺の歴史的環境を見ていこう。

石堂・上ノ河内の遺跡　築上町石堂・上ノ河内は、築城郡と京都郡の境界部に位置する丘陵地帯である。この地域は近世～近代に海側に向かって広く埋め立てて新田開発が行われており、海側の低地帯中には前代の遺跡は存在しない。遺跡は内陸部に発達した細長い尾根状丘陵とその間に挟まれた谷部に立地する。丘陵上には古墳時代後期から奈良時代初期にかけて群集墳が多く営まれる。特に上り松川と上ノ河内川の間に並んで延びる４本の丘陵はよく発達し現在のＪＲ日豊本線付近まで延びて京築平野を東西に分断する境界地帯を構成しているが、これらの丘陵上には石堂古墳群・石堂中原古墳群・石堂中後ヶ谷古墳群・福間菜切古墳群・頭無古墳群・山添古墳群などが展開し[(1)]、付近では有数の群集墳密集地帯である。

さて、石堂大石ヶ丸の氷室は、石堂中原古墳群・石堂中後ヶ谷古墳群と同じ丘陵上に立地する。このうち南にある石堂中後ヶ谷古墳群については10号線バイパスの有料部分として建設された椎田道路の建設に先立って発掘調査が行われ、計16基分が発見されたが、古墳群自体はさらに北側に延びて丘陵先端部に広がる石堂中原古墳群へとつづくものと推測され、付近では大きな古墳群の一つである。

次に谷を挟んで南東に細長く延びる丘陵には福間菜切古墳群がある。福間菜切古墳群については、菜切古墳群という名称で同じく椎田道路の建設に先立って６基分が調査され、敷地の隣接地にもう１基が発見されている（１～７号墳）。今回はその南側隣接地を調査した形となり、８～10号の３基分を調査した。

なお、さらに東には頭無古墳群の立地する丘陵があるが、頭無古墳群については椎田町教育委員会による１次調査、福岡県教育委員会による椎田道路に先立つ２次調査が行われ、計３基の古墳が発見されている。また先端部には山添古墳群や山添遺跡群が埋蔵文化財包蔵地として周知化されているが、すでに丘陵上の開発が進んでおり大部分の遺構は失われたとみられる[(2)]。

これらの古墳群を造営した集団は、海岸の丘陵裾や谷部に居を構えたのであろうが、現在までその痕跡ははっきりしていない。

中村・松江の遺跡　上ノ河内川と、その南東に並行して流れる角田川との間には太い尾根状丘陵がある。中世宇都宮氏の一族仲蜂谷氏の居城とされる馬場城[(3)]の立地する丘陵である。この丘陵上に中村西峰尾遺跡が、また中村西峰尾遺跡の南東側裾部に中村山柿遺跡がある。中村地区は中世角田荘の中心地として知られる。角田荘は宇佐神宮領で、角田八幡神社はこの荘園成立時に勧請された可能性が高いという[(4)]。中村山柿遺跡は角田荘の中心地と考えられる角田八幡神社の東に川を挟んで近接し、過去の調査では12～13世紀の集落跡が出土している[(5)]。角田荘を構成した集落の一つであろう。遺跡の北には縄文時代後期の集落跡として知られる中村石丸遺跡[(6)]があり、その東側には川を挟んで弥生時代後期・古代前期の集落跡である中村団後遺跡[(7)]もある。古くから人々が定着してきたと見られる。付近の谷と比べて谷間も広く、暮らしやすい場所だったのであろ

1 石堂大石ヶ丸の氷室　2 福間菜切古墳群　3 中村西峰尾遺跡　4 中村山柿遺跡　5 松江黒部遺跡　6 川内下野添遺跡　7 大村上野地遺跡　8 荒堀山田原遺跡　9 石堂古墳群　10 石堂中原古墳群　11 石堂中後ヶ谷古墳群　12 福間菜切遺跡　13 山添遺跡　14 山添古墳群　15 頭無古墳群　16 鳥越城跡　17 中村石丸遺跡　18 中村団後遺跡　19 則行城跡　20 馬場城跡　21 毘沙門遺跡　22 鵜迫遺跡　23 灰ノ木古墳　24 黒部古墳群　25 黒峰尾古墳群　26 黒峰尾遺跡　27 四郎丸船入遺跡　28 四郎丸窯跡　29 川内南原遺跡　30 四郎丸畑原遺跡　31 川内楠木遺跡　32 平原城跡　33 平原横穴墓群　34 鳥越今井野遺跡　35 山田城跡　36 八屋城跡　37 筆書城跡　38 今市向野遺跡　39 下原遺跡　40 吉木城跡　41 吉木遺跡　42 赤熊城跡　43 安祥寺城跡　44 今市城跡　45 荒堀大保遺跡　46 荒堀雨久保遺跡　47 荒堀車地遺跡　48 荒堀中ノ原遺跡　49 荒堀城跡　50 大村天神林遺跡　51 大村城跡　52 大村道場遺跡　53 大村石畑遺跡　54 天神山遺跡　55 青畑向原遺跡　56 青畑城跡　57 青畑火葬墓　58 荒堀石棺出土地　59 千束原古墳群　60 旭城跡　61 上毛条里遺跡　62 黒土城跡　63 黒土七夕遺跡　64 久路土芝掛遺跡　65 久路土高松遺跡　66 塔田琵琶田遺跡　67 西ノ原遺跡　68 大西遺跡　69 中大西遺跡　70 時末遺跡　71 永久笠田遺跡　72 久路土六田遺跡　73 永久遺跡　74 河原田塔田遺跡　75 河原田善丸遺跡　76 河原田四ノ坪Ａ遺跡　77 河原田四ノ坪Ｂ遺跡　78 薬師寺塚原遺跡　79 薬師寺城跡　80 才尾平原遺跡　81 上大西遺跡

第２図　周辺の歴史的環境（1/50,000）

う。

一方中村西峰尾遺跡は馬場城跡から北に延びる尾根上に立地し、遺跡のさらに海側、丘陵の先端部分にはその出城として築かれた鳥越城跡もある(現在遺構は残されていないとされる)。すなわち、中村西峰尾遺跡は同一丘陵上に作られた二つの城に挟まれるという立地条件を持つ。この点と、平坦な広場や石垣を持つことから、調査着手当初は両城と関連する中世山城関連遺跡の可能性が考えられた。しかし調査によりそれらの造成は近代のものである可能性が極めて高いことがわかり、下層の縄文時代遺構を主体とした報告となった。

角田川を挟んで南側には再び大きな丘陵と狭い谷地が連続する。角田と四郎丸の間に挟まれた丘陵地帯で、丘陵は海側に向かって数本の支脈に分岐しつつ八つ手状に展開する。この八つ手状の丘陵群と間の小谷が松江地区である。丘陵の先端部には鵜迫古墳群・黒部古墳群・黒峰尾古墳群（近接しており同一の古墳群としてひとまとめに理解する立場もあろうが、黒峰尾10号墳の調査報告においては、「墓域を異にするグループ」だろう[8]と推測されている）があり、一部は公園として残されている[9]。松江黒部遺跡はこの丘陵を山側にかなりさかのぼったところにある。尾根の先端部には黒峰尾遺跡・四郎丸船入遺跡などの遺跡が知られる。

川内・大村の遺跡　四郎丸の谷筋から尾根状丘陵を東に越えると川内の谷筋である。比較的広い谷底平野を形成しており、古くから開発が行われてきた。この谷を流れる中川の右岸には、白鳳元年（671）に建立されたと縁起に伝わる古社、大富神社が建つ。左岸一帯は正倉院に大宝2年（702）に作成された戸籍の断簡が残ることでも知られる炊江郷に比定される。やや上流には市史跡である平原横穴墓群[10]もあり、古墳時代から古代にかけてのさまざまな手がかりが残る地域である。この中川の右岸に延びる尾根状丘陵の東側裾部に広がる緩斜面上に、川内下野添遺跡が立地する。付近では数少ない古代後半期～中世の集落遺跡であり、中世山田荘を構成する集落の一つであろう。

さらに東に尾根を越えると大村地区に至る。大村地区は天地山丘陵の裾部が広く台地化した土地で、その中にさらに数条の尾根状低台地が発達して生活環境がよく、古くより開発が盛んであった。最も古い生活痕跡として青畑向畑遺跡があげられる[11]。後期旧石器時代前～中期と終末～縄文時代草創期の打製石器が出土している。近隣の荒堀大保遺跡でも後期旧石器時代の資料が出土している。縄文時代から弥生時代にかけての資料は少ないが、古墳時代から古代にかけては多くの遺跡があり、台地東側の天地山丘陵先端部では東九州自動車道の建設に先立つ発掘調査で群集墳を発見し（豊前市教育委員会により2012年度に調査）、あるいは現在の10号線バイパス近くの荒堀中ノ原遺跡[12]・荒堀車地遺跡[13]などでも古墳時代後期の並び倉や庇付の建物などの貴重な遺構が発見されている。10号線バイパス付近の古代官道推定地より北に位置する荒堀雨久保遺跡・荒堀大保遺跡では奈良時代の集落跡が[14]、またやや南に離れた永久遺跡では円面硯も出土した[15]。付近は正倉院文書に戸籍の残る炊江郷の比定地にあたり注目される。中世には現在の大村小学校付近に大村城が築かれた。『宇佐郡記』や『黒田家譜』などに記述が見られ、城井一族の支族山田氏の抱え城で、天正16年（1588）の宇都宮氏一族の廃絶に伴い廃城となった。大村石畑遺跡・大村天神林遺跡[16]など、中世大村城の関連遺構が多く検出されている。

この大村台地の東寄りには、南北に細長く発達した尾根状台地がある。荒堀台地と仮称するが、その西側斜面に立地するのが大村上野地遺跡である。遺跡は耕作に伴い大きく削平され、遺構のほとんどが失われていたものの、土坑や溝などの遺構を検出した。出土遺物が乏しいため、時期が不

明であることが残念である。また、同じ台地の東側緩斜面に荒堀山田原遺跡が立地する。やはり遺跡は大きく削平されており、出土遺物は全くなかったが、その構造から縄文時代以前と考えられる落とし穴が3基発見された。（小澤佳憲）

【註】

(1) 福岡県教育委員会『石堂中後ヶ谷古墳群・菜切古墳群・頭無古墳群―福岡県築上郡椎田町所在遺跡群の調査―』椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告第2集、1990年

椎田町教育委員会『頭無古墳（付.椎田町文化財一覧）―福岡県築上郡椎田町所在遺跡の調査―』椎田町文化財調査報告書 第1集、1975年

(2) 東九州自動車道建設に先立ち、山添遺跡群の範囲内や隣接地を試掘・確認調査したが、遺構・遺物ともほとんど出土しなかった。

(3) 廣崎篤夫「豊前市の古城跡」豊前市史編纂委員会編『豊前市史』上巻、1991年

(4) 有川宜博「荘園・公領制と上毛地方」豊前市史編纂委員会編『豊前市史』上巻、1991年

(5) 豊前市教育委員会『中村山柿遺跡―県営経営体育成基盤整備事業角田中部地区土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報―』豊前市文化財調査報告書第23集、2007年

(6) 福岡県教育委員会『中村石丸遺跡―福岡県豊前市大字中村字石丸所在縄紋時代遺跡の調査―』一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告第8集、1996年

(7) 福岡県教育委員会『団後遺跡・西一丁田遺跡・炭山遺跡―福岡県豊前市所在遺跡の調査―』一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告第3集、1994年

(8) 註6文献参照。

(9) 玄洋開発『黒部古墳群―豊前市松江所在古墳群の調査―』豊前市教育委員会編、1979年

(10) 丹羽博「平原横穴墓群」豊前市史編纂委員会編『豊前市史・考古資料別刷』、1993年

(11) 豊前市教育委員会『青畑向原遺跡・永久遺跡―県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書4（豊前市大村・青畑地区及び黒土西部地区）―』豊前市文化財報告書第12集、1999年

(12) 豊前市教育委員会『県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告Ⅱ　豊前市横武・千束地区（2)』豊前市文化財報告書第6集、1990年

(13) 豊前市教育委員会『県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告Ⅲ　豊前市横武・千束地区（3)』豊前市文化財報告書第7集、1991年

(14) 福岡県教育委員会『荒堀雨久保遺跡』福岡県文化財調査報告書第99集、1992年

(15) 註11文献に同じ。

(16) 豊前市教育委員会『大村石畑遺跡―県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ（県営担い手育成基盤整備事業大村青畑地区土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書）―』豊前市文化財報告書第22集、2007年

豊前市教育委員会『大村天神林遺跡―県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅢ（県営担い手育成基盤整備事業大村青畑地区土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書）―』豊前市文化財報告書第26集、2009年

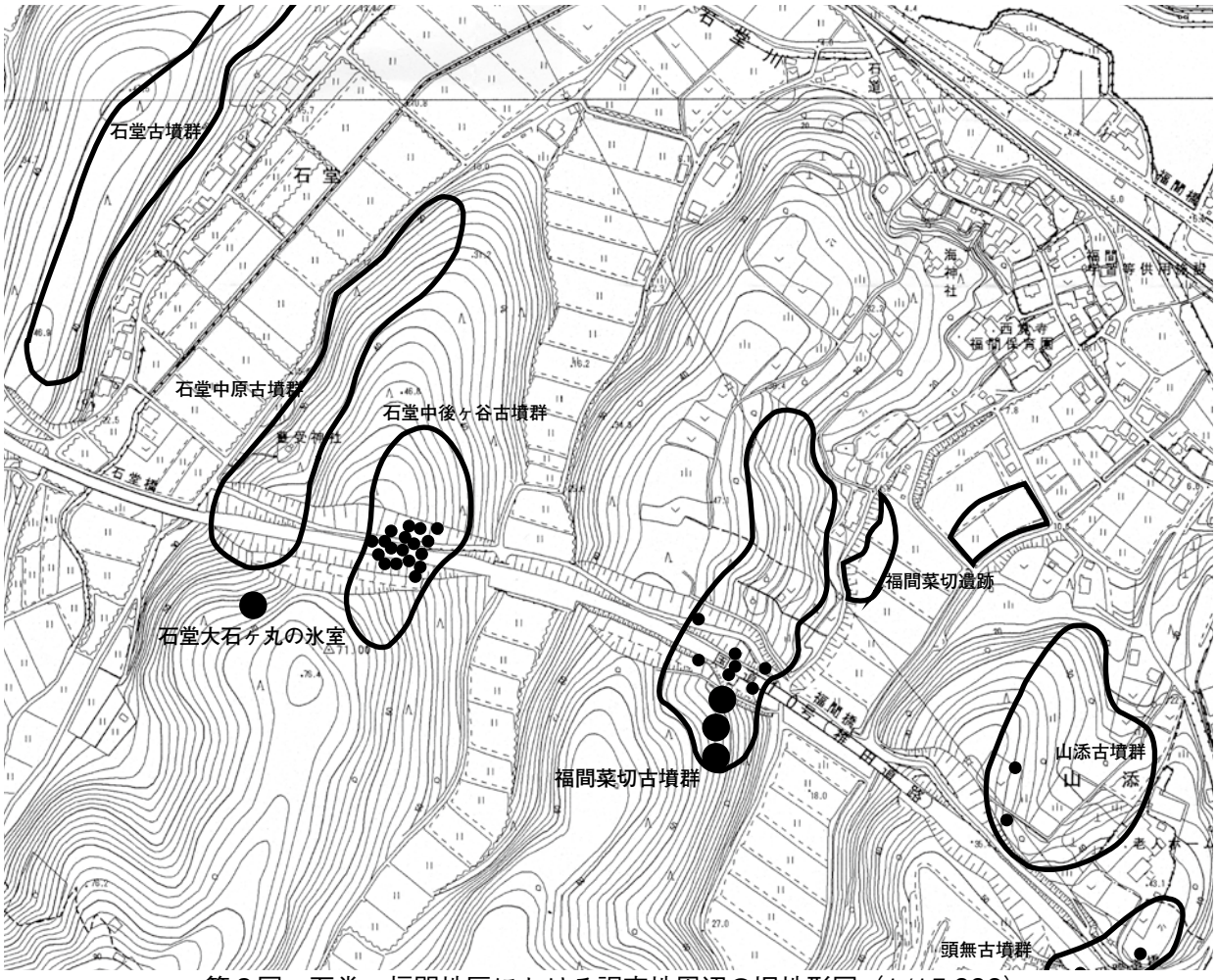
Ⅲ　石堂大石ヶ丸の氷室の調査の報告

1　遺跡の概要

遺跡の立地と概況　石堂・大石ヶ丸の氷室は英彦山系から周防灘へ放射状に伸びる舌状丘陵上に位置している。丘陵の西側斜面には周知の埋蔵文化財包蔵地である石堂中原古墳群・石堂中後ヶ谷古墳群が位置し、谷を挟んで東側の丘陵には本書で報告を行う福間菜切古墳群が位置している（第3･4図）。本調査地点は、これまで埋蔵文化財包蔵地として周知化されておらず、東九州自動車道建設に伴う試掘調査により発見されたものである。

調査に至る経過　事業主体者であるネクスコ西日本（株）中津工事事務所とは、調査が本格的に始まった平成21年度より定例会議を行い、綿密な連携を図ってきた。定例会議においては、ネクスコ西日本（株）から用地の進捗状況や工事計画の予定が出され、文化財部局もそれらの開発部局側の要望をうけて逐次必要地点の試掘や本調査を進めるという体制が維持されてきた。

本調査地点は、平成23年5月24日の定例会議の中で、用地取得ならびに立木の伐採が終了したことから試掘調査の依頼があり、同年7月20日に九州歴史資料館により試掘調査が行われた。その結果、用地内に掘削したトレンチでは遺構・遺物ともに発見されなかったものの、開発対象地内にある斜面中に石組の長方形土坑が露出していることから、発見に至ったものである。この石組土坑の発見を受け、急遽築上町教育委員会と協議を持った結果、築上町内には10数基の氷室が知ら



第３図　石堂・福間地区における調査地周辺の旧地形図（1/15,000）

れ、それらと今回発見の遺構の立地・構造が類似すると指摘された。そこで、本遺構についても氷室であるとの認識に至り、同年9月6日に事務手続きを経て『石堂・大石ヶ丸の氷室』として周知化された。本調査地点は工事着工時期が迫っていたことから、九州歴史資料館文化財調査室により調査が企画された。発掘調査は同年9月20日に城門義廣が担当となり着手された。

2　調査の経過

本調査は比較的短期間で終了すると見込まれていたこと、休憩所等のヤードにするための場所がなかったこと、調査地点が平地から比高差で30mほど登った場所にあることなどから、休憩所等の建機類は設置せず、同じ地点で工事を行っていた業者にトイレを借り調査を行った。平成23年9月20日に掘削用の道具などを搬入した後、21日にはレベル移動、平板およびトータルステーションによる測量を開始し、翌22日に人力による掘削を開始した。氷室とその周辺のみの掘削だったことから26日には掘削が終了し、全体写真をとって調査は終了した。

3　遺構と遺物

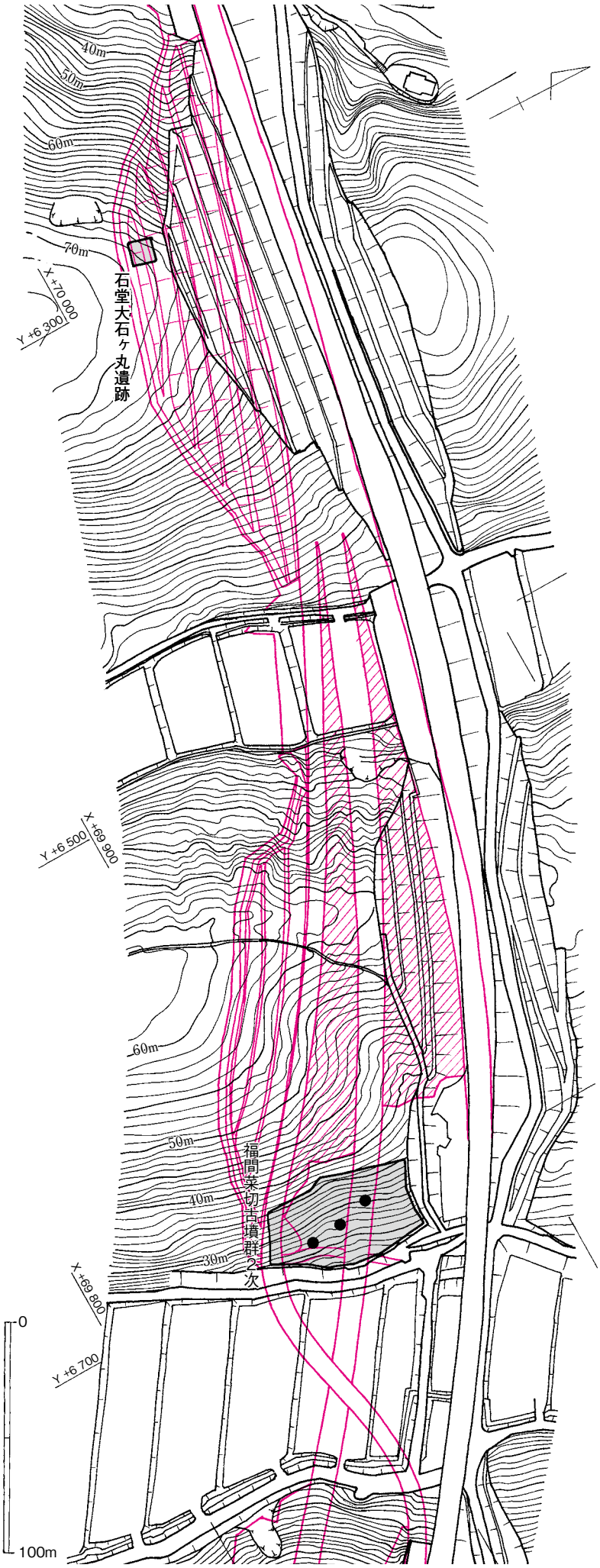
（1）氷室跡

本調査で検出された遺構は、氷室のみである。

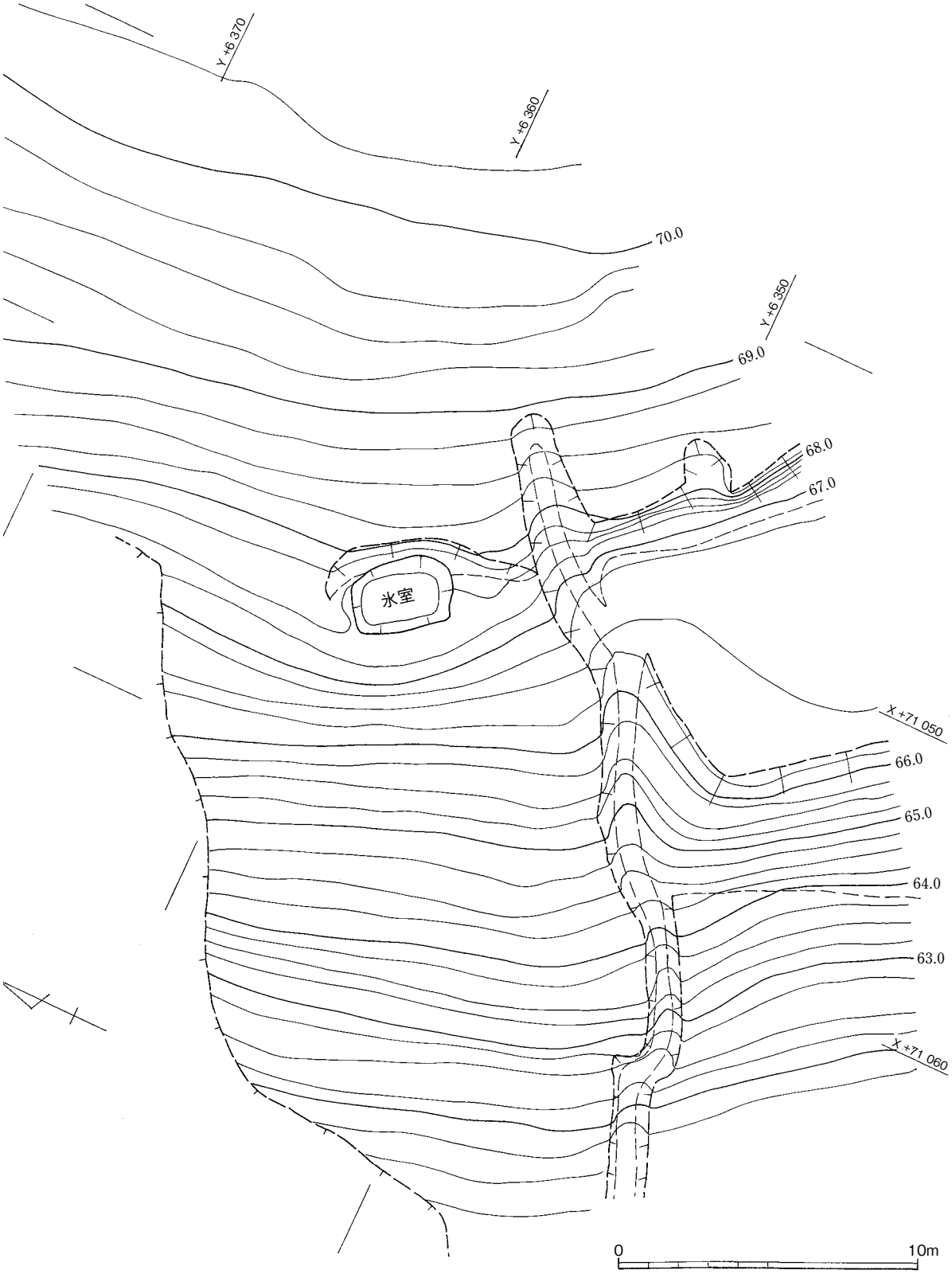
氷室（第5･6図、図版1）

立地　丘陵の頂部から西側に10mほど下った斜面上に位置する。

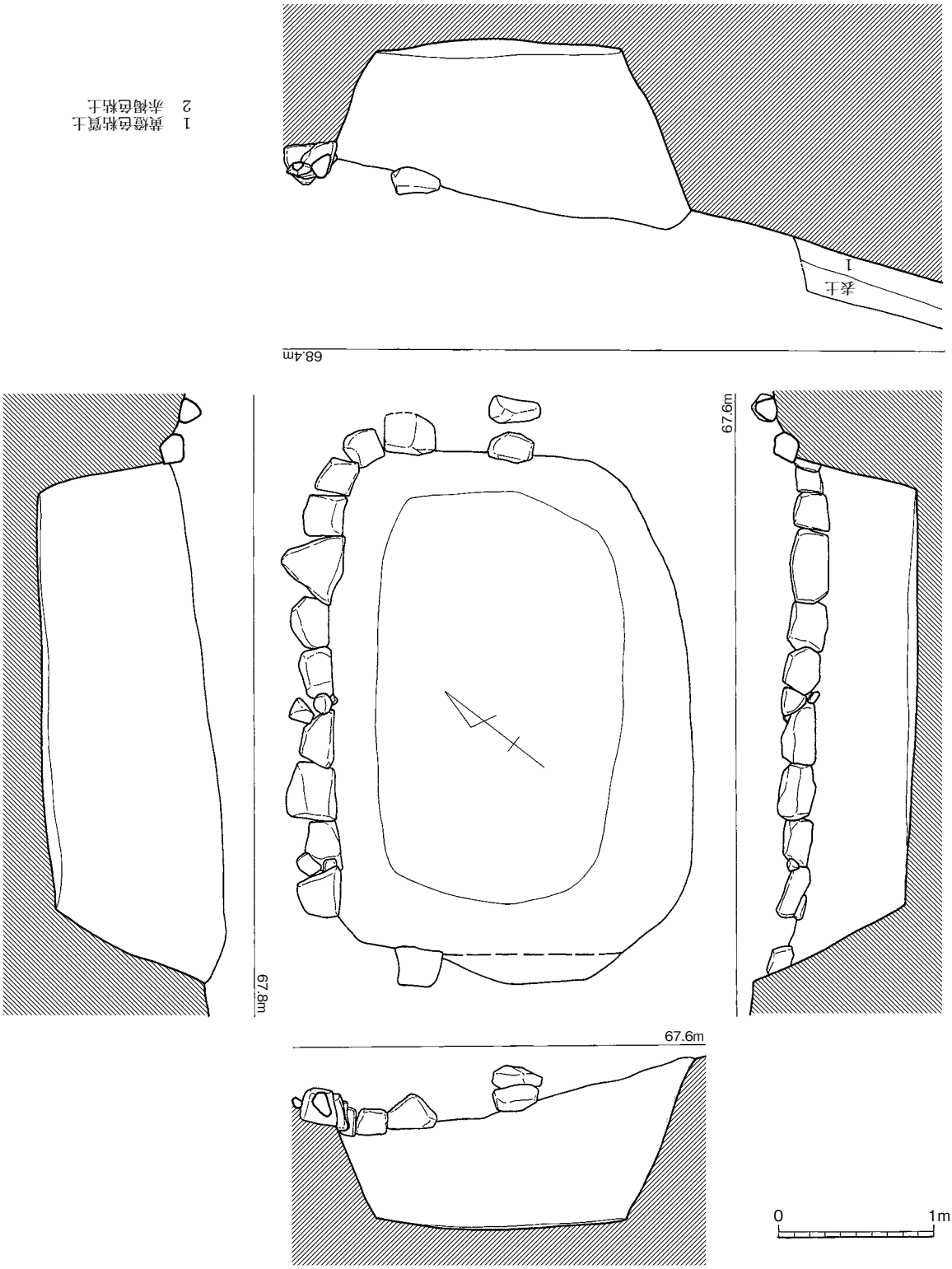
形態と構造　長辺3.4m×短片2.3mの長方形土坑で、深さは1mを測る。北西側に幅10～55㎝、高さ20㎝前後の方形・長方形花崗岩が1段配置される。また、



第4図　石堂・福間地区における調査地周辺地形と計画路線（1/2,500）



第５図　石堂・大石ヶ丸の氷室周辺地形図（1/200）



第６図　氷室実測図（1/40）

北東側、西南側にもそれぞれ１つずつの長方形花崗岩が配置される。現位置を保っていると考えられる石は全てで 14 個である。床面は 2.65m × 1.65m でほぼ水平になっており、ピット等は検出されなかった。内部には腐食土とともに、多くの方形・長方形花崗岩が埋没していた。埋没していた石は特に北側から西側に多く、少なくとも北西側長辺ならびに短辺には２段目以上の石が並んでおり、石の前面と掘方の壁面の位置が合うことから、下部には石がなかったと考えられる。

外部施設　氷室の場合、屋根等の上部施設が必要なことから、周辺の表土を剥いだがピット等は確認できなかった。また、内部および付近からの遺物の出土はなかった。

4　総括

遺物の出土がなかったことから本調査で検出された遺構がどの時期に属するのか、氷室なのかどうかを含めた機能は不明である。

そこで、周辺で知られている氷室の例から本調査例を検討したい。

本庄の雪穴（築上町本庄：町指定、築城町誌編纂委員会 2006）

5.5m 四方、深さ 4.6m、平面隅丸方形。内野東庵（1841 ～ 1926）の発願で明治時代中期に建設された。花崗岩の石積みで、底部は敷石されていない。

矢引迫の氷室（築上町真如寺）

大きさは 10m 四方ほどか。内側・外側共に石垣を築き、雨水流入を避けるため堀切が作られる。底部にも大小の石が敷き詰められる。築造時期は不明だが、江戸末期頃に使用されていたか。

求菩提の氷室（豊前市求菩提）[(1)]

10m 四方ほど。石組みを施し、床面にも石を敷いていた可能性が高い。中世末～近世初頭の築造と見られ、江戸～明治時代まで補修の痕跡が認められる。

犬ヶ岳の氷室（豊前市）[(2)]

求菩提の氷室よりも若干小さい。石垣状に石を積んで壁面とする。

周辺の氷室との比較　以上のように、いずれの例も 5m 以上であり、本調査例よりも規模が大きい。また、床面には石がない例もあるが、側面はいずれの例も下部まで石積みがなされている。ただし、上記の氷室が集落や住民の共有だとされていることから、規模の違いは対象とする母数の差異である可能性がある。また、壁面に関しても板や蓆を引いていれば十分だった可能性もある。

どちらにしても、これらとの比較のみで結論は下すことはできないが、現段階では、本調査例は個人ないしは数戸のみ共有の氷室であった可能性を指摘するに留めておきたい。（城門義廣）

【註】

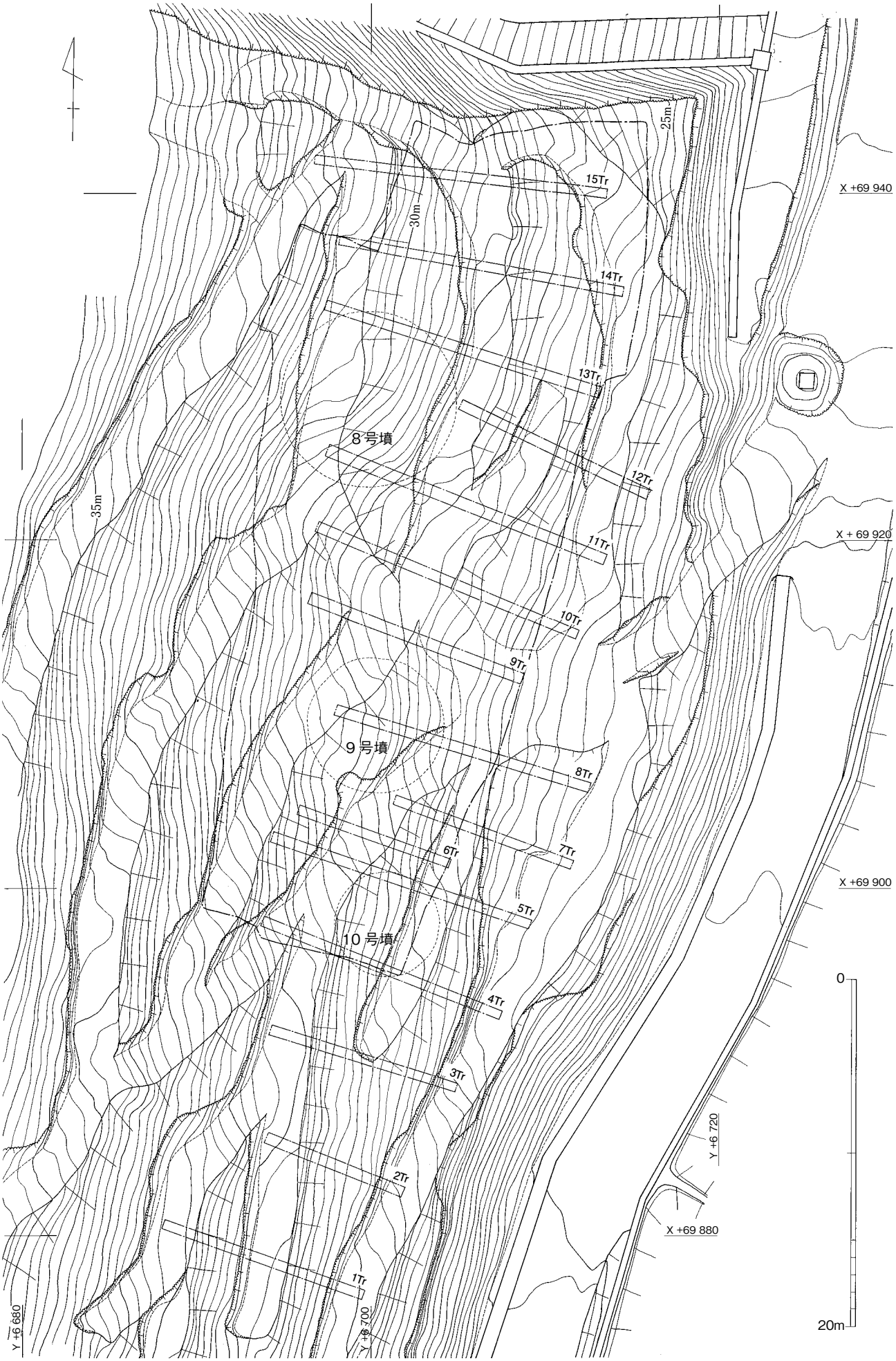
(1) 豊前市教育委員会棚田氏に教示を受けた。

(2) 同上。

【参考文献】

椎田町『椎田町史　民俗編』椎田町史編纂委員会編、2005 年

築城町『築城町誌　下巻』築城町誌編纂委員会編、2006 年



第７図　福間菜切古墳群第２次調査着手前の地形図（1/300）

Ⅳ　福間菜切古墳群第 2 次調査の報告

1　遺跡の概要

遺跡の環境　福間菜切古墳群は築上町・豊前市の境界域に発達した尾根状丘陵群と谷底平野の連続する地形の中にあり、その中の一つである築上町福間集落背後の丘陵東側斜面に位置する（第 3･4 図）。後期群集墳として早くから知られ､1976 年度に福岡県教育委員会が発行した遺跡分布地図（福岡県教委 1976）には福間 1 ～ 3 号墳として 3 基の古墳が周知化されている。

第 1 次調査　一般国道 10 号線椎田バイパスの建設工事の際にこの古墳群の一部が破壊されることとなり、1986 年に改めて当該地周辺の埋蔵文化財分布調査が行われ、椎田バイパス関係の第 22 地点として要調査地点にあげられた。この際に福岡県教育委員会が椎田町教育委員会に遺跡名称の照会を行い、あらためて菜切古墳群と命名された（福岡県教委 1990）。本調査では路線内において 6 基の円墳を発見し、発掘調査を行ったほか、路線の北側に隣接して 1 基の円墳を確認し（7 号、未調査のまま現存する）、1 ～ 7 号墳の番号がつけられた。なお、調査前の現地は過去にミカン山の造成が行われており地形は大きく改変されており、調査時にはほとんどの古墳が天井石の抜き取りや盗掘にあって大きく破壊された状態であったという。

名称変更と周囲の調査　その後 2003 年度に椎田町により遺跡包蔵地図が発行された（椎田町教委 2003）際、再び名称変更が行われ、福間菜切古墳群として周知化された。古墳群の分布範囲は従来より北側に大きく拡大され、福間集落に隣接する丘陵裾部にまで広げられた。また周辺でも、一本東に隣接する尾根上には頭無古墳群・山添古墳群が、一本西に隣接する尾根上には石堂中後ヶ谷古墳群・石堂中原古墳群が、さらにもう一本西の尾根上には石堂古墳群が埋蔵文化財包蔵地として周知化され、周囲が終末期古墳群の一大集合地域であることが明らかになった。

また、これに先立つ 1995 年度には東側の谷底平野が圃場整備事業の対象地となり、福間集落の南限付近の発掘調査が行われた（福間菜切遺跡）が、この際にはピットや性格不明の土坑以外には明確な遺構は検出されず、出土遺物も縄文時代の打製石器（石鏃・スクレイパー）や中世の陶磁器片が少量採集されただけで、群集墳に関係する資料は出土していない（椎田町教委 2001）。

【参考文献】

福岡県教育委員会『福岡県遺跡等分布地図（豊前市・築上郡編）』、1976 年

福岡県教育委員会『椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告（2）―石堂中後ヶ谷古墳群・菜切古墳群・頭無古墳群―』、1990 年

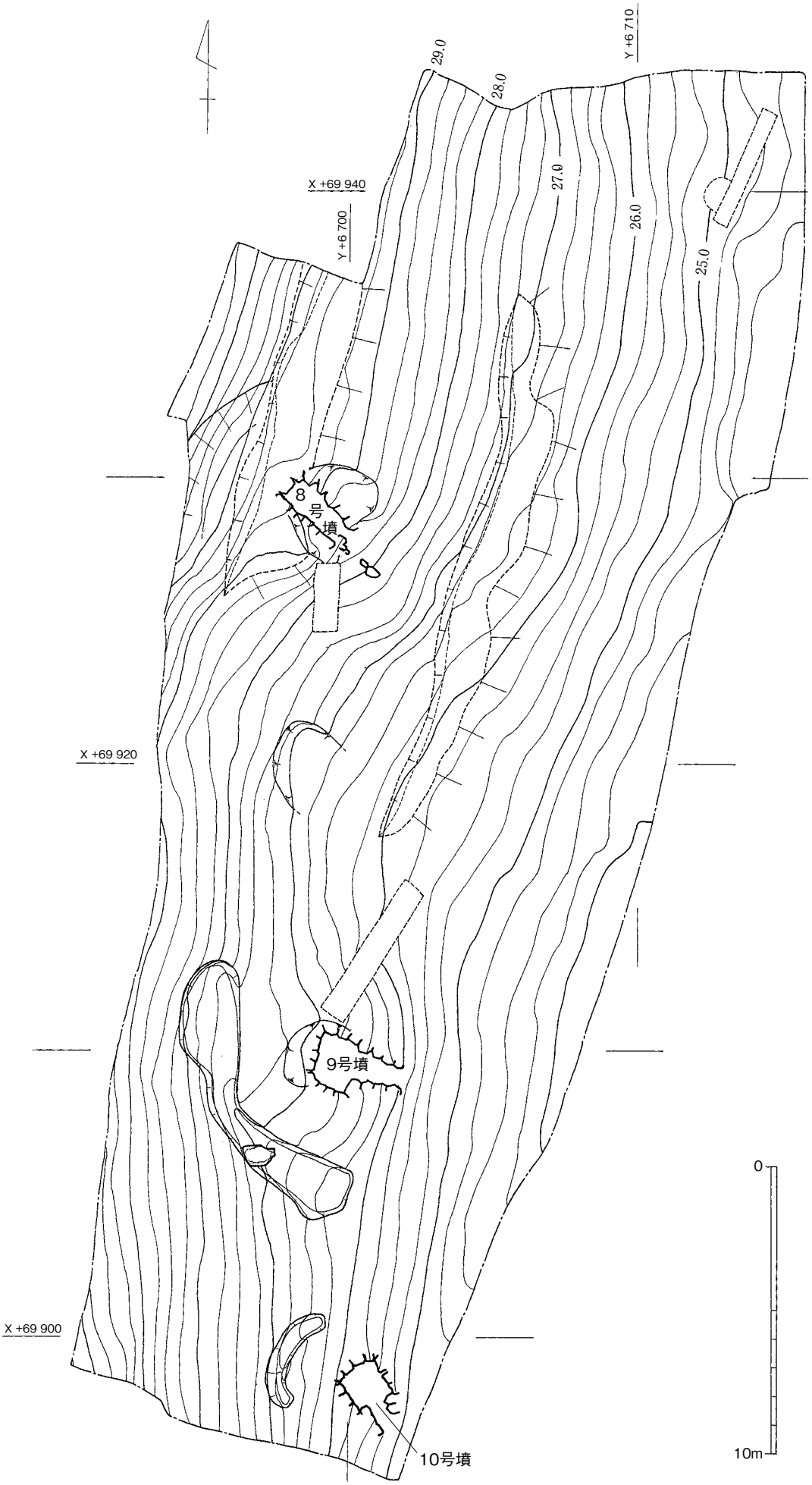
椎田町教育委員会『日奈古・宇留津周辺の遺跡と岩丸・福間の遺跡―福岡県築上郡築上町所在の遺跡―』椎田町文化財調査報告書第 11 集、2001 年

椎田町教育委員会『椎田町内遺跡等分布地図』椎田町文化財調査報告書第 13 集、2003 年

2　調査の概要

遺跡の所在　福間菜切古墳群第 2 次調査地は、築上町石堂 1835-1、1836-1 に所在する。

調査に至る経緯　今次調査は、東九州自動車道の建設予定地内における埋蔵文化財の照会がネクスコ西日本株式会社中津工事事務所より福岡県教育庁総務部文化財保護課に対して行われたことを端



第８図　表土除去後の地形と古墳の分布（1/200）

緒とする。当該地点は早くより埋蔵文化財を包蔵する地点としてあげられていた(中津第3地点)が、平成22年4月28日に改めて福岡県文化財保護課が確認調査を行い、工事対象地内に少なくとも2基の古墳が存在することが明らかになった。これを受けて文化財保護課調査第二係により発掘調査が行われた。調査は小澤佳憲が担当し、平成22年5月25日より着手した。

調査地周辺の状況　現地は発注側によりすでに伐採が行われていたため、地形測量から着手したが、伐採時に中型の重機が使用されたため各所に通路状の造成がなされていて地形はやや改変されていた。そこで6月10日より、地形測量が済んだ範囲より順次人力による試掘トレンチを設定して遺構の広がる範囲を把握しようと試みた結果、試掘調査により発見された2カ所の古墳のほかにもう2カ所で何らかの遺構が推定されるに至り、これらを北から1～4号墳と仮称することとした。

調査の経過　6月22日よりこれらの遺構の広がる範囲について重機を用いて表土剥ぎを行った。現地は傾斜がきつく重機による作業は困難を極めたが、墳丘を除く範囲については7月5日までにおおよそ地山が露出した。併せて人力による墳丘とその周囲の表土剥ぎを行ったが、竹の根が表面を覆っていて作業は困難を極めた。当初予定していた人員ではとうてい作業を終わらせることができず、近隣の調査現場に急遽作業員の応援を要請し、7月23日にはおおよそ表土剥ぎを終了するに至った。

表土剥ぎの結果、試掘トレンチ掘削により推定していた1～4号の古墳のうち、最も東に位置する1号墳が人工的な遺構ではないことが判明し、これ以降の調査は2～4号墳を対象として行われることとなった。なお、これらの番号は調査時点の仮番号であり、整理時には1次調査の7基に続けて新たな番号を付与した。仮2号墳→8号墳、仮3号墳→9号墳、仮4号墳→10号墳（仮1号墳は欠番）としているので注意されたい。

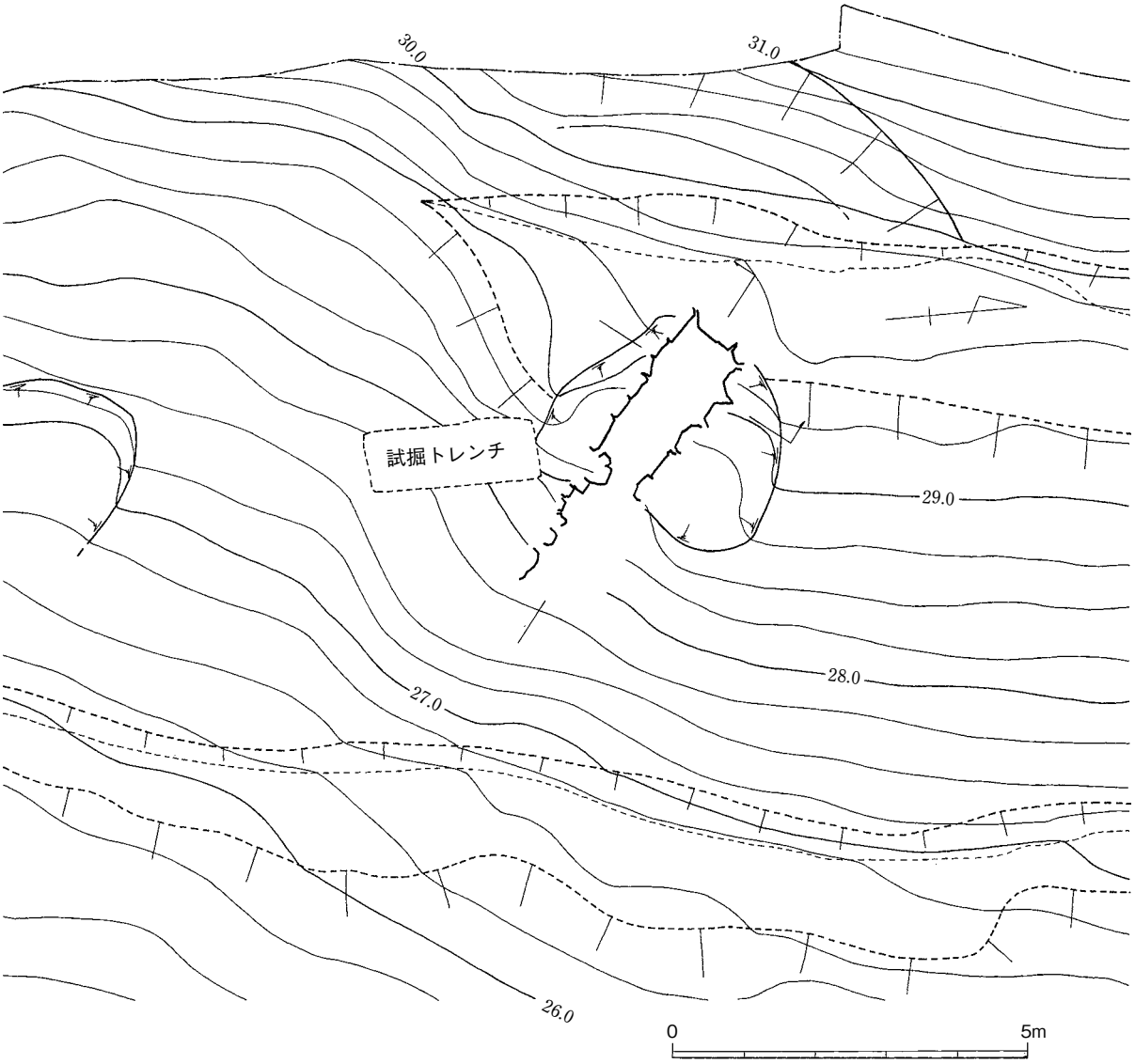
その後、3基の古墳の調査を行った。いずれも天井石が抜き取られていて石室内部まで大きく攪乱を受けていたが、8号墳玄室内からは多くの須恵器や鉄鏃などの遺物が原位置で発見されるなどの成果を得た。調査は酷暑の中発掘作業員の熱心な作業により順調に進み、8月24日にはすべての調査が終了した。

3　遺構と遺物

（1）地形

調査地の概況　調査地は南北に延びる尾根状丘陵の東側斜面下位にあたる。調査区の北側に隣接して国道10号線椎田バイパスが走っており、1次調査時に発見された1～6号墳は削平により完全に失われている。路線外にあって破壊を免れたとされる7号墳の付近は草木が生い茂り見通しがきかず、その現況は明らかではない。

調査着手前の地形　調査着手前の地形測量図を示す（第7図)。伐採のための重機が斜面を登るために切り盛りして通路を造成した痕跡が縦横に走り、旧地形の読み取りは難しいが、巨視的に見れば斜面上半の斜度がおよそ20度、下半部が約18度程度で下り、大きな凹凸は確認できない。ただし、古墳が発見された箇所を細かく見ると（長破線で推定される墳丘の範囲を示した)、8･9号墳については墳丘の盛り上がりが旧地形に反映されているのが確認できる。10号墳については全く地形の乱れが認められず、このため事前の試掘調査でも存在を把握できていなかったのだが、調査すると実際封土の大半が失われていた。なお、調査区の北東隅、15トレンチの東端に墳丘状の盛り上



第９図　８号墳墳丘測量図（1/100）

がりがあり、中央に巨石が露出していたためこの地点にも古墳の存在を推定し（仮１号墳）、15 トレンチに直交する方向に新たなトレンチを掘削したが人工的な遺構は見つからなかった。

旧地形　表土除去後の地形を示す（第８図）。第７回と比較すると伐採時の重機進入路がないために傾斜が一様であることがより理解できるとともに、３基の古墳の封土による地形の乱れがよく読み取れよう。３基の古墳は北から南へ８～10 号墳が直線上に並んでいるが、標高は８号墳が最も高く玄室床で 28.5m、９号墳が 26.5m、10 号墳が最も低く 25.5m をはかり、南に向けて少しずつ標高を下げていることが読み取れよう。

（2）8 号墳（第 9･10 図、図版 4･5）

概要　調査区の北西寄りで発見した。試掘調査で発見されていた 2 基の古墳のうちの 1 基である。調査区内で最も高い位置にあり、石室床面レベルが約 28.5m をはかる。天井石が抜き取られ、側壁も腰石を残し大部分が失われ、閉塞石も削平により大半が失われるなど、大きく改変された状態であったが、床面直上より須恵器や鉄鏃などが原位置のまま見つかったことは幸運であった。

墳丘　墳丘盛土は最も残るところでかろうじて 20㎝ほどの厚さが見られる程度で大きく削平されていた。盛土は地山の風化土を利用しており、地山との区別はややつけがたい。盛土の残存幅は最大 8m 程度で、墳丘の大きさはこれよりも大きくなるとみられる。旧地形を見ると奥壁から墓道方向に約 6m、背面に約 4m 弱の不自然なコンターが走っており、墳丘の最大直径は約 10m になるものと推定される。墳丘は削出と土盛りにより造成されたと考えてよかろう。なお、墳丘に伴う配石等は確認されなかった。仮に置かれていたとしてもすでに流出して失われてしまったのであろう。また明瞭な周溝も検出されなかった。

主体部　玄室は平面形態が略縦長長方形を呈し、幅 80 ～ 100㎝、長さ 230㎝ほどをはかる。ただし袖石がやや不明瞭であり長さは推定である。南東に開口しており、開口方向は斜面の傾斜方向とほぼ直交する。

玄室の残存状況は斜面上方が比較的残っていて腰石の上二段までの石材があるのに対し、斜面下方は残りが悪く腰石がかろうじて残る程度で、袖石は奥壁に向かって左側のみが残り右側は失われている。腰石の大きさも奥壁側が比較的高さがあるのに対し羨道側は低く小さな石材を用いる傾向にある。奥壁の石積みは腰石の上二段目から持ち送りが始まっており玄室の天井高はかなり低かったものとみられる。腰石の裏側にはやや締まりの悪い灰褐色粘砂質土が充填されていた。地山を掘削して腰石を据えた後に裏込土として詰められたものであろう。

玄室の床面には直径 10 ～ 20㎝ほどの大きさの円・角礫が敷き詰められていた。この敷石直上より、副葬遺物が出土している（後述）。敷石は、羨道側の一部が失われていた。羨道の流出によりともに流れ出たものであろうか。

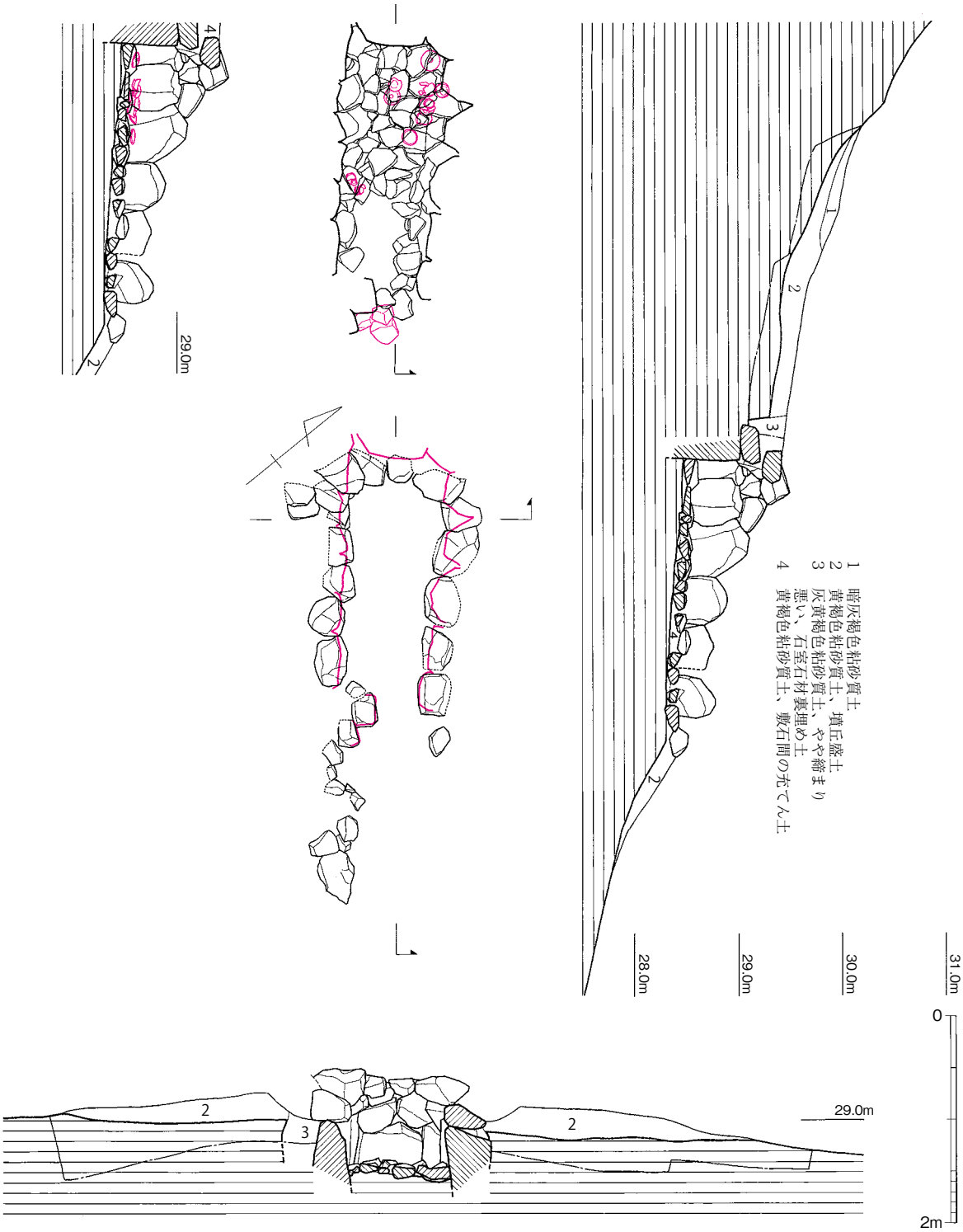
羨道部　羨道部は斜面の流出によりほぼすべてが失われていた。わずかに残された傾斜には墳丘盛土と同じ質の土が堆積していたが、堅く締まっている状況から、再堆積ではなく当初より盛られたものと判断した。つまり、玄室は玄室入り口の床面高さに合わせて奥壁側に水平に掘り込むように作られ、羨道部分は高さを玄室に少しでも合わせるように盛土がなされたものとみられる。羨道の左壁に当たるライン上に人頭大の石材が列状に並んでいたが、その基底部高さは現在の傾斜に沿っており、これが築造当時の位置を保っているかどうかは定かではない。

閉塞　玄室の出口付近に 3 石ほどの石材が置かれていた。敷石とは異なり平坦面を意識したような配置ではなく、閉塞石の可能性を考えたが、付近は乱れが激しく確実ではない。

出土遺物　玄室の敷石直上から須恵器が完形で数個体、鉄鏃が数本、鉄斧が 1 点出土した。須恵器のうち高坏と平瓶（第 15 図 12･13）は玄室奥壁に向かって左側の中央部に並べられ、坏蓋 5 点と坏身 4 点は玄室奥壁に向かって右側の奥に折り重なっておかれていた。鉄器類は坏蓋と坏身の近くにまとめておかれ、出土時には銹着して 2 つほどの塊となっていた。（小澤佳憲）

土器（第 15 図、図版 9）

須恵器（1 ～ 14）　1 ～ 5 は口縁部にカエリを有し、天井部中央につまみを貼り付けるタイプの坏



第 10 図　8 号墳石室実測図（1/60）

蓋である。1 は内面のカエリは比較的低いものであるが口縁端部を結ぶ線から下方へわずかに張り出している。つまみは断面が扁平な菱形を呈しており、典型的な宝珠形つまみではない。内・外面ともに回転ナデが施される。胎土は砂粒を多く含むも精緻である。焼成は良好で、内・外面ともに灰黄色を呈する。焼けひずみのため正確に法量を把握することはできないが、おおむね口径 12.0 cm、器高 3.5cmを測る。2 は全体的に扁平な形状をしている。内面のカエリが直線的にのび、他の資料とは異なる形をしている。内・外面ともに回転ナデが施されている。焼成は良好で、外面は灰色、内面は灰黄色を呈している。口径は 12.6cm、高さは 3.3cmを測る。3 は全体的に扁平な形状をしている。カエリは緩やかな U 字形で、内面のカエリは高くないが、外面のそれより低くなることはない。外面 1/2 に回転ヘラケズリが見られるほかは回転ナデが施されている。胎土に砂粒をまばらにふくむ。焼成は良好で外面は灰色、内面は灰黄色を呈している。口径は 13.6cm、高さは 3.2 cmを測る。4 は口縁部のカエリが比較的高いもので、内面のカエリが口縁端部を結ぶ線から下方へしっかりと張り出し、全体的に器高が高くなっている。調整は外面天井部に回転ヘラケズリが見られるほかは回転ナデで仕上げられている。胎土は 5㎜程の石英が一部確認できるが、おおむね 2㎜程度の砂粒をまばらに含んだものとなっている。焼成は良好で、内・外面ともに灰黄色を呈する。口径は 12.4cm、高さは 3.5cmを測る。5 は断面菱形に近い形状のつまみを有する。カエリの先端が欠損しており、形状の詳細を把握することは困難であるが、おそらく、U 字形のカエリをもち、内面のカエリは下方へ張り出していたと考えられる。内面は剥落や磨滅が著しいため詳細は不明であるが、外面は天井部に回転ヘラケズリが施され、その他の部分は回転ナデである。焼成はやや軟質で内・外面ともに灰黄色を呈する。6 ～ 11 は坏身である。おおむね高台を有している。6 は直線的に外傾し、端部がやや内湾する口縁部をもった坏身に、八の字形に外に開き端部で屈曲させる高台が貼り付けられている。口縁端部は丸く、付近では強いナデにより溝状のくぼみが廻る。高台は内接面で接地する。調整は、外面底部付近 1/3 が回転ヘラケズリであるほかは回転ナデで仕上げられている。胎土には 1㎜程度の石英を含むが、おおむね精緻である。焼成は良好で、内・外面ともに灰黄色を呈している。口径は 13.6cm、器高は 5.1cmを測る。7 も 6 と同様の形態をしている。調整は、内・外面ともに回転ナデが施されており、特に口縁部付近では、強く施されているため溝状のくぼみが見られる。胎土には、砂粒を多く含んでいる。焼成は良好で、外面は灰色、内面は灰黄色を呈する。口径は 13.5cm、器高は 5.5cmである。8 は 6･7 と同様の形態であるが、口縁部がやや強く外反するところが異なっている。調整は胴部 1/3 が回転ヘラケズリである他は回転ナデがしっかりと施されている。焼成は良好で、外面は灰色、内面は灰黄色である。焼けひずみが強く、法量は正確には把握することは困難であるがおよそ口径は 11.6cm、器高は 5.6cmを測る。9 は緩やかに内湾しながら立ち上がる胴部を有するものである。口縁部下には、工具痕が沈線状に一周巡らされている。調整は、内・外面ともにおおむね回転ナデが施されているが、胴部外面 1/2 は回転ヘラケズリがみられる。ただし、この回転ヘラケズリは丁寧に施されておらず、ケズリの単位がそれぞれ独立しているため、ヘラケズリの前段階に施されたであろう回転ナデが、ケズリとケズリの単位の隙間から見えている。焼成は良好で、外面は灰黄色、内面は灰色である。口径は 13.6cm、器高は 5.1cmを測る。10 は坏身の口縁部の小片である。小片のため形状の全体を把握することはできないが、6 ～ 9 と同様の形状をしていたと考えられる。この資料は、14 の長頸壺の底部に付着しており、おそらく 14 の焼成時に張り付いてしまったものと思われる。調整は内面に回転ナデが施され、焼成は良好で灰

黄色を呈する。11 は高台付坏の高台部の小片である。6 ～ 9 と同様の坏部を有していたものと考えられる。調整は回転ナデが施され、胎土は 1㎜程度の砂粒を多く含んでいる。焼成は良好で、内・外面ともに灰黄色を呈する。底径は復元で 7.4㎝を測る。12 は高坏である。平底気味の底部から直線的に外傾しながら開く口縁部をもつ坏部に脚が付いたものである。脚部は高くはなく、脚部高と坏部高がほぼ等しい。調整は、坏部外面底部付近に回転ヘラケズリが施されている以外は、回転ナデで仕上げられている。装飾は脚部中央に 1 条の沈線が施されているのみでスカシは見られない。焼成は良好で、内・外面ともに灰黄色を呈し、胎土は 1㎜程度の砂粒を多く含む。焼けひずみがあり、正確には測れないが、おおむね口径は 9.9㎝、器高は 8.0㎝である。13 は平瓶である。底部は平たく、胴部は丸い。肩の張りは緩やかで外傾しながら開く口縁部につながる。胴部外面はカキメが施されるが、底部付近のみ静止ヘラケズリ調整によって一部消されている。その他は回転ナデである。胎土は砂粒を多く含んでおり、焼成は良好である。内・外面ともに灰黄色を呈する。14 は長頸壺である。平底は底部で、偏球形の胴部から直立する頸部に至り、そのまま緩やかに外反する口縁部を持つ。頸部中央には 2 条の沈線文が施され、頸部－胴部境の内面には絞り痕が明瞭に残っている。胎土は砂粒をまばらに含むも精緻である。焼成は良好で、内・外面ともに灰黄褐色である。口径は 7.8㎝、器高は 22.7㎝、底径は 7.0㎝である。底部に 10 が癒着していた。（大森真衣子）

鉄器（第 16 図、図版 9）

鉄鏃（1 ～ 9）　1 ～ 9 は鉄鏃である。うち 1 ～ 8 はいずれも 8 号墳石室敷石の直上、石室の奥壁に向かって右側やや奥で坏身・坏蓋がまとまって出土した場所（第 10 図参照）のすぐ左脇から出土した。出土時には 1 ～ 7 は銹着してひとつの塊となっていたほか、8 もそのすぐ横から出土しており、まとめて副葬されていたものと考えてよい。上記のような出土状況から、5 ～ 8 の茎部が 1 ～ 4 と同一固体である可能性が高いが、整理時には接合しなかったため一応別固体として提示しておく。1 ～ 4 は先端部が残っているもので、いずれも有茎の方頭式である。1 は刃部の一部と茎が欠損し、全長 8㎝ほどが残る。鏃身長約 5.7㎝、刃部幅が推定で 2.1㎝、茎長は 1.9㎝ほどが遺存する。厚みは茎が均一で約 3㎜あり、刃部に行くにつれて薄くなる。2 も刃部の一部が欠損するほか茎が失われている。全長 7.6㎝を測りそのうち鏃身長が 7㎝、刃部幅は推定 3.9㎝とやや大型である。厚みは鏃身部中位が最も厚く約 2.5㎜で、刃部・茎部方向に行くにつれ薄くなりながらやや湾曲する。3 は比較的残りがよく、全長 9.7㎝が遺存する。うち鏃身長 6.7㎝、茎の遺存長が 3㎝、刃部幅 2.4㎝ほどを測る。厚さは茎部が均一で約 3.5㎜、刃部方向にまっすぐ伸びながら徐々に薄くなる。4 も同形である。全長 9.9㎝を測るが刃部・茎部が欠損し、鏃身部の遺存長が約 5.9㎝、茎部が約 4㎝を測る。厚さは茎部が約 3㎜で、刃部方向に湾曲しながら薄くなる。5 ～ 8 は茎部のみが残るものである。いずれも断面形状は方形で幅 4㎜、厚さ 3㎜程度を測り、1･3･4 の茎の断面形状と共通する。9 は 8 号墳の敷石除去時に出土した。やはり鉄鏃の茎部で、ほかの例と比べてやや太く幅 6㎜、厚さ 4㎜程度を測る。遺存長は約 4.7㎝である。

不明鉄器（10）　10 は不明鉄器の茎部である。8 号墳の敷石除去時に出土した。遺存長は 4.7㎝、厚さは 4.5㎜、上に伸びるに従い徐々に太さを増しており細いところの幅が 5㎜、太いところでは 1㎝程度の太さを持つ。刀子など、小形の利器の茎と見たい。

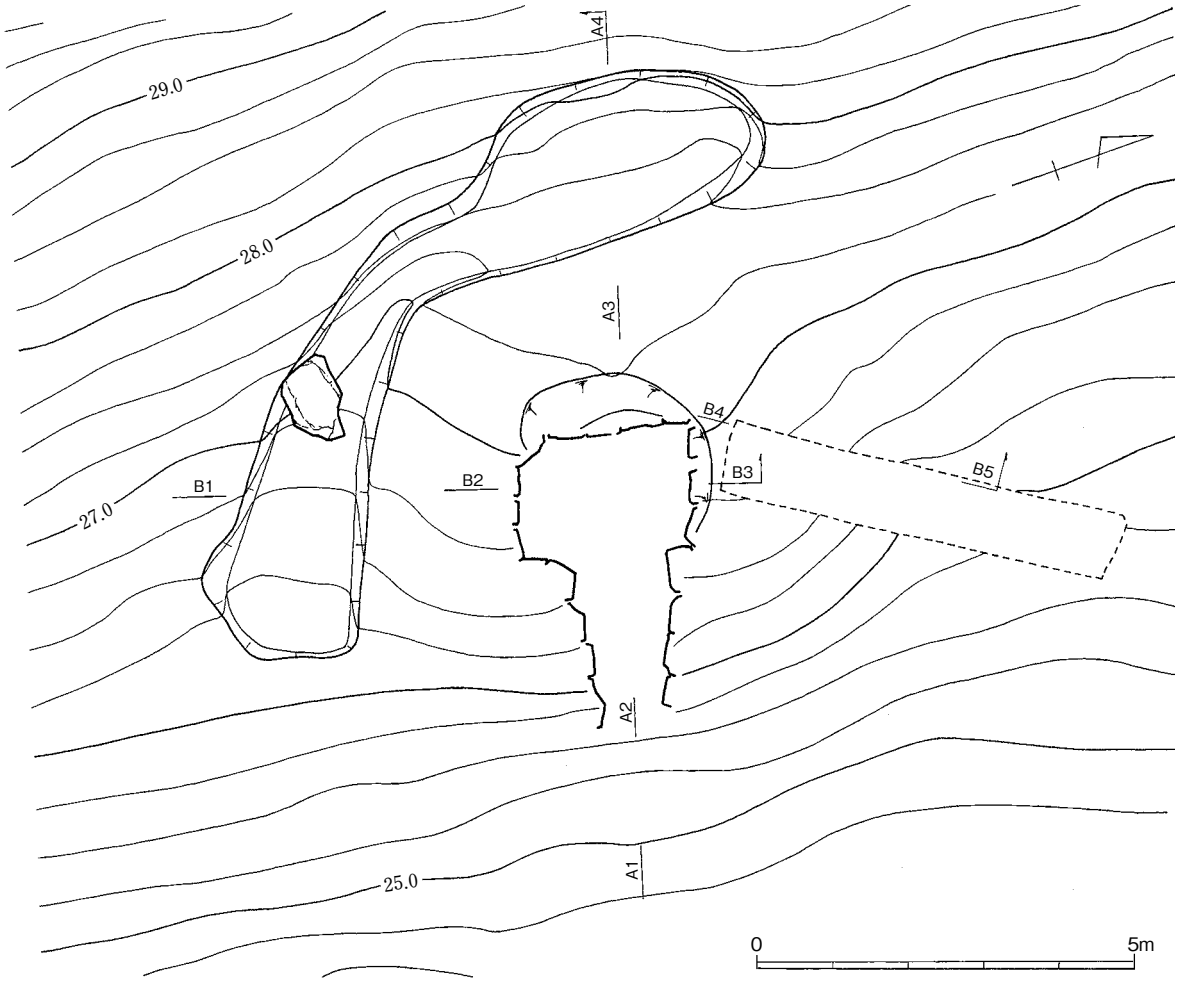
鉄斧（11）　11 は鉄斧である。8 号墳の床面直上より出土した。出土位置は記録に残しておらず不明である。銹が著しく本来の形状を復元するにはやや困難があったが、やや強引に図化している。

これによると全長は推定7.7cm、刃部幅が約4cm、中位のくびれ部の幅が約3.1cm、厚さは最大で1.5cmほどを測る。袋部の折り返しは稚拙で身の中位の段も小さい。（小澤佳憲）

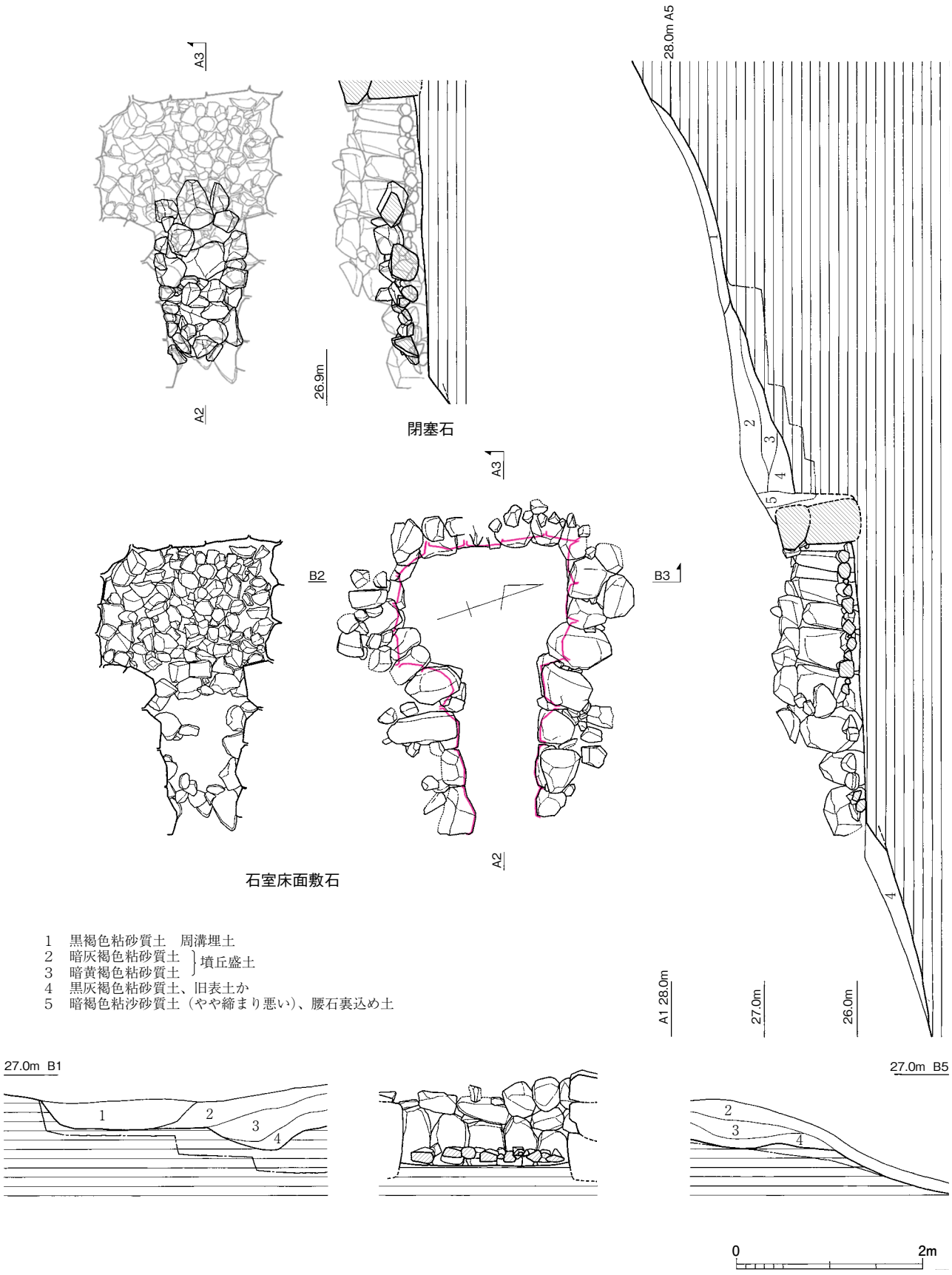
（3）9号墳（第11･12図、図版5･6）

概要　調査区のほぼ中央部に位置する。試掘調査において発見されていたうちの1基である。3基のうち中位の標高に位置し、石室床面レベルで26.0mほどをはかる。古墳の封土は大半が失われていて天井石もすべて失われ、側壁も玄室部分で腰石の上一段部分までしか残っていないが、羨道のある東方向の地形が8号墳と比べて緩やかなため羨道部の残りは8号墳よりもよく、羨道床面と腰石は1.8mほど残されていた。石室内部には側壁に用いられた石材が大量に崩落していたほか、表土も多く流れ込んでおり、石室内には遺物は全く認められなかった。

墳丘　墳丘盛土は石室西側・南側で比較的残りがよく厚さ約40～60cmをはかる。盛土は3層ほどに分層できるがいずれも赤（黄）褐色系統の粘砂質土で、地山の風化土を利用していて、地山表層部との区別はややつきがたい部分がある。地山最上位に旧表土層が確認されず、地山をある程度地ならししてから盛土を行ったものとみられる。盛土の残存幅は南北幅7m、東西長8mほどであるが、



第11図　9号墳墳丘測量図（1/100）



第 12 図　9 号墳石室実測図（1/60）

周溝が西から南側にかけての山側に半月状に残っており、周溝内側から石室中央部までの長さを折り返すとおおよそ上記の数字に一致することから、墳丘は幅 7m、長さ 8m のわずかに偏った円形に復元できる。羨道出口付近（特に向かって左側）に数石の礫がコーナー部を丸く収めるように配石されており、外護列石の可能性が考えられるが、すでに原位置を移動している可能性もある（図版 6-2）。なお、同じ写真に見える、玄室奥壁に向かって左側（北側）の墳丘裾を廻るかのように配石されている礫は、本来墳丘盛土内にあったものだろう。

周溝　周溝は、南～西側の山側斜面で確認された。おおよそ全周の 1/4 が検出されたが、本来の周溝は墳丘を全周するようなものではなく、現状よりわずかに北側に延びる程度の半月形で山側斜面を切っていたのであろう。幅は最も広いところで 4m ほど、深さは同じく 30cmほどを測るが、これは担当者の不注意によりやや掘りすぎた感が否めず、本来は深さ 10cm程度のくぼみ状ではなかったかと思われる。埋土は地山に比べて黒色味が強く腐植土を含む表土の流入・堆積で埋没したものとみられる。

主体部　玄室は平面形態が横長の略長方形を呈し、幅 170cm、長さ 130 ～ 140cmほどの規模をはかる。玄室の形状はやや丸みを帯びていて作りも悪く、特に南西コーナー部は角出しがきちんとできておらず丸みを帯びている。東南東に開口しており、開口方向は斜面の傾斜とほぼ直交する。玄室の残存状況は悪く、腰石の上一段分が残されている程度である。腰石の大きさは小さく、残された 2 段目の石材ですでに少しずつ持ち送りが始まっており、玄室の天井高も低かっただろう。腰石の裏側にはやや締まりの悪い暗褐色粘砂質土が充填されており、地山を掘り下げて石室を設置したことがわかる。

玄室の床面には直径 10 ～ 20cmほどの大きさの円・角礫が敷き詰められていた。羨道部にも一部敷石のようなものが見られ、本来は敷き詰められていた可能性がある。閉塞石が見られる部分を中心に敷石が見られない箇所が広がっており、閉塞石を設置する際に敷石が乱されたものとすれば追葬の可能性も考えられよう。

羨道　羨道部は玄室南東側に付き、玄室の中心線からやや右側に振った場所にある。床面と腰石が約 1.6m ほど残されており、そこから先は失われていた。外護列石の可能性がある石材までの長さは約 3.5m ほどあり、これがおおよその羨道＋墓道の長さであろう。

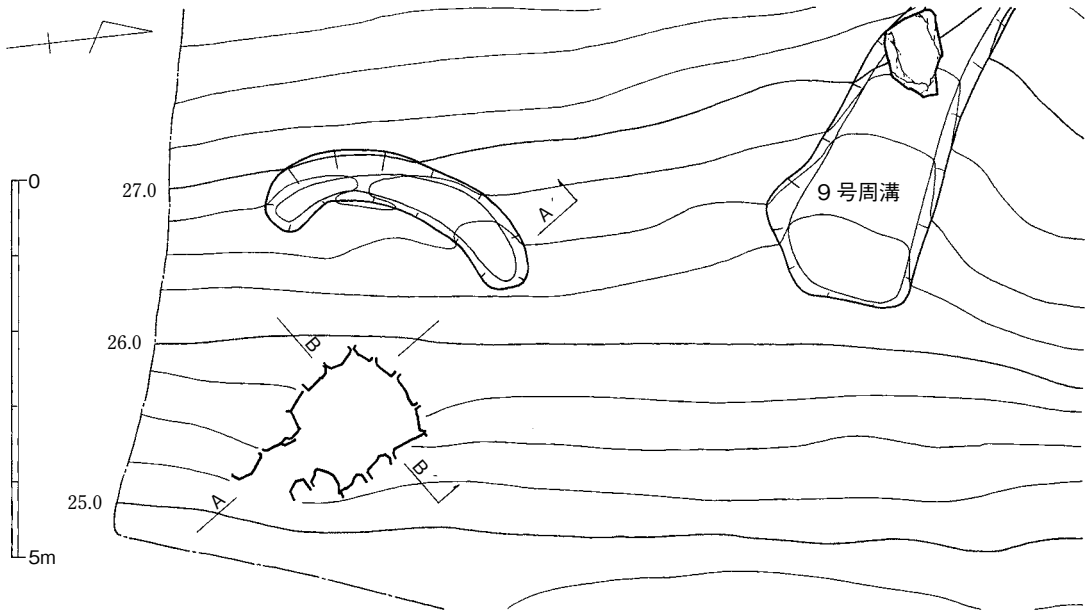
閉塞　玄室入り口付近には小児頭大～人頭大の円・角礫を用いて乱雑に積んだ閉塞石が残されていたが、ほぼ基礎部分のみしか残されておらず高さは 30cm弱であった。閉塞石はかなり玄室方向にまで広がっており、あるいは盗掘等による攪乱も考えられよう。

出土土器　玄室・羨道・墳丘盛土・周溝内などから出土遺物は出土しなかったが、第 15 図－ 15 の須恵器坏身口縁部片は本墳の近辺の表土掘削中に出土した。

所属時期は不明であるが周囲の古墳との兼ね合いから見れば 7 世紀後半代、表土中の土器片を見れば 6 世紀末～ 7 世紀初頭が考えられる。

（4）10 号墳（第 13･14 図、図版 7）

概要　調査区の南東端部に位置する。本調査に着手してまもなく約 5m 間隔で設定した 4 号トレンチと 5 号トレンチのちょうど中間に位置しており、トレンチ調査でも危うく見逃すところであった。9 号墳の墳裾部をやや広めに重機で剥いでいる時に不自然な集石部分を発見し、その周囲を広く重



第 13 図　10 号墳墳丘測量図（1/100）

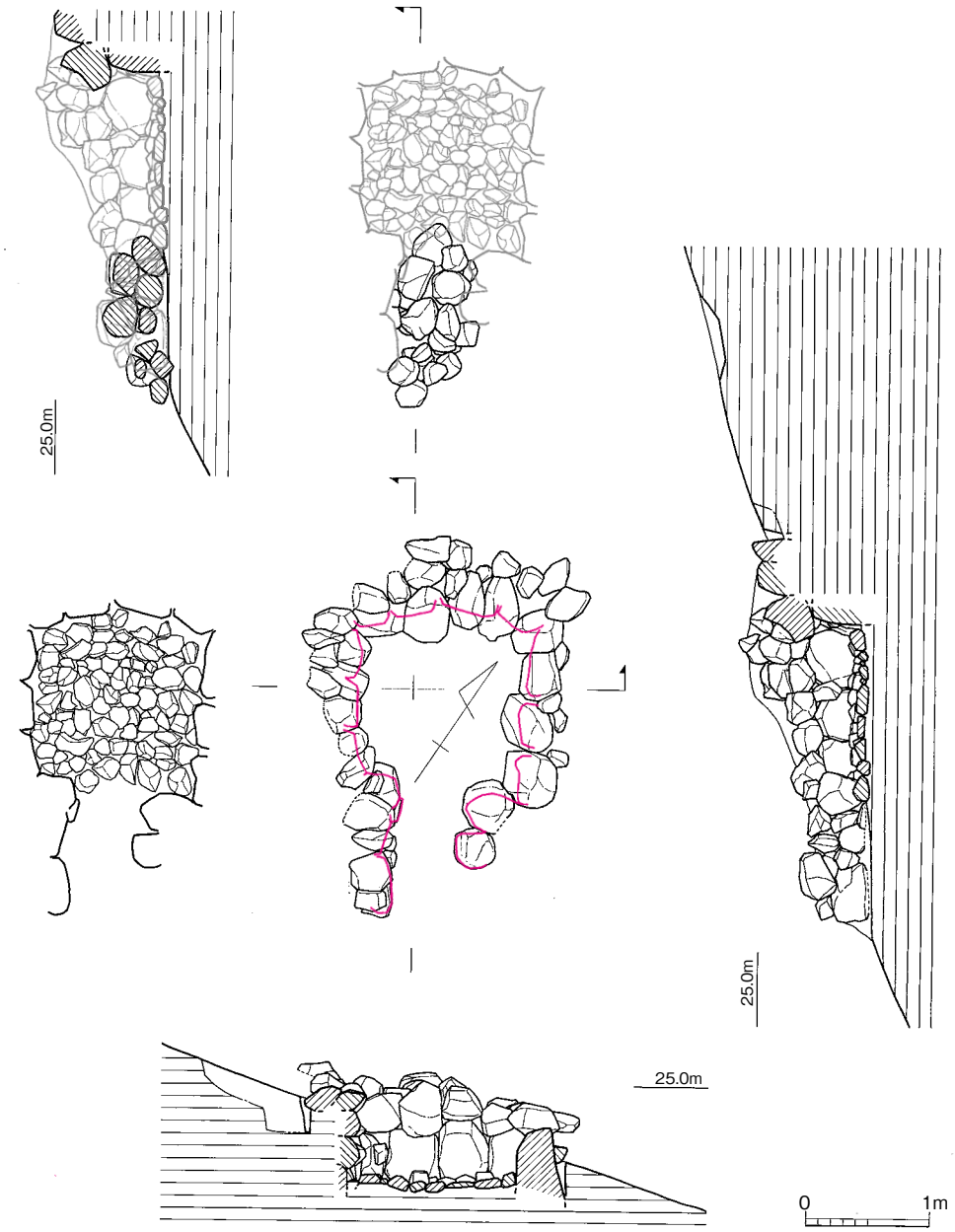
機で開けて、ようやく石室が遺存していることを把握した。旧地形では墳丘の存在を示すような等高線の乱れは全く認められなかった。このような状態で残された古墳についてはどのようにその存在を把握すべきか悩ましいが、やはり事前調査で遺構が見つからなかった範囲もトレンチを多く入れ、また広めに表土を剥ぐ等の対応が必要であることを痛感した。

3 基のうち最も低い場所にあり、石室床面レベルは約 24.0m をはかる。封土は完全に失われており、天井石も全く残されていない。側壁は西（向かって左）・北（奥）壁の残りがよく腰石の上一段分が残る。羨道部分は約 1.2m ほどが残され、そこから先は失われている。石室内には側壁に用いられていた石材が大量に崩落して埋没し、地表には陥没も認められなかった。石室内には遺物は全く認められなかった。

墳丘　墳丘盛土は完全に失われている。周溝が西から北側にかけて半月状に残されており、その配置と石室との位置関係から、墳丘の大きさを長さ 9m ほどに復元しておきたい。幅はこれよりやや短くなるだろう。

周溝　周溝は、西から北側の山側斜面で確認された。おおよそ全周の 1/5 が検出されたが、本来の周溝は墳丘を全周するようなものではなく山側を断ち切った半月形であったものと思われる。周溝の幅は広いところでも 1m 弱、深さはせいぜい 15㎝程度と残りは非常に悪い。埋土は暗褐色の粘砂質土で表土の流入・堆積土で埋没したものであろう。

主体部　玄室は平面形態が略正方形を呈し、幅 130㎝、長さ 140㎝ほどの規模をはかる。奥壁と左側側壁はやや丸みを帯びている。南南東に開口しており、開口方向は斜面の傾斜に正対せず約 45 度左（南）方向に振れる。玄室の残存状況は悪く、腰石の上 1 段分が残されるのみである。腰石の大きさは小さく、特に奥壁で持ち送りがすでに見られることから玄室の天井高は低かったとみられる。腰石の裏側にはやや締まりの悪い暗褐色粘砂質土が充填されており、地山を掘り下げて玄室石



第 14 図　10 号墳石室実測図（1/60）

材をおいたことがわかる。玄室床面には直径 10 ～ 20㎝程度の円・角礫が敷き詰められていた。羨道部には敷かれていない。

閉塞　羨道部には閉塞石が充填されていた。閉塞石は人頭大のものが多く、比較的まとまっておかれていて荒らされたような痕跡は確認できなかったが、大半が削平により失われているため追葬の有無や盗掘については判断できない。

羨道　羨道部は玄室南南東方向に付き、玄室の中心線より東（向かって左）によっていて、片袖式にやや近い構造となる。床面と腰石が約 1.2m ほど残されていたが、そこから先は失われていた。

出土土器　玄室・羨道・墳丘盛土・周溝内などから遺物は全く出土しなかった。従って所属時期は

不明であるが、7 世紀後半前後か。（小澤佳憲）

（5）そのほかの出土遺物

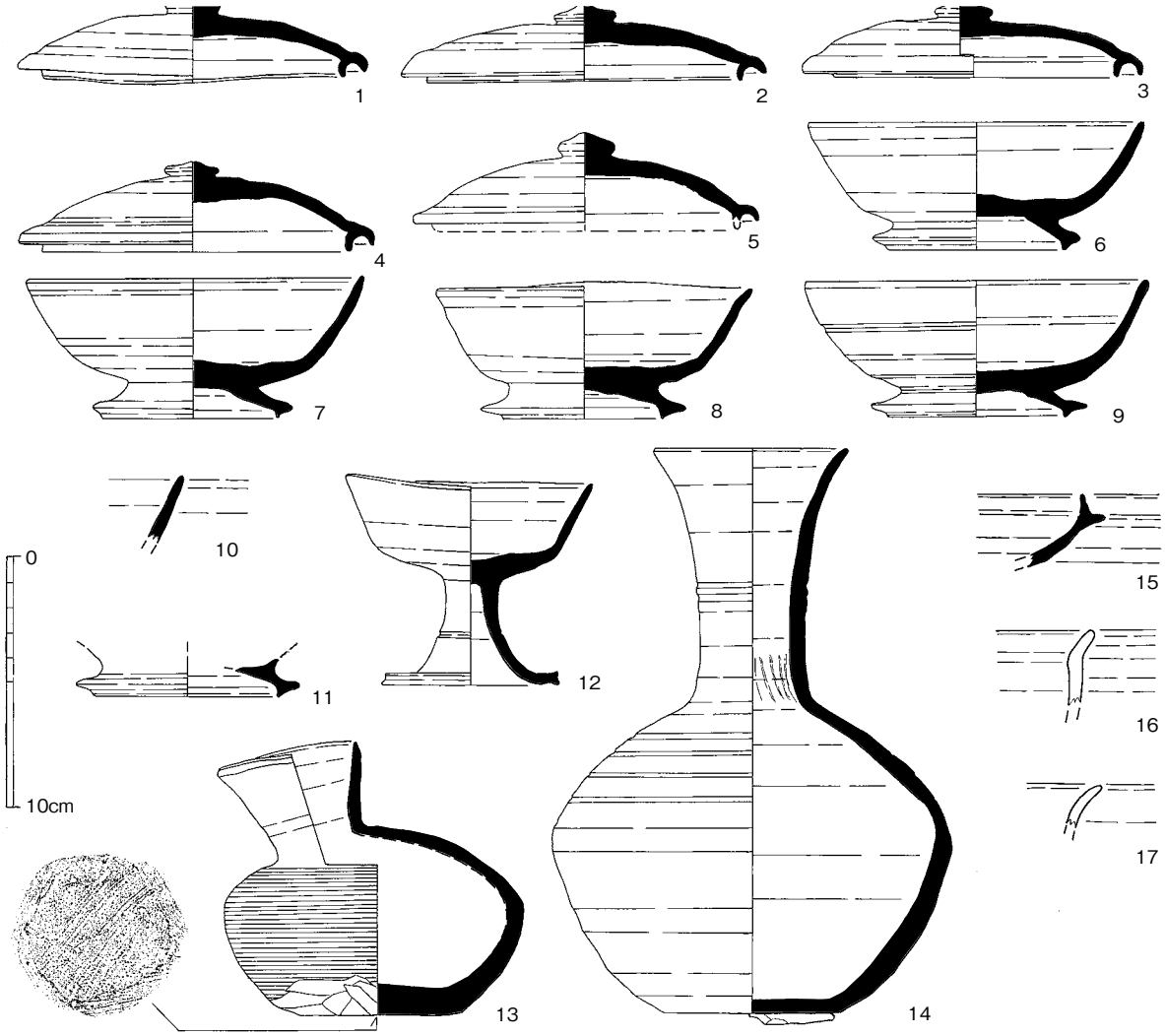
遺構に伴わない出土遺物としては、須恵器のほか土師器、縄文土器とみられる粗製の土器の小片、石鏃などがある。いずれも表採・表土中・包含層中などの出土である。

土器（第 15 図）

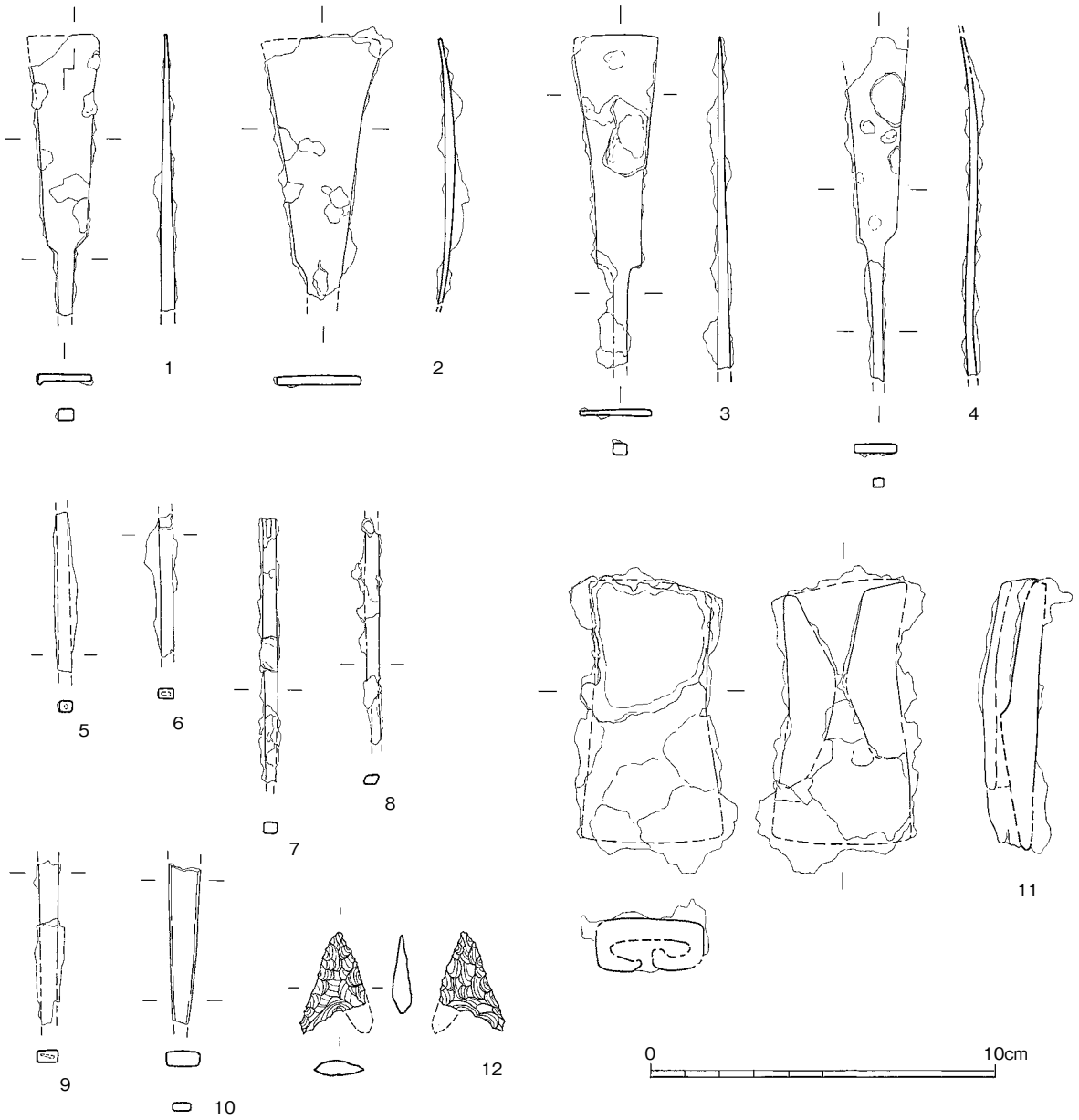
須恵器（15） 15 は坏身の口縁部の小片である。立ち上がりは低く、受け部も短いかえりを有する。底部付近に回転ヘラケズリの痕跡が見られるが、それ以外はナデ仕上げが施されている。焼成は良好で、内・外面ともに灰黄色を呈する。小片のため径は復元できない。

土師器（16･17）16･17 は甕の口縁部の小片である。16 は直立気味の胴部から緩やかに外反する口縁部をもつと考えられる。調整は、内・外面ともに回転ナデが施される。焼成は良好で、内・外面ともに赤褐色を呈する。17 は緩やかに外反する口縁部をもつ。調整は内・外面ともに回転ナデが施される。焼成は良好で、赤褐色を呈する。いずれも小片で径は復元できないが、小型の器種である。

石器（第 16 図、図版 9）



第 15 図　福間菜切古墳群第 2 次調査出土土器実測図（1/3）



第 16 図　福間菜切古墳群第 2 次調査出土鉄器・石器実測図（1/2）

石鏃（12）　12 は石鏃である。無茎式で抉りがあるタイプで、片方の抉り部を欠損する。姫島産黒曜石の特徴を持つ。全長 3.0㎝、最大部幅が推定で 2.2㎝、重量は 1.6g をはかる。（大森真衣子）

4　総括

（1）福間菜切古墳群の全体像

①はじめに

概要　福間菜切古墳群第2次調査では、以上のように終末期群集墳を3基調査した。いずれも直径10m以下の小円墳で、小規模な竪穴式石室を持つ。8号墳のみ床面直上から遺物が出土し、7世紀後半に比定できる。それ以外の2基については所属時期を明らかにできない。

本古墳群では1986年度に国道10号線椎田バイパスの建設に先立って1次調査が行われている。1次調査地の調査範囲は2次調査地のすぐ北側に隣接しており、1～7号の計7基の古墳の存在が明らかになり、うち路線内に石室のある6基の発掘調査が行われた。これらの古墳についても、やはりすべてが直径10m以下の小円墳で、小規模な竪穴式石室を持ち、出土遺物から時期が判明する古墳はすべて7世紀後半に比定できる。したがって、1･2次調査地にはおなじ古墳群が広がっており、その構成も共通性が非常に高いといえる。

ここでは、1･2次調査の成果を通覧して、福間菜切古墳群の構成について若干の検討を加えておく。

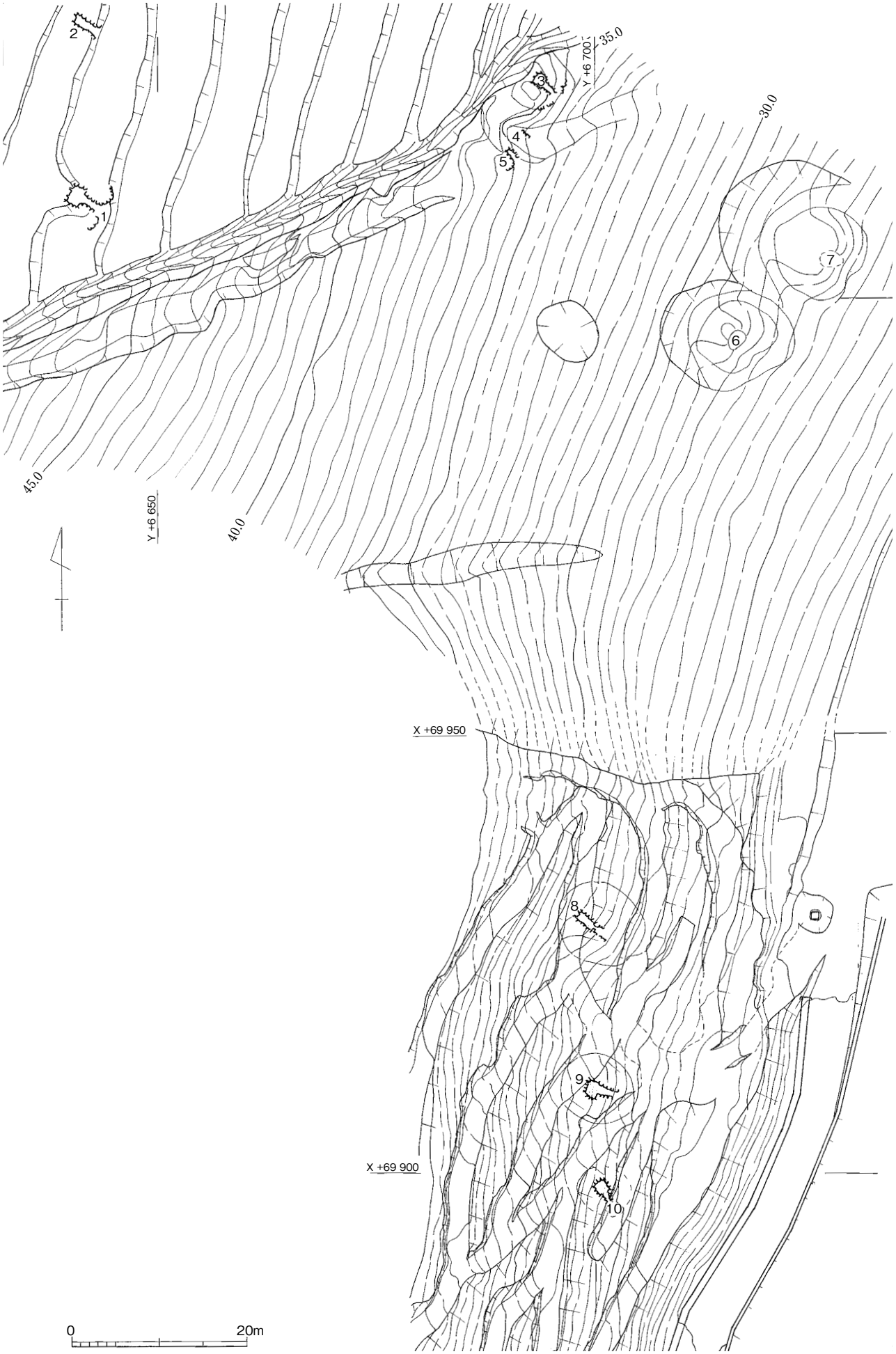
②各古墳の立地

標高帯ごとの古墳のまとまり　1･2次調査で発見した1～10号墳について、調査前の地形測量図にその位置を落とした（第17図）。それぞれの古墳同士の位置関係を見てみると、標高帯により3群のまとまりがみられることがわかる。最も低い位置のものが6～10号墳の計5基である。石室床面レベルがおおよそ24m～28m付近にあり、南側がやや低く北に向かって少しずつ標高をあげながら一列に並ぶ。これらの5基は墳丘の規模が10m前後と古墳群の中では比較的大きいことでも共通し、一見して本古墳群の中で優位にある集団のようにも見えるが、石室の規模を見ると9･10号墳はさほど大きい部類ともいえず、これらの被葬者を社会的優位にある集団と想定するのはやや短絡的過ぎるだろう。墳丘の大きさについては、むしろこれより上位にある古墳群がみかん畑の開墾による影響を受けて大きく改変されていることを併せて考える必要があるかもしれない。ここでは5基が近いコンターライン上に一列に並ぶことを指摘するにとどめておきたい。

中位に位置するのが3～5号墳である。これらは標高約35m付近、1次調査区の中央部付近に極めて近接して営まれる。図には示していないが、2次調査区における標高35m付近をみると、傾斜がやや急になっていることから、南側においてはこの標高付近に古墳を造営しにくかったと思われ、このレベルの古墳群は1次調査区から北側に展開するものと見たい。

最後に1･2号墳である。標高45mほどの位置にあり、当古墳群の中で最も高位に位置する。南側の2次調査区付近における標高45m付近は丘陵の傾斜がかわってかなり緩やかになっている箇所で、一見して古墳が存在しないことが明らかであった（念のため試掘調査を行ったがやはり遺構は認められなかった）。したがって、南側ではやはりこの標高付近にも古墳が造営されなかったと考えられる。

墓道の想定　さて、標高25m付近に群集する6～10号の計5基の古墳の配置であるが、北の6･7号と南の8～10号の間に距離がややあるものの、列状に配置されていることは注目される。少なくとも6･7号と8～10号は、等高線に並行して走る墓道をそれぞれ共有していたことは容易に推



第 17 図　福間菜切古墳群 1･2 次調査区内古墳分布図（1/600）

測できる。さらに、標高の低い 10 号から標高の高い 6･7 号に向かって谷平野から緩やかに上る墓道を想定することも可能かもしれない。ただし、調査においてそのような痕跡はまったく把握できなかったため、推測に過ぎない。

なお、ほかの 2 群については、それぞれ所属する古墳が現在のところ 3 基 ･2 基しかなく、墓道の想定は困難といわざるを得ない。ここでは、本古墳群の配置原理が等高線に沿っており、調査区付近では墓道は等高線に沿って伸びる可能性が高いことを指摘するにとどめておきたい。

③古墳群の広がり

各小群の広がり　本古墳群では上記のようにおおよそ等高線に沿って 3 群の小群が形成されているが、このうち最も高位にある 1･2 号墳群と中位にある 3 ～ 5 号墳群については、地形条件や踏査・試掘調査の結果等を勘案するとそれ以上南側へは展開しない可能性が高いことを述べた。では、もっとも低い場所に並ぶ 6 ～ 10 号墳についてはどうだろうか。

2 次調査で発見された 8 ～ 10 号墳の並び方をみたい。8 号墳と 10 号墳の間の距離は石室中心点間で 30m ほど離れているが、8 号墳の石室床面レベルが約 28.5m、10 号墳の石室床面レベルが約 24m で、その間に 4.5m ほどレベルが下がっている。墓道の傾斜が一定だとすると、10 号墳から今回の調査対象地の南限付近まで約 25m の間に墓道はさら 4m ほど下がることになる。第 7 図をみてもわかるように、標高 20m 付近はすでに農道や水田開発により大きく削られており、古墳が作られていたとしてもすでに破壊されている可能性が高い。また、低地との比高差がなく本来古墳が造営されていたかも疑問である。

福間菜切古墳群の範囲　以上の点から、1･2 次調査区内で発見された 3 つの小群はいずれも 2 次調査区より南側には展開しないと推測される。したがって、本古墳群は今回調査地点よりも南側には広がらない可能性が考えられる。

しかし、もちろん南側には 3 小群とはべつの高さに新たな小群が存在している可能性もある。調査中に調査範囲の南側を数度踏査してみたが、竹木が伐採されておらず見通しが悪く、古墳の可能性のあると推測される等高線の変化についてはっきりとはわからなかった。しかし、過去に発行された遺跡分布地図（福岡県教委 1976･ 椎田町教委 2000）を見ると、今回の調査区と重複するか、やや南寄りの地点で 3 基の古墳を記録しており、古墳の分布域がまだ南に広がる可能性を否定しきれない。以上から、ここでは今回調査地点が本古墳群の南限にかなり近い箇所であると想定しておくが、もちろんそれよりも南に広がる可能性についても捨象しないでおきたい。

【参考文献】

福岡県教育委員会『福岡県遺跡等分布地図（豊前市・築上郡編）』、1976 年

福岡県教育委員会『椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告－２－　石堂中後ヶ谷古墳群・菜切古墳群・頭無古墳群』、1990 年

椎田町教育委員会『椎田町内遺跡等分布地図』椎田町文化財調査報告書第 13 集、2003 年

（2） 築上地域における古墳玄室の平面形態

①はじめに

既往の研究　福間菜切古墳群１次調査の担当者の一人であった緒方泉氏は、付近の終末期群集墳の石室（特に玄室）の平面形態について、長幅比とサイズから分類を試み、横長方形a･b類、正方形ａ～ｄ類、縦長方形ａ～ｄ類の計10類型に細分した（福岡県教委1990）。しかし、各領域の境界は必ずしも明瞭ではなく、今回調査した資料を加えるとますます細分は難しくなるとみられる。また、氏は石室の規模を分類項目に入れているが、これは古墳自体の規模によって左右される可能性があり、分類や編年にそのまま用いるにはやや問題があろう。

対象資料　そこでここでは、改めて築上町・豊前市境界域周辺の古墳時代後期群集墳について玄室の規模を比較検討したい。対象資料は、氏が列挙したものに新出の資料を若干加えて（第２表）以下のとおりとした。行橋市域：渡築紫古墳群（行橋市教委2004）、築上町域（旧築城町）：安永古墳群（築城町教委1984）、築上町域（旧椎田町）：石堂中後ヶ谷古墳群・福間菜切古墳群・頭無古墳群（福岡県教委1990）、豊前市域：黒部古墳群（豊前市教委1979）。

②玄室の平面形態の検討

玄室の類型設定　まず、すべての玄室を対象として長幅比を比較した（第18図上）。散布図の上・中・下のそれぞれにドットの大まかな集まりが見られ、玄室の長幅比より３グループに分類できることがわかる。各群の内部では玄室の規模により奥行きが1m付近から3m付近までまんべんなく分布し、各群の内部をさらに細分することは難しい。

３グループのうち、散布図の上にあるものは玄室の長幅比が１：１程度からやや横幅が広いものまでを含み､緒方氏のいう｢正方形ｂ～ｄ類・横長方形a･b類｣の５類型を含む。これをここでは｢方形型」と呼ぶ。中程の一群は平面形状がやや細長いが、緒方氏の「長方形ａ～ｄ類」よりは幅の広い印象があるもので、緒方分類の正方形・長方形類型の双方から中間値に近いものが抽出されている。これを「長方形型」と仮称する。散布図の下に横長に分布する群は、玄室幅が奥行きに比べて狭いものを指し、緒方分類の「長方形ｂ～ｄ類」を一括した概念である。「細長方形型」と呼ぶ。またこれらの群の分布範囲からはみ出す明らかに大きなものが２つあり、後述したい。

③玄室の平面形態バリエーションの背景

時期ごとの玄室形態の変化　次に、時期ごとに玄室の大きさが変化するかどうか見るために、6c代から8c代までを５期に区分して時期ごとの玄室の大きさを比較した（第18図中）。上述の３類型ごとに見ていく。方形型をみると、各時期とも混在しながらもわずかに新しいものが小型化する傾向があり、7c末～8c初頭には奥行きが1.75m以下に限定され、さらに8c前葉にかけては奥行きが1.2～1.3m付近に集中し、見かけ上の幅が広がることにより横長方形状を呈するようになる傾向がありそうである。ただし、それ以前についても奥行きが短く横長方形状を呈する例は少量ながら存在し、この形態の玄室が特定の時期に出現するとまでは断定できない。

長方形型であるが、資料数が少ないためやや難しいところはあるが、6c代の資料が多く、古い形であることははっきりと指摘できる。新しくなるにつれてサイズは小さくなる傾向にありそうだが資料が少なく断言できない。

第２表　築上地域の後期群集墳における主体部の規模

遺跡	所在地（自治体）	古墳No.	墳丘	玄室規模		時期
			直径（m）	長さ（m）	幅（m）	
福間菜切古墳群第1次調査	築上町（旧椎田町）	1号墳	7.4	1.56	2.22	
福間菜切古墳群第1次調査	築上町（旧椎田町）	2号墳	5.0	1.60	1.12	7c後半
福間菜切古墳群第1次調査	築上町（旧椎田町）	3号墳	9.0	1.56	1.78	7c後半
福間菜切古墳群第1次調査	築上町（旧椎田町）	5号墳	5.0	1.32	0.84	
福間菜切古墳群第1次調査	築上町（旧椎田町）	6号墳	10.0	1.98	1.90	7c後半
福間菜切古墳群第2次調査	築上町（旧椎田町）	8号墳	10.0	2.30	1.00	7c後半
福間菜切古墳群第2次調査	築上町（旧椎田町）	9号墳	9.0	1.45	1.75	
福間菜切古墳群第2次調査	築上町（旧椎田町）	10号墳	9.0	1.25	1.35	
石堂中後ヶ谷古墳群1次調査	築上町（旧椎田町）	1号墳	7.0	2.02	1.02	7c末～8c初
石堂中後ヶ谷古墳群1次調査	築上町（旧椎田町）	2号墳	6.9	1.59	1.96	7c後半
石堂中後ヶ谷古墳群1次調査	築上町（旧椎田町）	3号墳	5.8	1.73	1.93	7c後半
石堂中後ヶ谷古墳群1次調査	築上町（旧椎田町）	4号墳	6.0	1.34	1.57	7c末～8c初
石堂中後ヶ谷古墳群1次調査	築上町（旧椎田町）	5号墳	10.0	1.20	1.90	8c前半
石堂中後ヶ谷古墳群1次調査	築上町（旧椎田町）	6号墳	5.5	1.44	0.80	
石堂中後ヶ谷古墳群1次調査	築上町（旧椎田町）	7号墳		2.16	1.10	8c前半
石堂中後ヶ谷古墳群1次調査	築上町（旧椎田町）	8号墳	9.2	1.20	1.78	8c前半
石堂中後ヶ谷古墳群1次調査	築上町（旧椎田町）	9号墳	5.0	1.67	0.84	
石堂中後ヶ谷古墳群1次調査	築上町（旧椎田町）	10号墳		1.22	1.70	7c後半
石堂中後ヶ谷古墳群1次調査	築上町（旧椎田町）	11号墳		1.00	1.94	
石堂中後ヶ谷古墳群1次調査	築上町（旧椎田町）	12号墳	6.5	1.10	1.20	8c前半
石堂中後ヶ谷古墳群1次調査	築上町（旧椎田町）	13号墳	6.0	1.51	1.79	7c末～8c初
石堂中後ヶ谷古墳群1次調査	築上町（旧椎田町）	14号墳	8.1	2.21	1.04	8c前半
石堂中後ヶ谷古墳群1次調査	築上町（旧椎田町）	15号墳		1.76	0.92	7c後半
石堂中後ヶ谷古墳群1次調査	築上町（旧椎田町）	16号墳		1.74	0.90	
頭無古墳群1次調査	築上町（旧椎田町）	1号墳		1.65	1.60	
頭無古墳群2次調査	築上町（旧椎田町）	1号墳	10.0	1.75	2.12	7c後半
黒部古墳群	豊前市	2号墳	12.0	2.15	1.35	6c前半
黒部古墳群	豊前市	3号墳	23.4	2.70	2.40	6c前半
黒部古墳群	豊前市	4号墳	16.0	3.00	1.25	
黒部古墳群	豊前市	5号墳		1.60	1.30	
黒部古墳群	豊前市	6号墳	16.2	1.70	2.00	6c後～7c前
安永古墳群	築上町（旧築城町）	2号墳		1.20	0.80	7c中頃
安永古墳群	築上町（旧築城町）	3号墳		1.70	2.00	7c後半
安永古墳群	築上町（旧築城町）	4号墳		1.70	1.90	7c後半
渡築紫古墳群	行橋市	1号墳	9.7	1.65	1.62	7c前半
渡築紫古墳群	行橋市	2号墳	9.4	1.63	1.26	7c前半
渡築紫古墳群	行橋市	3号墳	12.3	2.42	1.80	6c末
渡築紫古墳群	行橋市	5号墳	9.1	2.30	1.57	6c末
渡築紫古墳群	行橋市	6号墳		1.74	0.95	
渡築紫古墳群	行橋市	7号墳	10.2	1.70	1.65	7c中頃
渡築紫古墳群	行橋市	8号墳		1.55	1.80	7c後半
渡築紫古墳群	行橋市	9号墳	11.9	1.90	1.65	
渡築紫古墳群	行橋市	10号墳	8.6	1.97	1.77	7c末～8c初
渡築紫古墳群	行橋市	11号墳		0.95	1.22	7c後半
渡築紫古墳群	行橋市	12号墳		1.15	1.52	7c末～8c初
渡築紫古墳群	行橋市	13号墳	6.3	1.20	1.52	7c中頃
渡築紫古墳群	行橋市	14号墳	6.3	1.32	1.80	8c初頭
渡築紫古墳群	行橋市	15号墳	8.6	1.75	1.80	7c中頃
渡築紫古墳群	行橋市	16号墳	7.9	2.20	1.70	7c中頃
渡築紫古墳群	行橋市	17号墳		1.11	0.62	
渡築紫古墳群	行橋市	18号墳		1.13	0.62	
渡築紫古墳群	行橋市	19号墳		1.05	1.80	7c中頃
渡築紫古墳群	行橋市	20号墳		1.12	0.55	
渡築紫古墳群	行橋市	21号墳		0.75	0.75	
渡築紫古墳群	行橋市	22号墳		0.86	0.85	
渡築紫古墳群	行橋市	23号墳	11.5	2.02	2.15	8c前半
渡築紫古墳群	行橋市	24号墳	6.5	1.78	0.80	7c中頃
渡築紫古墳群	行橋市	25号墳	9.2	1.42	1.80	7c中頃
渡築紫古墳群	行橋市	26号墳		1.09	1.10	
渡築紫古墳群	行橋市	27号墳		1.20	0.60	

細長方形型については各時期のものが満遍なく分布しており、変化の方向性ははっきりしない。

墳丘サイズと玄室の形態　そこで、墳丘の大きさが玄室の大きさに与える影響を考慮して、墳丘の大きさごとに玄室の規模を比較してみた（第18図下）。まず正方形型であるが、墳丘直径が10mよりおおきなものは分布範囲がグラフの右上によっていて明らかにやや大きめの玄室を持つことがわかるが、10m以下の古墳では墳丘の大きさと玄室のサイズが連動しないことがわかる。

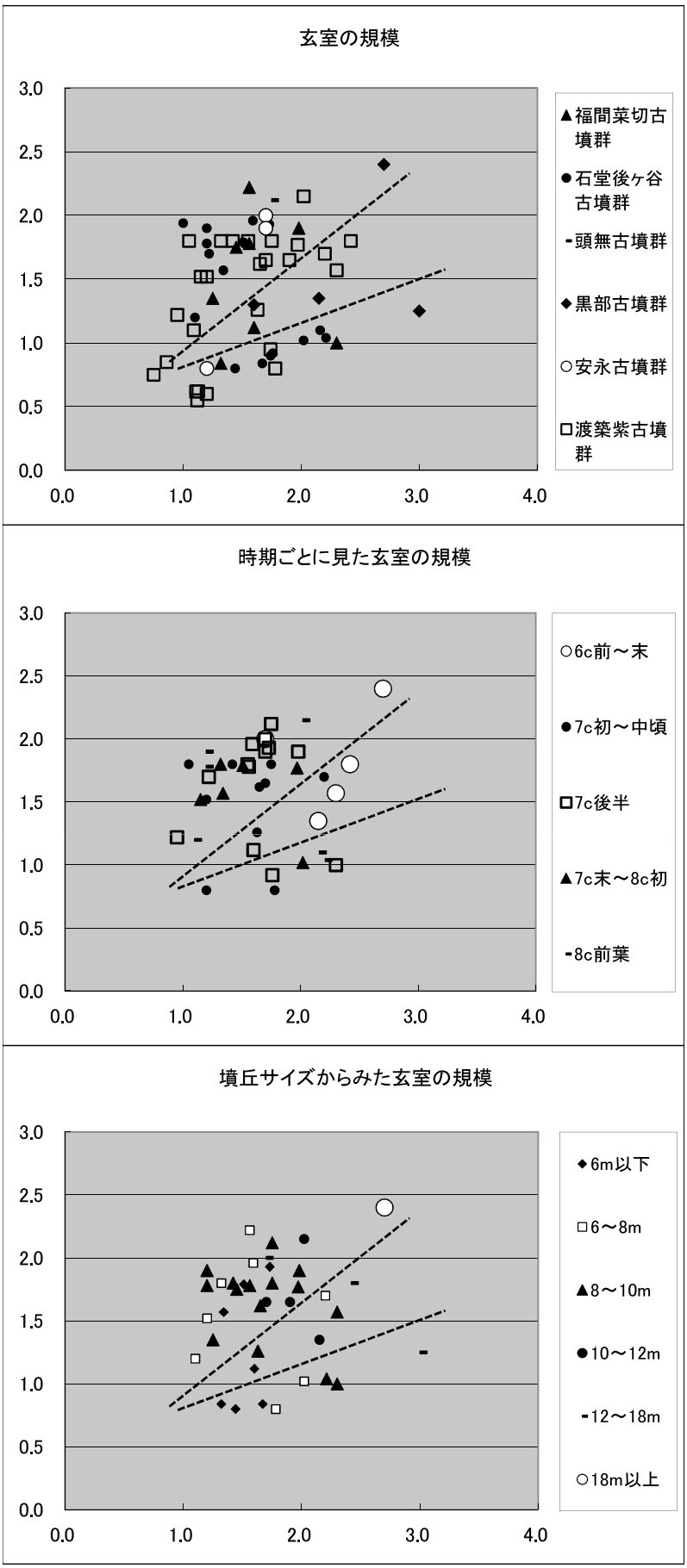
次に長方形型であるが、墳丘の大きさは玄室の大きさに連動しないといえよう。

最後に細長方形であるが、これは明らかに墳丘の大きさと石室の大きさ（この形式の場合は主に長さ）が連動していて、墳丘直径が小さいほど石室の奥行きが短くなる傾向がはっきりと現れた。

玄室の形態を左右する要素　以上の検討から、玄室形態については、以下のようにまとめられよう。

a）玄室の平面形態は、正方形に近いものからやや幅広まで変異を持つ正方形型と、やや長い長方形型、幅に比べ奥行きが明らかに長い形状を持つ細長方形型の3種類の作り分けがみられる。

3者とも6c代から7c後半まで見られる安定した形式であるが、終末期以前の横穴式石室の多くは規模を別とすれば長方形型に含まれることから、長方形型が古い形態で、6世紀から7世紀



第18図　築上地域の後期群集墳における玄室サイズ

にかけて正方形型・細長方形型に分化した可能性が高い。

b）玄室の規模は、正方形型に限って言えば時期を追って変化する傾向がはっきりしており、新しくなるにつれて小型化し、やや横長方形状に変化する。一方細長方形型の玄室の大きさは時期を追って変化する傾向は見られない。

c）玄室の規模は、細長方形型に限っていえば古墳の大きさによって変化する傾向がはっきりしており、小さくなるにつれて奥行きが短くなる。一方正方形型の玄室の大きさは少なくとも6世紀後半以降については墳丘の大きさに影響されず一定である。

④小結

全体と個別　福間菜切古墳群では玄室の形状が判明する資料が9基しかなかったため周辺地域の資料を含めて分析を行った結果、この地域では後期群集墳の玄室の平面形態が大別3類に分類されると指摘できた。先行研究ではさらに細分した成果も示されているが（福岡県教委1990、行橋市教委2003など）、玄室の大きさや平面形状が時期・墳丘サイズに影響される可能性がある以上、さまざまな時期・墳丘サイズを持つ資料をひとまとめにして細分するのは本質を見失う危険があり、ここではそれ以上の細分には踏み込まなかった。資料が許せばさらに細かな条件を設定して分析を積み上げることもできよう。ここで示した分類はあくまで大別分類であることを強調しておきたい。

小石室　玄室が小型化するとはいえ、ここで扱った資料は奥行きが1m以上、幅も80㎝程度以上の規模を持つものばかりで、終末期群集墳にしばしば見られるいわゆる（石棺系）小石室に該当する資料は見られない。ただし、やや離れた京都郡（現みやこ町豊津）に位置する後期群集墳である北垣古墳群では、調査された13基の古墳中、3基が石棺系小石室であったという（豊津町教委1995）。本地域では存在しないというわけではなさそうである。今回の資料に含まれないのが偶然なのかどうか、今後も注視する必要があろう。

玄室サイズの小型化　なお、6世紀前半代の大型墳である黒部古墳群3号墳（直径23.4m）と、時期は不明だがおそらくこれに近い時期と思われる同4号墳（直径16m）の玄室は、本検討中では前者が方形型に、後者が長方形型に分類されるが、いずれも石室規模の分布の中では突出した大きさを持つ。おなじ黒部古墳群の中でも6世紀後半～7世紀前半に比定される大型墳である6号墳（直径16.2m）の玄室の大きさが、方形型の中では標準的なサイズに収まることから考えれば、方形型の標準的なサイズの成立は6世紀後半前後に求められるかもしれない。ただしこの点については資料が少なく、今後の更なる検討が必要であろう。長方形型については、墳丘直径と奥行きが連動することが明らかであり、墳丘が小さくなるのに合わせて小型の石室が成立したといえよう。

【参考文献】

築城町教育委員会『安永遺跡―福岡県築上郡築城町所在遺跡の調査―』築城町文化財調査報告書第1集、1984年

豊津町教育委員会『北垣古墳群―福岡県京都郡豊津町大字節丸所在北垣古墳群の調査報告―』豊津町文化財調査報告書第14集、1995年

福岡県教育委員会『椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告－２－　石堂中後ヶ谷古墳群・菜切古墳群・頭無古墳群』、1990年

豊前市教育委員会『黒部古墳群―豊前市松江所在古墳群の調査―』玄洋開発、1979年

行橋市教育委員会『渡築紫遺跡―福岡県行橋市大字稲童所在遺跡の発掘調査概要報告―』行橋市文化財調査報告書第23集、2004年

（3）福間菜切古墳群出土須恵器の形態的特徴

①はじめに

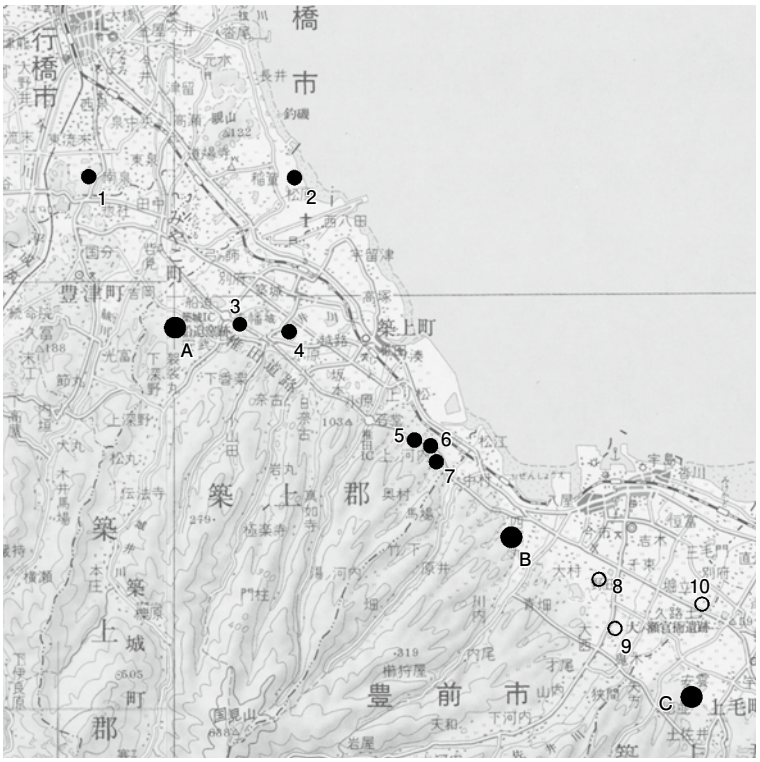
福間菜切古墳群出土須恵器の意義　福間菜切古墳群における1･2次調査においては、7世紀後半を前後する時期の須恵器群が良好な一括資料として出土した。中でも、1次調査6号墳･2次調査8号墳から出土した資料群は、坏蓋・坏身が集中して出土し、高坏・平瓶・長頸壷などの器種も共伴する可能性が高く、編年においても良好な資料として価値が高いものと考えられる。

坏身の形状における特徴　これらのうちとくに坏身を見ると、高台の断面形状が特徴的な形態をもつ―高台が強く外に張りながら内湾するように伸びる―ことに気づく。同様の形状を持つ坏身はほかに、古墳群の東400ｍ程の隣接丘陵上に立地する頭無古墳群でも出土し、また荒堀雨久保遺跡（豊前市1993）・塔田琵琶田遺跡[(1)]・小石原泉遺跡[(2)]など豊前市域の古代集落にもみられ、築上町から豊前市域にかけて広く類例が出土する。同様の資料は豊前市四郎丸にあるとされる四郎丸窯跡の表採資料にも見られ（米田1977）、生産地－消費地の関係を可能性がある示す遺物として大いに注目される。

一方、西に300ｍ程の隣接丘陵に立地する石堂中後ヶ谷古墳群（福岡県教委1990）出土資料の坏身を見ると、高台の断面形状がやや異なり、外に開きながら端部を四角く納める形状を持つことが指摘できる。さらに周囲に目を転じれば、行橋市域にかけて、高台断面形状におけるさらにいくつかの小変異が存在し、それらが時には遺跡内・遺構内で混在し、あるいは遺跡ごと・遺構ごとに偏在しながら複雑に分布する様相が窺われる。

豊前地域における須恵器生産体制の特質　豊前地域、特にいわゆる京築地域における須恵器生産体制は、北九州市南部から苅田町域にかけて広がる水晶山系古窯跡群以外には集中的な生産体制を持たず、「各地域でそれぞれ操業契機を異にしながら」操業し、長期的・集中的な操業を行わない特質が知られる（小田・長2006）。特に7世紀後半以降は、各所に寺院が建立されるのに伴い小規模な瓦窯跡が短期操業し、恐らくこれにともなって須恵器の生産もいわゆる一郡一窯的様相が強化されたとみるべきであろう。こうした中で須恵器の形状に変異が見られ、それが地域的な分布の偏りを持つ可能性があるとすれば、個々の変異の背景に特定の生産者集団が存在する可能性を疑ってもよかろう。形状における小変異が生産者集団を特定することができる強力な手がかりとなるな

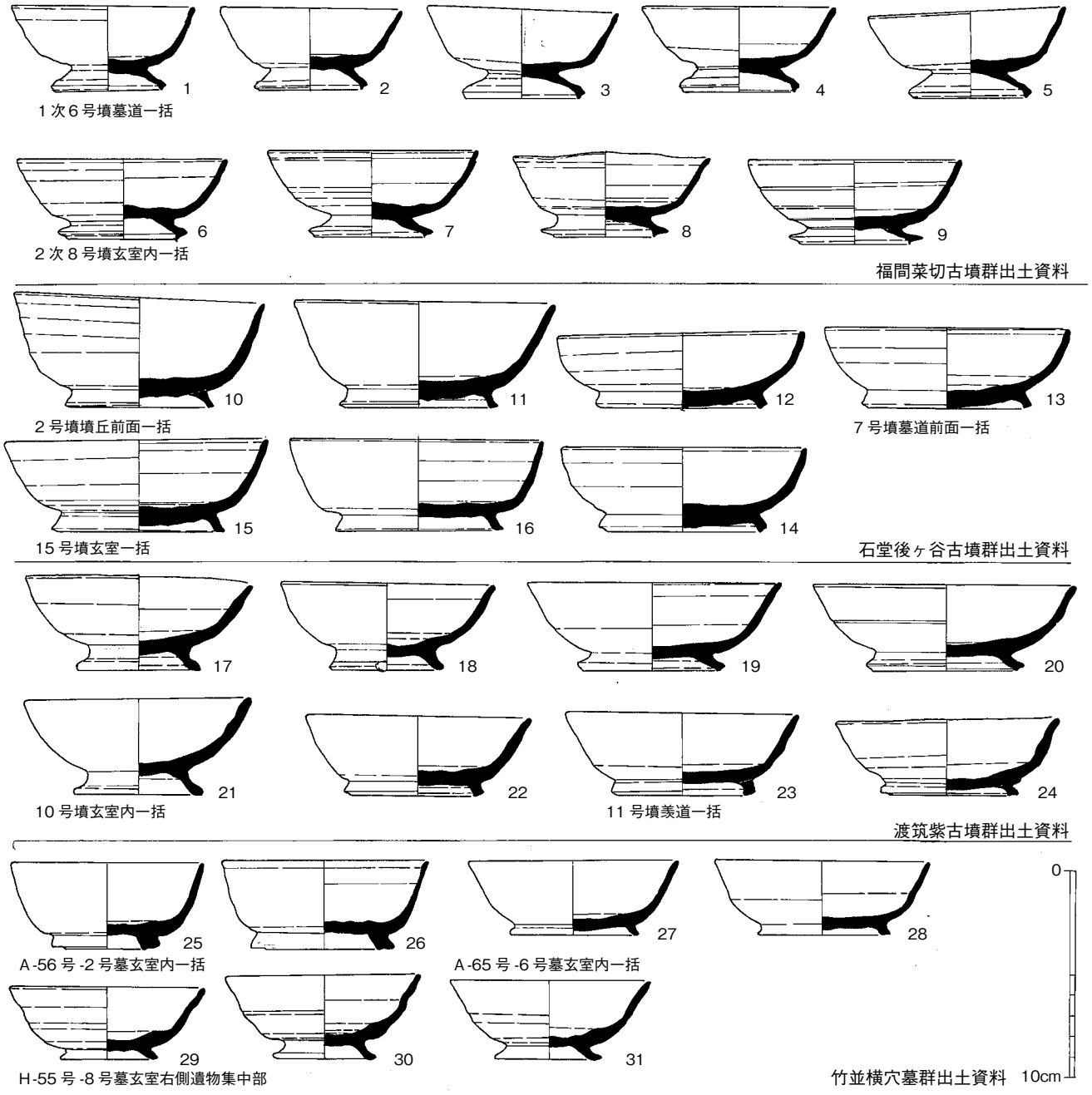
1 竹並横穴墓群　2 渡築紫古墳群　3 赤幡森ヶ坪遺跡　4 安武深田遺跡　5 石堂中後ヶ谷古墳群
6 福間菜切古墳群 7 頭無古墳群　8 荒堀雨久保遺跡　9 塔田琵琶田遺跡　10 小石原泉遺跡
A 船迫窯跡　B 四郎丸窯跡　C 山田窯跡



第19図　関連遺跡群の分布

らば、須恵器の生産と流通の実態を解明する上で大きな武器となると期待される。

須恵器の胎土分析　さて、仮に形状における各小変異群が特に須恵器窯群レベルでの生産者集団を示すものとすれば、それは胎土組成上においても何らかの反映があると期待できる。ここでは、福間菜切古墳群とその周辺の遺跡から出土した須恵器、特に坏身に焦点を当て、7世紀後半～8世紀代における形状の小変異を集成し、胎土分析による比較検討を行いたい。また同時に、それらの成果と窯跡とを結びつける手がかりを得るため、いくつかの須恵器生産窯跡出土品も胎土分析資料に付け加えた。この分析により、形状における各小変異群を胎土分析を介して生産遺跡と結合させることができれば、福間菜切古墳群のみならず、本地域における須恵器の生産と流通における重要な分析手段を獲得することができるだろう。



第20図　京築地域出土須恵器坏身の形態バリエーション

②形状変異の抽出

対象資料の選択　まず、形態における小変異について検討しておく。対象とする資料は高台付の坏身（坏Ｂ）である。主に、高台の断面形状に注目して分類する。

福間菜切古墳群出土資料群は、７世紀後半（小田編年のⅥ期、小田・長編年のⅥ - １期）に位置づけられる良好な墳墓供献・副葬資料である。したがってここでは、条件をできるだけ等しくするために、７世紀後半の墳墓供献資料を中心に周辺の資料を抽出する。ただし、隣接する古墳群である石堂中後ヶ谷古墳群の出土資料との形態比較も大きなテーマとなるため、石堂中後ヶ谷古墳群が主に造営された時期である７世紀末～８世紀前半（小田編年Ⅶ期、小田・長編年Ⅵ - Ⅱ～Ⅶ - １期）の資料も含めることとする。また、胎土分析（今回は資料の生産地が近接しており、胎土組成において比較的微細な変化が重要な手がかりになる可能性が高い。そのため、破壊分析の手法をとり分析の精度を上げることとする）の資料を入手できる資料を対象とすることとする。

対象資料の概要　以下、形状比較のための主要な資料群を列挙していく（第 19･20 図）。

・**福間菜切古墳群出土資料**（福岡県教委 1990）：築上町と豊前市の境界に展開する細長い尾根状丘陵群の一つに位置する群集墳である。これまでに 10 基の古墳が調査され、７世紀後半～末の資料が多く見つかっている。特に１次６号墳墓道出土資料（第 20 図－１～5）、２次８号墳玄室出土資料（第 20 図－６～９）を対象とする。いずれも小田・長編年でⅥ-1 期に比定される資料である。

・**石堂中後ヶ谷古墳群出土資料**（福岡県教委 1990）：福間菜切古墳群の西約 300 ｍに位置する。やはり細長い尾根状丘陵上に営まれる群集墳で、椎田バイパスの建設に先立つ調査で 16 基の古墳が調査された。出土土器は７世紀中葉～８世紀前半でやや幅を持つ。２号墳墳丘前面出土資料（第 20 図－ 10･11）、７号墳墓道前面出土資料（第 20 図－ 12 ～ 14）、15 号墳玄室出土資料（第 20 図－ 15･16）を対象とする。いずれもⅦ-1 期の資料と考えられる。

・**渡筑紫古墳群出土資料**（行橋市教委 1994 ほか）[(3)]：福間菜切古墳群の北約 9kmに位置する。行橋市一帯に広がる海岸平野の南側、海岸付近にある独立丘陵上に位置する群集墳で、６世紀後葉～７世紀末に造営され、その後８世紀後葉まで追葬が行われたとされる。29 基の古墳が出土している。10 号墳玄室出土資料（第 20 図－ 17 ～ 21）、11 号墳羨道出土資料（第 20 図－ 22 ～ 24）を対象とする。いずれもⅥ-1 ～２期の資料である。

・**竹並古墳群**（行橋市教委 1979）：福間菜切古墳群の北東約 15kmに位置する。５世紀から８世紀にかけての一大横穴墓群で、調査された横穴墓の数は 948 基、未調査のまま破壊されたものを含めれば 1000 基を超えるとされる。A-56 号 -2 号横穴墓玄室出土資料（第 20 図－ 25･26）、A-65 号 -6 号横穴墓玄室出土資料（第 20 図－ 27･28）、H-55 号 -8 号横穴墓玄室内右側遺物集中部出土資料（第 20 図－ 29 ～ 31）の各資料を対象とする。いずれもⅥ-1 期の資料である。

高台部断面形態の変異　第 20 図に示した資料を見ながら、以下に高台断面形状のバリエーションについて見ていこう。

・**形態変異ａ**

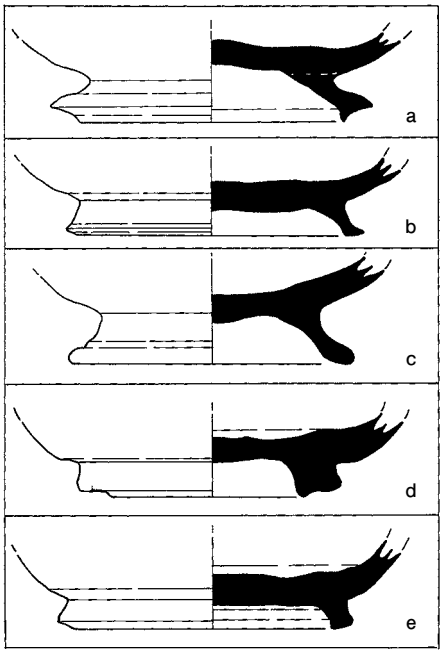
対象資料を通覧して、最も形態にバリエーションのある部分を指摘すると、高台の断面形状をあげることができよう。福間菜切古墳群出土資料はいずれも、強く外側に開きながらわずかに内湾し、端部が肥厚する特異な形態を持つ。これを、高台断面形状の形態変異ａとする。

・形態変異 b

次に、石堂中後ヶ谷古墳群出土資料は大きく二つに分けられ、2 号墳 ·15 号墳出土のものは「八」字状に外側に開き端部外面が外に強く稜をつける断面形状を持つ一方、7 号墳出土のものはやはり開くものの伸びが短く端部を四角く納める形を持つ。「八」字状に開き端部外面に稜をつけるものを形態変異 b とする。竹並古墳群出土のうち第 20 図－ 28 もこの変異に含められよう。

・形態変異 c

渡築紫古墳群出土例に特徴的なものとして 10 号墳玄室出土の 5 例中 3 例を占める形態変異があるが、これはやはり断面形状が「八」字状になりながら、端部を丸く収めて稜をつけないもので、これを形態変異 c とする。竹並古墳群 H-55-8 号墓出土資料にも類例がある（第 20 図）。



第 21 図　高台部断面形態の変異

・形態変異 d

竹並古墳群 A-56 号 -2 号墓玄室内出土のものは、高台が非常に太くて短いもので、接地面に凹線が入る点も特徴的である。これを形態変異 d とする。

・形態変異 e

最後に、8 世紀代に他地域で一般的となるような、高台が短くて断面形状が四角、あるいは平行四辺形状を呈するようなもの―第 20 図－ 22·23 など―を形態変異 e とする。やや形は異なるが、同 12 ～ 14 なども一応これに含めておくこととする。なお、各変異については、典型的な形状を第 21 図に示しておく。

坏部形状の変異　次に、坏の高台より上の形状―ここでは杯部形状とする―を見ておく。大きく分けて、同部屈曲部が明瞭なものと、緩やかに全体的に湾曲していて半円形を示すものの 2 者があるように見える。特に、高台断面形状 c 類と杯部半円形のもの、高台断面形状 d 類と杯部に明瞭な屈曲を有するものの親縁性が高いように見える。しかし、この点についてはより資料を多く収集して分析する必要があると考えており、ここでは扱わないこととしたい。

③胎土分析

(a) はじめに

形態変異と胎土の特徴　上記で示した形態変異は、いずれも細かな調整の細部までそれぞれ共通性が高く製作技法として確立していたとみられる。このような現象の背後には、それぞれの形態変異を生み出す生産者集団の相違、そしてある程度の独立性が想定されるが、このような条件は本地域における須恵器生産体制によく合致しており、窯跡ごとの形態的差異である可能性が高いと考えられる。そこでまず、上記 a ～ e の形態変異をもつ坏身の胎土を試料として、胎土分析を行い、各形態的変異を有する土器群が胎土の相違を持つかどうか検証することとした。対象試料は、福間菜切古墳群（1·2 次調査、福岡県教委 1990）、石堂中後ヶ谷古墳群（福岡県教委 1990）、中村西峰尾遺跡（本報）頭無古墳群（2 次調査、福岡県教委 1990）、赤幡森ヶ坪遺跡、安武深田遺跡（いずれも

九州歴史資料館所蔵資料、福岡県教委 1992)、渡築紫古墳群（行橋市教育委員会より提供、行橋市教委 2004）である。

なお、高台部の形状がわかる坏身の出土数はそれほど多くなく、分析資料の数が限定されてしまうこと、また特に坏蓋については古墳から出土するものはしばしば坏身とセットで出土することから、坏身と坏蓋が入手時に（ひいては生産時に）すでにセット状態であった可能性が高いものと仮定し、古墳出土の坏蓋のうち坏身と共伴したもののいくつかについても分析対象とした。

窯跡出土資料と胎土の特徴　また、上記のようにこれらの形態変異の背景に生産者集団が存在する可能性が高いと考えられることから、京築地方における当該期の須恵器生産窯跡より、採集資料・灰原出土資料などを中心に試料を収集し、併せて胎土分析に提供した。試料は、築上町船迫窯跡群（築城町教委 1998）茶臼山 4 号窯跡灰原出土品（築上町教育委員会より提供を受けた)、四郎丸窯跡（米田 1977）採集試料（採集者である米田鉄也氏より提供を受けた)、上毛町山田東窯跡群（新吉富村教委 1995）4 号窯跡出土品（上毛町教委より提供を受けた）の 3 遺跡分である。（小澤佳憲）

(b) 胎土分析の方法と試料

分析の目的　上記の資料を対象として、理化学的方法による須恵器胎土分析を行った。分析目的は以下の事柄である。

・形態的属性により坏身を a、b、c、 d 、e の 5 つのタイプに分類したが、この形態上の分類が胎土分析によっても差異がでるのかどうか（提供された資料には a 、b、c、e の 4 タイプが含まれており、実際にはこれら 4 タイプの差異を検討する)。

・窯跡出土須恵器（四郎丸窯跡、山田窯跡群 4 号窯跡、船迫窯跡群茶臼山 4 号窯跡）の胎土比較。

・福間菜切古墳群ほか（石堂中後ヶ谷古墳群、頭無古墳群、赤幡森ヶ坪遺跡、安武深田遺跡、渡築紫古墳群・中村西峰尾遺跡）の消費地遺跡出土須恵器と窯跡試料との胎土比較。

分析方法と試料　分析は蛍光Ｘ線分析法で行い、胎土の成分（元素）量を測定し、その成分量から分析試料の差異について調べた。測定した成分（元素）は、Si、Ti、Al、Fe、Mn、Mg、Ca、Na、K、P、Rb、Sr、Zr の 13 成分である。なお測定装置・条件・試料は以下の通りである。

測定装置：SEA5120A（ｴｽｱｲｱｲ・ﾅﾉﾃｸﾉﾛｼﾞｰ社製）を使用した。

測定条件：Ｘ線照射径 2.5mm、電流 50 ～ 200mA、電圧 50kV/15kV、測定時間 300 秒、測定室は真空の条件で測定した。

測定元素：13 成分の定量値は地質調査所の標準試料 JA-1（安山岩)、JG-1a（花崗岩)、JR-1（流紋岩)、JB-1a（玄武岩)、JF-1（長石）の 5 個の試料を用いて検量線を作成し、定量値を算出した。

測定試料：分析試料は、須恵器表面の汚れを除去後（研磨機)、乾燥した試料を乳鉢（タングステンカーバイト製)で粉末(100 ～ 200 ﾒｯｼｭ)にしたものを加圧成形機で約 15ﾄﾝの圧力をかけ、コイン状に成形したものを測定試料とした。したがって、一部破壊分析である。

分析試料および結果は第 3･4 表に示した。

分析結果の比較（差異）は、有意な差がみられる成分を横軸と縦軸にとり、散布図を描き、各遺跡（窯跡）の差異を検討した。

(c) 分析結果について

胎土組成差の比較　測定した 13 成分のうち、分析試料に顕著な差がみられたのは、Ca、K、Rb、Sr の 4 成分であった。このうちの 2 成分（Ca、K）に各窯跡で顕著な胎土差がみられ、微量成分

の Rb、Sr は、同じ窯跡試料でもバラツキが大きかった。したがって Ca を縦軸に、K を横軸にとり散布図を作成し、胎土の違いを検討した。

各窯跡出土資料の比較　四郎丸窯跡、山田東 4 号窯跡、船迫窯跡群茶臼山 4 号窯跡出土の須恵器の胎土を比較した（第 22 図）。その結果、今回分析した 3 つの窯跡出土須恵器は明確に胎土が異なっていることが推定される。つまり、四郎丸窯跡と山田東窯跡群は Ca 量の違いで分類でき、四郎丸窯跡・山田東窯跡群と船迫窯跡群とは、K 量の違いで分類できる。

坏身の形態分類と胎土組成の相関性　対象資料のうち、坏身を形態より 4 つのタイプ（a・b・c・e）に分類しており、この分類が胎土分析でどのように分類されるか、また、これらのタイプがどの窯跡と類似しているか検討した。その結果、第 23 － 1 ～ 4 図に示す K-Ca 散布図から以下のように推定される。

・a 類（第 23 図－ 1）

Ca 量が約 0.2% ～ 1% のやや広い範囲に分布し、1 つにまとまる傾向にある。なお試料番号 127 の渡築紫古墳群出土の試料は、単独で分布している。また、a 類は四郎丸窯跡の分布域とほぼ重なっている。

・b 類（第 23 図－ 2）

K 量の違いで 2 つに分類できる。それは石堂中後ヶ谷（42・43）の 2 点とそれ以外、つまり石堂中後ヶ谷（56・57）、安武深田（98・101）、赤幡森ヶ坪（89･90）、中村西峰尾（185・186・187）である。そして、2 つに分かれた b 類のうち後者のものは船迫窯跡群の領域にほぼ分布する。また前者の石堂中後ヶ谷（42・43）は、四郎丸窯跡の領域からはやや外れるようである。

・c 類（第 23 図－ 3）

渡築紫（132・133・135・142）の c 類は一つにまとまり、四郎丸窯跡の領域に分布する。

・e 類（第 23 図－ 4）

K と Ca 量の違いで 3 つほどの胎土に分類できる。一つめは石堂中後ヶ谷（48・49・50）、安武深田（94）、赤幡森ヶ坪（88）、渡築紫（138･140）の群、二つめは安武深田（91･92･93･100）の群、三つめは安武深田（96・97・99）、渡築紫（128・129・134・137・145）の群である。このうち、一つめの石堂中後ヶ谷（48・49・50）、安武深田（94）、赤幡森ヶ坪（88）、渡築紫（138・140）の群は四郎丸窯跡に、三つめの安武深田（96・97・99）、渡築紫（128・129・134・137・145）の群は船迫窯跡群の領域に分布する。なお、二つめとした安武深田（91･92･93･100）の群は四郎丸窯跡・船迫窯跡群のどちらにも入らない。

各遺跡出土資料と各窯跡出土資料の相関性　石堂中後ヶ谷古墳群、福間菜切古墳群、頭無古墳群、渡築紫古墳群、安武深田遺跡、赤幡森ヶ坪遺跡、中村西峰尾遺跡の各消費地遺跡出土資料と、四郎丸窯跡、船迫窯跡群、山田東窯跡群の各窯跡出土資料の胎土比較の結果を、第 24 － 1 ～ 6 図の各散布図に示した。

第 24 － 1 図より、福間菜切古墳群の坏と高杯が一つにまとまり四郎丸窯跡の領域に入ることが分かる。

第 24 － 2 図より、石堂中後ヶ谷古墳群の試料が 2 つの胎土にわかれ、半分ほどが四郎丸窯跡の領域と重複しつつそれよりわずかに K が少ない領域に広がり、残りの半分ほどがおおよそ船迫窯跡群の領域に入る。

第３表　胎土分析対象試料一覧（その①）

出土遺跡等	所在地	器種	タイプ	Si	Ti	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	Na	K	P	Rb	Sr	Zr	報告書・挿図番号		備考
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	坏身口縁		67.08	1.37	19.19	8.71	0.03	1.08	0.91	0.79	0.69	0.05	7.5	206.0	269.5	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	坏身口縁		68.82	1.22	19.34	8.92	0.00	0.57	0.37	0.00	0.64	0.05	6.0	75.5	292.5	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	坏身口縁		67.57	1.24	19.83	9.64	0.01	0.56	0.41	0.00	0.61	0.05	5.0	96.0	353.5	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	坏身口縁		67.35	2.04	20.50	7.50	0.02	1.56	0.18	0.00	0.66	0.05	15.0	49.5	416.5	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	坏身口縁		70.92	2.26	17.77	6.51	0.04	0.75	0.59	0.13	0.81	0.06	10.0	136.0	438.0	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	坏身口縁		67.42	1.24	19.98	9.45	0.01	0.61	0.45	0.00	0.71	0.05	8.0	103.0	317.5	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	坏身口縁		67.77	1.22	19.91	9.44	0.04	0.27	0.42	0.14	0.70	0.02	25.5	76.5	313.5	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	坏身口縁		67.75	1.19	20.07	9.37	0.03	0.26	0.48	0.12	0.63	0.02	9.5	79.0	327.0	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	坏身口縁		67.82	1.17	20.04	9.58	0.02	0.25	0.43	0.00	0.59	0.02	17.5	83.5	302.5	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	坏身口縁		67.58	1.27	19.88	9.69	0.01	0.27	0.46	0.00	0.74	0.02	15.0	65.5	295.0	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	坏身口縁		70.87	2.15	18.34	7.24	0.01	0.18	0.31	0.01	0.72	0.03	8.5	54.5	420.0	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	坏身口縁		66.65	1.38	20.27	9.91	0.05	0.25	0.65	0.00	0.70	0.02	12.5	138.0	324.5	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	坏身高台	a	64.67	2.24	18.86	11.89	0.08	0.44	0.87	0.20	0.63	0.02	14.5	144.5	363.0	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	坏身高台	a	69.65	1.79	19.52	7.83	0.03	0.20	0.37	0.01	0.50	0.02	8.5	82.0	428.5	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	坏身高台	a	66.17	1.53	19.14	10.89	0.04	0.17	0.81	0.00	1.15	0.01	11.0	198.5	312.0	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	坏身高台	a	67.28	1.18	19.96	9.83	0.02	0.21	0.45	0.18	0.79	0.02	9.0	108.5	312.0	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	坏身高台	a	71.27	2.19	17.59	6.01	0.04	0.20	1.05	0.69	0.80	0.03	14.0	233.5	405.0	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	坏身高台	a	65.99	1.30	21.00	10.12	0.02	0.28	0.45	0.00	0.75	0.02	7.5	95.5	352.0	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	坏身高台	a	70.97	2.00	18.03	7.22	0.02	0.14	0.69	0.00	0.79	0.03	15.0	149.5	397.0	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	坏身高台	a	70.72	2.12	18.04	7.23	0.00	0.15	0.79	0.01	0.83	0.02	7.5	169.5	395.0	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	坏身高台	a	67.65	1.22	20.03	9.60	0.02	0.21	0.43	0.00	0.74	0.01	17.0	102.0	315.0	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	坏身高台	a	69.45	1.50	17.67	8.38	0.03	0.61	0.56	0.80	0.88	0.03	7.5	107.5	310.0	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	坏身高台	a	70.55	1.91	18.44	7.46	0.02	0.13	0.65	0.00	0.71	0.02	10.5	167.5	448.5	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	坏身高台	a	67.30	1.47	19.46	9.45	0.03	0.28	0.75	0.39	0.76	0.02	10.0	171.0	336.0	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	坏身高台	a	69.61	1.85	18.69	7.90	0.02	0.42	0.30	0.17	0.88	0.03	13.0	72.5	487.5	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	坏蓋口縁部		69.88	1.98	18.75	7.36	0.02	0.14	0.71	0.21	0.82	0.02	19.0	182.5	410.0	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	坏蓋口縁部		71.15	1.61	17.02	8.68	0.04	0.28	0.24	0.00	0.86	0.02	17.5	58.0	401.0	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	坏蓋つまみ部		70.97	2.39	17.95	6.13	0.01	0.17	0.88	0.33	1.00	0.03	11.5	214.5	483.0	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	坏蓋口縁部		71.63	2.13	17.49	7.02	0.00	0.10	0.69	0.01	0.80	0.01	14.0	151.5	428.0	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	坏蓋口縁部		70.20	1.61	17.56	8.64	0.01	0.41	0.35	0.00	1.11	0.02	12.0	73.0	359.5	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	坏蓋口縁部		69.85	1.61	19.42	7.81	0.00	0.46	0.20	0.00	0.52	0.04	8.5	30.0	393.5	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	坏蓋つまみ部		64.86	2.13	19.18	10.97	0.05	0.46	0.91	0.37	0.94	0.02	23.5	203.5	334.0	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	坏蓋つまみ部		73.09	1.89	17.16	6.08	0.01	0.15	0.50	0.00	1.00	0.02	7.5	113.5	399.0	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	坏蓋つまみ部		64.13	2.08	19.32	11.80	0.08	0.46	0.92	0.33	0.76	0.02	14.5	218.0	382.0	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	坏蓋口縁部		65.94	1.29	20.37	9.35	0.01	0.66	0.78	0.84	0.65	0.02	14.5	177.0	320.5	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	坏蓋口縁部		69.45	1.86	18.96	6.89	0.05	0.28	1.10	0.34	0.94	0.03	23.0	241.5	370.0	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	坏蓋口縁部		67.88	1.52	19.23	9.42	0.00	0.73	0.23	0.00	0.84	0.06	14.0	48.0	318.5	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	碗		67.20	2.01	19.34	9.26	0.03	1.46	0.08	0.00	0.39	0.06	10.0	26.5	425.5	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	高杯		68.03	1.35	17.85	10.90	0.04	0.74	0.29	0.00	0.68	0.04	12.0	49.5	267.5	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	坏身?底部	高台無	69.66	1.93	19.07	6.98	0.01	0.87	0.55	0.09	0.67	0.06	8.5	134.5	395.0	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	坏身？底部	高台無	66.93	1.20	19.80	9.40	0.01	1.28	0.45	0.00	0.74	0.06	18.5	123.5	293.5	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	坏蓋口縁部		70.76	1.77	16.54	8.20	0.06	1.36	0.31	0.00	0.82	0.05	20.0	71.5	368.0	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	坏蓋口縁部		66.13	1.50	18.88	10.40	0.03	1.72	0.32	0.00	0.87	0.05	16.5	87.0	345.0	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	坏蓋口縁部		68.70	1.85	19.01	7.19	0.01	1.72	0.77	0.00	0.62	0.03	11.5	173.0	377.5	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	坏蓋口縁部		62.48	1.72	19.65	12.51	0.09	1.94	0.57	0.00	0.85	0.06	26.0	136.5	349.0	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	坏蓋口縁部		70.66	1.98	18.29	7.11	0.01	1.04	0.14	0.00	0.65	0.03	6.0	39.0	455.0	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	坏蓋口縁部		68.96	1.92	18.35	7.14	0.02	1.99	0.29	0.00	1.19	0.03	22.0	66.5	495.5	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	坏蓋口縁部		69.54	1.49	16.98	10.29	0.03	0.22	0.37	0.00	0.98	0.03	21.0	70.0	311.0	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	坏蓋口縁部		71.62	1.97	18.59	6.81	0.01	0.27	0.10	0.00	0.49	0.03	12.0	6.5	436.5	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	坏蓋口縁部		65.44	1.68	18.36	12.59	0.09	0.30	0.54	0.00	0.84	0.02	13.0	115.0	355.5	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	坏蓋口縁部		71.11	2.08	18.77	6.58	0.00	0.23	0.44	0.00	0.57	0.03	11.5	136.5	425.5	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	坏蓋口縁部		67.52	1.26	19.92	9.85	0.02	0.27	0.40	0.01	0.65	0.03	20.0	101.5	286.0	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	坏蓋口縁部		72.34	2.05	17.63	6.81	0.00	0.19	0.29	0.00	0.54	0.03	8.5	64.5	445.5	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	坏蓋口縁部		69.15	1.60	16.76	10.64	0.06	0.24	0.37	0.24	0.83	0.03	13.5	56.0	332.5	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	坏蓋口縁部		70.23	1.95	18.52	7.44	0.01	0.17	0.80	0.00	0.75	0.03	12.0	207.5	358.0	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	坏身口縁部		70.43	2.02	18.52	7.37	0.02	0.21	0.59	0.01	0.73	0.02	6.0	150.0	408.0	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	坏身口縁部		70.10	1.93	18.46	7.28	0.04	0.16	1.05	0.00	0.84	0.02	6.5	225.5	390.5	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	坏身高台部	a	66.58	1.28	20.49	10.40	0.05	0.24	0.36	0.00	0.51	0.02	18.0	66.5	344.5	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	坏身口縁部		71.90	1.98	17.51	6.60	0.00	0.12	0.90	0.00	0.84	0.03	12.0	202.5	413.5	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	坏身口縁部		69.81	1.93	18.75	7.38	0.01	0.33	0.65	0.21	0.76	0.04	28.5	169.5	381.5	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	坏身口縁部		70.08	1.99	18.85	7.45	0.01	0.12	0.63	0.02	0.72	0.02	10.5	173.5	385.0	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	坏身口縁部		68.77	2.03	18.72	7.56	0.04	1.92	0.18	0.00	0.58	0.12	4.0	43.0	426.0	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	坏身口縁部		68.71	1.83	19.05	7.15	0.02	1.96	0.51	0.01	0.60	0.05	4.0	91.5	386.5	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	坏身高台部	a	66.13	1.63	19.28	10.06	0.00	1.28	0.81	0.00	0.64	0.05	8.5	169.0	381.0	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	坏身口縁部		66.28	1.21	19.89	9.57	0.04	1.80	0.41	0.00	0.67	0.06	6.0	66.0	309.5	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	坏身口縁部		67.23	1.62	18.32	9.95	0.04	1.42	0.32	0.00	0.89	0.06	11.5	88.0	357.5	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	坏身口縁部		65.14	1.25	20.77	9.21	0.00	1.91	0.78	0.00	0.76	0.06	8.0	185.5	326.0	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	坏身口縁部		69.98	1.92	18.79	7.29	0.00	0.22	0.79	0.25	0.64	0.03	23.0	199.0	342.0	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	坏身口縁部		69.92	1.86	19.50	7.33	0.06	0.42	0.22	0.00	0.58	0.03	8.0	56.5	356.5	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	坏身口縁部		67.28	1.25	19.93	9.83	0.04	0.34	0.44	0.00	0.76	0.03	16.0	101.0	311.5	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	大甕胴部か		70.99	2.12	18.41	7.69	0.01	0.19	0.08	0.00	0.40	0.03	7.0	52.0	384.5	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	大甕胴部か		70.49	1.98	18.59	7.37	0.06	0.29	0.41	0.00	0.66	0.04	3.0	111.0	477.0	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	大甕胴部か		71.02	2.08	18.01	7.64	0.01	0.25	0.22	0.00	0.64	0.04	5.5	32.5	428.0	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	大甕胴部か		71.95	2.10	17.33	6.90	0.03	0.21	0.46	0.01	0.87	0.03	7.5	92.5	414.5	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	大甕胴部か		63.33	1.91	20.79	12.13	0.01	0.49	0.54	0.19	0.46	0.03	8.0	108.0	361.5	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	大甕胴部か		70.07	2.04	18.72	7.83	0.02	0.25	0.23	0.00	0.69	0.03	9.0	21.0	479.5	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	大甕胴部か		71.13	2.12	17.76	7.21	0.00	0.27	0.58	0.17	0.61	0.03	10.0	127.5	441.0	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	大甕胴部か		71.41	1.89	17.78	7.16	0.02	0.22	0.49	0.01	0.85	0.03	16.5	138.0	420.5	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	大甕胴部か		67.61	2.10	18.36	9.87	0.07	0.36	0.58	0.00	0.91	0.03	10.0	153.5	408.5	天観寺山	不掲載	
四郎丸窯跡採集品	豊前市四郎丸	大甕胴部か		71.03	2.09	17.86	7.45	0.01	0.28	0.26	0.00	0.86	0.04	11.5	52.5	429.5	天観寺山	不掲載	
中村西峰尾遺跡	豊前市中村	坏身	b	75.38	1.03	15.57	4.32	0.01	0.42	0.34	0.27	2.51	0.03	57.5	88.5	365.5	東九州道16	48図5	土器散布1
中村西峰尾遺跡	豊前市中村	坏身	b	75.84	1.12	15.82	3.70	0.00	0.31	0.35	0.32	2.42	0.04	60.5	78.0	404.0	東九州道16	48図6	土器散布1
中村西峰尾遺跡	豊前市中村	坏身	b	75.10	0.91	14.92	4.48	0.00	0.75	0.41	0.72	2.60	0.03	58.0	70.5	331.0	東九州道16	48図7	土器散布1
石堂中後ヶ谷古墳群1次	築上町石堂	坏身	b	71.20	2.42	18.04	7.31	0.01	0.51	0.09	0.00	0.25	0.06	11.0	19.5	527.5	県　椎田ﾊﾞｲﾊﾟｽ2	15図6	
石堂中後ヶ谷古墳群1次	築上町石堂	坏身	b	70.98	2.50	17.78	7.98	0.02	0.14	0.19	0.01	0.25	0.03	5.5	5.5	545.0	県　椎田ﾊﾞｲﾊﾟｽ2	15図7	
石堂中後ヶ谷古墳群1次	築上町石堂	甕口縁部		75.19	0.94	15.09	3.79	0.00	0.93	0.39	0.82	2.64	0.03	53.5	85.5	298.0	県　椎田ﾊﾞｲﾊﾟｽ2	15図8	
石堂中後ヶ谷古墳群1次	築上町石堂	坏蓋口縁部		70.24	2.23	19.10	7.56	0.07	0.28	0.13	0.00	0.25	0.03	4.5	38.5	539.0	県　椎田ﾊﾞｲﾊﾟｽ2	15図4	
石堂中後ヶ谷古墳群1次	築上町石堂	高杯脚部		66.20	1.72	19.26	10.64	0.05	0.37	0.43	0.00	1.21	0.03	49.0	94.0	471.0	県　椎田ﾊﾞｲﾊﾟｽ2	15図3	
石堂中後ヶ谷古墳群1次	築上町石堂	坏蓋口縁部		67.86	2.03	17.35	11.55	0.07	0.38	0.18	0.00	0.46	0.02	9.5	22.5	523.0	県　椎田ﾊﾞｲﾊﾟｽ2	41図3	
石堂中後ヶ谷古墳群1次	築上町石堂	坏身	e	69.13	1.91	19.48	8.12	0.04	0.41	0.22	0.00	0.53	0.03	24.5	27.5	480.0	県　椎田ﾊﾞｲﾊﾟｽ2	41図10	
石堂中後ヶ谷古墳群1次	築上町石堂	坏身	e	68.81	1.91	19.60	8.30	0.04	0.43	0.22	0.00	0.54	0.04	6.5	22.5	480.5	県　椎田ﾊﾞｲﾊﾟｽ2	41図9	
石堂中後ヶ谷古墳群1次	築上町石堂	坏身	e	69.70	1.85	19.17	7.83	0.03	0.38	0.27	0.00	0.66	0.02	15.0	4.0	438.0	県　椎田ﾊﾞｲﾊﾟｽ2	41図11	
石堂中後ヶ谷古墳群1次	築上町石堂	坏身口縁部		66.01	1.97	19.18	11.84	0.06	0.30	0.17	0.00	0.34	0.02	5.0	46.0	423.0	県　椎田ﾊﾞｲﾊﾟｽ2	41図8	
石堂中後ヶ谷古墳群1次	築上町石堂	甕（ハソウ）		78.72	1.61	13.67	4.37	0.01	0.13	0.44	0.01	0.91	0.03	7.0	86.0	392.5	県　椎田ﾊﾞｲﾊﾟｽ2	41図13	

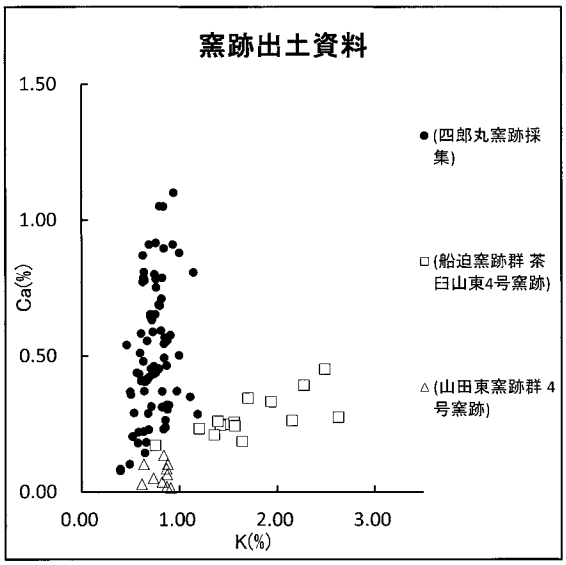
第４表　胎土分析対象試料一覧（その②）

出土遺跡等	所在地	器種	タイプ	Si	Ti	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	Na	K	P	Rb	Sr	Zr	報告書・挿図番号	備考
石堂中後ヶ谷古墳群1次	築上町石堂	坏蓋		70.74	2.01	18.34	6.64	0.13	0.14	0.38	0.01	1.46	0.02	31.0	82.0	389.5	県　椎田ﾊﾞｲﾊﾟｽ2　41図4	
石堂中後ヶ谷古墳群1次	築上町石堂	坏蓋		68.25	1.75	19.79	7.55	0.04	1.82	0.17	0.00	0.49	0.05	6.0	31.5	428.0	県　椎田ﾊﾞｲﾊﾟｽ2　41図6	
石堂中後ヶ谷古墳群1次	築上町石堂	坏蓋		68.98	1.79	19.79	8.34	0.02	0.28	0.21	0.00	0.45	0.03	8.5	21.0	440.0	県　椎田ﾊﾞｲﾊﾟｽ2　41図1	
石堂中後ヶ谷古墳群1次	築上町石堂	坏身	b	69.51	1.47	20.11	5.68	0.00	0.29	0.41	0.45	1.96	0.02	60.5	61.5	426.0	県　椎田ﾊﾞｲﾊﾟｽ2　84図2	
石堂中後ヶ谷古墳群1次	築上町石堂	坏身	b	69.66	1.52	20.39	5.67	0.04	0.11	0.41	0.02	2.03	0.02	30.5	58.5	478.5	県　椎田ﾊﾞｲﾊﾟｽ2　84図1	
（福間）茶切古墳群1次	築上町石堂	坏身高台部	a	67.78	1.79	18.35	10.35	0.06	0.16	0.45	0.00	0.91	0.01	10.5	102.5	389.0	県　椎田ﾊﾞｲﾊﾟｽ2　103図1	
（福間）茶切古墳群1次	築上町石堂	高杯		68.18	2.02	19.25	8.48	0.05	0.45	0.49	0.01	0.95	0.02	10.0	103.5	462.5	県　椎田ﾊﾞｲﾊﾟｽ2　118図14	
（福間）茶切古墳群1次	築上町石堂	高杯		69.11	1.76	18.30	8.86	0.04	0.29	0.43	0.00	1.10	0.02	15.0	77.0	403.0	県　椎田ﾊﾞｲﾊﾟｽ2　118図13	
（福間）茶切古墳群1次	築上町石堂	高杯		65.38	1.91	20.03	10.75	0.05	0.60	0.35	0.00	0.79	0.03	8.5	73.5	399.5	県　椎田ﾊﾞｲﾊﾟｽ2　118図12	
（福間）茶切古墳群1次	築上町石堂	坏身	a	71.57	1.73	16.37	9.06	0.04	0.23	0.18	0.00	0.70	0.01	14.0	48.5	413.0	県　椎田ﾊﾞｲﾊﾟｽ2　118図6	
（福間）茶切古墳群1次	築上町石堂	坏身	a	69.49	1.88	18.45	8.99	0.01	0.31	0.21	0.00	0.55	0.02	12.5	27.0	429.5	県　椎田ﾊﾞｲﾊﾟｽ2　118図7	
（福間）茶切古墳群1次	築上町石堂	坏身	a	69.29	1.81	17.98	9.65	0.01	0.31	0.20	0.01	0.63	0.02	10.0	27.5	415.0	県　椎田ﾊﾞｲﾊﾟｽ2　118図8	
（福間）茶切古墳群1次	築上町石堂	坏身	a	72.18	1.88	17.14	7.04	0.01	0.14	0.31	0.02	1.17	0.02	35.0	49.0	436.5	県　椎田ﾊﾞｲﾊﾟｽ2　118図9	
（福間）茶切古墳群1次	築上町石堂	坏身	a	71.67	1.92	17.39	7.42	0.02	0.17	0.25	0.02	1.00	0.03	9.0	41.5	406.5	県　椎田ﾊﾞｲﾊﾟｽ2　118図10	
（福間）茶切古墳群1次	築上町石堂	坏蓋		68.94	1.77	18.41	9.39	0.05	0.43	0.27	0.00	0.61	0.03	11.5	50.5	438.5	県　椎田ﾊﾞｲﾊﾟｽ2　118図1	
（福間）茶切古墳群1次	築上町石堂	坏蓋		71.90	1.92	17.37	7.24	0.02	0.12	0.31	0.02	0.97	0.02	21.0	63.5	424.5	県　椎田ﾊﾞｲﾊﾟｽ2　118図2	
（福間）茶切古墳群1次	築上町石堂	坏蓋		69.66	1.72	17.44	9.76	0.01	0.15	0.25	0.00	0.89	0.02	21.5	50.0	432.5	県　椎田ﾊﾞｲﾊﾟｽ2　118図4	
福間茶切古墳群2次	築上町石堂	高杯		71.16	1.76	16.87	7.71	0.01	0.67	0.37	0.00	1.31	0.04	16.5	85.5	412.0	今回報告予定　15図12	
福間茶切古墳群2次	築上町石堂	坏蓋		67.29	1.90	17.84	10.65	0.02	1.10	0.29	0.00	0.76	0.06	10.0	47.5	395.0	今回報告予定　15図1	
福間茶切古墳群2次	築上町石堂	坏蓋		67.68	1.91	18.48	9.70	0.04	0.95	0.31	0.00	0.77	0.06	9.0	45.5	404.0	今回報告予定　15図4	
福間茶切古墳群2次	築上町石堂	坏身	a	67.73	1.72	18.25	9.89	0.02	1.28	0.28	0.00	0.68	0.05	4.5	63.0	390.5	今回報告予定　15図7	
福間茶切古墳群2次	築上町石堂	坏蓋		69.22	1.76	17.17	10.22	0.02	0.67	0.18	0.00	0.59	0.05	9.0	60.0	387.0	今回報告予定　15図3	
福間茶切古墳群2次	築上町石堂	坏身	a	69.53	1.81	16.90	9.82	0.06	0.66	0.29	0.00	0.78	0.06	14.0	21.0	386.5	今回報告予定　15図6	
福間茶切古墳群2次	築上町石堂	坏身	a	69.37	1.84	16.89	10.60	0.00	0.26	0.24	0.00	0.66	0.03	7.0	30.0	438.0	今回報告予定　15図8	
福間茶切古墳群2次	築上町石堂	坏蓋		65.85	1.98	18.93	11.81	0.04	0.28	0.28	0.00	0.65	0.02	6.0	70.5	487.0	今回報告予定　15図5	
福間茶切古墳群2次	築上町石堂	坏身	a	68.43	1.84	19.56	8.75	0.03	0.21	0.42	0.00	0.64	0.03	6.0	74.5	374.5	今回報告予定　15図11	
福間茶切古墳群2次	築上町石堂	坏身	a	68.51	2.01	21.68	5.87	0.00	0.77	0.21	0.01	0.79	0.04	8.0	4.5	429.0	今回報告予定　15図15	
頭無古墳群2次	築上町上ノ河内	坏蓋		67.69	1.99	16.51	12.36	0.03	0.23	0.33	0.14	0.57	0.03	11.0	108.5	404.0	県　椎田ﾊﾞｲﾊﾟｽ2　124図2	
頭無古墳群2次	築上町上ノ河内	坏蓋		68.24	2.07	16.33	11.94	0.02	0.27	0.33	0.00	0.64	0.02	9.0	36.5	436.5	県　椎田ﾊﾞｲﾊﾟｽ2　124図1	
頭無古墳群2次	築上町上ノ河内	坏身	aか	68.99	1.96	16.10	11.51	0.02	0.25	0.34	0.00	0.71	0.03	13.0	67.0	408.5	県　椎田ﾊﾞｲﾊﾟｽ2　124図3	
赤幡森ヶ坪遺跡	築上町赤幡	坏蓋		77.47	1.58	13.93	4.28	0.00	0.24	0.30	0.61	1.41	0.04	13.5	60.0	333.5	県　椎田ﾊﾞｲﾊﾟｽ8　66図1	
赤幡森ヶ坪遺跡	築上町赤幡	坏蓋		70.57	1.36	18.18	7.24	0.01	0.16	0.28	0.00	2.08	0.03	46.0	39.5	385.5	県　椎田ﾊﾞｲﾊﾟｽ8　66図2	
赤幡森ヶ坪遺跡	築上町赤幡	坏蓋		73.27	1.46	17.30	5.08	0.02	0.49	0.26	0.00	1.97	0.04	41.5	62.0	344.0	県　椎田ﾊﾞｲﾊﾟｽ8　66図3	
赤幡森ヶ坪遺跡	築上町赤幡	坏蓋		73.36	1.00	17.03	3.94	0.01	0.84	0.38	0.66	2.62	0.03	61.5	79.0	277.5	県　椎田ﾊﾞｲﾊﾟｽ8　66図5	
赤幡森ヶ坪遺跡	築上町赤幡	坏身口縁部		76.55	1.70	15.21	4.27	0.01	0.24	0.45	0.00	1.44	0.03	32.0	71.5	398.0	県　椎田ﾊﾞｲﾊﾟｽ8　66図7	
赤幡森ヶ坪遺跡	築上町赤幡	坏身底部	e	74.43	1.47	15.64	6.81	0.01	0.13	0.28	0.02	1.08	0.03	18.0	56.5	359.0	県　椎田ﾊﾞｲﾊﾟｽ8　66図10	
赤幡森ヶ坪遺跡	築上町赤幡	坏身底部	bか	66.79	1.51	19.20	10.30	0.08	0.31	0.51	0.00	1.19	0.03	10.0	86.0	316.0	県　椎田ﾊﾞｲﾊﾟｽ8　66図9	
赤幡森ヶ坪遺跡	築上町赤幡	坏身底部	bか	70.39	0.97	19.46	4.01	0.01	0.45	0.57	1.14	2.82	0.03	59.5	151.5	466.5	県　椎田ﾊﾞｲﾊﾟｽ8　66図8	
安武深田遺跡	築上町安武	坏身	e	79.13	1.69	12.69	3.71	0.03	0.21	0.71	0.37	1.29	0.04	10.0	85.0	331.5	県　椎田ﾊﾞｲﾊﾟｽ4　260図71	
安武深田遺跡	築上町安武	坏身	e	72.58	1.64	17.10	5.70	0.03	0.32	0.56	0.24	1.67	0.03	20.0	131.0	339.5	県　椎田ﾊﾞｲﾊﾟｽ4　260図73	
安武深田遺跡	築上町安武	坏身	e	66.83	0.93	20.37	5.15	0.03	0.49	1.07	2.49	2.52	0.02	43.5	218.0	390.5	県　椎田ﾊﾞｲﾊﾟｽ4　260図74	
安武深田遺跡	築上町安武	坏身	e	68.97	0.88	19.70	5.35	0.01	0.58	0.22	0.73	3.45	0.03	107.0	82.0	226.0	県　椎田ﾊﾞｲﾊﾟｽ4　260図75	
安武深田遺跡	築上町安武	坏身	a	68.97	1.58	19.67	8.14	0.01	0.19	0.56	0.01	0.77	0.02	18.0	104.5	336.5	県　椎田ﾊﾞｲﾊﾟｽ4　260図83	
安武深田遺跡	築上町安武	坏身	e	69.76	1.61	17.71	8.71	0.04	0.35	0.52	0.27	0.90	0.03	20.0	76.0	336.5	県　椎田ﾊﾞｲﾊﾟｽ4　260図85	
安武深田遺跡	築上町安武	坏身	e	68.84	1.41	18.80	8.14	0.01	0.20	0.32	0.19	1.95	0.03	54.0	52.5	359.5	県　椎田ﾊﾞｲﾊﾟｽ4　260図88	
安武深田遺跡	築上町安武	坏身	bか	69.23	1.40	19.33	7.34	0.00	0.19	0.26	0.24	1.89	0.02	33.5	34.0	341.0	県　椎田ﾊﾞｲﾊﾟｽ4　260図90	
安武深田遺跡	築上町安武	坏身	e	72.98	1.56	17.64	4.77	0.01	0.35	0.26	0.00	2.23	0.03	43.0	76.5	375.5	県　椎田ﾊﾞｲﾊﾟｽ4　260図89	
安武深田遺跡	築上町安武	坏身	e	74.39	1.16	15.77	4.57	0.02	0.62	0.61	0.96	1.79	0.03	24.0	137.5	312.5	県　椎田ﾊﾞｲﾊﾟｽ4　260図87	
安武深田遺跡	築上町安武	坏身	b	71.74	1.76	17.65	5.94	0.00	0.28	0.45	0.51	1.53	0.02	33.0	107.0	382.5	県　椎田ﾊﾞｲﾊﾟｽ4　260図84	
山田東窯跡群4号窯跡灰原	上毛町安雲	坏蓋		64.47	2.17	20.93	10.85	0.03	0.11	0.04	0.00	0.82	0.03	11.0	37.5	535.5	新吉富村9集　不掲載	焚口床面6
山田東窯跡群4号窯跡灰原	上毛町安雲	坏蓋		70.42	2.33	19.09	6.75	0.00	0.24	0.10	0.00	0.88	0.04	25.5	41.0	570.5	新吉富村9集　不掲載	窯内埋土35
山田東窯跡群4号窯跡灰原	上毛町安雲	坏蓋		67.32	2.60	20.68	7.76	0.01	0.09	0.05	0.00	0.73	0.03	13.0	35.5	558.5	新吉富村9集　不掲載	窯内埋土23
山田東窯跡群4号窯跡灰原	上毛町安雲	坏蓋		66.63	2.23	21.19	8.29	0.02	0.11	0.13	0.00	0.84	0.03	22.0	31.0	498.5	新吉富村9集　不掲載	窯内埋土29
山田東窯跡群4号窯跡灰原	上毛町安雲	坏蓋		69.08	2.53	19.71	7.28	0.00	0.13	0.09	0.00	0.87	0.03	9.5	25.5	561.0	新吉富村9集　不掲載	焚口床面9
山田東窯跡群4号窯跡灰原	上毛町安雲	坏蓋		59.73	2.52	24.30	12.21	0.07	0.17	0.10	0.02	0.64	0.02	6.5	42.5	658.5	新吉富村9集　不掲載	窯内埋土24
山田東窯跡群4号窯跡灰原	上毛町安雲	坏蓋		68.78	2.12	20.32	7.40	0.02	0.28	0.07	0.01	0.88	0.04	19.0	37.5	443.5	新吉富村9集　不掲載	窯内埋土7
山田東窯跡群4号窯跡灰原	上毛町安雲	坏身口縁		66.42	2.00	20.38	9.15	0.02	0.89	0.01	0.00	0.91	0.06	14.5	4.0	475.0	新吉富村9集　不掲載	床面、No.なし
山田東窯跡群4号窯跡灰原	上毛町安雲	坏蓋		66.22	2.08	20.50	8.92	0.02	1.45	0.03	0.00	0.62	0.05	9.5	10.0	494.5	新吉富村9集　不掲載	床面、No.なし
山田東窯跡群4号窯跡灰原	上毛町安雲	坏身口縁		64.06	2.10	21.37	10.76	0.03	0.60	0.02	0.00	0.87	0.07	15.5	47.5	507.0	新吉富村9集　不掲載	注記なし、No.なし
船迫窯跡群茶臼山4号窯跡	築上町船迫	坏身口縁		67.55	1.62	19.98	7.25	0.03	1.41	0.25	0.00	1.47	0.06	24.5	40.0	426.5	築城町6集　不掲載	前庭部下段
船迫窯跡群茶臼山4号窯跡	築上町船迫	坏蓋(つまみ無)か		68.33	1.66	19.21	8.11	0.04	0.83	0.24	0.00	1.42	0.06	40.0	12.5	374.0	築城町6集　不掲載	前庭部下段
船迫窯跡群茶臼山4号窯跡	築上町船迫	坏身口縁		68.83	1.46	18.91	6.84	0.01	0.87	0.27	0.00	2.63	0.06	39.0	25.0	400.5	築城町6集　不掲載	前庭部下段
船迫窯跡群茶臼山4号窯跡	築上町船迫	坏身口縁		70.51	1.68	19.42	6.48	0.00	0.21	0.21	0.00	1.36	0.03	24.5	5.0	403.0	築城町6集　不掲載	前庭部下段
船迫窯跡群茶臼山4号窯跡	築上町船迫	坏身口縁		69.23	1.45	19.62	6.84	0.03	0.30	0.26	0.00	2.16	0.02	48.5	50.5	378.0	築城町6集　不掲載	前庭部下段
船迫窯跡群茶臼山4号窯跡	築上町船迫	坏身口縁		66.77	1.81	21.58	7.82	0.01	0.43	0.23	0.01	1.21	0.02	11.0	13.5	460.0	築城町6集　不掲載	前庭部トレンチ
船迫窯跡群茶臼山4号窯跡	築上町船迫	坏身口縁		70.13	1.51	18.27	6.57	0.02	0.38	0.45	0.00	2.49	0.03	62.5	78.0	461.0	築城町6集　不掲載	前庭部トレンチ
船迫窯跡群茶臼山4号窯跡	築上町船迫	坏身口縁		72.04	1.62	17.95	5.97	0.04	0.22	0.34	0.01	1.70	0.03	36.5	58.5	423.5	築城町6集　不掲載	前庭部トレンチ
船迫窯跡群茶臼山4号窯跡	築上町船迫	坏身口縁		67.55	1.62	20.67	7.45	0.00	0.76	0.19	0.00	1.65	0.03	23.5	52.0	396.5	築城町6集　不掲載	前庭部トレンチ
船迫窯跡群茶臼山4号窯跡	築上町船迫	高杯蓋か		69.79	1.54	18.53	7.05	0.05	0.25	0.39	0.00	2.28	0.03	29.0	33.0	365.5	築城町6集　不掲載	前庭部トレンチ
船迫窯跡群茶臼山4号窯跡	築上町船迫	坏蓋天井部か		69.96	1.68	19.59	6.79	0.00	0.17	0.26	0.03	1.40	0.03	35.5	29.5	437.5	築城町6集　不掲載	一括灰原
船迫窯跡群茶臼山4号窯跡	築上町船迫	坏身口縁		71.22	1.52	18.48	6.17	0.03	0.17	0.33	0.01	1.94	0.02	46.5	28.5	414.5	築城町6集　不掲載	一括灰原
船迫窯跡群茶臼山4号窯跡	築上町船迫	坏蓋つまみ部		59.33	1.65	24.31	12.84	0.04	0.03	0.17	0.01	0.76	0.05	11.0	21.0	440.5	築城町6集　不掲載	一括灰原
船迫窯跡群茶臼山4号窯跡	築上町船迫	坏蓋肩部		69.99	1.66	19.22	6.96	0.03	0.21	0.26	0.00	1.56	0.02	35.5	58.0	379.5	築城町6集　不掲載	一括灰原
船迫窯跡群茶臼山4号窯跡	築上町船迫	坏身口縁		65.65	1.86	21.85	8.29	0.06	0.34	0.24	0.00	1.57	0.03	30.0	35.0	456.0	築城町6集　不掲載	一括灰原
渡築紫古墳群	行橋市稲童	脚付椀？	a類祖型か	73.26	0.72	17.03	5.08	0.01	0.20	0.39	0.03	3.12	0.03	56.0	56.0	440.0	行橋市　概報のみ	A3号墳-21羨道
渡築紫古墳群	行橋市稲童	小坏身	e	63.78	1.42	20.57	7.62	0.08	2.56	0.27	0.60	2.93	0.03	94.0	44.5	306.5	行橋市　概報のみ	A8号墳-9玄室
渡築紫古墳群	行橋市稲童	坏身	e	69.68	0.85	18.97	4.99	0.00	0.84	0.31	0.80	3.39	0.04	115.5	70.0	253.5	行橋市　概報のみ	A8号墳-12玄室
渡築紫古墳群	行橋市稲童	坏身	a	71.33	1.77	17.85	7.61	0.02	0.12	0.43	0.07	0.66	0.02	11.0	91.2	356.0	行橋市　概報のみ	A10号墳-4玄室
渡築紫古墳群	行橋市稲童	脚付杯？	a類祖型か	68.08	1.69	19.10	10.07	0.01	0.25	0.25	0.00	0.44	0.02	11.5	60.5	413.0	行橋市　概報のみ	A7号墳-6前庭部
渡築紫古墳群	行橋市稲童	坏身	c	69.58	2.12	19.06	7.54	0.01	0.38	0.39	0.02	0.74	0.03	9.0	39.5	448.5	行橋市　概報のみ	A10号墳-7
渡築紫古墳群	行橋市稲童	坏身	c	68.47	2.09	20.23	7.56	0.00	0.25	0.30	0.05	0.84	0.04	14.0	71.5	503.0	行橋市　概報のみ	A10号墳-6
渡築紫古墳群	行橋市稲童	坏身	e	64.75	1.40	20.19	7.54	0.08	2.40	0.33	0.37	2.83	0.02	69.5	67.0	354.5	行橋市　概報のみ	A11号墳-9羨道
渡築紫古墳群	行橋市稲童	坏身	c	73.43	1.80	16.81	6.87	0.01	0.16	0.23	0.00	0.56	0.03	6.0	54.0	400.0	行橋市　概報のみ	A10号墳-8
渡築紫古墳群	行橋市稲童	坏身	aか	69.56	1.69	19.04	8.65	0.03	0.15	0.32	0.01	0.46	0.02	5.5	60.0	331.5	行橋市　概報のみ	A10号墳-9
渡築紫古墳群	行橋市稲童	坏身	e	61.71	1.62	22.41	8.95	0.03	2.60	0.24	0.01	2.31	0.03	61.5	31.5	414.0	行橋市　概報のみ	A13号墳-19玄室
渡築紫古墳群	行橋市稲童	坏身	e	68.40	1.83	18.66	9.76	0.04	0.22	0.39	0.00	0.57	0.03	3.0	51.5	372.0	行橋市　概報のみ	A13号墳-20羨道
渡築紫古墳群	行橋市稲童	坏身	a	67.05	1.85	19.34	10.50	0.02	0.35	0.35	0.00	0.44	0.03	10.0	20.0	418.0	行橋市　概報のみ	A13号墳-5墓道
渡築紫古墳群	行橋市稲童	坏身	e	79.29	1.58	13.32	4.01	0.03	0.13	0.48	0.00	1.03	0.04	5.0	44.0	327.5	行橋市　概報のみ	A23号墳-1墓道
渡築紫古墳群	行橋市稲童	坏身	a	65.74	1.58	20.65	10.58	0.00	0.26	0.49	0.00	0.58	0.03	14.5	65.0	371.5	行橋市　概報のみ	A15号墳-6羨道
渡築紫古墳群	行橋市稲童	坏身	c	71.32	1.99	17.22	8.65	0.02	0.22	0.14	0.00	0.33	0.03	10.5	25.5	432.0	行橋市　概報のみ	A15号墳-3前庭部
渡築紫古墳群	行橋市稲童	坏身	a	70.60	1.98	17.11	8.72	0.03	0.32	0.33	0.00	0.78	0.02	15.5	66.0	425.0	行橋市　概報のみ	A16号墳　前庭？
渡築紫古墳群	行橋市稲童	脚付小壺？	a類祖型か	79.27	0.92	13.56	4.58	0.00	0.18	0.18	0.00	1.20	0.03	33.5	2.0	299.5	行橋市　概報のみ	北溝-1
渡築紫古墳群	行橋市稲童	坏身	e	73.65	1.06	16.02	4.78	0.00	1.70	0.34	0.28	2.05	0.04	38.0	97.5	336.5	行橋市　概報のみ	A11号墳-6羨道

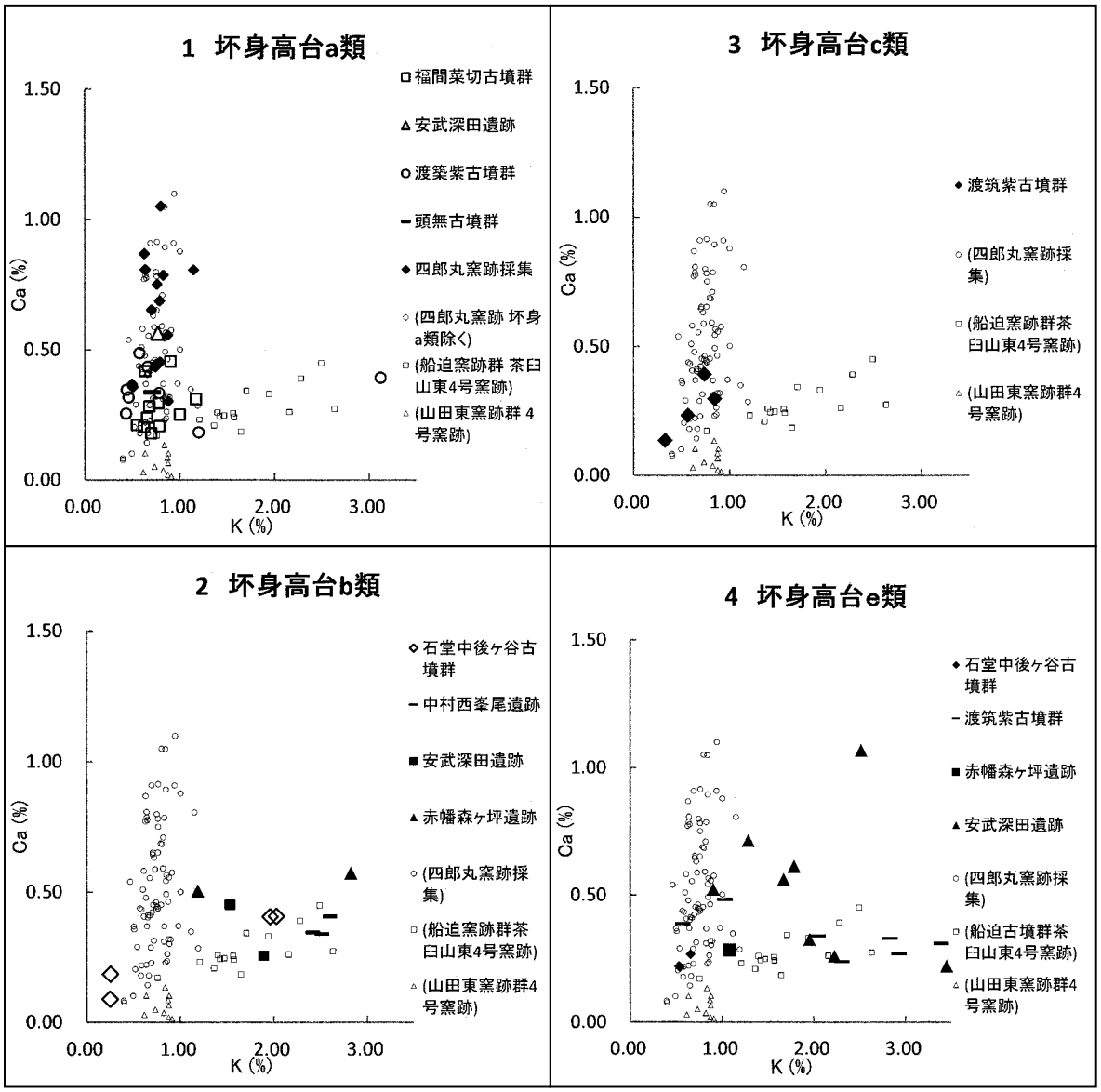
第24－3図より、頭無古墳群の坏（a類）・坏蓋が四郎丸窯跡の領域に入り、また中村西峰尾遺跡出土の坏身（b類）が船迫窯跡の領域に入ることが読み取れる。

第24－4図より、渡築紫古墳群の坏（a・c・e類）が2つにわかれ、坏a・cとeの一部が四郎丸窯跡に、坏eの多くが船迫窯跡群の領域にそれぞれ入る。a類の祖型の可能性があるとした脚付器種については、四郎丸窯跡の領域に入るものが1点､船迫窯跡の領域に入るものが1点、両者の中間にあるものが1点見られ、いずれのものとも判断しがたい。

第24－5図は､安武深田遺跡の坏身a･b･e類で、



第22図　窯跡出土資料の胎土組成比較



第23図　坏身の形態属性と胎土組成の相関性

a は四郎丸窯跡に、b は船迫窯跡に、e は四郎丸窯跡と船迫窯跡群の領域に含まれるもののほか両者のどちらにも入らないものがある。

第 24 － 6 図は、赤幡森ヶ坪遺跡の坏身 b・e 類と坏蓋で、うち坏身 b 類と坏蓋の全てが船迫窯跡群の領域に分布し、坏身 e 類と形式不明の坏身口縁部片の 2 点ほどがこれからややはずれるが、四郎丸窯跡に入るものはないと推定される。

(d) 小結

以上の分析結果をまとめると、次のようなことを述べることができよう。

形態的属性について　まず、坏身の形態的属性と、推定される産地との関係については、以下のようなことが推測される。

・a 類は、ほぼすべてが四郎丸窯跡で生産されたと推定される。

・b 類は船迫窯跡群で生産されたと推定されるが、なかには生産地がはっきりしないものもある。これは、生産地つまり、窯跡試料を増やすと明確になるかもしれない。

・c 類は、四郎丸窯跡で生産された可能性が示されたが、a 類より分析点数も少なく、検討の余地が残る。

・e 類は、四郎丸窯跡と船迫窯跡群の両方および不明の生産地と推定される。特に安武深田遺跡出土の e 類には不明のものが多くみられた。

生産地と消費地の関係　次に各遺跡別では、

・福間菜切古墳群と頭無古墳群は、四郎丸窯跡から供給されたと推定される。

・石堂中後ヶ谷古墳群の試料は、船迫窯跡群と、四郎丸窯跡またはそれに極めて胎土組成が近似する別の窯跡から供給された須恵器が入っていることが推定される。

・渡築紫古墳群は四郎丸窯跡・船迫窯跡群の両方の窯から供給されていると推定される。

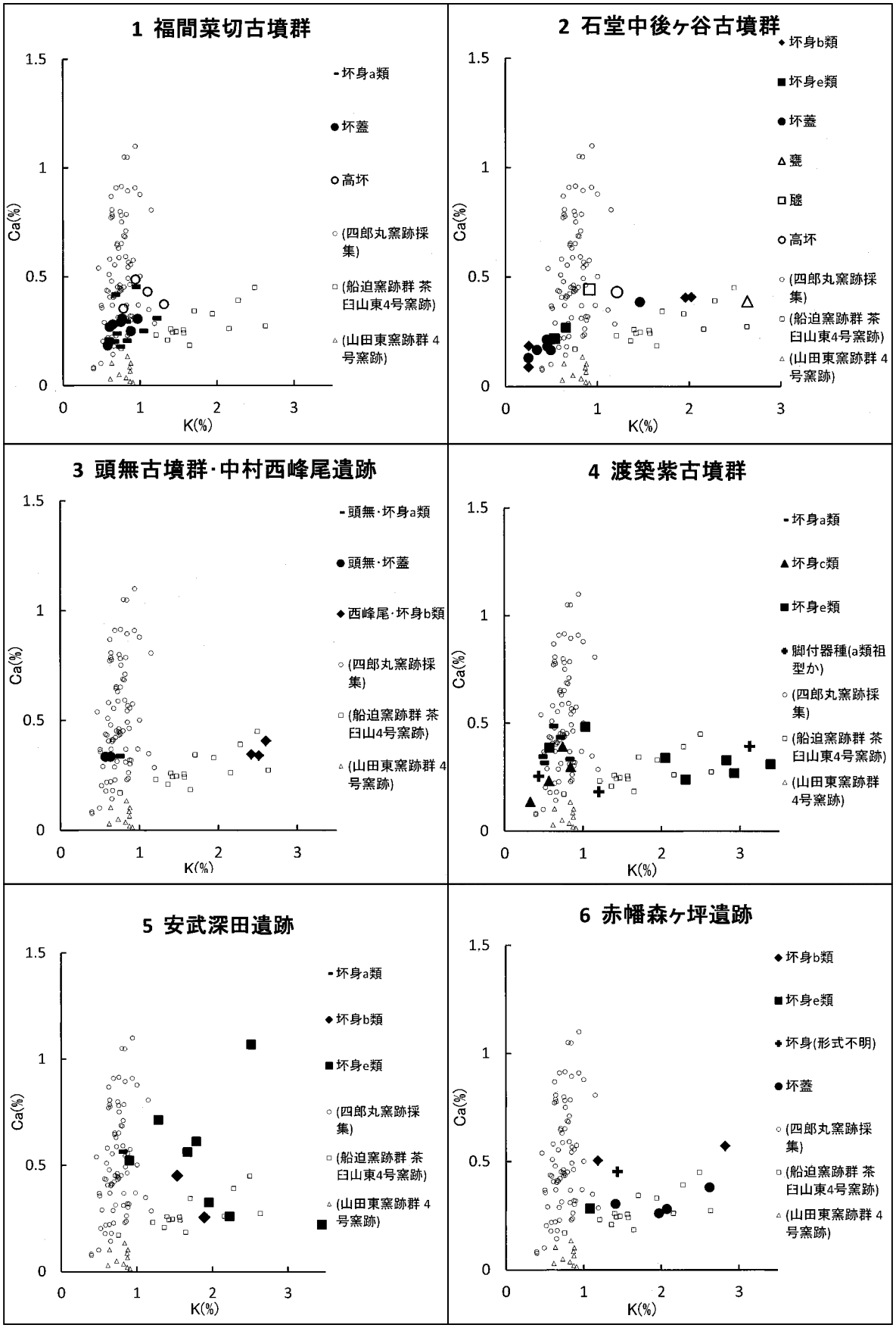
・安武深田遺跡・赤幡森ヶ坪遺跡・中村西峰尾遺跡の各遺跡の試料は、安武深田の一部を除き、ほとんどが船迫窯跡群から供給されたと推定される。（白石 純）

④　考察

以上の分析により、福間菜切古墳群から出土した特徴的な形態を持つ須恵器坏身について、いくつかの重要な知見が得られた。

坏身の高台部断面形状について　まず第 1 点目として、福間菜切古墳群で出土した須恵器坏身高台部断面形状【a 類】の生産窯跡が、四郎丸窯跡にほぼ絞られた点が挙げられよう。分析により、福間菜切古墳群のみならず、京築地域で広く出土する a 類の胎土における K-Ca 散布が四郎丸窯跡の K-Ca 散布領域に収まること、さらに、四郎丸窯跡で採集された須恵器坏身片のうち高台部断面形状が観察できる試料の全てが a 類に分類できることがわかった。形態的属性という考古学的な知見と、胎土組成という理化学分析による知見、さらには分布論からの知見が完全に一致した結果であり、極めて重要な成果と言えよう。

次に、中村西峰尾遺跡や石堂中後ヶ谷遺跡などから出土した須恵器坏身高台部断面形状【b 類】については、その多くが船迫窯跡産である可能性が高いことが示された。この点については、船迫窯跡群における 7 世紀後半の須恵器焼成窯跡である茶臼山東 4 号窯跡の灰原出土試料の K-Ca 散布と各遺跡出土の須恵器坏身 b 類の K-Ca 散布がおおよそ重なることから推測できる。しかし、残念



第 24 図　各遺跡出土資料と各窯跡出土資料の相関性

ながら茶臼山４号窯跡灰原出土資料には坏身の高台形状を観察できる資料がなく、分布論からの知見がやや欠けていることから、断定はできない。石堂中後ヶ谷古墳群出土のｂ類の中に、K-Ca 散布が全く異なる（四郎丸窯跡の領域に近く、ややＫ量が少ない）資料が２点含まれることもあり、今後さらに資料を加えながら検討していく必要があろう。

渡築紫古墳群で出土した須恵器坏身高台断面形状【c 類】については、K-Ca 散布が四郎丸窯跡採集資料の K-Ca 散布とほぼ重なるという結果が出た。この点を重要視すれば、このタイプについても四郎丸窯跡で生産された可能性が示唆されるわけだが、一方では四郎丸窯跡採集資料の中にｃ類が１点も含まれていない点､既に四郎丸窯跡ではａ類が生産されているという結論を得ている点、さらに坏身のａ類とｃ類は高台部の断面形状が異なるのみでその他の部分の形状は総じて似ており、同一の窯跡での作り分けに関して積極的な肯定理由が見当たらない点などが、この可能性に対しての難点として提示される。ここでは、四郎丸窯跡で生産された須恵器と K-Ca 散布がよく似た胎土を用いる別の窯跡で生産された可能性を考慮しておきたい。ｃ類の生産遺跡については管見に触れた限りでは中津市ホヤ池窯跡などに類品があるが、消費地としては渡築紫遺跡のほか前田山横穴墓群など行橋市・みやこ町域の遺跡に多く出土する傾向があるようである。この時期の須恵器窯跡は京都郡から仲津郡にかけては未だ知られないが、椿市・上坂・菩提の各廃寺の創建に伴う瓦陶兼用窯（福六瓦窯跡など）の成立などの可能性を考慮に入れつつ､引き続き検討していく必要があろう。

ｄ類については、胎土分析試料を入手することがかなわなかったので、胎土分析の結果を踏まえて述べることができない。ただし、出土地の傾向からすれば豊前市域よりは行橋市域に多く見られる印象があり、豊前地域において最も須恵器窯跡が集中する、いわゆる水晶山系窯跡群の出土資料にもしばしば類例が見られる。従って、現段階においては本類の産地について水晶山系窯跡群のいずれかを候補としてあげておきたい。

ｅ類については、K-Ca 散布が大きく散らばるという結果が得られた。これはある程度予想していたことである。というのも、今回ｅ類を設定した際に、高台部断面形状が比較的短く収まるものを全てこの類型に含めていた。須恵器坏身の高台部断面形状は一般的に、坏身と坏蓋が反転し高台が付されるようになる７世紀中頃～後半には形態的な変異の幅が大きいが､8 世紀前半にかけて徐々に、断面形状が比較的短い方形～平行四辺形状へと収束していくことはよく知られる。本稿で設定した類型のうち、特にａ～ｃ類は高台部断面形状が斜めに長く伸びるもので時期的にはやや古く位置づけられ、形態的な変異幅が比較的大きいことは予想されたことであった。これに対しｅ類とした高台部断面形状が方形に近いものは恐らく、８世紀前半以降のやや新しい時期に位置づけられ、高台部断面形状の変異幅が収束していく時期のものを多く含むとみられる。つまり、ｅ類の K-Ca 散布が分散する背景には、本稿で取り上げた３窯跡を含むいくつかの窯跡において生産される須恵器坏身の形状が、８世紀前半に向けて徐々に変異幅が収束していったことを示しているものと理解できる。

生産地と消費地の関係　次に、生産地が推測できる資料を手がかりとして、生産地と消費との関係を概観したい。

四郎丸窯跡で生産された須恵器は、頭無古墳群・福間菜切古墳群・荒堀雨久保遺跡といったごく近隣の消費地のほか、東では小石原泉遺跡や塔田琵琶田遺跡など豊前市全域に、西では渡築紫古墳群・竹並横穴墓群などで見られ、京築地域全般に運ばれていたことがわかる。

個別の出土状況を見ると、まず窯跡にごく近い福間菜切古墳群や頭無古墳群では（出土資料は限られるが）ほぼ全てが四郎丸窯跡産の須恵器で占められる。これだけ見ればこの点は当然の結果であろう。しかし一方では、福間菜切古墳群に隣接する石堂中後ヶ谷古墳群や頭無古墳群よりさらに四郎丸窯跡に近い中村西峰尾遺跡ではこれが全く出土しない。このことは、（副葬）須恵器の入手方法が単純に距離に応じて決定されるわけではないことを示しており、極めて興味深い。

このような背景には単純な市場経済的流通を想定することは難しく、（副葬）須恵器の流通にはやはり被葬者や葬送主催者の性格、また須恵器産地の集団との関係など、集団間の社会的関係が大きな影響を及ぼしたことが推測される。付近は古代における築城郡と上毛郡の郡界にあたり、（中村山柿遺跡の報告において後述するように）中世から近代にかけて郡界の移動が見られるなど領域の線引きが不安定な地域であった。出土須恵器の形態的特徴から見れば、福間菜切古墳群の造墓集団は東の上毛郡側、石堂中後ヶ谷古墳群の造墓集団は西の築城郡側に強い繋がりを持つことを志向したとも捉えられる一方、さらに東の中村西峰尾遺跡では西側との関係も覗え、所属領域の境界部における複雑な集団行動の一端を示す現象と理解できるならば本稿で示した現象は重要であろう。

また、渡築紫古墳群・竹並横穴墓群など産地からやや遠い消費地では埋葬単位ごとに坏身の類型がそろう傾向がある（図 20 のほか各報告を参照）。これについては、ひとつは消費機会（副葬・供献）のたび毎に産地からまとめて入手した消費行動の一端を示すものとして理解できるとともに、特定の産地を選択する葬送集団の意図が存在したことをも推測させるもので、ここにおいても単純な市場経済的流通よりは何らかの社会的関係を背景に（副葬）須恵器が流通した可能性を読み取れよう。

なお、本稿をなすにあたり、以下の方々に御協力賜りまたご示唆を頂いた。記してお礼申し上げます（敬称略、順不同）。

大森真衣子、小川秀樹、亀田修一、下原幸裕、末永浩一、高尾栄一、棚田昭仁、米田鉄也

【註】

(1) 豊前市教育委員会棚田氏より教示を受けた。

(2) 2011 ～ 2013 年度に東九州自動車道建設に先立ち九州歴史資料館が発掘調査を行ったが、出土遺物中に同じ特徴を持つ須恵器坏身が存在することを確認している。なお、この調査の報告は 2014･2015 年度に行う予定である。

(3) 本遺跡の報告書については 2013 年度末に行橋市教育委員会が正式報告を刊行すべく現在報告書執筆中であった。報告書の執筆中にもかかわらず担当者の小川氏に資料提供を快諾いただき、さらに本稿執筆時点で未発表であった出土遺物の実測図の掲載も許可いただけたのは僥倖であった。

【参考文献】

小田富士雄・長直信「豊前の須恵器生産」行橋市史編纂委員会編『行橋市史資料編（原始・古代）』行橋市、2006 年

新吉富村教育委員会『照日遺跡群―福岡県築上郡新吉富村大字安雲所在窯跡群等の調査―』新吉富村文化財調査報告書第 9 集、1995 年

築城町教育委員会『船迫窯跡群―茶臼山東窯跡群・堂がへり遺跡・堂がへり窯跡群・宇土窯跡―福岡県築上郡築城町大字船迫所在古代窯跡群の発掘調査報告』築城町文化財調査報告書第 6 集、1998 年

福岡県教育委員会『椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告―2―　石堂中後ヶ谷古墳群・菜切古墳群・頭無古墳群』、1990 年

福岡県教育委員会『椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告―8―　赤幡森ヶ坪遺跡・塞の神遺跡・十双遺跡』、1992

年
豊前市『豊前市史　考古資料別冊』豊前市史編纂委員会編、1993 年
行橋市教育委員会『竹並遺跡』竹並遺跡調査会編、1977 年
行橋市教育委員会『渡築紫遺跡―福岡県行橋市大字稲童所在遺跡の発掘調査概要報告―』行橋市文化財調査報告書第 23 集、2004 年
米田鉄也「四郎丸窯跡」北九州市埋蔵文化財調査会編『天観寺山窯跡群―北九州市小倉南区―』、1977 年

Ⅴ　中村西峰尾遺跡の調査の報告

１　遺跡の概要

遺跡の立地環境　中村西峰尾遺跡は福岡県東南部の豊前市と、その北に接する築上郡築上町境の丘陵上に立地する。遺跡が展開する標高 70 m級の丘陵は、福岡県を代表する山で大分県境にある英彦山（標高 1,200 m）から東の周防灘へ向かって派生する、幾多の細長い八つ手状丘陵の先端部にあたり、その先は国道 10 号線バイパス椎田道路により寸断されている。

この丘陵頂部からの展望はよく、視界良好の日には、周防灘を介して北に山口県周防市の中国地方、東に大分県国東半島や黒曜石原産地の姫島も遠望できる（図版 11 － 1）。また、南背後には修験道として有名な国指定史跡「求菩提山」（標高 782 m）も迫っている。

一方、東眼下には豊前市の北部に位置する中村地区が拡がり、その中央を南北に流れる角田川は下流２km で豊前海岸に注いでいる。集落は川の両岸沿いに拡がり、400 戸の民家が集中している。集落の中心となる角田八幡神社には、地元の保存会により神楽が奉納されている。西眼下に転じると、築上町の南部に位置する上ノ河内地区が開け、上ノ河内川と県道沿いに 100 戸ほどの民家が点在している。なお、丘陵下の現水田面は標高 23 m前後で、中村西峰尾遺跡との比高差は 50 mほどである。本遺跡は、これまで埋蔵文化財包蔵地として周知化された履歴はなく、今回の開発に伴って発見・周知化された。

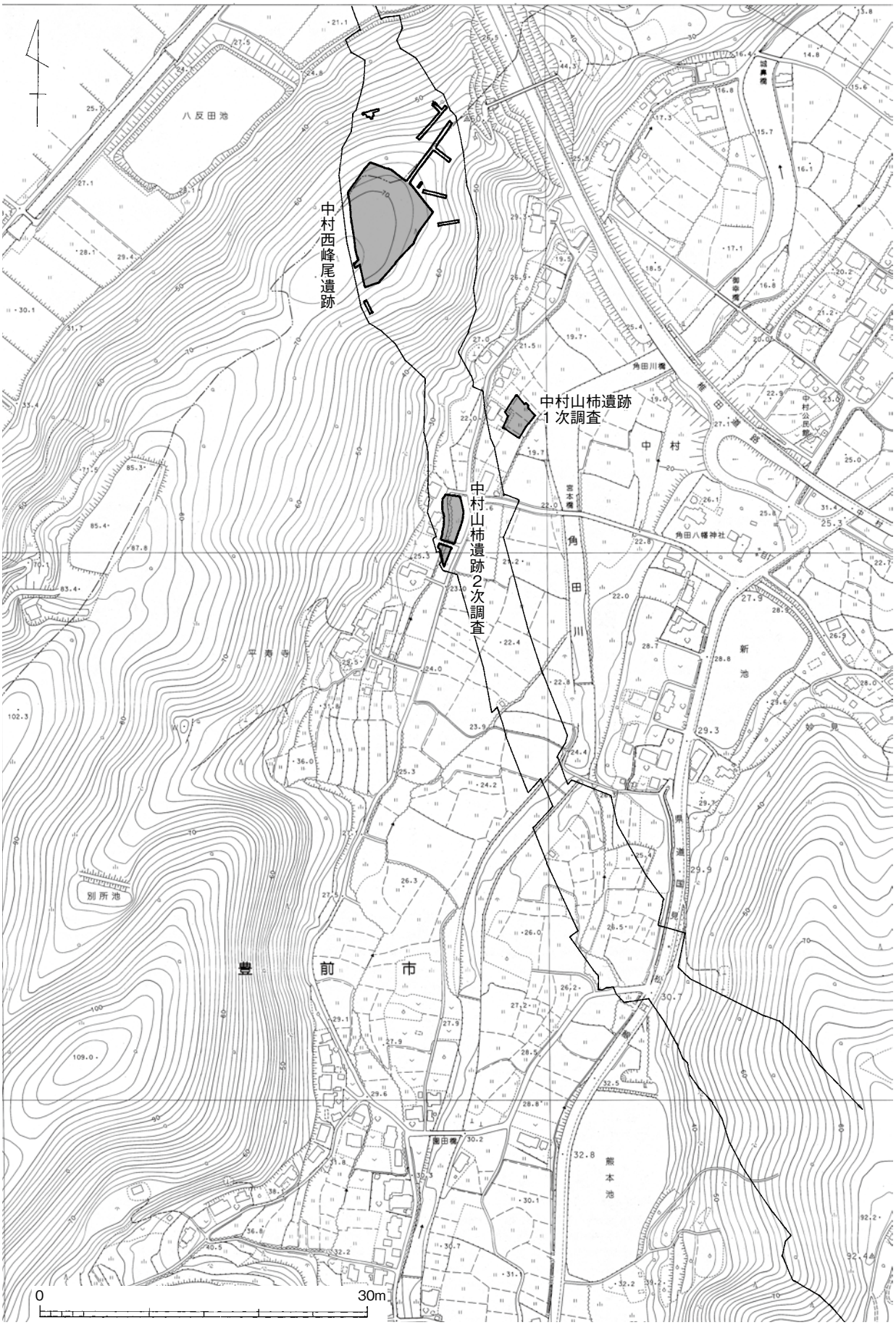
遺跡を取り巻く歴史　中村西峰尾遺跡の位置する豊前市周辺では各種開発により多くの遺跡が調査されている。とくに昭和 60 年代から始まった圃場整備事業や国道 10 号線バイパス椎田道路建設では、多くの遺跡が発掘され、新たな遺跡も発見されている。なかでも、昭和 62 年調査の中村石丸遺跡は当遺跡の真下にあり、竪穴住居跡や土壙墓、甕棺墓など大規模な縄文時代後期の集落跡が発掘されている。また、隣接する中村団後遺跡では、縄文時代晩期～中世にかけての幅広い時期の竪穴住居跡や掘立柱建物跡などが発掘されている。

ただ、これらの遺跡の多くは、周防灘に注ぐ河川がつくる標高 20 m前後の低位段丘に立地し、丘陵部での調査例は少ない。その丘陵上では、当遺跡から北 400 mの丘陵先端に中世山城の鳥越城があり、丘陵尾根を切断する堀切や土塁が知られている。さらに、丘陵突端では、鳥越城に関連する中村城ヶ鼻遺跡が所在する。また、丘陵の南２km で標高約 100 mの城山山頂には、戦国期の豪族仲峰屋氏の居城かとされる馬場城があり、堀切・曲輪・空堀など大規模な山城遺構が良く残っている。また、今回線刻石の発見があったが、東 1.8km には横穴式石室玄室に船や木の葉、人物の線刻画をもつ黒部古墳群があり､船の線刻画をもつ６号墳が福岡県指定史跡として保存されている。一方、西側の築上町域では、上ノ河内集落背後の丘陵に、７世紀後半の円墳で横穴式石室を主体部とする頭無古墳が調査され、近くには福間菜切古墳群など多くの群集墳が知られている。

２　調査の概要

遺跡の所在　中村西峰尾遺跡は、豊前市中村 289-1、291-2、292、295、297-1、298-6、299-1、築上郡築上町上ノ河内 721-3 に所在し、遺跡の大半は豊前市域にかかる。

調査に至る経緯　遺跡は、福岡県豊前市と築上町の行政境にあたる尾根状丘陵上に位置する。両市町が作成した遺跡分布地図では埋蔵文化財はともに空白地区であった。東九州自動車道の建設予定



第 25 図　中村地区における発掘調査地点位置図（1/5,000）

地内における埋蔵文化財の照会がネクスコ西日本（株）より福岡県教育庁総務部文化財保護課に対して行われた際、文化財保護課は本地点について埋蔵文化財を包蔵する可能性のある地点の一つとしてあげ、中津６地点という番号を付されていた。

平成23年３月14・15日、ネクスコ西日本による土地の買収と一部立竹木の伐採が終了した旨の連絡を受け、九州歴史資料館では予定地内の埋蔵文化財試掘調査を計画し、重機を使って４本のトレンチを設定した。調査では不整形な土坑や落込みなどを検出したが、明確な遺構はなく遺物の出土もなかった。一方、試掘の合間に丘陵頂部の檜未伐採地内を踏査したところ、石垣により北半が方形に区画にされた３段の平坦面が確認された。さらに南の道路予定地外にも、平坦面に続く幅６ｍの円周に廻る土塁と空堀が発見され、これらは中世山城遺構の一部ではないかと予想された。これを受けてネクスコ西日本（株）と福岡県文化財保護課、九州歴史資料館、豊前市教育委員会、築上町教育委員会は本地点の発掘調査について協議を持ち、調査対象地が市町村境にまたがることから、九州歴史資料館が発掘調査を行うことになった。

調査の経過　中村西峰尾遺跡の発掘調査は、道路予定地内の伐採が半分ほど終了した平成23年４月19日から着手した。開始からの２カ月間は枯れ枝と下草の除去作業がほとんどで、調査面積が約15,000㎡と広いことに加え急斜面での作業が多く手間取った。除去作業と並行して平板による地形測量を行い、調査区全域の測量が終了したのは７月末であった。その間、丘陵頂部にて船などを描いた線刻石を４個も発見するなど、思わぬ収穫もあった。

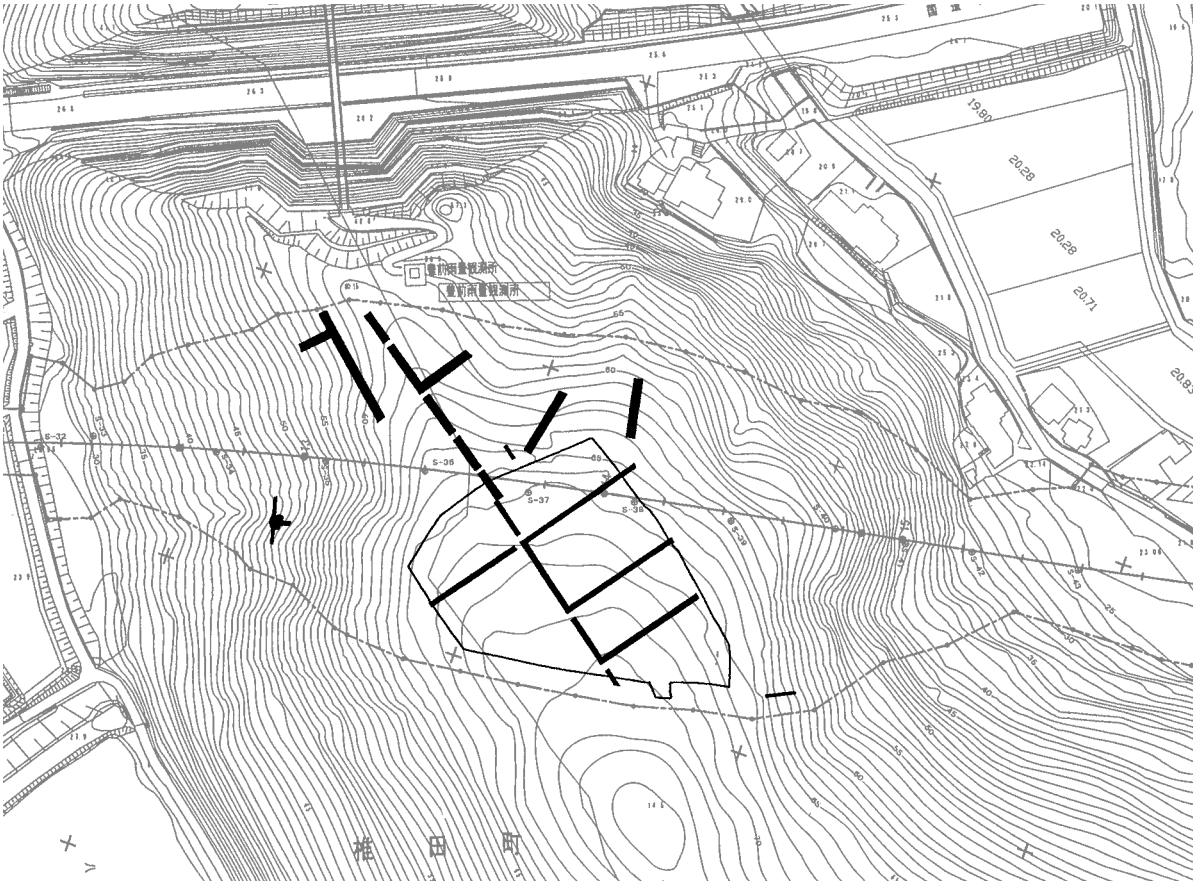
一方、当遺跡は中世山城跡との認識で調査に着手し、方形区画内の檜伐採後に遺跡全体の見通しが良くなった段階で、九州歴史資料館の岡寺良氏に現地踏査をお願いしたところ、空堀や土塁は山城を防御する役目を果たしておらず、別の遺構ではないかとの指摘をうけた。その後調査を進めていくうちに、「競馬場の跡では」と伝え聞き、地元の人に聞き取り調査を行った。その結果、数人の方から「明治時代には競馬場があったと聞いた」との証言を得、その後の調査の目安となった。

枯れ枝除去最盛期の５月27日には県教育委員会による文化財安全パトロールがあり、杉光教育長はじめ甲木文化財保護課長補佐、南里九州歴史資料館副館長一行による発掘作業に当たっての安全点検が行われた。ようやく、２カ月後には調査区全域の枯れ枝撤去がほぼ終了し、６月21日に発掘前の遺跡全景空中写真撮影を行った。

その間、ネクスコ西日本中津工事事務所との協議で、丘陵北半部の調査を急いで欲しいとの要請があり、方形区画がある丘陵南半部よりも北半部の調査を先行させることにした。この丘陵北半部は先般の試掘調査では明確な遺構がなく、トレンチによる調査で対応することにした。

６月末から丘陵北半部の発掘に着手し、頂部および東西斜面に８本のトレンチを設定した。各トレンチでは表土下10～20㎝の赤褐色粘質土地山面にて土坑や溝などを検出したが、出土品もほとんどなく、遺構の時期や性格については不明であった。ただ、包含層から黒曜石製石鏃や剥片などが数点出土し、縄文時代の遺構の存在が予想された。これらトレンチ調査による丘陵北半部の調査が終了したのは９月末で、10月11日には完掘後の空中写真撮影を行った。

一方、後回しとした方形区画域の調査に着手したのは９月中旬からである。区画内は中世山城跡の可能性も残されているので全面発掘とし、事前のトレンチ調査により、上下２層に遺構面が存在することが確認された。ただ、区画内には檜切株が多く、重機による表土剥ぎと併せて遺構面を痛めないよう、抜根作業を慎重に行った。



第 26 図　中村西峰尾遺跡調査範囲とトレンチ位置図（1/2,500）

11 月末には方形区画内の表土剥ぎが終了し、上層面では土坑・柵列や須恵器散布地、その他多くの落ち込み遺構などが検出され、縄文土器片や黒曜石剥片なども出土した。ただ、これまでの進捗具合や下層面の調査は未着手という状況を考えると、年度内の調査終了は見込めず、２月のネクスコ中津工事事務所との協議で、調査期間を次年度７月頃まで延期したい旨の要望を行った。その様な状況のもと、上層面の調査は続行し、初年度の調査は平成 24 年３月１日でいったん終了した。

平成 24 年度の調査は４月 10 日から再開した。４月末には上層面の掘り下げが終わり、遺構の実測を経て、５月 17 日には全景の空中写真撮影を行い、上層面の調査は終了した。その間、方形区画の三方を囲繞した石垣の写真測量を行うための清掃を断続的に行い、５月９・10 日には石垣写真撮影を実施し、石垣の平面・立面図の作成業務を委託した。

石垣撮影終了後の５月中旬からは､重機を再投入して石垣の撤去と上層遺構面の掘削を開始した。下層面で出土した遺構は上層に比べて少なく、土坑や落とし穴、落ち込みなどが検出され、少量の押型文土器片や黒曜石剥片なども出土した。

ところで、梅雨末期の７月 13 日夜から 14 日早朝にかけて九州北部地方で発生した記録的な豪雨は、福岡県南部八女市矢部川流域で河川の氾濫や土砂災害を招き、甚大な被害を及ぼした。当豊前地方でも多量の降雨があり、丘陵下への土砂流出が心配されたが、事前に重機従事者からアドバイスを受けて対策を取っていたため、大事に至らなかった。感謝したい。

その様な中、７月末までには下層面の発掘を終え、実測作業終了後の８月 19 日には空中写真撮影による全景撮影を実施し、翌 20 日には器材撤収を行って現場作業はすべて終了した。

その後、８月 31 日には山頂部の線刻石を豊前市埋蔵文化財センターにて保管・展示するため、重機を使って搬出作業を行い、傷つけることなく無事センターに展示できた（110 ページ写真）。

ここに、平成 23 年４月以来、ほぼ１年４ヶ月をかけて実施してきた中村西峰尾遺跡の発掘調査は、すべて完了した。

３　遺構と遺物

（1）検出遺構

発掘調査の概要　発掘調査は、丘陵北半部はトレンチによる調査を、南半部の方形区画域は全面調査を実施した。全体の調査面積は約 15,000㎡で、そのうち方形区画域の面積は約 5,300㎡である。先行した北半部の調査では８本のトレンチを頂部および両斜面に設定したが、明確な遺構の出土はなかった。出土遺物として数点の黒曜石製石鏃や剥片などがある。

方形区画の調査概要　方形区画域の調査では上下２層に遺構面があることが判明し、まず方形区画内の上層の調査を実施した。上層面では全域にて土坑やピット、落ち込み遺構などを多数検出したが、当初予想していた中世山城としての掘立柱建物や関連施設などは、何ら発見されなかった。土坑・落ち込みの多くは性格不明だが、明らかなのは旧競馬場の施設の一部であろう柵列や、８世紀前後の須恵器散布遺構、そして縄文時代早期の落とし穴の土坑２基などである。出土遺物として、近世～近代の陶磁器や縄文時代押型文土器と黒曜石石鏃や剥片・砕片があった。押型文土器や石鏃については、1/100 縮尺で平板に記録して取り上げ、下層でも同じ作業を行った。

下層面の調査は基壇石垣を撤去し、方形区画外まで調査範囲を拡げた。下層は基盤層の赤褐色粘質土地山面まで掘り下げ、北半および東半域にて落ち込み遺構やピットとともに円・方形の土坑を７基発見した。これら土坑は上層土坑同様、落とし穴と思われる。落とし穴からの遺物の出土はなく、周辺からは縄文時代早期押型文土器や黒曜石石鏃などが出土した。

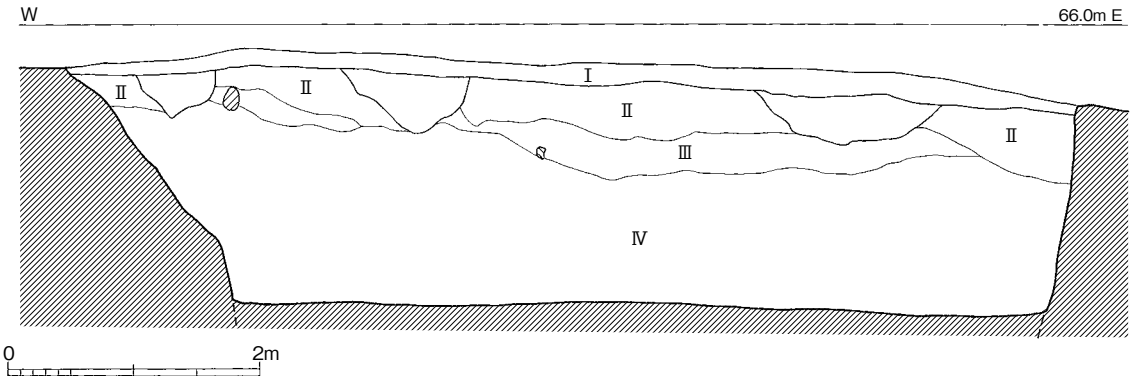
線刻石の発見　一方、発掘作業に先行する測量調査中、思いがけなく丘陵尾根にて５個の線刻石を発見した。18㎝の小品から大は１ｍ超の安山岩自然石に、船や格子文などを細く鋭い線で描いたものである。ただ、これら線刻石は原位置ではなく、設置状況が不明なのが残念であった。

遺跡の性格　最後に、方形区画とした遺構の調査では、中世山城の痕跡を示す遺構や遺物の出土はなかった。しかし、調査中に競馬場跡という話を聞き及び、また、二長辺を持つ平面楕円形プランを「馬場」だとすると、方形区画遺構は競馬場跡であると判断された。方形区画遺構の主要な施設である円周土塁や空堀は調査区外のため未発掘で、将来の調査が期待される。

調査に伴う業務委託　なお、方形区画遺構の下段を囲う石垣の平面、立面図の作成を（株）日航コンサルタントへ、また上下遺構面の土坑等から出土した炭化物・獣骨をＣ 14 年代測定のため、古環境研究所へ分析の業務委託を行った。

（2）基本土層（第 27 図、図版 16-3）

中村西峰尾遺跡が立地する丘陵は、基本的には阿蘇火山の噴火堆積土であり、ネクスコ西日本によるボーリング調査結果では、表土から－ 50㎝は礫混入茶～赤褐色砂質土、－ 80㎝までは砂質粘性土となり、その下部は 11 ｍ付近まで赤褐～茶褐色をした強風化凝灰角礫岩（砂質粘土）層で腐り礫が混入し、一部は粘土化しているという。



第 27 図　基本土層図（1/60）

丘陵頂部の方形区画内ではプライマリーな層が残っていないため、頂部をやや東へ下った標高 66 m付近にトレンチを設定し基本土層の観察を行った（第 27 図、図版 16）。それによると、地表面から 10 ～ 15cmまでは表土層（Ⅰ層）、その下に 20 ～ 40cmの厚さで黄茶色～暗茶褐色土の堆積土があり（Ⅱ層）、この層に暗茶褐色や暗茶灰色の埋土が詰まる遺構が掘り込まれていた。Ⅱ層の下には暗いピンク色をした小火山礫含暗赤褐色土粘質土層があり、これが地山面となる（Ⅲ層）。さらに、その下のⅢ層下部は明るいピンク色をした火山礫含赤白色火山灰土を含む基盤層であった（Ⅳ層）。

方形区画域の調査では、方形区画遺構北半の整地層面とⅡ層上面を上層遺構面、その下層のⅢ層地山面を下層遺構面とした。

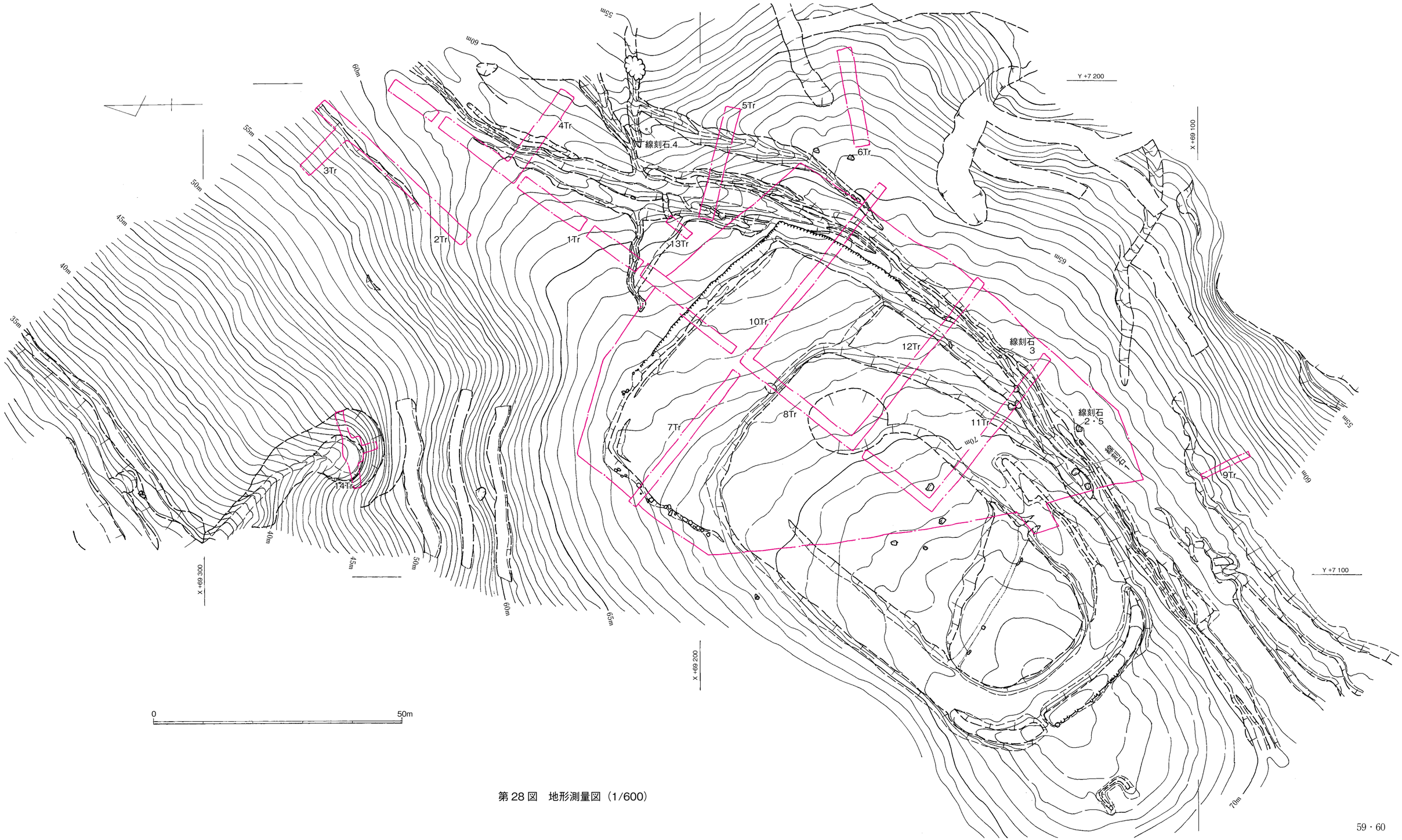
（3）方形区画遺構の測量調査

調査の概要　丘陵頂部の檜伐採が終了した段階で平板による 1/100 の地形測量を実施した。ここではその成果と地表観察をもとに、発掘前の方形区画遺構の状況を報告する。なお、空堀・土塁がある方形区画南半の 1/3 は道路予定地外のため、発掘はしなかった。また、ネクスコ西日本から受領した丈量図と地形測量図を照合すると、方形区画の石垣列と筆界がほぼ一致し、方形区画遺構はほぼ豊前市域に含まれることが分かった。方形区画とした遺構は、北半三方を石垣で囲繞して内部を三段に造成し、南半は円周状の土塁と空堀で区切った平面長方形の大規模な遺構である（第 29 図）。

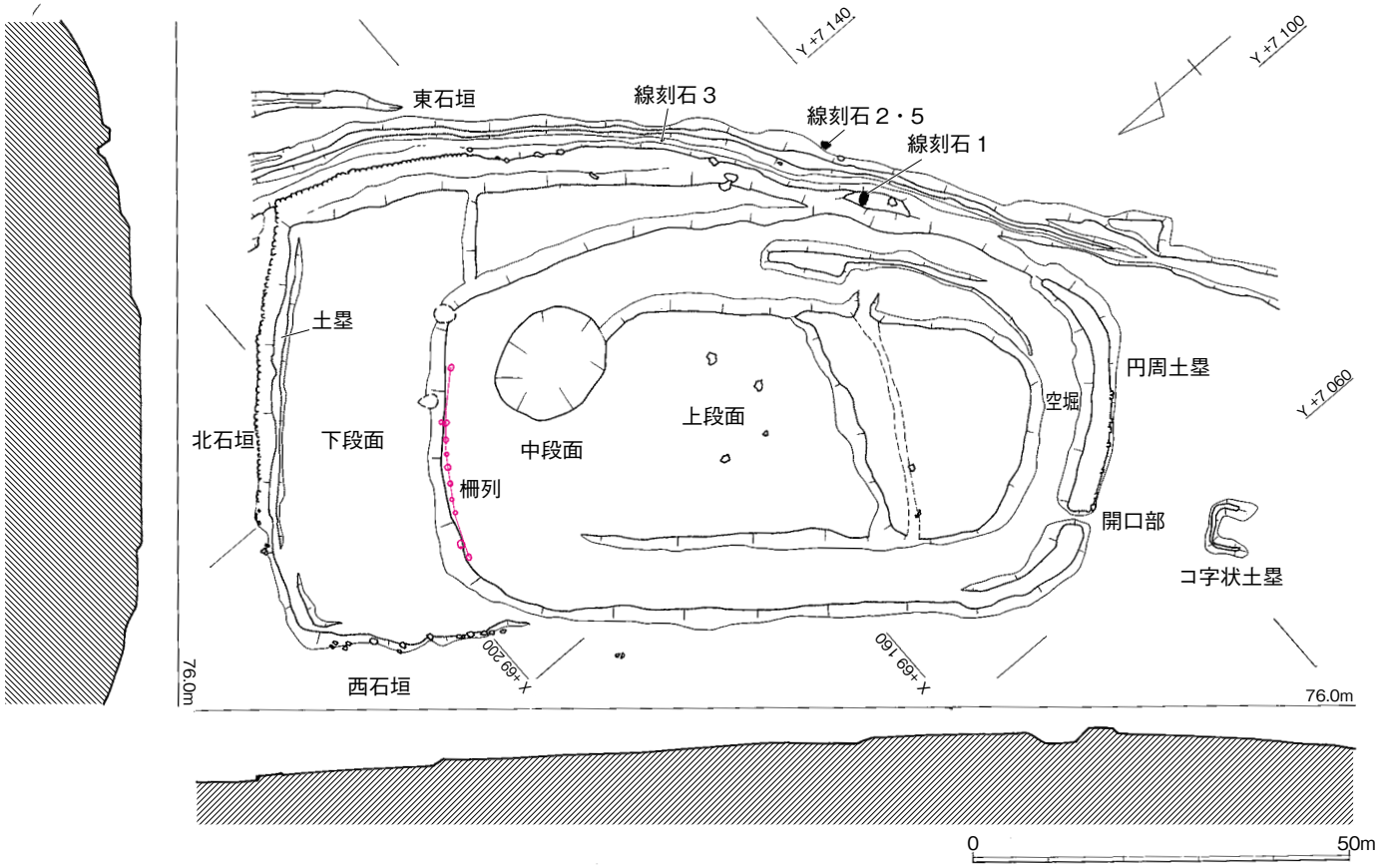
以下、方形区画遺構を構成する各遺構について述べる。

石垣（第 30 図、図版 17･18）　方形区画遺構下段の北・東・西三方を囲む石垣の規模は、周防灘に面する北石垣は 47.4 m、豊前市側の東石垣 26.9 m、築上町側の西石垣 32.5 mの長さで、やや外へ湾曲しながらも直線的に築かれる。北石垣がもっとも良く残り、石垣上面が揃っていることや前面への転石も少ないことから崩壊は最小限だと思われる。石垣の積みは北が最も高く４段 80cm、東は３段 60cm、西も３段 60cmである。また、奥行きは北石垣が最大で、80cmを測る。東石垣は等高線沿いに築かれ傾斜がきついためか、損壊が目立つ。西石垣は自然石露頭を利用した個所もある。

石垣の石材は安山岩自然石がほとんどで、とくに加工したものは見当たらない。河原石は丘陵東下を流れる角田川産であろう。今でも川底には安山岩が累々と転がっている。使われる石材は 20 cm～１m大まであり、北石垣は 30 ～ 50cm前後、東石垣では 60cm大のものが多い。石垣の構築は、礫混赤褐色粘質土の地山を 50 ～ 60cmの深さに段切りし、そこに整地層の土留め基壇として安山岩を野面積みしたものである。根石・裏込石はほとんどない。また、北・東石垣はおよそ５～６m間隔に大石を縦あるいは横位に据えて要石とし、連続する石垣を強固なものとしている。



第 28 図　地形測量図（1/600）



第 29 図　方形区画遺構平面図（1/1,000）

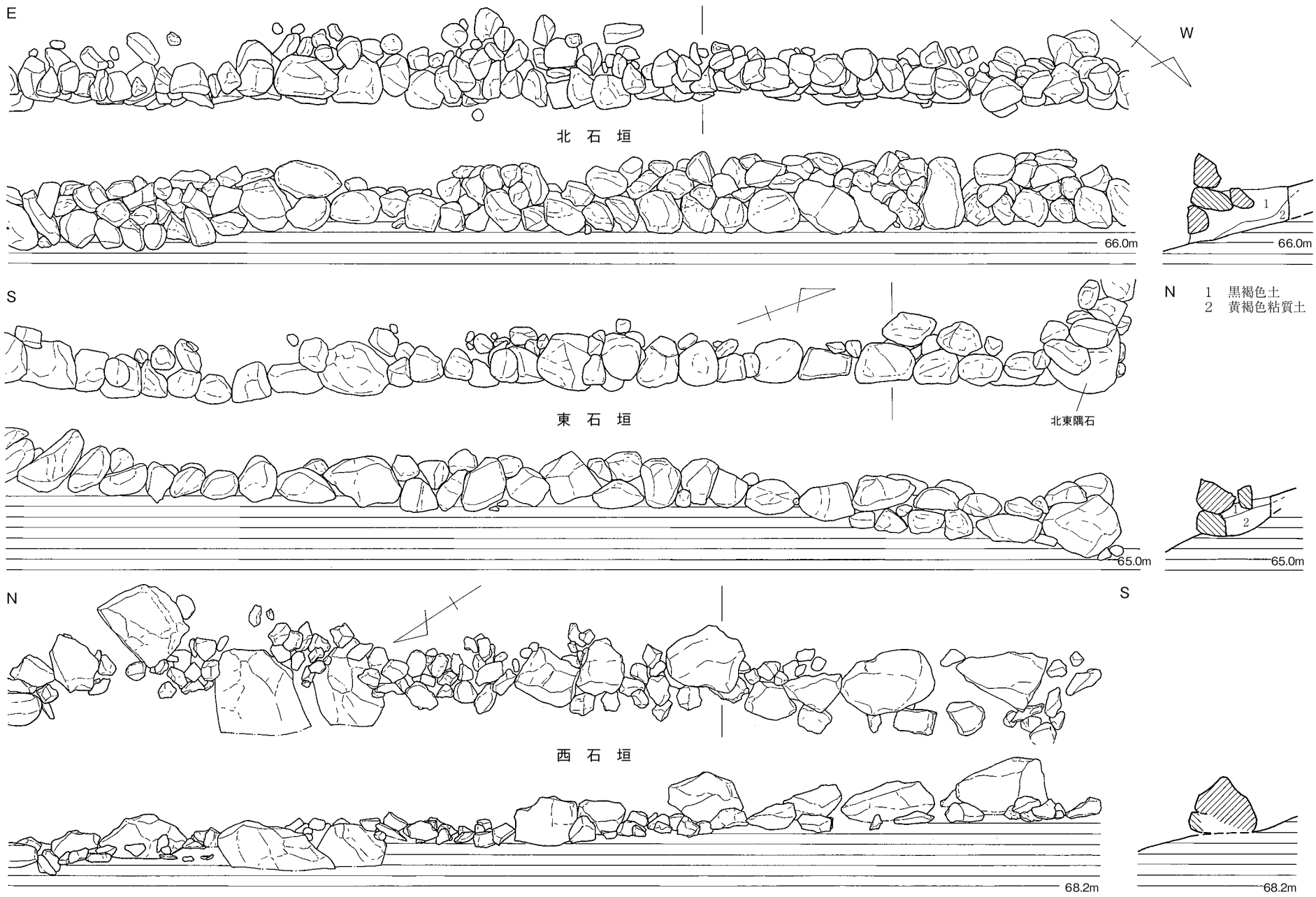
一方、北石垣基底部両端の高低差は 2.5 m、東石垣では 1.5 mあり、北辺と東辺の交点となる北東角基底部付近が標高 65 mと最も低い。この個所に築かれる北東隅石は 80 × 60㎝の大石を基礎に据え、強固な積みである。しかも北・東石垣の石は、ほとんどこの隅石側に寝かせて据えていることから、この北東隅石を起点として南あるいは西に向かって順次石垣を築いたと思われる（図版 18 － 1）。北辺と西辺の北西角隅については残っておらず、不明である。

なお、北石垣西端の石垣には櫨が巻きつき、樹齢は 40 ～ 50 年と推定されることから、石垣の築造はそれ以前に遡るのは確実である。また、石垣石材に線刻石の使用は確認されず、東斜面では、石を割る「矢穴」を残した安山岩転石が数個見られた。

平坦面（第 29 図、図版 13）　北の石垣と南の土塁に区切られた区画内北半は、上中下 3 段の平坦面からなる。

下段平坦面の規模は北石垣から南円周土塁までの南北長 114 m、幅は東西石垣間で 65 mを測り、平面長方形を呈する面積は約 6,300㎡である。また、北石垣から北西角石垣背後に沿って、幅 1 m、高さ 10 ～ 20㎝の低い土塁が約 50 m長で東西方向に伸びている。

中段面は北石垣から南へ 23 mの地点で 60㎝立ちあがり、隅丸方形の平坦面をつくる。南北 90 m、東西幅 55 mを測り、東辺は円周土塁外面へ連続して続き、西辺は溝を兼ねた里道で途切れる。上段平坦面は南北 62 m、東西幅 32 mを測る。北半は半径 17 m前後の周縁をつくるが明確な段はない。南半は半径 15 m前後の円弧を描く空堀で区切られ、全体として隅丸長方形となる。また、東辺南半には中段へと下る幅２mのスロープが１カ所あり、現在里道として利用されている。これら上中下 3 面の平坦面はほとんど起伏がなく、全体としては北へ傾斜している。また、中段東寄りに



第 30 図　方形区画石垣（部分）実測図（1/50）

径 16 mの楕円形の浅い窪みが見られた。なお､区画内では安山岩が露頭し､とくに上面で多かった。

空堀と円周土塁（第 28・29 図、図版 19）　上段平坦面が続く南の丘陵基部側に円周状の土塁と空堀が造られ、北からの平坦面が区切られている。平面 U 字を呈する円周状の土塁は南側に膨らみ、総延長は 56 mを測る。土塁上面内端での半径は約 25 mの円周を描く。土塁の規模は、高さ 1.5 m、上面幅３m、基底部幅５mで断面は逆台形を呈し、外面裾には盛土基礎に据えられた石がところどころに散見される。土塁西寄りに基底部に石を据えた幅 1.8 mの開口部があり（図版 19 － 2)、この個所上面は標高 72.9 mと方形区画内では最も高い位置にある。土塁両端は丘陵斜面まで延びることなく頂部端で止まっており、南外部からの侵入を防ぐ用はなしてしてない。

さらに、この円周土塁が造られることにより、平坦面との間には空堀状の堀が形成される。空堀の半径は堀底面内端でおよそ 16 mを測る。堀の幅は上面約８m、底面４～６m、深さ 1.5 mの断面 U 字状で、底面は平坦だが未調査なので深さはわからない。空堀の底面は中央部が最も高く標高 71.4 mで、底両端は下段平坦面東西辺へと段差なく続いている。一方、空堀と接する平坦面縁辺部には何らの施設も見られない。

コ字状土塁　円周土塁開口部から南 16 mの標高 72 mの位置に平面コ字状の小規模土塁が存在する。土塁規模は北辺５m、東辺３m、西辺４mで南辺はなく開口し、上面幅 0.5 m、下端幅 1.5 ～２m、高さ 50 ～ 60㎝と小型で低い土塁である。土塁内部は４畳弱の広さで、底面は平坦である。この土塁は円周土塁開口部の正面に対峙する位置に配されていて、方形区画遺構と一体のものであろう。

（４）北半部の調査

①調査の概要

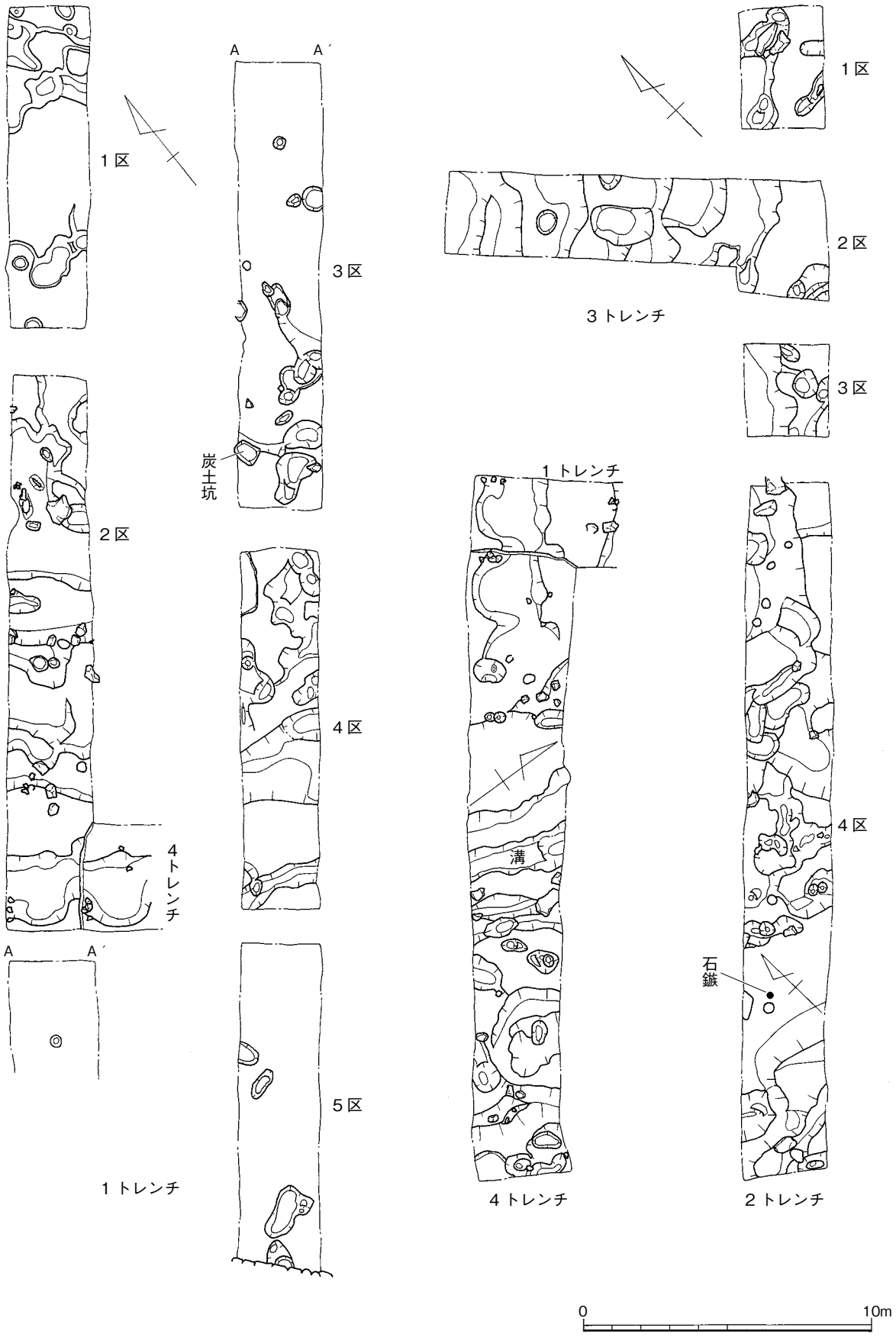
高速道路工事との絡みで、丘陵先端寄りの北半部の調査を先行させた。この個所については先般実施した試掘調査では明確な遺構等が検出されなかったので、トレンチによる調査で対応することにした。尾根および東西斜面に第１～６、13・14 の８本のトレンチを設定した。また、北半部ではないが、丘陵南半東斜面に第９トレンチ１本を設定したので、この項で報告する。

②各トレンチの調査（第 28・31・32 図、図版 15・16）

第１トレンチ　第１トレンチは尾根頂部で、丘陵主軸の南北方向に全長 75 m、幅３mで設定した。トレンチ北端の標高は 61 m、南端は 67 mである。トレンチ土層は、薄い表土下に礫が混じる明茶褐色土があり、浅い所では表土から 20㎝下で地山の火山礫混暗赤褐色土となる。トレンチ２区では暗褐色土の詰まった幅２m、深さ 40㎝の溝を数条検出したが、東西に延びるかは不明で、遺物の出土もない。

また、トレンチ３区南端では長 0.94 m、幅 0.6 m、深さ 20㎝の炭混入土坑１基を検出したが、周壁は焼けておらず伴出遺物もなかった。また、他にも不整形な土坑や落込みなどを検出したが、出土品もなく性格は不明である。なお、出土遺物としては、表土層から須恵器坏小片、２層から白磁小皿底部片などがある。

第２トレンチ　第２トレンチは第１トレンチからやや西に下った標高 59 ～ 60 mの斜面沿いに 40 m × ３mで設定した。ここは石面を西に向け、飛び石状に数個の石が散見する場所で、山城の一部を構成する遺構ではないかと考え設定した。表土直下 20㎝で礫混赤褐色粘質土の地山面となり、飛び石は自然石頭が数個露出したもので、人工的な石垣ではなかった。また、地山の再堆積土が混



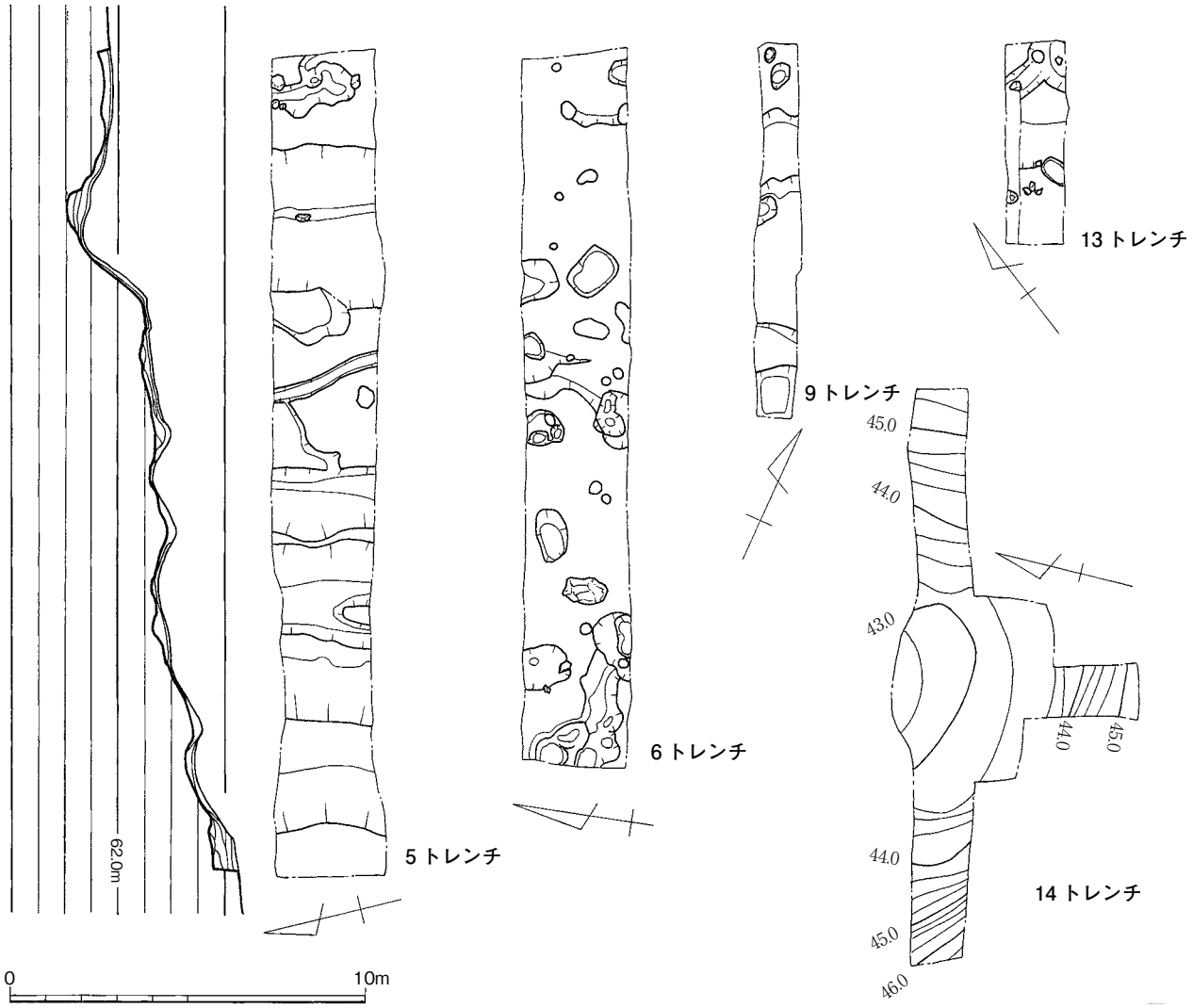
第31図　トレンチ実測図その①（1/200）

じった落ち込みや不整形土坑を多数検出したが、これらからの遺物の出土はなかった。地山面直上で、姫島産の黒曜石石鏃１点や黒曜石剥片が数点出土した。

第３トレンチ　第３トレンチは、第２トレンチ北端西壁に直交させて斜面下位側へ設定した。長さ 10 m、幅３mで標高は 55 m～ 59 mの間にある。表土直下 15cmで礫混赤褐色粘質土の地山となる。トレンチ中央では幅７m、深さ 40cmにわたって撹乱層があり、その底面で長さ 2.2 m･幅 1.4 m、深さ 60cmの暗茶褐色土埋土の長方形土坑を検出した。遺物の出土もなく遺構の性格は不明である。他からの遺物の出土もない。

第４トレンチ　第４トレンチは、標高 60 ～ 63 mの間で、東斜面沿いに走る里道を兼ねた幅３mの溝断面を観察するため、溝と直交方向に８m × ３mの長さで設定した。表土下－ 20cmで礫混赤褐色粘質土の地山となり、現行の溝は 20cmほど地山面に窪み人工的な掘削と見られるが、そう古い溝ではないと判断した。また、トレンチ中央にて丘陵方向に延びる幅 2.5 m、深さ 30cmで暗褐色土埋土の溝を検出したが遺物の出土はなかった。表土層から近世染付碗胴部片が出土した。

第５トレンチ　第５トレンチは、東斜面の標高 62 m～ 64 mにて丘陵方向に伸びる３本の溝の観察のため設けたトレンチで、溝と直交方向に 23 m × ３mの長さで設定した。トレンチ内に目立った遺構はないが、トレンチ断面で観察される溝の構造は、下位側の溝は幅４m、深さ 1.5 mと深く、現行溝底からさらに 50cmほど埋没して、溝底はまるで切り通しのようであった。なお、これら３



第 32 図　トレンチ実測図その②（1/200）

本の溝は、丘陵南の方形区画付近で１本の溝に収斂し、さらに尾根基部側へと延びている。これら溝底からの出土遺物はなかったが、表土層にて近代の染付や青磁、白磁片、灰釉・黒釉陶器片、それに黒曜石剥片などが出土した。

第６トレンチ　第６トレンチは標高 61 m～ 64 m付近にて東へ張り出す緩斜面に 20 m × 3 mの長さで設定した。このトレンチでは、表土となる腐植土がほとんどなく直ぐに礫混茶褐色土の地山層であった。トレンチ南半では長さ 1.4 m、幅 1.1 m、深さ 30㎝の隅丸方形土坑が２基、北端では姫島産黒曜石剥片１点が出土した不整形土坑を１基検出した。ただ､これら遺構の性格は分からない。

第 13 トレンチ　方形区画遺構の北石垣東半から北へ 12 mの地点に、北面が有段で広さ 180㎡ほどの平坦地が存在したので、長さ６m、幅２mの第 13 トレンチを設定した。地表下 20 ～ 30㎝で地山面となり、土坑やピットなどを検出したが、明確な遺構はなかった。瓦質土器片や近代の染付皿片などが数点出土した。

第 14 トレンチ　西斜面中腹の標高 43 ～ 47 m付近にて、斜面下方に大きく開口する長径 16 m、深さ３mの擂鉢状の大きな窪地を発見した。この窪地底面（標高 42.75 m）は常時湿地状態で、井戸など山城に関連する遺構があるのでは、と想定しトレンチを設定した。長さ 11 m × 2 mのＴ字状トレンチである。表土は腐植土が 20㎝堆積し、その下は堆積層がなく直ぐ礫混赤褐色粘質土の基盤層であった。地山面には掘込みや石組などの人工的な施設はなく、遺物の出土もなかった。観察すると、表土と地山面の間から水が滲み出る天然の湧出池であった。余談だが、調査中、湿地周辺では動物の足跡がしばしば目撃された。

第９トレンチ　北半部ではないが、丘陵南半部に設けた第９トレンチをここで報告する。東斜面南半の標高 66 m付近に陥没穴を伴う低い高まりがあったので、古墳の有無を確認するために設定した 10 m × 1 mのトレンチである。表土直下に黄褐色土の地山面があり、トレンチ北半にて褐色～赤褐色土の詰った幅 3.3 m、深さ 40㎝の落ち込みを検出したが、石材・土器等の出土もなく、古墳の墓壙ではないと判断した。

③トレンチ調査のまとめ

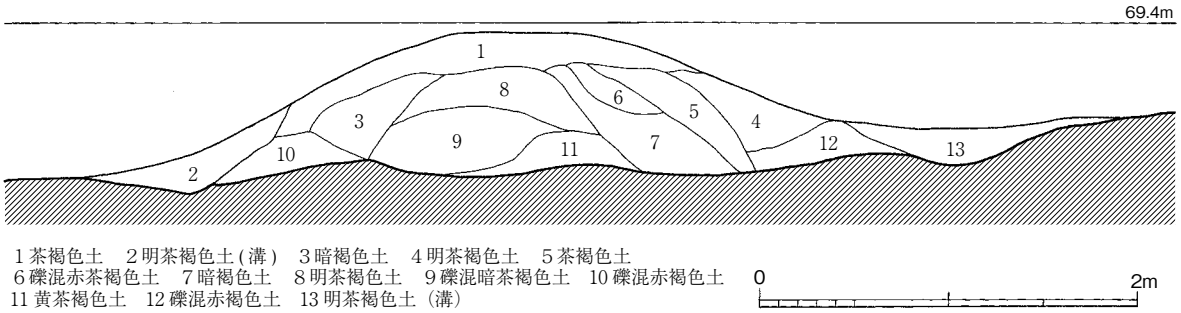
以上、丘陵北半部において１～６、13・14 トレンチの８本、南半部で９トレンチ１本を設定し調査を行ったが、性格や年代の分かる明確な遺構は確認されなかった。また、出土遺物として、若干の近世～近代の陶磁器片と黒曜石石鏃や剥片が数点出土した。

（５）外郭土塁の調査（第 33 図、図版 20）

丘陵頂部に近い東斜面沿いに､丘陵主軸の南北方向に延びる１本の土塁が存在した。この土塁は、山城跡に伴う東面を守備する土塁ではないかと考え、外郭土塁と仮称した。しかし、詳細に観察すると、土塁南半は丘陵基部南側へ延びるが北半では途中で平地へと続くため、山城を構成する土塁ではないと判断した。一方、頂部の方形区画域が競馬場跡の可能性が高くなり、山城をイメージする外郭土塁の名称は適当でないかもしれないが、報告に際してはそのまま使用することにした。

先に触れたように、外郭土塁北端は途切れるが、南半は方形区画遺構の東辺に沿ってさらに延びている。また、調査では外郭土塁から方形区画遺構内へ渡る通路や土橋などは見られなかった。

外郭土塁の構造を解明すべく、方形区画に設けた第 11・12 トレンチを東へと延長し、土塁断面の観察を行った。その結果、土塁は明らかに盛土によるもので、まず土塁の芯となる部分に粗い盛



第33図　外郭土塁土層図（1/40）

土をし、その後内外法面の整形盛土を行ったことが観察された。トレンチ内での土塁規模は上面幅1.2 m、基底部幅3.6 m、高さ0.7 mで断面は低い台形である。確かに、外郭土塁は人工的な盛土で、最近までは里道として利用されていたようだが、用途ははっきりしない。土塁の構築年代についても不明で、表土層からは近世陶磁器などが出土している。

一方、この外郭土塁については、競馬場跡についての聞き取り調査の際、南へ2kmの城山（標高約100 m）にある中世豪族仲峰屋氏の居城馬場城への通路である、と言うことであった。現在、遺跡から先は荒廃しているため実地踏査はしていない。

なお、外郭土塁下の層から炭化物が採取されたので、C14年代測定試料とした（試料番号2）。

（6）　上層の調査

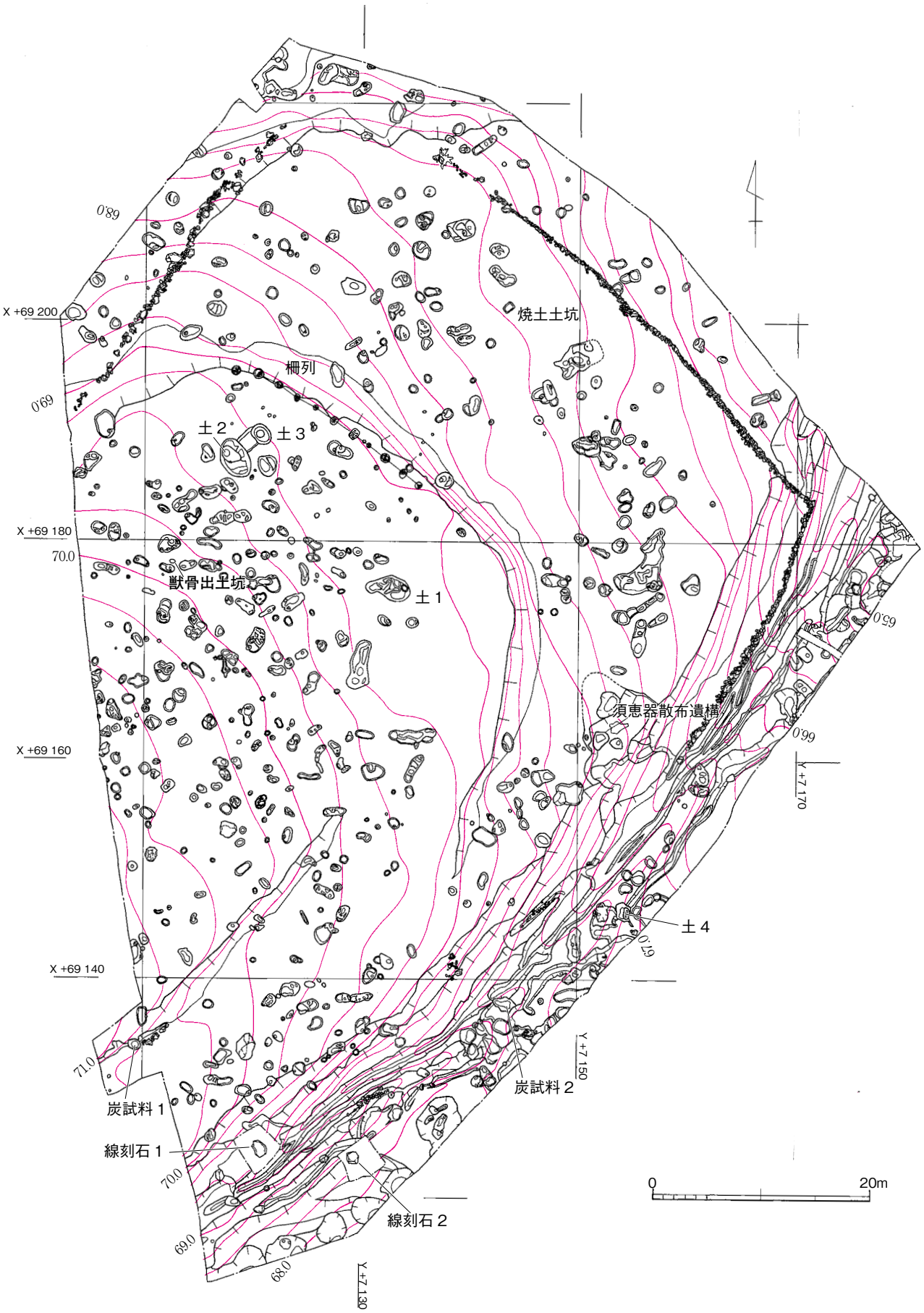
丘陵頂部で、コ字状基壇に囲まれた方形区画の形状については、先に述べたが、現地表面からの観察であった。そこで、全面調査前の前作業として、道路予定地内の方形区画北半域に7～12（9を除く）の5本のトレンチを設定し、区画内の土層と遺構面の確認を行った。

方形区画内主軸の南北方向に70 mの長さで設定した第8トレンチによる観察では、上下2層で遺構面を確認した。その後、表土除去と檜の抜根作業を重機を使って行い、上層遺構面を検出した。上層遺構面の南半は基盤層に近い赤褐色を呈する粘質土層、北半は方形の石垣を築くための暗茶褐色土を盛土した整地層であった。遺構面のおよその標高は区画内北端で67.2 m、南端で69 mを測る。また、三方を囲む石垣の外側斜面については、表土層直下に地山面があった。

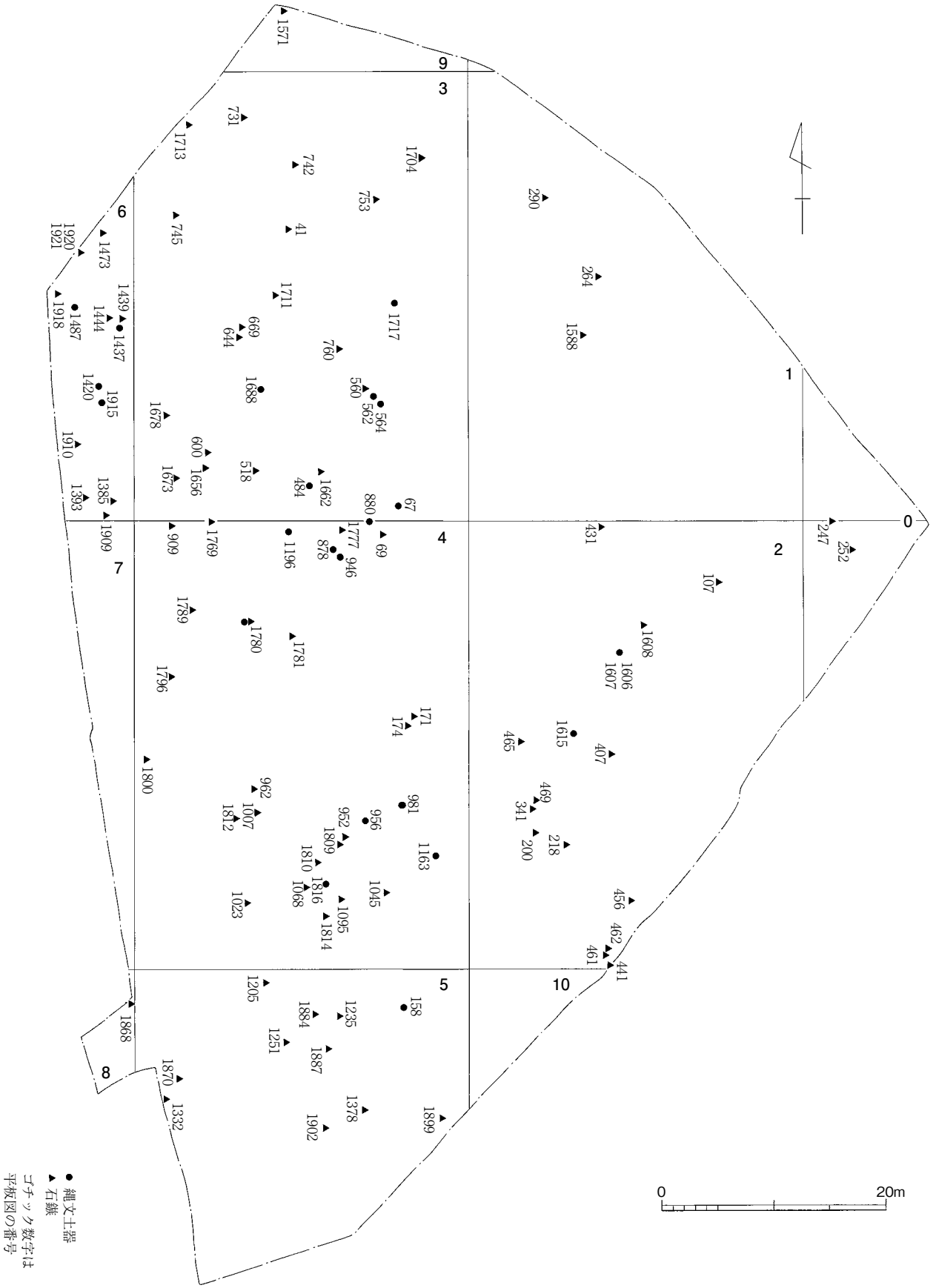
上層面で検出した遺構は、円形・長方形土坑4基、柵列1列、須恵器散布遺構1基、焼土土坑1基と、不整形土坑や落ち込みなどがあり、より多く出土した不整形土坑や底面の凹凸が激しい落ち込み遺構については、性格の判断がつかなかった。以下、明確な遺構について説明する。

1号土坑（第36図、図版21）

中段北辺中央部で検出した土坑で、上面は標高69 mにある。平面は西半が狭くなる不整楕円形で、長さ4.07 m、幅2.1 mを測る。周壁は緩く立ち上がり、底面の深さは35～55cmで凹凸が激しい。坑内上層は褐色土が堆積し、縄文土器片1、姫島系黒曜石石鏃1、黒曜石片31、サヌカイト片19、安山岩片1が出土し、途中から遺物番号を付して取り上げた。それによると、平面では中央部にて、断面では中層にかけてほとんどの遺物が出土している。坑内南西の底面近くで出土した縄文土器は、横位方向の楕円施文押型文土器である（第47図－1）。その他番号を付してない遺物として黒曜石13、サヌカイト4、チャート1の破片がある。



第 34 図　上層遺構配置図（1/500）



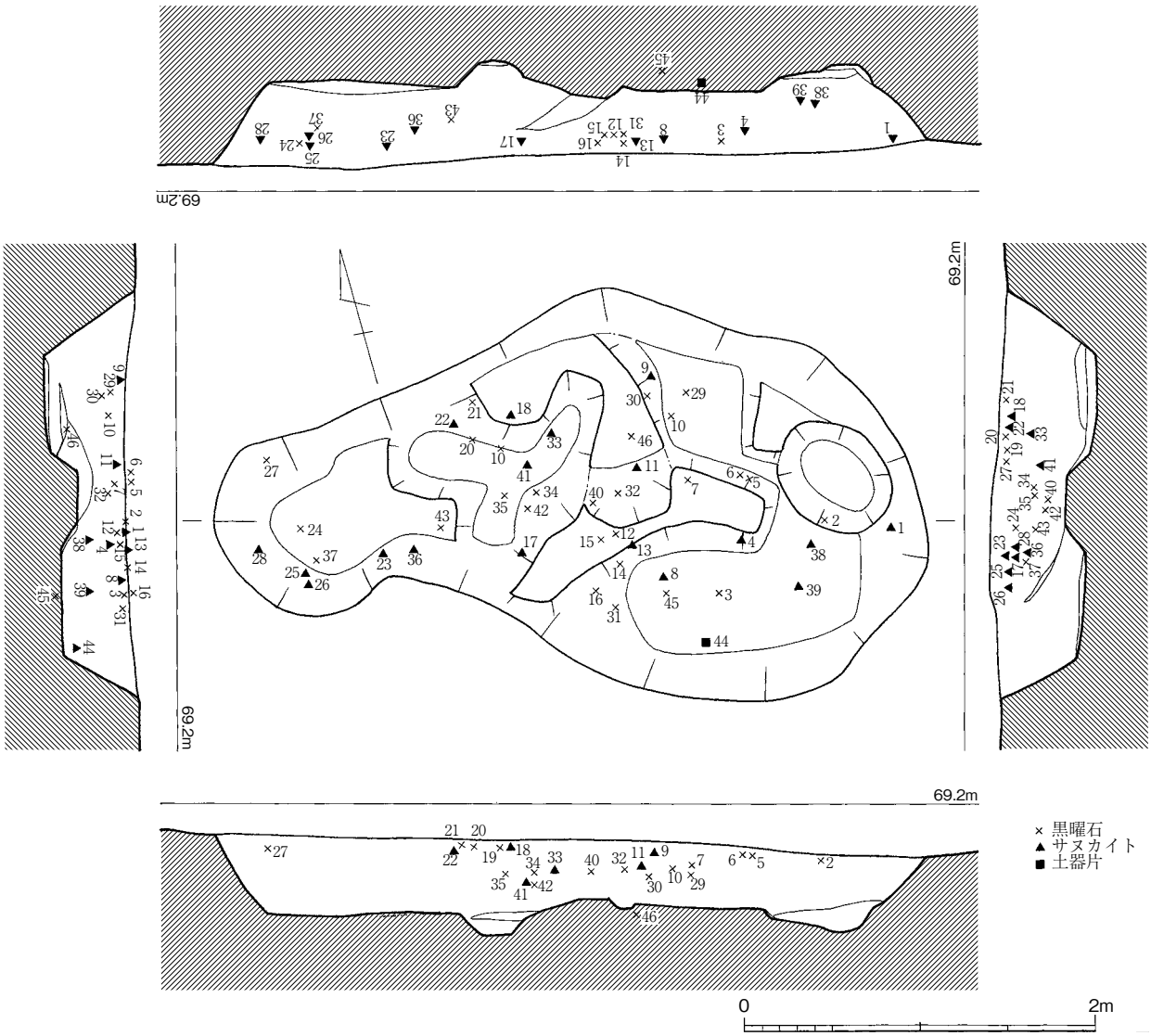
第 35 図　上層遺物出土状況（1/500）

2 号土坑（第 37 図、図版 21）

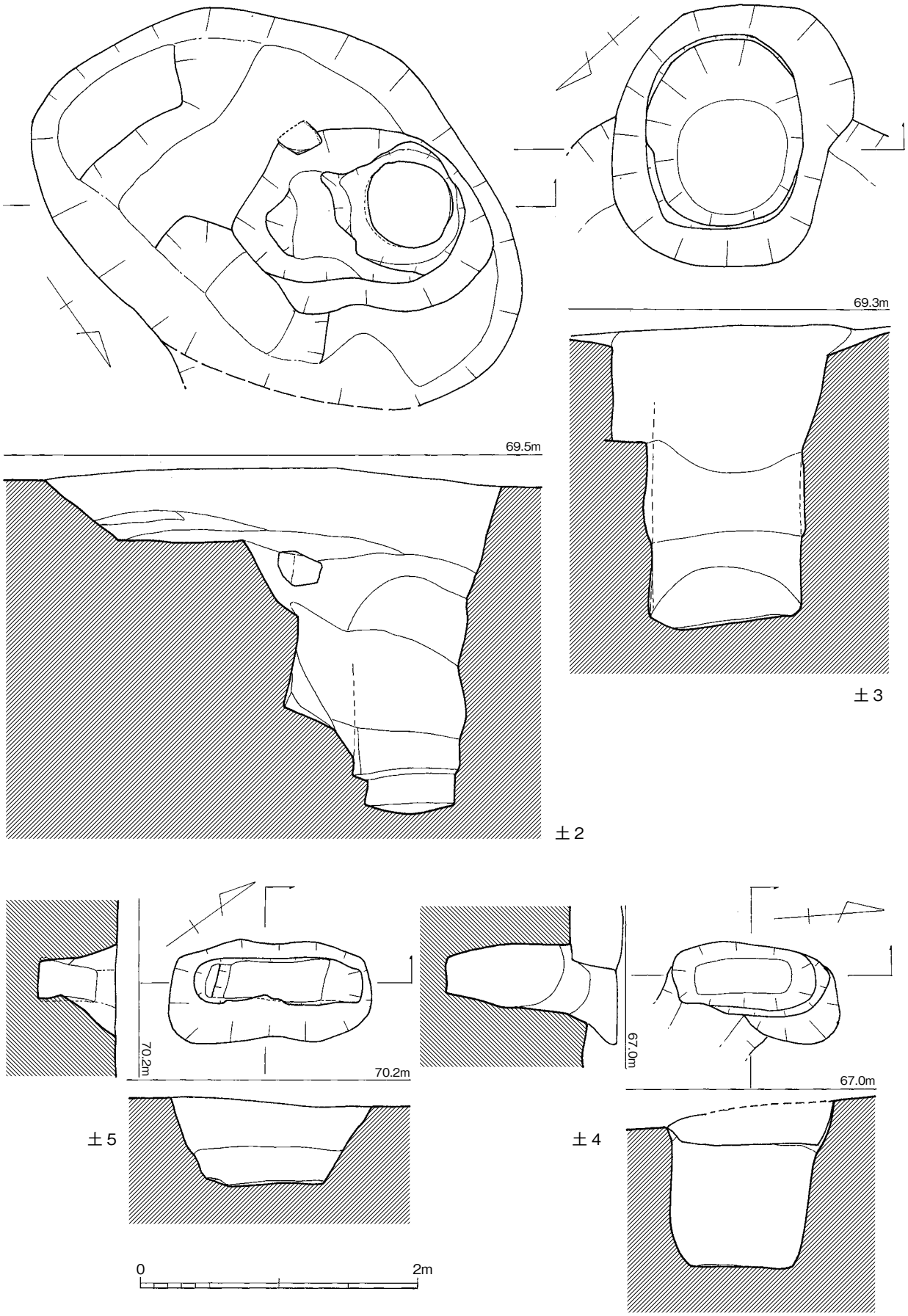
中段北辺北西寄りの標高 64.5 m付近にて検出し、調査時は 1 － p25 とした土坑である。長さ 3.5 m、幅 2.65 m、深さ 54cmの楕円形を呈す。土坑は二段掘りで南端にはステップ状の段がつく。下段の坑は上段坑の北半寄りにあるが崩落し、復元では約 0.9 mの正円形に近い。深さは 1.9m を測り、底面はやや窪むが平坦で径は 61 × 66cmの正円となる。遺構面からの深さは 2.44m と深い土坑である。周壁の西面はほとんど垂直で、東面は崩壊により抉れている。そのため、底面には地山の礫混淡黄灰粘質土が 60cm近く堆積していた。坑底面は基盤層の赤褐色粘質土層に掘り込まれている。黒曜石・サヌカイト製石鏃各 1 と破片の黒曜石 24、サヌカイト 6 が出土した。

3 号土坑（第 37 図、図版 21）

3 号土坑は、2 号土坑の北東 3 mにて検出し、上面は標高 69.2 mにある。土坑は長さ 1.9 m、幅 1.69m の楕円形、底面は 80cmの正円形で平坦である。周壁は上半が緩く開き下半は垂直で、上半部も本来は垂直であっただろう。上面からの深さは 2.16 mを測る。上層は黒色土覆土の堆積で、底面に地山と思われる淡黄灰色粘質土が 50 ～ 60cmの厚さで堆積していた。崩落土と思われる。遺物の出土はない。



第 36 図　1 号土坑実測図（1/40）



第 37 図　2～5 号土坑実測図（1/40）

4号土坑（第37図、図版22）

第12トレンチ東端で外郭土塁の下から検出された土坑で、上面は標高67 mにある。複数の遺構と重なるため上端面の規模は正確ではないが長さ約1.2m、幅0.57 m、深さ1.21 mを測り、平面形は隅丸長方形である。土坑長軸は等高線にほぼ平行する。底面は長さ0.7 m、幅0.25 mの隅丸長方形で、平坦である。切り合いのため正確さを欠くが恐らく一段掘りであろう。

周壁の上半は垂直で下半部は窄まる。底面付近では10㎝の厚さで淡黄灰色粘質土が堆積していた。坑内からは、黒曜石とサヌカイトの剥片が各1出土した。

柵列（第38図、図版22）

中段面東辺の中央部で、柱穴11個がゆるくカーブし、東西方向一列に並ぶ柵列を検出した。総延長は20 mを測り、さらに東側にある1個を加えると25 mとなる。10間の柱間は1.46 m～2.13 mとばらつきがあり、平均は1.94 mとなる。各柱穴は径40～90㎝、深さも30～50㎝と不揃いである。底面は二段掘りがほとんどで、小石の根締石を残すものが多い。

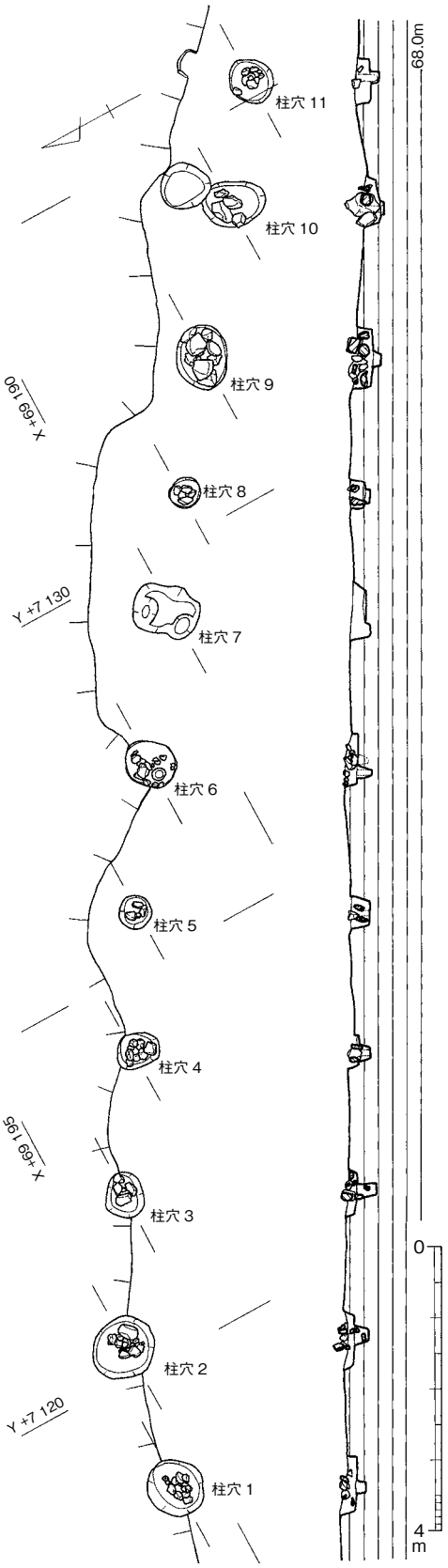
底面の穴の径などから柱の太さは10㎝前後の木柱が想定されるが、柱痕は検出されなかった。出土遺物として、柵列6・7柱穴内から黒曜石やサヌカイト砕片が数点出土した。

この柵列は地表面での観察では確認されず、上層遺構面で検出したが、柵列設置の位置は、地形測量図と照合すると中段北円周縁に当たり、方形区画遺構に伴うものと考えられる。

須恵器散布遺構（第39図、図版23）

上層下段平坦面東辺の標高67.9 m付近にて、少量の土師器を含む須恵器群が東西に拡がる散乱した状態で出土し、須恵器散布遺構とした。検出時に確認した黒褐色土面は、遺構としての掘り方は明確ではなく、長さ1.5 m、幅1 mの範囲内で平面的に出土した。底面は顕著な掘り方もなく、直ぐに地山面であった。

出土した須恵器は100点余、土師器は20点余を数え、いずれも破片で完形品はなかった。また、それぞれの破



第38図　柵列実測図（1/100）

片は個体としての纏まりがなく散らばった状態で出土し、据え置いた土器が破損したと言うよりは、投げ捨てにより飛散した状況であった。器種としては坏蓋、坏身、長頸壷などがある。

さらに、須恵器片に混じって少量の炭が出土したが、周辺が加熱を受けた痕跡もなかった。これら須恵器群は何らかの意図で廃棄されたものと推測される。

焼土土坑（第 43 図、図版 24）

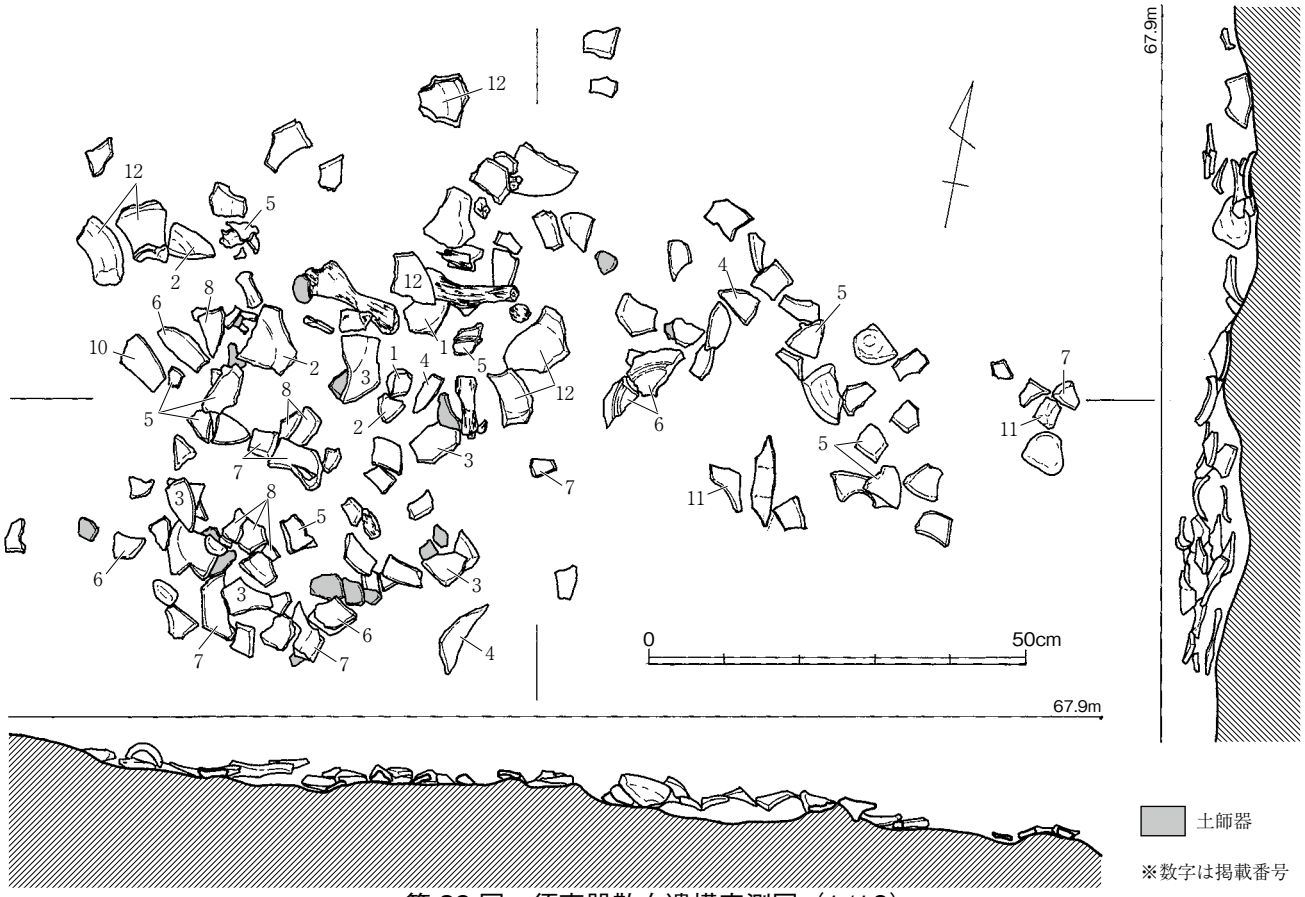
下段平坦面北石垣寄り中央にて検出した土坑で、上面は標高 66.8 mにある。平面形は隅丸方形で、長さ 1.07m、幅 0.83m、深さ 7㎝を測り、長軸は南北方向に向く。周壁は暗褐色土が貼りつき、その一部に赤く焼けた土があるのみで、周壁が焼けた状態ではなかった。底面西辺沿いに、長さ 38㎝、幅 9㎝、厚さ 3㎝、重さ 2.1kgのブロック状炭化材が出土した。他に遺物の出土はない。出土炭化材は C14 による年代測定試料として提出した（試料番号 3）。

（7）下層の調査

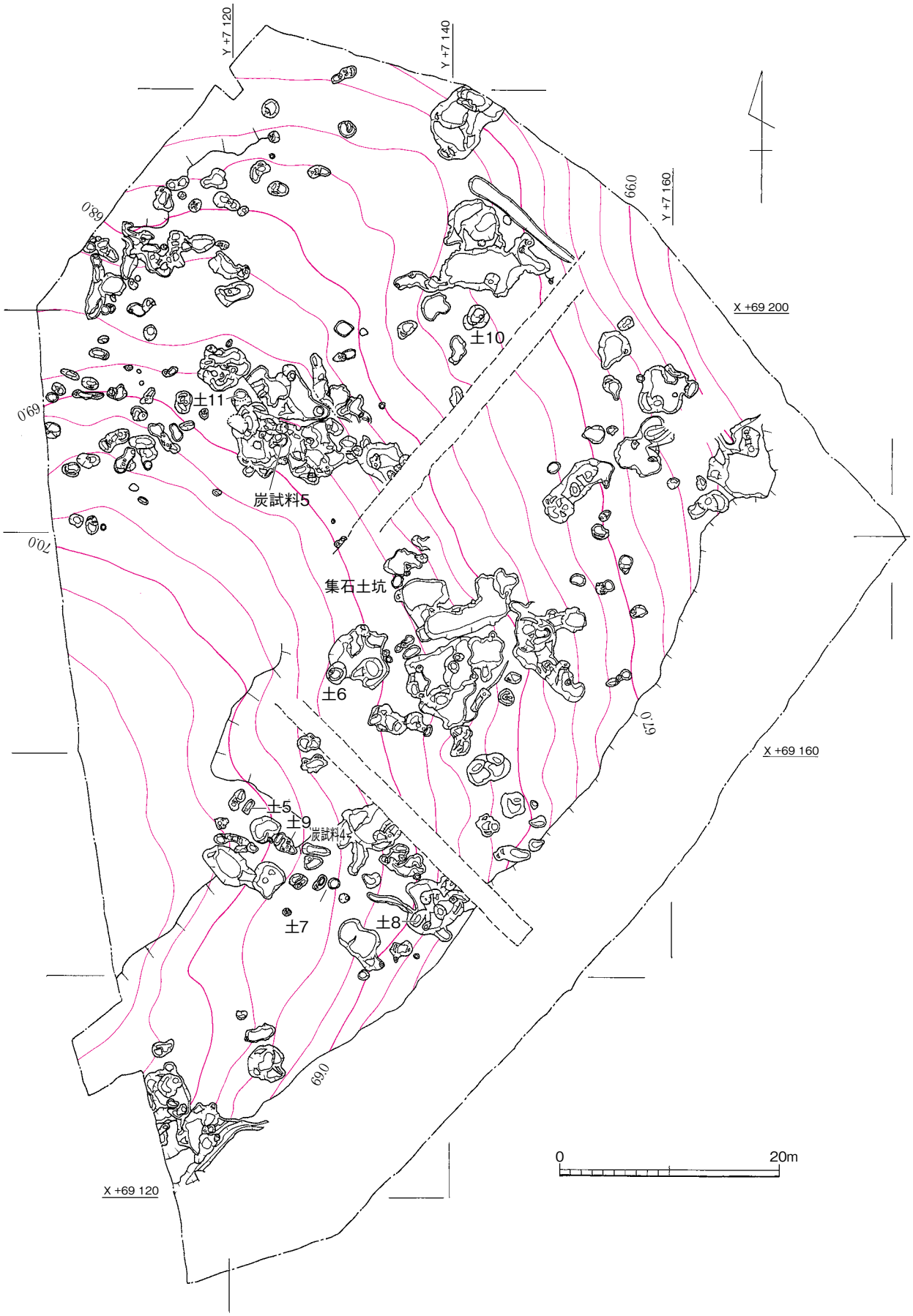
下層面は、上層整地層を掘り下げた標高 66.8 ～ 68.9 mの基盤層面にあり、南半では方形区画造成時の削平のため整地層はなかった。下層地山面は腐り礫が混入する赤褐色粘質土の基盤層で、調査区の中央にて土坑や落ち込み状遺構などが混在した状態で検出された（第 40 図、図版 25）。ここでは、落とし穴と思われる土坑 7 基と、集石土坑 1 基について述べる。

5 号土坑（第 37 図、図版 26）

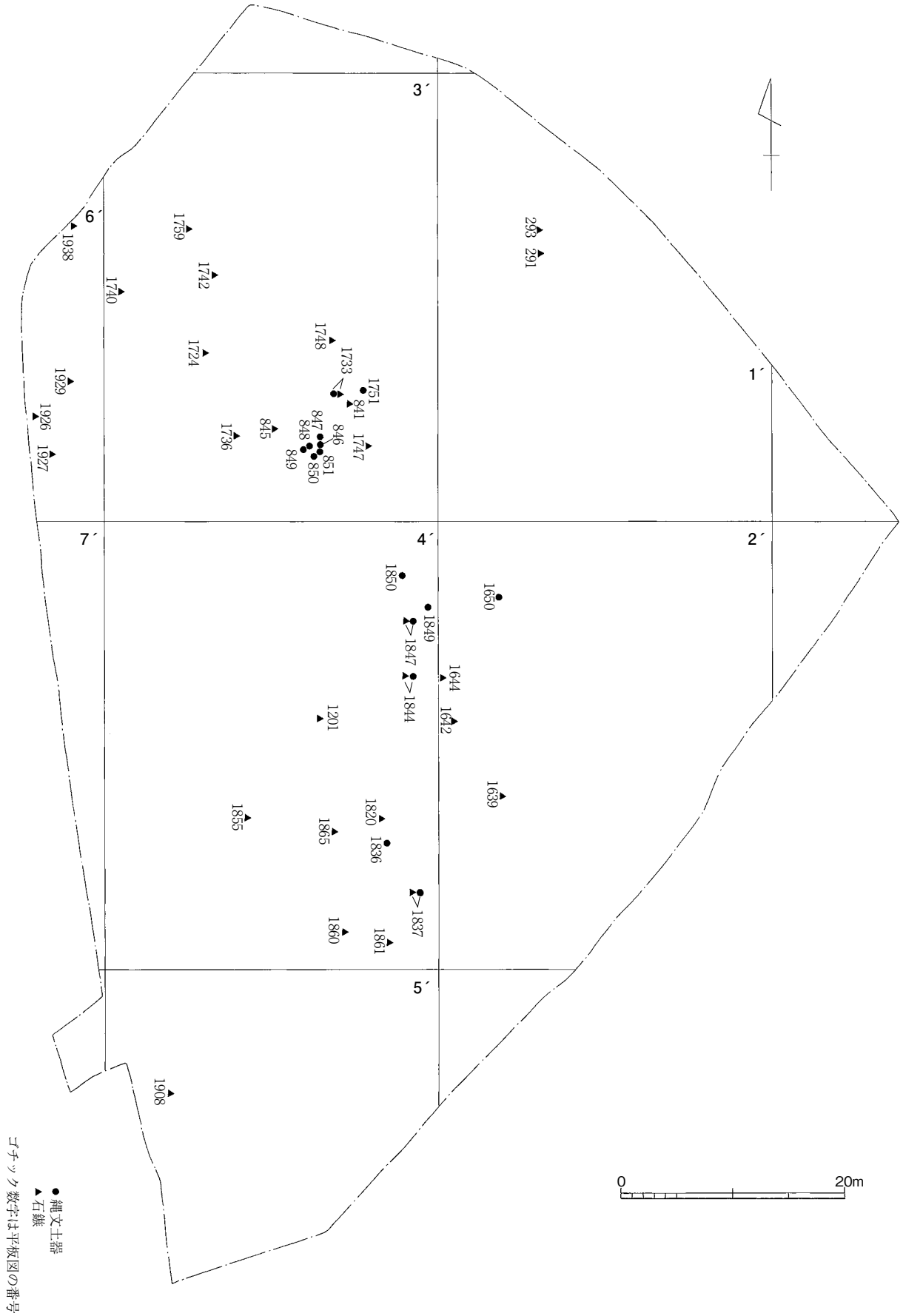
5 ～ 9 号土坑は丘陵東斜面で検出した土坑である。5 号土坑は、ほぼ等間隔で線上に並ぶ 5･9･7･



第 39 図　須恵器散布遺構実測図（1/10）



第 40 図　下層遺構配置図（1/500）



第 41 図　下層遺物出土状況（1/500）

8 号土坑の高位側にあり、標高 70 mに位置する。旧遺構番号は 4' − p63。長さ 1.43 m、幅 0.67 m、深さ 0.56 mを測り、平面は隅丸長方形をなす。長軸方向は等高線と平行となる。底面も隅丸長方形で長さ 0.69 m、幅 0.27 mを測り、南端で低い段をつくるが平坦である。周壁はほぼ直に大きく開き、長辺下半は垂直で中位に稜線が入る。上層にて黒曜石剥片 2 が出土した。

6 号土坑（第 42 図、図版 26）

5 号土坑の北東約 15 mの位置にあり、北辺が他の落ち込みと切りあった土坑で、上面の標高は 69.2 mにある。平面形は円形で長さ 1.93 m、幅 1.55 m、深さは 1.84 mである。底面は 0.7 mの正円で中央部が皿状に窪む。周壁は北壁下部に硬い岩盤があるためかそれを避けるように二段掘りとし、南壁はほぼ直に緩く立ち上がる。土坑からの遺物の出土はなく、北接する落ち込みからは黒曜石・サヌカイトの剥片が出土した。

7 号土坑（第 42 図、図版 26）

5 号土坑の南東 10 mにて検出した土坑で、上面は標高 69.6 mにある。長軸は等高線と平行する。旧遺構番号は 4' − p65。平面形は楕円に近い隅丸長方形で、長さ 1.4m、幅 0.79 m、深さ 1.11 mを測る。周壁の上半は直線状に緩く立ち上がり、北壁上部では安山岩が露頭している。下半は垂直に近くやや外湾気味である。底面は長さ 0.68 m、幅 0.43m を測り、平坦だが西長辺壁際に径・深さともに 10㎝の小ピットがある。上層から黒曜石剥片が 1 点出土した。

8 号土坑（第 42 図、図版 27）

8 号土坑は 5・9・7・8 号土坑と線状に並ぶ最低所に位置し、西端は標高 69 mにある。長軸方向は等高線と平行する。この土坑は他の落ち込み遺構底面にて検出したため上半部は欠失している。底面が長方形であることから上面を復元すると、長 1.2 m、幅 0.6 m、深さ 0.9 mの規模に復元できる。底面は長さ 0.8 m、幅 0.23m を測り平坦である。周壁長辺側は直線的に立ち上るが、短辺側はやや緩い。底面両小口には 20 × 15㎝、深さ 20㎝のピットがそれぞれ穿たれている。

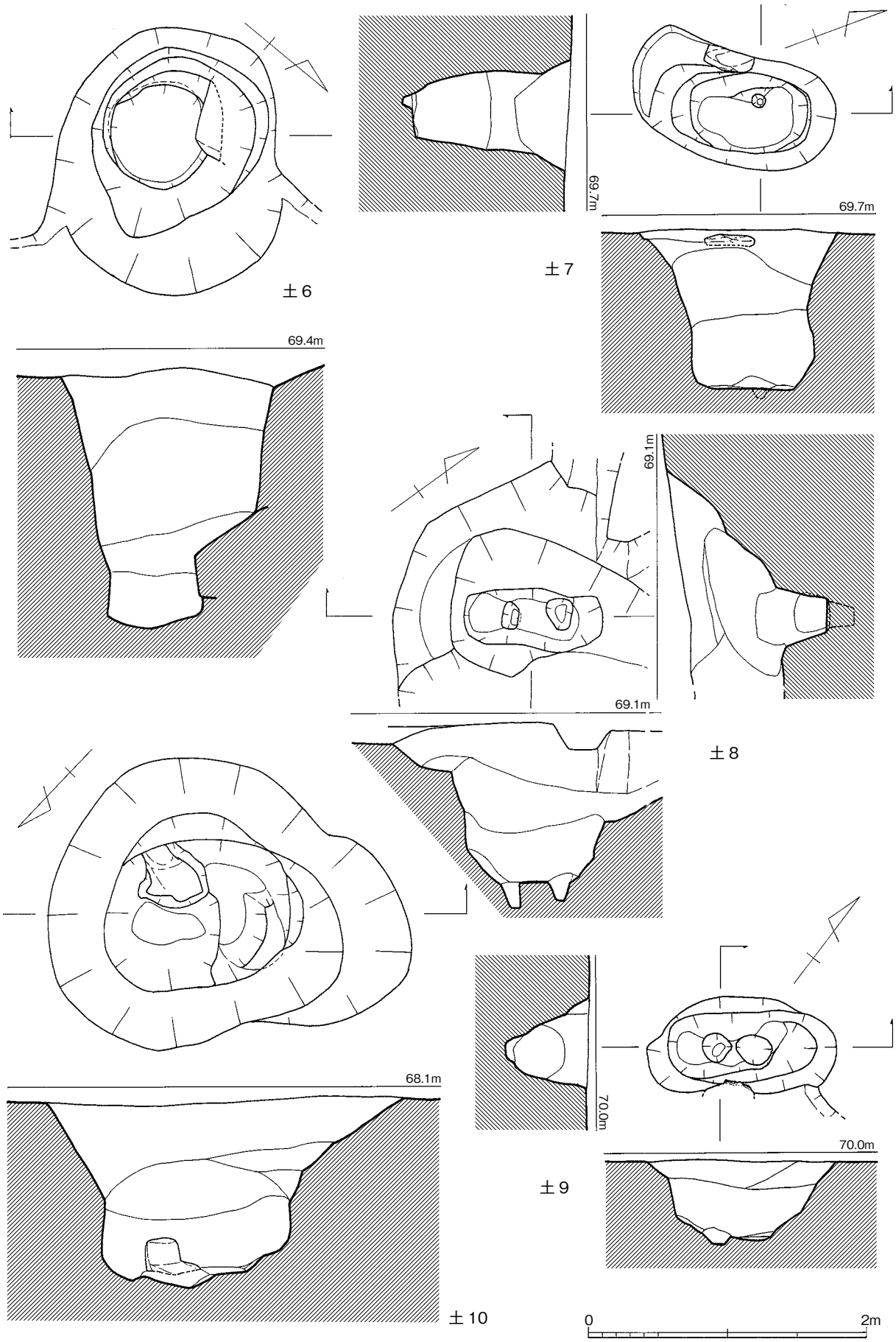
遺構検出時に 4' − p69 とした落ち込みからはほとんど接合しない土製品らしき破片とともに黒曜石・サヌカイト製石鏃各 1 と、剥片が 20 点近く出土した。

9 号土坑 （第 42 図、図版 27）

5 号土坑と 7 号土坑の中間に位置する土坑で、上面は標高 69.9 mにある。長軸方向は等高線と平行する。東長辺は他の土坑と切り合うが平面隅丸長方形で、長さ 1.37 m、幅 0.68 m、深さ 0.6m を測る。底面は不整方形で長さ 0.72 m、幅 0.20m を測り、南半寄りに径 20㎝、深さ 10㎝の浅いピットを有する。周壁の短辺は緩く、長辺は強く直に立ち上がる。下半は凝灰岩角礫基盤層まで達している。黒曜石とサヌカイト剥片が 6 点出土した。旧遺構番号は 4' − p88 である。

10 号土坑（第 42 図、図版 27）

10・11 号土坑は東斜面にある 5 ～ 9 号土坑群とは反対側の丘陵頂部にて検出した。10 号土坑は頂部北半にあり、上面は標高 67.9 mにある。平面形は楕円に近く、長さ 2.56 m、幅 2.05 m、深さ 1.64



第 42 図　6 ～ 10 号土坑実測図（1/40）

mを測る。底面は長径 0.8 mの楕円で中央がくぼむ。周壁の下半は垂直に近く、上半は緩く立ち上がる。遺物の出土はない。

11 号土坑（第 43 図、図版 28）

北半の 10 号土坑から南へ 22 m離れて検出した土坑で、上面の標高は 68.8 mである。周囲は土坑や落ち込みなどが複雑に切りあい、南辺を他の土坑に切られている。平面は楕円形を呈し、長さ 1.35 m、幅は復元で 1 m、深さは 0.76 mを測る。底面も平坦な楕円形で中央には円形 15㎝のピットが掘られ 40㎝と深い。周壁は緩く直に立ち上がり、底面下部とピットは淡黄灰色粘質土が堆積する。覆土より黒曜石・サヌカイト・安山岩剥片が 30 点近く出土した。旧遺構番号は 3' − p78。

集石土坑（第 43 図、図版 28）

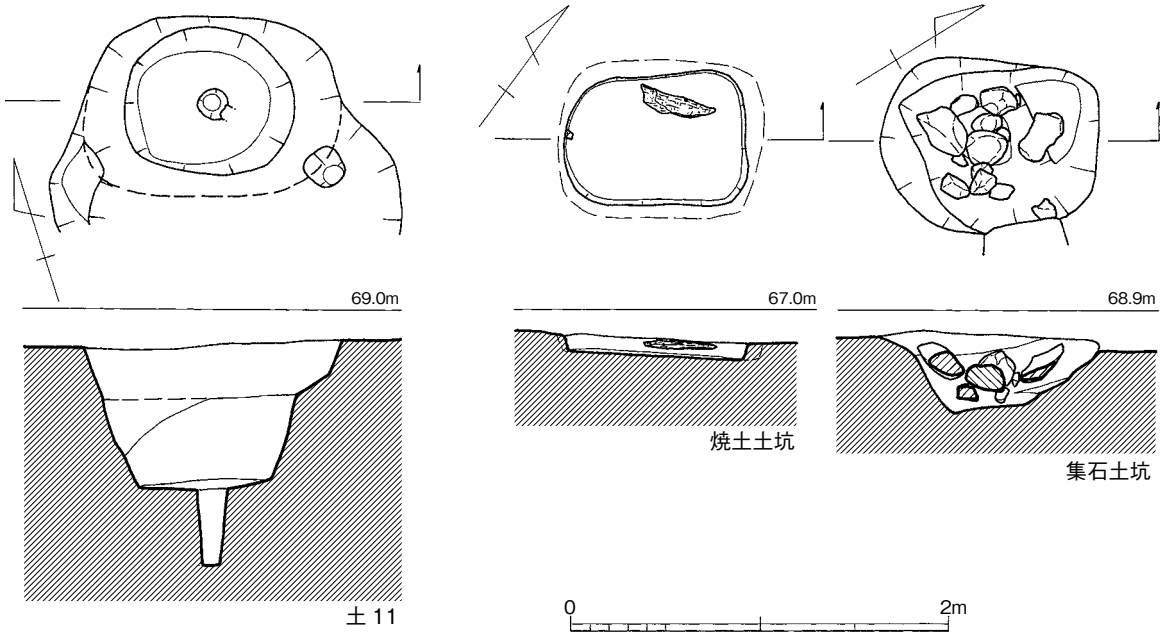
丘陵頂部中央の標高 68.8 mにて検出した集石土坑である。両脇には大形の落ち込みがあり、挟まれている。平面形は隅丸方形で、長さ 1.15 m、幅 0.92 m、深さ 0.38 mを測る。坑底には 10 ～ 20㎝大の安山岩礫が詰まっていたが、石面も不揃いで組んだ形跡はなく、石面に焼けた痕跡や炭等の出土もなかった。遺物の出土はない。

（8） C 14 年代分析試料出土遺構

上・下層の遺構面や土坑などから炭化物が出土し、そのうちの 5 点を C14 年代測定の試料として提出した。以下、その出土遺構について述べる。

上層 5 − P2 土坑（試料番号 1）

方形区画南半空堀近くにて出土した長さ 1.2 m、幅 0.94 m、深さ 27㎝の楕円形の浅い土坑である。底面の 2 ヶ所に分かれて出土したうちの№ 2 の試料で 120 g を測る。総量では 330 g ある。他に遺



第 43 図　11 号土坑・焼土土坑・集石土坑実測図（1/40）

物の出土はない。方形区画遺構の一つの年代推定試料となる。

上層 36 杭付近外郭土塁整地層下（試料番号 2）

丘陵東斜面沿いに丘陵方向に延びる土塁で、当初山城の一部と考え外郭土塁とした。今回採取したのは 4 号土坑の南西 14 m付近の土塁下地山面からの採取で、120 g ある。土塁年代の推定材料になる。

上層焼土土坑（試料番号 3）

詳細は上層遺構面にて報告済み。試料は 2.1kg。上層年代を推定できる。

下層 4' － P89 長方形土坑（試料番号 4）

5 号土坑の東 7 mにある長さ 2.51 m、幅 0.65 m、深さ 15㎝の不整楕円形土坑から採取した炭化物で 170 g ある。黒曜石・サヌカイト剥片 7 点が共伴した。下層遺構の年代を推定できる。

下層 3' － P87 土坑（試料番号 5）

11 号土坑の東南 5 m付近で、落ち込み遺構が重複する不整形な 3' － P87 土坑内から採取した炭化物で 50 g ある。土坑は長さ 0.7 m、幅 0.6 m、深さ 5㎝の浅い小土坑で、焼土面などは見られなかった。下層遺構の年代が推定できる。

（9）出土遺物

丘陵頂部の方形区画遺構において上下 2 層の遺構面を発掘し、上層では柵列や土坑・落とし穴・須恵器散布遺構とともに、近世・近代陶磁器片や縄文土器、それに石器が出土した。上層の大半は区画遺構のための整地層で、整地層は下層の押型文縄文土器を含む包含層を均したものであり、他の時期の縄文土器は出土していない。両層から出土した遺物は近世～近代陶磁器・銭貨など約 100 点、縄文土器 20 点余、石器（剥片や砕片を含む）は表面採取品まで含めて約 7,800 点を数える。

ここでは上・下層出土の遺物を併せて報告する。

石器類（第 44 ～ 46 図、第 5･6 表、図版 35 ～ 37）

概要　出土した石器（製品･剥片･砕片を含む）は、表採品や排土採取品も併せて 7,780 点を数える。出土土器が近世・近代の陶磁器を除くと押型文土器のみであったように、今回出土石器のほとんどは押型文土器にともなう石器としてよいだろう。

製品としては打製石鏃が 144 点と最多で、半数を掲載した。以外はスクレイパー 6、石錐 3、環状石斧・凹石・磨石各 1 と少数である。また、便宜上石材の 2㎝以上を剥片、以下を砕片とすると、集計はしてないが圧倒的に砕片が多い。石核も数点ある。

なお、掲載した石器の計測値については別表 5・6 に一覧としている。

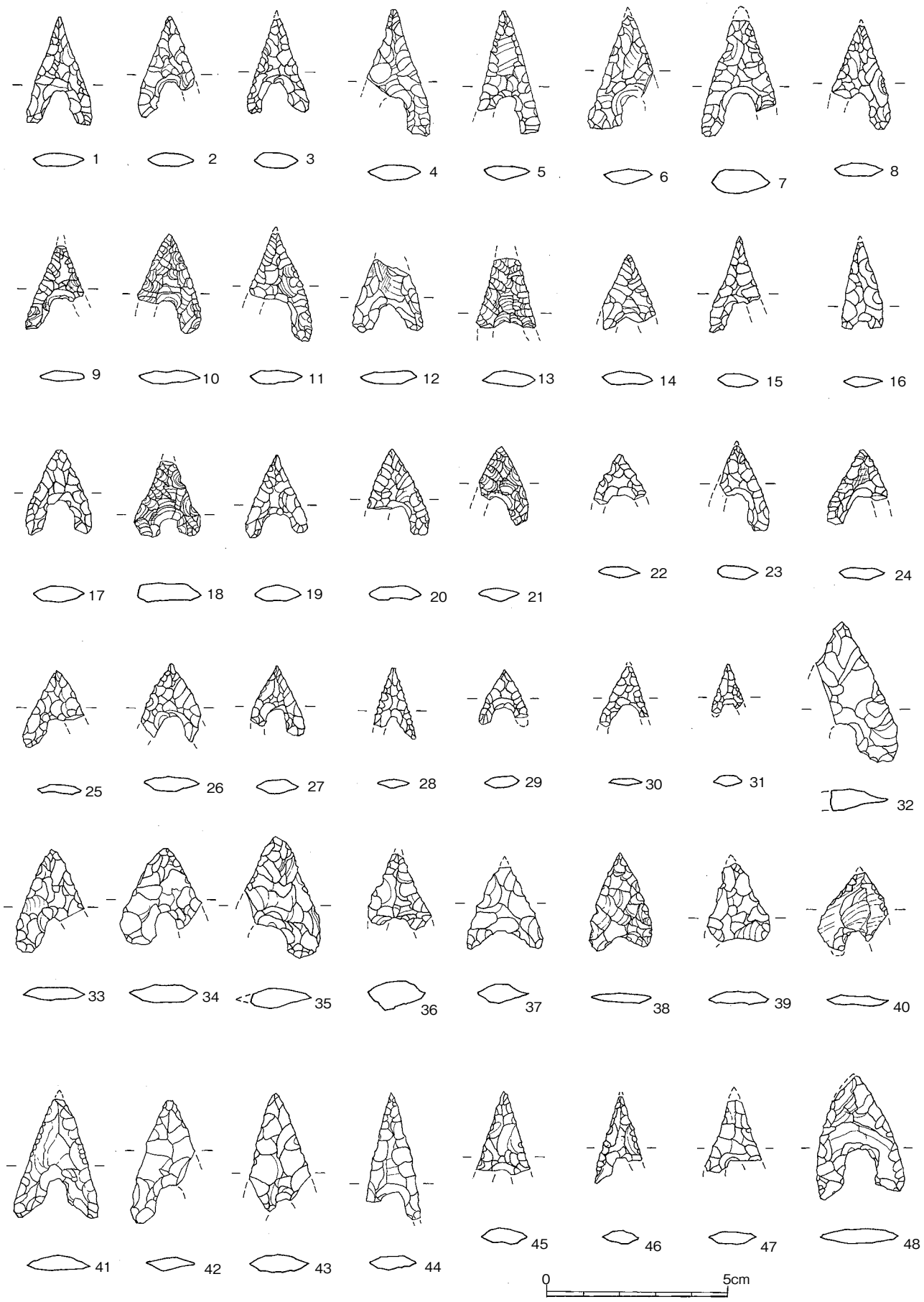
打製石鏃（第 44･45 図 1 ～ 72）　1 ～ 72 は打製石鏃で、1 ～ 40 は黒曜石、41 ～ 65 はサヌカイト、66・67 は安山岩、68 ～ 71 はチャート、72 は石英である。黒曜石製のうち姫島産は 3 点と少ない。黒曜石製石鏃は形態上おおよそ 4 種に分類できる。Ⅰ類は大型で、抉りが長方形で深い二等辺三

第５表　中村西峰尾遺跡出土石器計測一覧（その①）

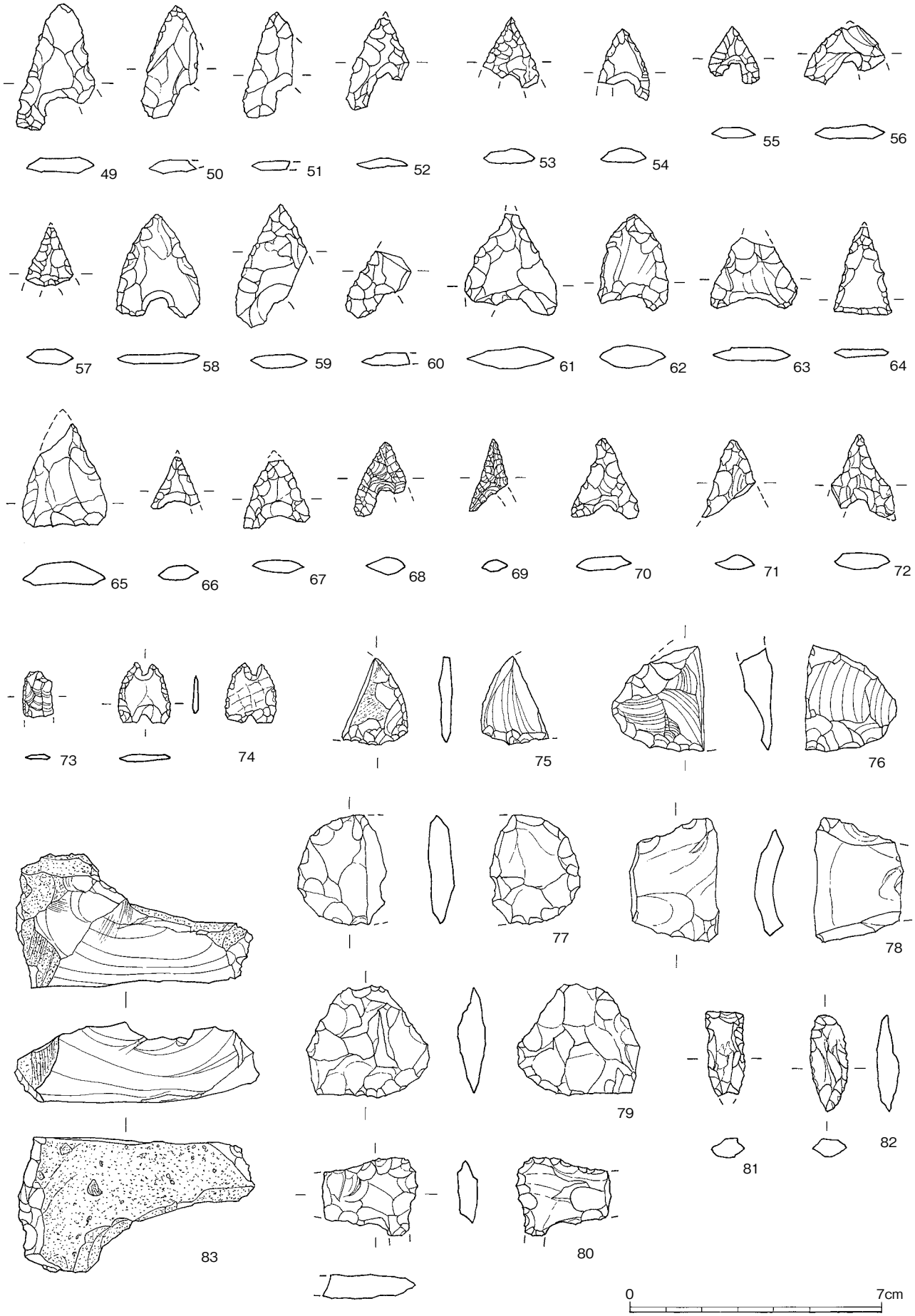
番号	種類	石質	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	出土地区	層序	整理番号	備考
1	石鏃	黒曜石	3.03	1.84	0.44	1.31	1-038	上層	16	完存、半透明
2	〃	〃	2.85	1.55	0.47	0.97	3-257	〃	33	剥離面残
3	〃	〃	2.65	1.76	0.45	1.1	5-176	下層	54	先端欠
4	〃	〃	3.4	1.69	0.45	1.54	0-007	上層	14	半透明
5	〃	〃	3.4	1.76	0.43	1.32	1-039	〃	17	先端欠
6	〃	〃	3.12	1.73	0.52	1.78	土坑2	〃	147	先・片脚欠
7	〃	〃	3.22	2.05	0.61	2.28	5-p31	〃	108	先・片脚欠
8	〃	〃	2.83	1.72	0.39	1.17	4-347	〃	48	片脚欠
9	〃	〃	2.38	1.47	0.35	0.68	排土採取		127	先・片脚欠
10	〃	〃	2.79	1.77	0.47	1.22	〃		131	光沢あり
11	〃	〃	3.06	1.67	0.4	1.17	3-195	上層	32	片脚欠
12	〃	〃	2	1.92	0.38	1.26	2-110	〃	21	剥離面残
13	〃	〃	2.01	1.62	0.38	1.1	排土採取		128	先・片脚欠
14	〃	〃	2.02	1.44	0.36	0.84	12Tr	下層	158	両脚欠
15	〃	〃	2.57	1.42	0.41	0.81	4-p21	上層	91	片脚欠
16	〃	〃（姫島）	2.44	1.11	0.32	0.7	2-143	〃	23	先端欠
17	〃	〃	2.43	1.8	0.47	1.08	4`-p79	下層	100	半透明
18	〃	〃	2.09	0.84	0.53	1.43	排土採取		130	粗製
19	〃	〃	2.18	1.7	0.46	0.95	1-012	上層	15	完存、半透明
20	〃	〃	2.45	1.75	0.41	1.11	3-170	〃	31	片脚欠
21	〃	〃	2.11	0.39	1.3	0.71	表土採取		139	光沢有
22	〃	〃	1.39	0.41	0.27	0.44	10Tr-9	上層	7	両脚欠
23	〃	〃	2.39	1.19	0.41	0.7	6-p16	〃	117	先・片脚欠
24	〃	〃	2.03	1.63	0.31	0.72	5-049	〃	52	剥離面残
25	〃	〃	2.05	1.7	0.31	0.69	8Tr	〃	6	片脚欠
26	〃	〃	2.17	1.74	0.42	1.04	3Tr-3	〃	2	両脚欠
27	〃	〃	1.95	1.5	0.36	0.6	3-p56	〃	72	片脚欠
28	〃	〃	1.93	1.2	0.24	0.35	2Tr	〃	1	半透明
29	〃	〃	1.56	1.35	0.33	0.41	3-p80	〃	78	片脚欠
30	〃	〃	1.7	1.3	0.21	0.28	4-102	〃	41	剥離面残
31	〃	〃	1.39	0.85	0.28	0.21	5-p1	〃	104	半透明、両脚欠
32	〃	〃	3.85	1.88	0.55	3.18	3-p86	〃	82	片脚欠
33	〃	〃	2.82	1.9	0.39	1.39	中津側土墓Tr	〃	159	片脚欠
34	〃	〃	2.68	2.23	0.51	2.23	6-014	〃	56	片脚欠
35	〃	〃	3.3	1.95	0.49	2.35	4-348	〃	49	片脚欠
36	〃	〃	2.14	1.73	0.82	1.86	4-p41	〃	94	分厚い
37	〃	〃（姫島）	2.25	2.11	0.58	1.59	土坑1-37	〃	146	先端欠
38	〃	〃（姫島）	2.64	1.7	0.3	1.05	排土採取		126	完存
39	〃	〃	2.18	1.75	0.38	1.16	0-002	上層	13	先・片脚欠
40	〃	〃	2.19	1.96	0.26	1.03	4`-p87	下層	101	半透明､剥離面残
41	〃	サヌカイト	3.24	2.33	0.4	2.08	12Tr-58	上層	11	先端欠
42	〃	〃	3.26	1.71	0.37	1.8	3-126	〃	30	片脚欠
43	〃	〃	3.26	1.7	0.49	2.12	5-033	〃	51	両脚欠
44	〃	〃	3.48	1.57	0.41	1.24	3-370	〃	39	片脚短い
45	〃	サヌカイト	2.3	1.55	0.46	1.09	4-170	〃	44	両脚欠
46	〃	〃	2.37	1.27	0.38	0.59	12Tr -14	〃	9	先・片脚欠
47	〃	〃	1.96	1.55	0.32	0.81	4-215	〃	46	先端欠
48	〃	〃	3.38	2.44	0.46	3.05	排土採取		125	先端欠
49	〃	〃	3.48	2.21	0.51	2.86	5-p17	〃	106	剥離面残

第６表　中村西峰尾遺跡出土石器計測一覧（その②）

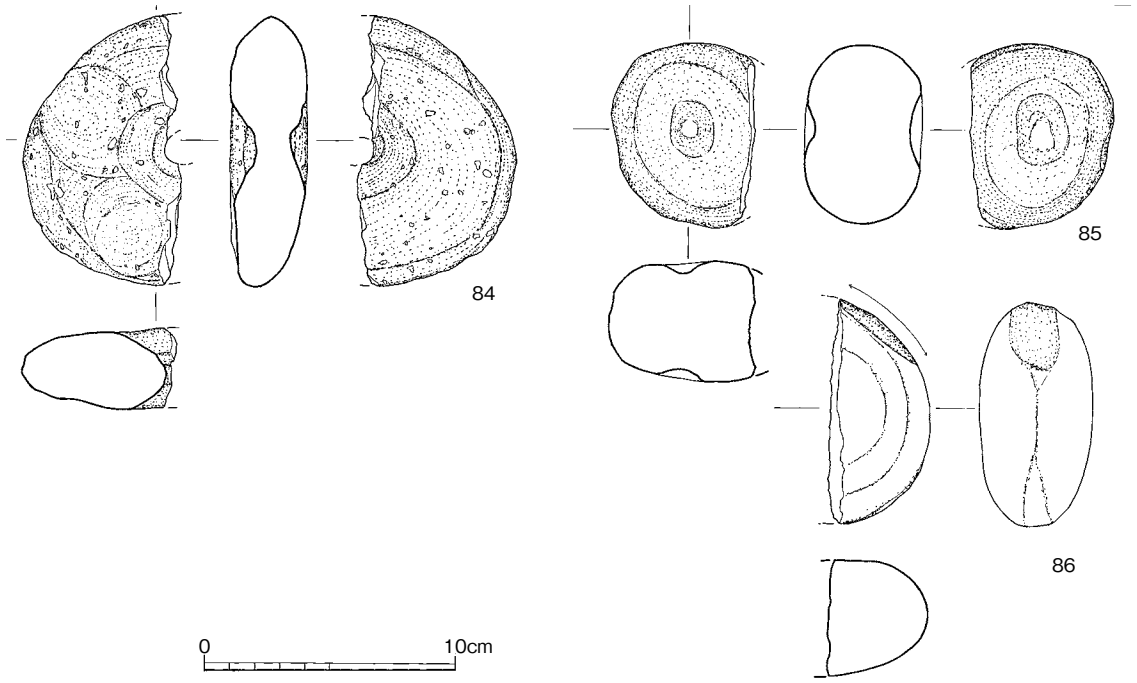
番号	種類	石質	長(cm)	幅（cm)	厚(cm)	重(g)	出土地区	層序	整理番号	備考
50	〃	〃	3.11	1.76	0.33	1.43	2-158	〃	24	片脚欠
51	〃	〃	2.95	1.56	0.34	1.38	2-171	〃	27	片脚欠
52	〃	〃	2.64	1.74	0.35	1.04	2-164	〃	26	先・片脚欠
53	〃	〃	1.94	1.5	0.4	0.83	1`-1041	下層	18	両脚欠
54	〃	〃	1.98	1.4	0.42	0.84	3-086	上層	29	片脚欠
55	〃	〃	1.6	1.36	0.3	0.39	3-p91	〃	84	完存
56	〃	〃	1.45	2.25	0.38	1.04	6-p8	〃	113	先・片脚欠
57	〃	〃	1.68	1.31	0.42	0.69	土坑2-3	〃	148	先・両脚欠
58	〃	〃	2.91	2.3	0.4	2.38	3-366	〃	38	剥離面残
59	〃	〃	3.41	1.91	0.46	2.51	4`-p69	下層	163	片脚欠
60	〃	〃	1.81	1.75	0.36	0.98	6-p8	上層	116	先・片脚欠
61	〃	〃	2.86	2.52	0.61	3.26	1-p9	〃	61	先・片脚欠
62	〃	〃	2.74	1.95	0.59	2.89	2-134	〃	22	完存
63	〃	〃	2.01	2.44	0.42	2.03	4`p92	下層	102	先端欠
64	〃	〃	2.4	1.63	0.34	1.16	北石垣裏込め	上層	123	先端欠
65	〃	〃	2.88	2.35	0.61	4.14	3-p89	〃	83	不定型石器
66	〃	安山岩	1.4	1.35	0.34	0.44	4-p32	〃	93	先・片脚欠
67	〃	〃	2.02	1.88	0.4	1.05	3-286	〃	37	濃灰色
68	〃	チャート	1.9	1.58	0.4	0.76	排土採取		129	黒灰白色
69	〃	〃	1.92	1	0.35	0.38	石垣背後	上層	133	黒灰白色
70	〃	〃	2.3	1.86	0.36	0.99	4-p44	〃	96	赤茶色、完存
71	〃	〃	2.12	1.4	0.39	0.82	7Tr-21	〃	3	黒灰白色
72	〃	石英	2.38	1.63	0.49	1.54	3-268	〃	34	半透明、両脚欠
73	細石刃	黒曜石	1.22	0.81	0.18	0.2	下段遺構面	下層	124	片辺刃潰し
74	異形石器	サヌカイト	1.63	1.43	0.2	0.54	6-p2	上層	112	上辺一部欠
75	スクレイパー	黒曜石	2.35	1.94	0.4	1.7	4-109	〃	42	1/2欠
76	〃	〃	2.95	2.5	0.83	5.49	4`-p97	下層	103	1/2欠
77	〃	サヌカイト	3.04	2.47	0.78	6.26	4-p46	上層	98	1/2欠
78	〃	〃	3.45	2.43	0.63	7.02	3-279	〃	36	断面凹、1/3欠
79	〃	〃	3.08	3.32	0.76	6.31	7Tr付近	下層	150	完存
80	石錐	黒曜石（姫島）	2.23	2.66	0.62	3.79	9-001	上層	60	1/4欠
81	〃	サヌカイト	2.35	1.1	0.56	1.22	土坑2	〃	149	先端欠
82	〃	〃	2.68	1.06	0.58	1.56	4-242	〃	47	完存
83	石核	黒曜石	6.52	3.7	2.08	43.68	6-p1	〃	111	自然面残
84	環状石斧	花崗岩	10.62	6.28	2.95	225	4-p9	〃	88	1/2欠
85	凹石	〃	7.33	5.7	4.76	248.1	3-p4	〃	66	1/3欠
86	磨石	花崗岩系	8.88	4.1	4.56	209.6	2-p3	〃	62	褐灰白色



第 44 図　中村西峰尾遺跡出土石器実測図①（2/3）



第 45 図　中村西峰尾遺跡出土石器実測図②（2/3）



第 46 図　中村西峰尾遺跡出土石器実測図③（1/3）

角形の鍬形鏃で、1 ～ 17、41 ～ 48 が該当する。押圧剥離による丁寧な作りである。Ⅱ類は中型で抉りも浅い三角形の鏃で、18 ～ 31、54 ～ 57 が該当。Ⅲ類はⅠ・Ⅱ類に近いが幅広の大型品で、32 ～ 36、58 ～ 63 が該当。Ⅳ類は基部が平坦で抉りの浅い 37 ～ 40、64・65 である。Ⅰ・Ⅱ類が 80％を占め、安山岩などその他の石材はⅡ・Ⅲ類が多い。

55 は長さ 1.6cmで出土品中最小、32 は 3.85cmと最大である。65 は石鏃未製品か。不定形石器ともいわれ、裏面は剥離面が残る。70 のチャートは赤茶色、それ以外は黒灰白色である。72 は石英製で肩が角張る。

その他の石器（第 45・46 図 73 ～ 86）　73 は細石刃か。片辺は刃潰しされている。刃部側に微細な剥離がある。黒曜石製。74 は異形石器で二辺に抉りを入れる。サヌカイト製。福岡市内野遺跡に四辺抉りの安山岩製類似品がある。時期は縄文時代前期後半という。75 ～ 79 はスクレイパーである。75 の裏面は剥離面である。80 ～ 82 は石錐で､80 はＬ字形で姫島産か。81･82 は長軸状となる。83 は今回出土品中最大の黒曜石石核で、44 ｇある。礫面の付く角礫から横長剥片を剥離している。84 は環状石斧で花崗岩製である。半折し、復元すると楕円形になる。85 は花崗岩製凹石。両面中央部が 1cmほど窪む。86 は磨石で、側面の一部と片面に磨き面がある。花崗岩系石材か、石英質で光沢がある。

土器類（第 47 ～ 49 図、図版 35・38 ～ 40）

縄文土器（第 47 図 1 ～ 8）　縄文土器は上層・下層あわせて 20 余点が出土した。遺構に伴うのは図示した 1・7・8 出土品だけで、他は整地層あるいは包含層からの出土である。これら縄文土器はいずれも破片資料で遺存も悪く脆い。全体の器形を窺えるものはない。

1 ～ 3 は楕円押型文土器である。他にも押型文土器らしきものもあるが山形文や格子目文はない。1 は最も押型文が残る土器で、横位方向の施文である。器壁は 1cmと厚い。胎土には雲母、角閃石

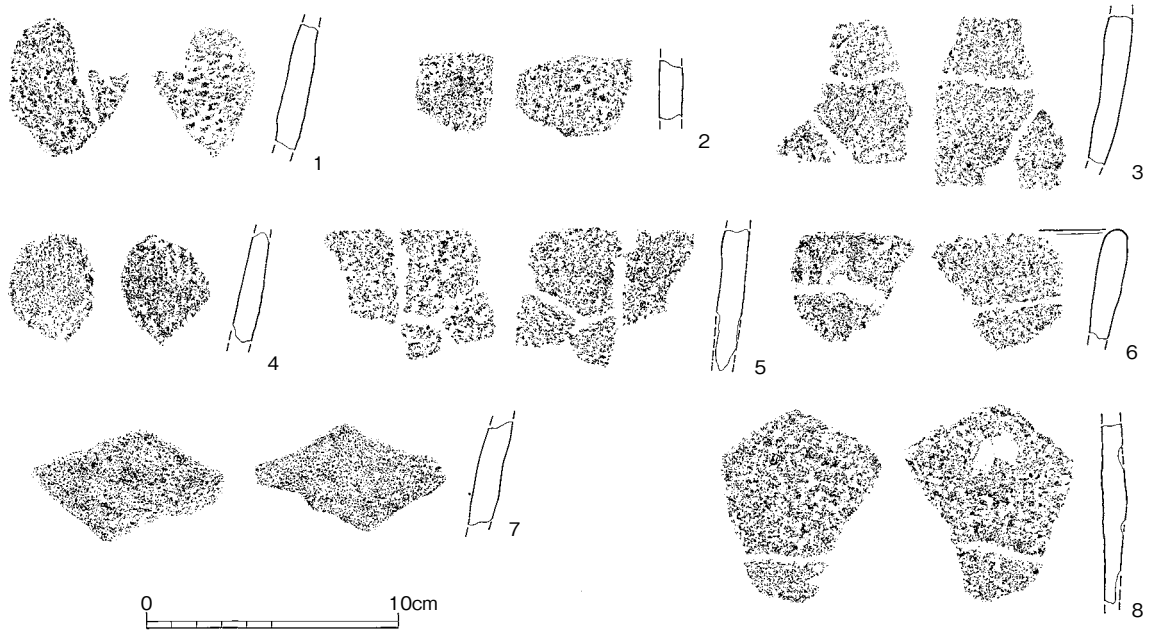
を含み、色調は暗黄茶褐色を呈す。1号土坑底面付近出土。2は剥落が激しいが外面一部に楕円押型文が残る。器壁は1cmと分厚い。黄褐色を呈し長石、角閃石を含む。上層出土。3は10片あるがすべては接合せず、外面の楕円は確実ではない。他に比し1.2cmと分厚い。雲母、角閃石含む。暗黄茶褐色を呈す。上層出土。

4は外面に条痕が残る。白色粒、角閃石含む。灰黄褐色を呈す。厚さ0.9cm。

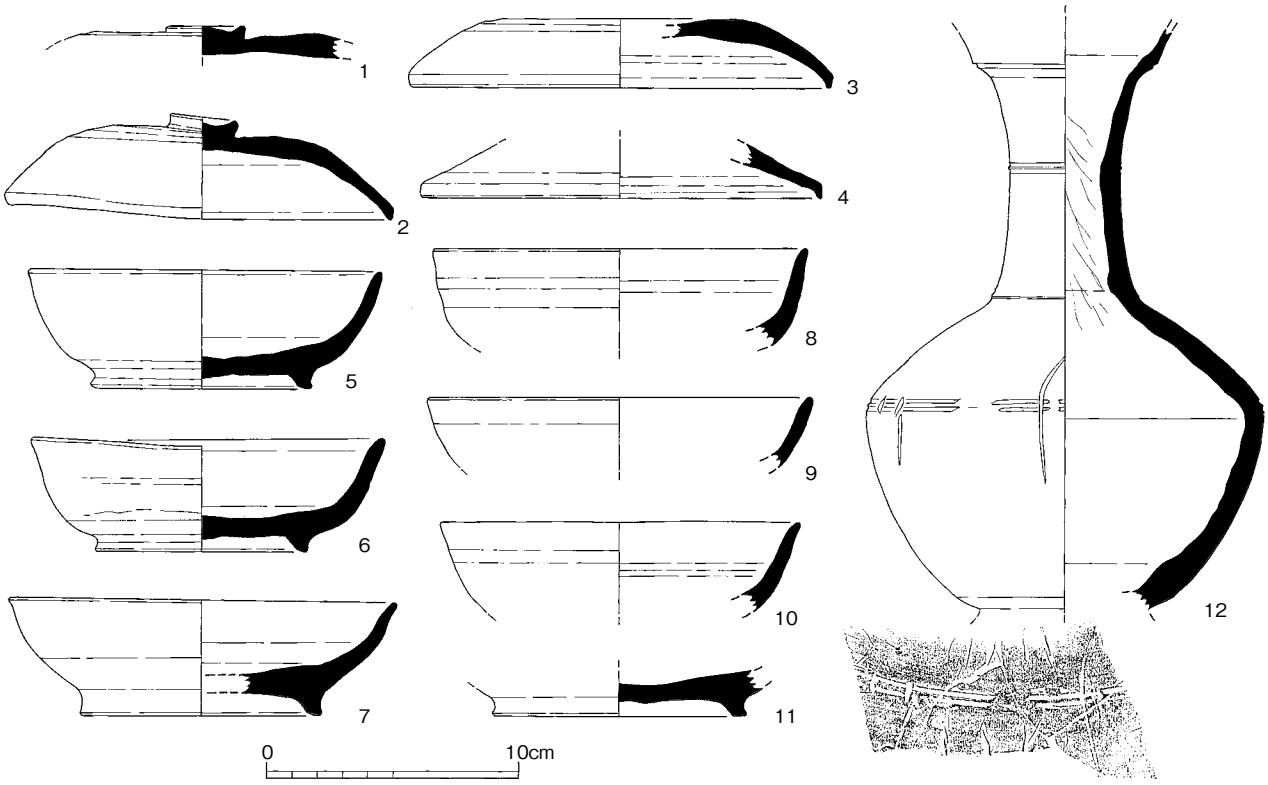
5～8は押型文土器の無文部または無文土器である。5は1.2cmと分厚い。上層出土。内外面の磨滅が著しい。大粒の白色粒多く含む。灰黄褐色を呈す。11トレンチ出土。6の厚さは1.1cmである。白色粒、雲母、角閃石含む。暗黄茶褐色を呈す。7は厚さ1.1cmで、角閃石・砂粒を多く含み、暗茶灰色を呈する。上層3－P62出土。8は磨滅が著しく、厚さ1cm。雲母・角閃石を含み、黄橙褐色を呈する。上層4－P12出土。

須恵器（第48図1～12、図版38） 上層面の須恵器散布遺構から出土した須恵器片は100余点、土師器は小片が多く20点近くある。破片数の割には接合できるものが少なく、須恵器は10余個が器形復元できたが、土師器ではなかった。図示した須恵器は坏蓋4、坏身7、長頸壺1の計12個である。

1～4は須恵器坏蓋である。1は天井部付近の破片である。摘みは扁平な宝珠形で径3.1cm、高さ6mmを測る。外面は横ナデ、体部付近はヘラ削りで、内面はナデ調整である。色調は内外面とも淡黄灰色。胎土は砂粒ほとんど含まず、焼成は良好である。2は完形に復元され、復元口径14.5～15.5cmで、口縁部は焼け歪むが、端部は三角につまみ出される。器高は4.2cmを測る。摘みは復元径2.9cmで扁平である。外面体部と天井部の境は緩く屈折し、甘い稜が付く。外面中位はヘラ削りで他はナデである。内面はナデである。胎土は砂粒を少量含み、焼成は良好。色調は淡黄灰色をなす。3は復元口径16.9cm、残存器高2.7cmで天井部の摘みを欠く。残存率4割である。外面天井部は強く窪み口縁端部は三角に尖る。外面天井部はヘラ削り、体部はナデによる調整である。内面もナデである。胎土は細砂粒を含み、焼成は良好である。色調は灰色～黄灰色を呈す。接合しないが口縁部長7cmの同一個体破片が別にある。4は口縁部のみが1/4残存し、天井部を欠失する。復元口径16



第47図　中村西峰尾遺跡出土縄文土器実測図（1/3）



第 48 図　中村西峰尾遺跡出土須恵器実測図（1/3）

cmを測る。口縁端部は三角に尖るが、前 2 者に比し華奢である。内外面はナデで、色調は緑灰色～黄灰色を呈する。胎土に細砂粒含み、焼成は良好だが焼け歪みがある。

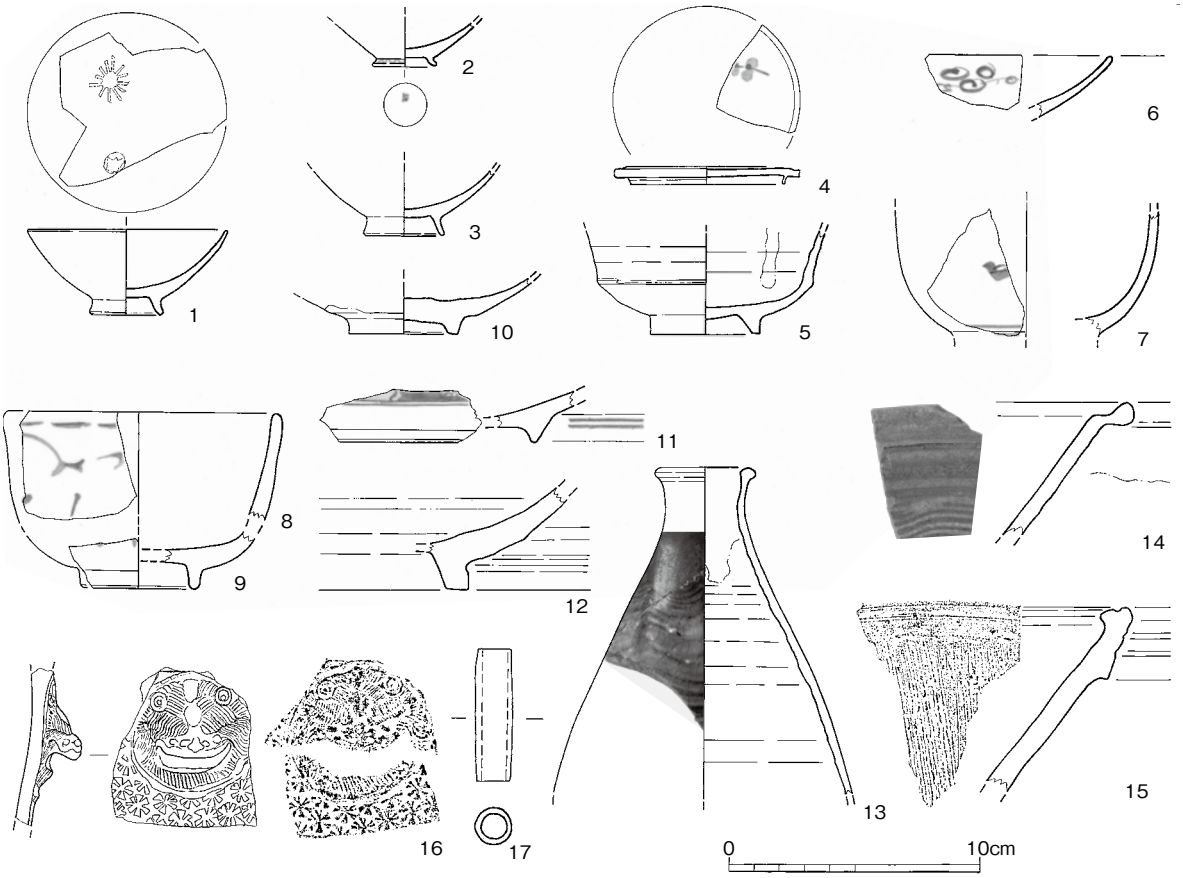
5 ～ 11 は須恵器坏身である。5 は 1/2 ほど残存し、復元口径 14.1cm、器高 4.9cm、高台底径 8.8cm を測る。3.5cmの深さの体部は碗形で上半は強く外反し口縁端部は緩くつままれる。断面靴形の高台は高さ 8mmで外へ踏ん張る。内面から高台付近にかけては横ナデ、それ以外はナデである。胎土は細砂粒含み、焼成は良好だが口縁部は歪んでいる。色調は黄灰色を呈する。6 は完形に復元でき、口径 14 ～ 14.5cmだがやや歪む。器高 4.1 ～ 4.5cm、底径 8.4cmを測る。深さは 3.1cm、高台の高さは 7mmである。体部は 5･7 に比し箱形に近く深さは 3.5cmを測る。口縁端部は外へ緩くつまみだし、分厚い。胎土は細砂粒僅かに含み、色調は黄灰色を呈す。焼成はやや甘い。7 は底部を除いてほぼ復元され口径 15.5cm、器高 4.7cm、底径 9.6cmを測る。口縁端部は緩くつまみ短く外反する。高台端部は外へ強く踏ん張る。内外底面はナデ、それ以外は横ナデである。胎土は砂粒を若干含み、破損した内底面の剥離面に 5mmほどの黒くて鈍く光る有機物の砕片数個が裸出している。色調は淡灰色を呈し、焼成はやや不良である。8 は体部の 1/3 が残り、復元口径 14.7cm、残存器高 3.9cmを測り、口縁部端の外反は弱い。外面体部中ほどに浅い窪みをつくる。胎土には砂粒若干含む。色調は黄灰色を呈し、焼成は良好である。9 も口縁部のみ 1/5 残存し、復元口径 15.3cm、器高 2.7cmを測る。体部は浅い感じがする。内外面は横ナデである。胎土は細砂粒わずかに含み､色調は灰白色を呈す。焼成は良好である。10 は口縁部が 1/4 残存し、器高は 3.7cmである。口縁端部の張りは弱い。体部中ほどに浅い窪みをつくる。胎土は細砂粒僅かに含み、色調は灰白色を呈す。焼成は良好である。11 は坏の高台が 1/3 が残り、復元径 10.1cmを測る。現存高は 1.8cmである。同じ坏底部の 5 ～ 7 より一回り大きい。底面は外へ窪み高台端部は外へ踏ん張り高さは 8mmである。胎土は細砂粒をわずかに含み、色調は内面灰白色、外面は黄灰白色を呈す。焼成良好である。

12は長頸壷で、口縁部と底部を欠き、他は1/2の残存で胴部は図上復元である。現存器高23cm、頸部径4.4cm、胴部は球形で、最大径15.8cmを測る。欠失する口縁端部は短く外反すると思われる。口縁部から頸部にかけては有段で浅い沈線が1本はいる。頸部下半内面には右上から左下へ流れる絞り痕が強く残り、外面にも僅かに表れている。完形の頸部中程には2本の沈線がはいり、頸と胴部の境には微かな稜が付く。胴部は球形で最大径は胴部1/3の高さにあり、くの字状にゆるく屈折するが稜はつかない。肩に2本の沈線を巡らすが、間隔を空けた7カ所を工具により撫で消し、肩にはゆるい垂直線が上下方向に4cm長で数ケ所に付く。底部を欠く胴端部外面には幅1.1cmの剥離面が残り、ここに高台あるいは脚が付いていたことがわかる。現存する内外面は横ナデである。胎土は砂粒を若干含み、色調は緑灰～黄灰色を呈す。焼成は良好である。11の高台底部が接合する可能性もあるが、両者は直接接合せず、図上復元でも違和感がある。また、12の端部に残る剥離面からすると接合技法が異なるようで、両者は別個体であろう。

以上、これら須恵器は、7世紀末～8世紀初頭の年代が考えられる。

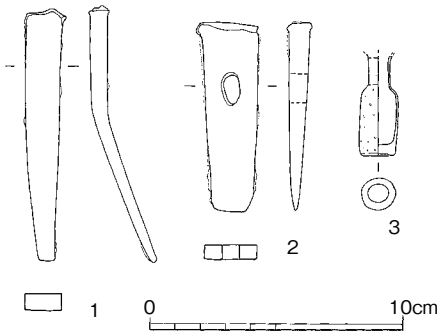
陶磁器（第49図1～17、図版39・40）　表採及び上下遺構面の調査で、近世～近代の陶磁器などの破片が90点近く出土した。それらの中から実測に耐え特徴あるものを選び、図示し説明する。

1～3は軍人の退営・除隊記念として配られた記念杯と言われる薄手の小杯磁器で、いずれも全面に乳白～淡水色の透明釉が掛りほぼ同形品である。1の内面見込みには上絵付けが剥げた光線12条の旭日旗と日の丸図柄の痕跡がみられる。体部は内湾気味にゆるく立ち上がり、全体として断面形が丸みを帯びたV字形をなし、器壁は薄い。復元口径8cm、器高3.4cm、高台径3cmを測り、畳付



第49図　中村西峰尾遺跡出土陶磁器実測図（1/3）

は露胎である。方形区画内 11 トレンチ表土出土。2 は杯下半部のみで、高台径は 2.5cmと小さく、1 に比しやや小型品か。外底面にはコバルト描きの不鮮明な文字がある。九州歴史資料館のデジタルマイクロスコープで拡大し、一瀬智氏により「輜」あるいは「緇」ではと判読いただいた。また、高台外面には呉須による凹凸線文が描かれ、畳付は露台である。上層出土。3 は 1 と形状・色調が似ているが、見込みに文様はない。高台径 3.2cmを測る。11 トレンチ出土。4 は復元外径 9.2cm、器高 7mmの扁平な磁器急須蓋片で摘みを欠く。全面淡オリーブ色で貫入がはいるが身受部は露胎で、蓋上面には鉄釉と白象嵌で梅花文が描かれる。上層 3 － P32 土坑出土。5 は口縁部を欠く腰折れ陶器碗で、復元すると口径 10cm、器高 5cm前後の大きさになろう。外面胴部は直立で稜が付き、暗灰緑の釉が掛かるが発色が悪い。胴下半は強く屈折し、この個所から内面にかけては暗褐色の露胎で、内面上部に釉ダレが 1 箇所みられる。上層出土。6 は碗か皿の陶器小片で、口径 11cm程度の大きさに復元できる。全面暗黄灰色を呈し、内面に呉須で唐草文が描かれるが発色は良くない。上層出土。7 は磁器碗片で口径 12cm、器高 6cm前後に復元される。内外面暗水色を呈し、外面体部には草花文、底部付近には 2 条界線の呉須染付けが見られる。上層出土。8・9 は接合しないが同一個体の青磁碗で、8 は口縁部片、9 は底部片である。図上復元すると口径 10cm、器高 6 cm前後であろうか。全面暗緑灰色で貫入がはいり器壁も厚い。体部外面には 1 条の圏線と雪の輪文が描かれるがはっきりしない。底部の畳付は露台である。上層出土。10 は磁器皿片で、復元すれば口径 14cm前後の小皿であろう。底径は 4.4cmを測る。全面淡水色の釉が掛り、見込みは雑な二重の蛇の目釉剥ぎである。底部付近は露胎で、畳付には砂目が付く。上層出土。11 は復元すれば口径 30cm近い磁器大皿片である。全面オリーブ色で貫入が見られ、見込みには 2 条界線と濃淡の草花文？が、高台外面にも 2 条の界線が呉須で描かれている。畳付は露胎である。上層出土。12 は陶器鉢底部片で、復元すれば径 30cmを超える大形品であろう。器壁も分厚い。体部外面にはヘラ削りによる稜が明瞭に残され、外面から高台外面にかけては無釉の暗茶褐色、畳付けは露胎である。内面は黄灰白色釉である。上層 3 － P12 出土。13 は陶器瓶の徳利で、接合しない 2 片からなる。図上復元すると、下半を欠くが器高 25cm、胴径 12cm前後となる。強く張る胴部に細く短い頸部が付き、口縁部は肥厚して収まる。外面肩部に波状の、接合しない別の破片胴部には横位の刷毛目が付く。口縁部は黒色～褐色釉が掛かり、内面の釉ダレが激しい。肩部以下は灰色～黄緑色の釉である。体部内面は露胎で茶褐色を呈す。東斜面里道表土出土。14 は復元 30cm以上の陶器大鉢口縁部片である。口縁部は強く屈折し端部は厚く跳ね上がる。外面上半から内面は灰緑色釉を掛け、内面下半は波状刷毛目が付く。外面下半は褐色地肌面である。北石垣前面表土出土。15 は陶器擂鉢口縁部片で、紫褐色を呈する。口縁部は長方形で外面に 2 条の沈線が入り、端部は内面に張り出す。摺り目の単位は不明である。上層出土。16 は瓦質火舎の獅子頭把手で現存長 6.4cmの破片である。外面は灰色で、把手の獅子頭は 5 × 4.5cmの型押し成型の貼り付けで、体部との接合面には隙間が残る。獣面高は 1.5cmで愛嬌ある目をし、掴み易いよう口は大きく裂けている。下半には 6 弁の菊花文を施文する。内面は黄灰色を呈す。外郭土塁上面表土出土。17 は陶器製管状土錘で、完形品である。長さ 5.2cm、胴部径 1.5cm、両端部径 1.3cm



第 50 図　中村西峰尾遺跡出土金属・ガラス製品実測図（1/3）

と中位が太く端正なエンタシス状で、器壁は薄い。重さ 9.6g である。孔径は 1 cm弱で、内面には長軸方向の線条痕が見られる。外面のみ青緑釉が掛かり、まだらである。胎土は精選され灰白色を呈する。11 トレンチ出土。

これら出土陶磁器のうち 1 ～ 3 の記念杯磁器は昭和期で、それ以外は近世後半の 18 世紀後半～19 世紀前半の時期が考えられる。

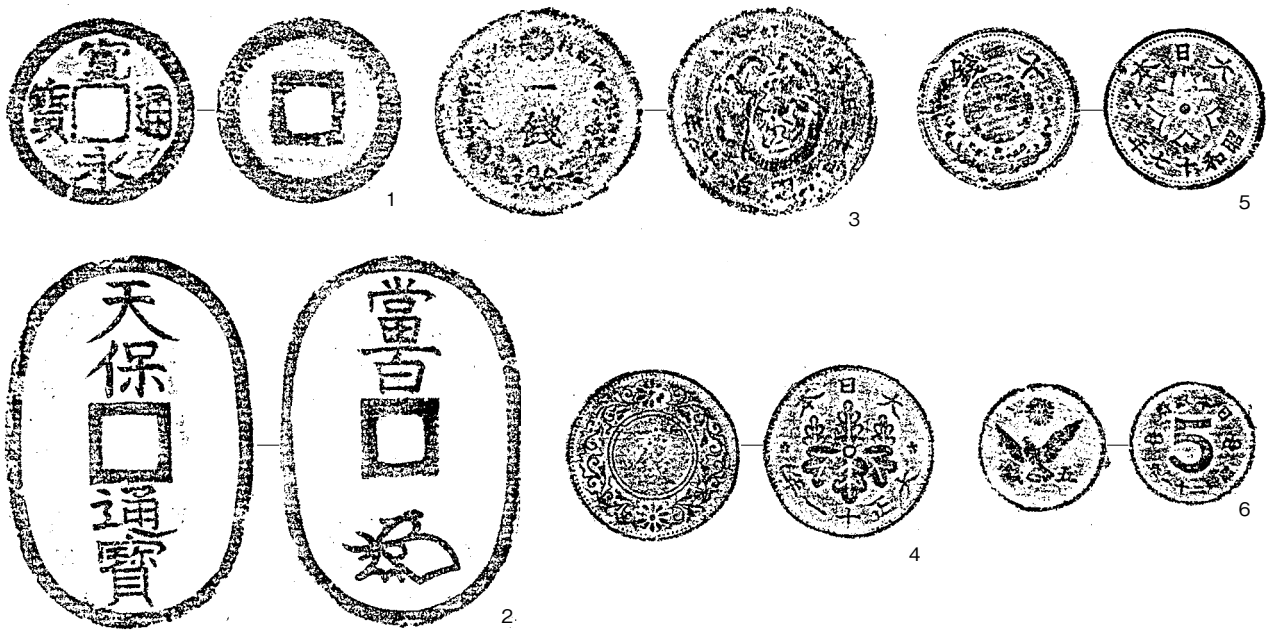
金属製品・ガラス製品（第 50・51 図、図版 40）

鉄器（第50図1･2）　1･2は鉄製楔で､縫釘かもしれない｡両者とも頭部は潰れている｡1は長さ10.1cm、頭部幅 2cm・厚 8mm、先端幅 7mm、重さ 36.8g を測り、体部の 2/3 の位置で折れ曲がっている。使用中に曲がったのであろう。上層出土。2 は体部中位やや上に 1.2 × 0.6mmの楕円孔を有する楔である。長さ 7.6cm、頭部幅 2.6cm・厚 1cm、先端幅 1.4cm、重さ 46.3g を測る。方形区画内 8 トレンチ出土。

ガラス器（第 50 図 3）　3 はガラス小瓶である。白濁の透明ガラスで気泡が目立つ。口縁部端部を欠損し、現存高 3.9cm、現存口縁部部径 0.9cm、胴最大径は肩にあり 1.5 × 1.4cmで断面は楕円である。重さ 5.58g。型合せ鋳造品成型で、長径側面に合わせ目が残る。明治期の薬か化粧水の瓶であろう。上層出土。また、器壁 1mm以下の非常に薄い緑ガラス砕片を数点表面採取した。

銭貨（第 51 図 1 ～ 6）　表面採取及び発掘で 6 枚の銭貨が出土した。1 は寛永通宝である。径 2.48cm。孔径 6 × 5.5mm。重さ 3.29g。線刻石 2 付近外郭土塁表土出土。初鋳は寛永 13 年（1636）である。2 は天保通宝。長径 4.88cm、短径 3.25cm。孔径 6.2mm。重さ 18.46g。東斜面裾にて表面採取。初鋳は天保 6 年（1835）である。3 は龍一銭銅貨。明治 10 年発行。径は 2.8cm。重さ 6.19g。中段上層出土。4 は桐一銭青銅貨。大正 11 年発行。径 2.29cm。重さ 3.66g。石垣前面での表面採取。5 は菊十銭アルミニウム貨。昭和 17 年発行。径 2.2cm。重さ 1.20g。東斜面表面採取。6 は五銭錫貨。昭和 21 年発行。径 1.71cm。重さ 1.94g。中段上層出土。

寛永通宝・天保通宝は江戸期の銭貨であるが、明治時代まで流通したという。6 の五銭錫貨は終



第 51 図　中村西峰尾遺跡出土銭貨拓影（1/1）

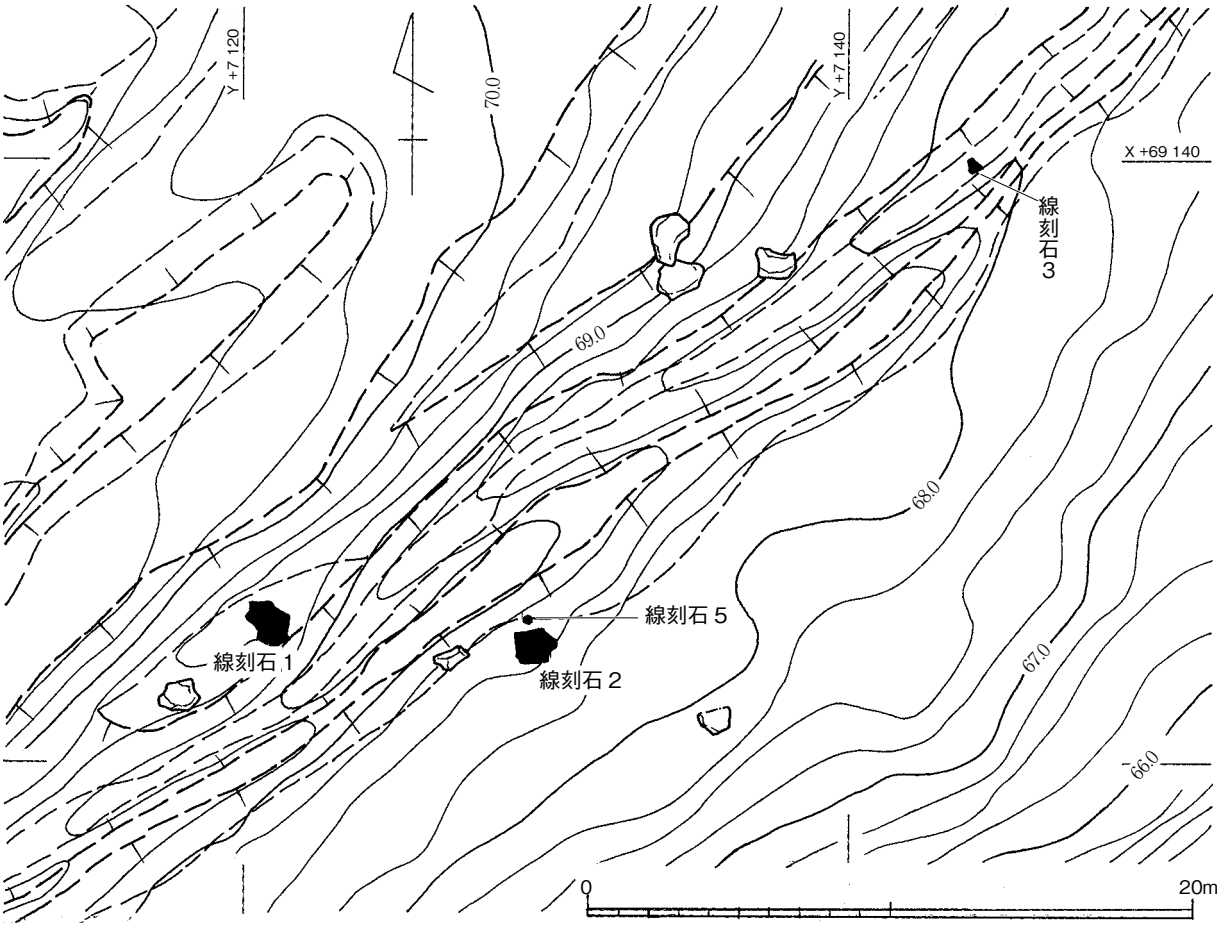
戦直後に発行され、表は平和の象徴である「鳩」のデザイン、裏面は「日本政府」の刻印がある。

（１０）線刻石

地形測量中、丘陵頂部から東斜面において線刻で図柄を描いた線刻石を５個発見した。丘陵には安山岩露頭や転石が多数点在し、当初はまったく気付かなかった。線刻石１は東斜面上縁を南北方向に走る溝を兼ねた里道の西側で最初に発見し、標高 69.4 ｍと５個中最高所にある。線刻石２は線刻石１から９ｍ東の里道の東側で発見した。また、線刻石２から北に 22 ｍ下った里道で線刻石３を、さらに北へ 65 ｍほど離れた標高 60 ｍの斜面中腹で線刻石４を発見した。その後調査終了間際、線刻石２の周囲を調査中、その前面にて線刻石５が出土し、都合５個の線刻石を発見したことになる。これらすべて東斜面沿いに丘陵主軸方向に伸びる里道筋での発見である。

線刻石１（第 53・54 図、図版 29 ～ 31）

概要　線刻石１は長さ 1.56m、幅 1.20 ｍ、厚さ 0.84 ｍの黄灰色～灰色地肌をした安山岩自然石である。角の取れた６面体の扁平な直方体をなし、人工的な加工はない。移設の際に測った重量は約２トン近くあった。発見時、線刻石の底面 30㎝が地中に埋没し、側面は苔むしていた。線刻画は石の上面と南向き側面の２面にあり、ともに船が描かれている。以下、最初に発見した南側面の線刻画をＡ面、上面の線刻画をＢ面とする。



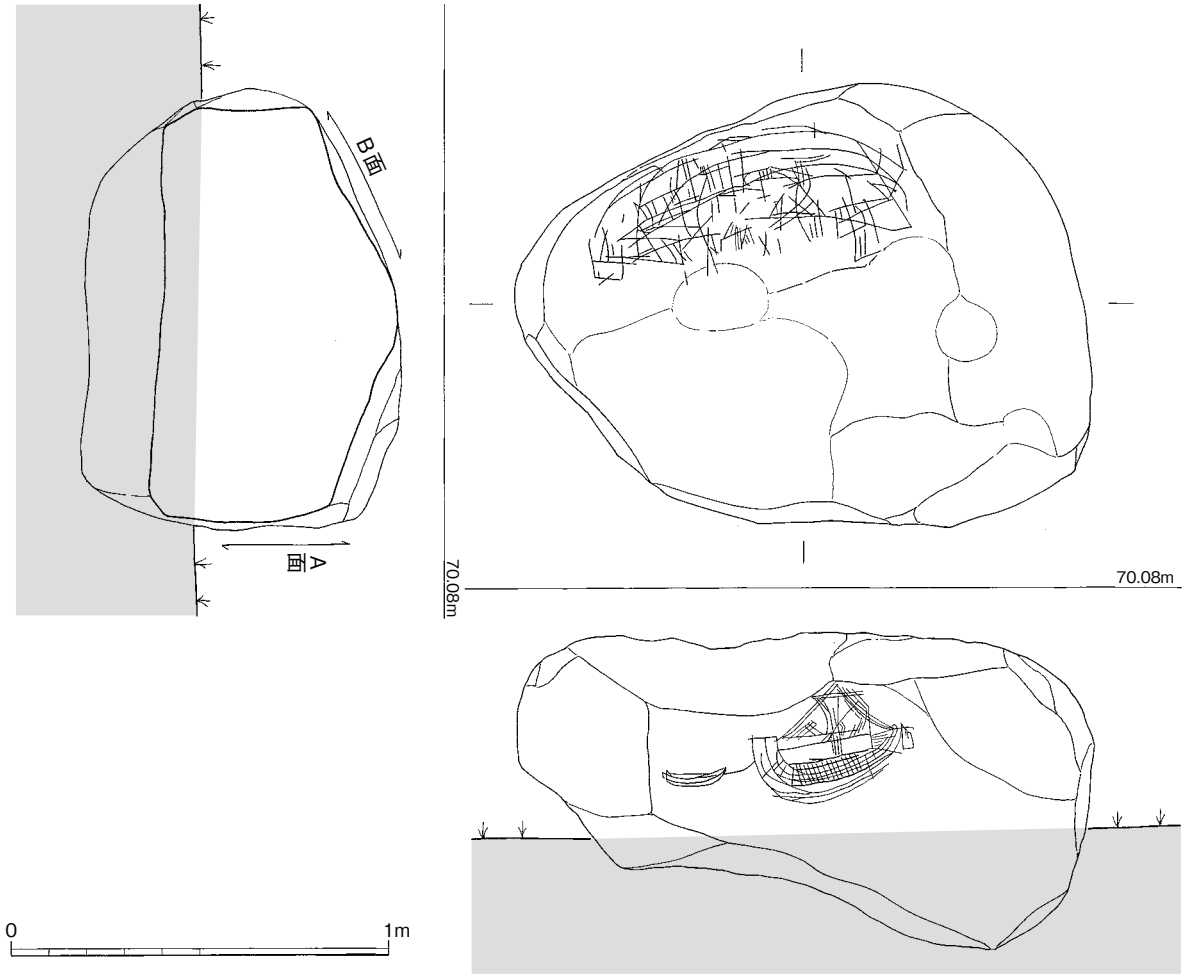
第 52 図　線刻石１～３･５出土位置図（1/250）

A 面線刻画　A 面の線刻画は側面にあったためか、今次発見線刻石中最も残り具合が良く、明瞭な図柄の線刻画である。線刻画は、80 × 50cmの菱形状平滑面に、小船と張った帆をもつ大船が上手く収まるよう構図されている。線刻の太さは 1 ～ 2mm、深さは 1mm前後の浅いU字状で、風化度も古い。線刻は鋭利な金属によるものであろう。これは他の 4 石についても同様である。

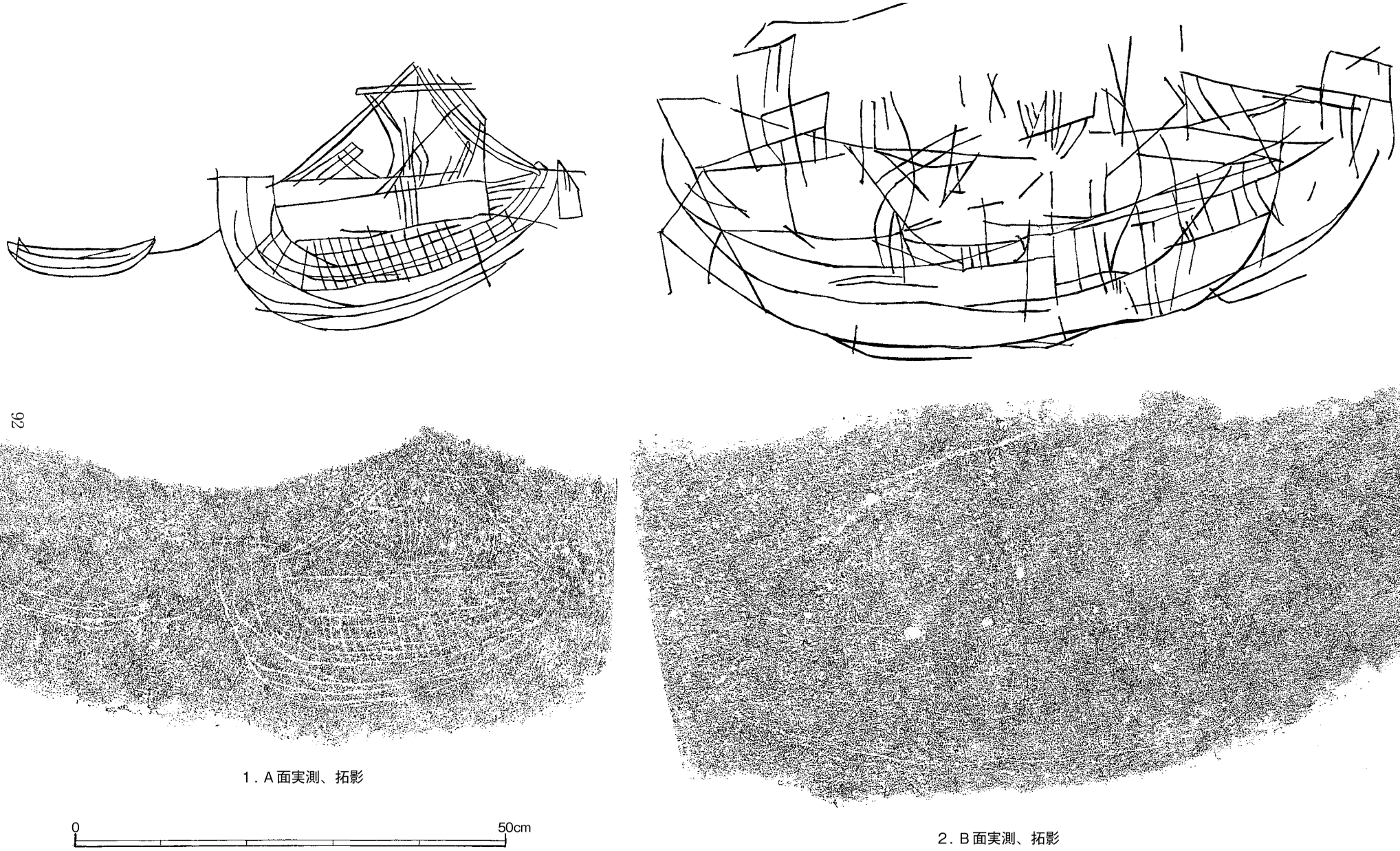
線刻画は大小 2 艘の船が描かれ、正面左手の小船は全長 17.2cm、胴部幅 2.6cmを測る。小船の右先端は尖り、こちらが船首であろうか。左の船尾は角状に収まる。小船の右には大船が描かれ、その間を 10cm長の綱で繋いでいる。曳航しているのだろうか。

大船は全長 39.4cm（舵を含むと 42.5cm）、総高 28.5cm、胴部最大幅 10cmを測る。右端部に舵が取り付くので左向きの船首であろうか。船首はゴンドラ風に反り上り、ずんぐりとして端部は水平幅広となる。右向きの船尾は次第に細くなり、船尻には一辺を斜とした長方形の舵が付く。胴部上縁には6本の水平線と20本弱の斜線が引かれ「垣立」状の斜格子が作られる。胴部甲板には帆柱が立ち、複線で描く帆は右に膨らむ。また、帆柱頂部からは船首船尾に向かって伸びる操帆用の綱が複線で表現されている。線刻石 1 A面線刻画は極めて写実的な図柄である。

B 面線刻画　一方、上面下半の B 面にも 100 × 45cm平滑面に船の線刻画が描かれている。線刻面が天を向くため風雨に晒され、全体的に朦朧としている。船は全長 86cm、総高 40cmと A 面船の 2 倍近い大きさであるが、多くの線が入り乱れ部位が分かりづらい。先に見た A 面のようなシンプ



第 53 図　線刻石 1 実測図（1/20）

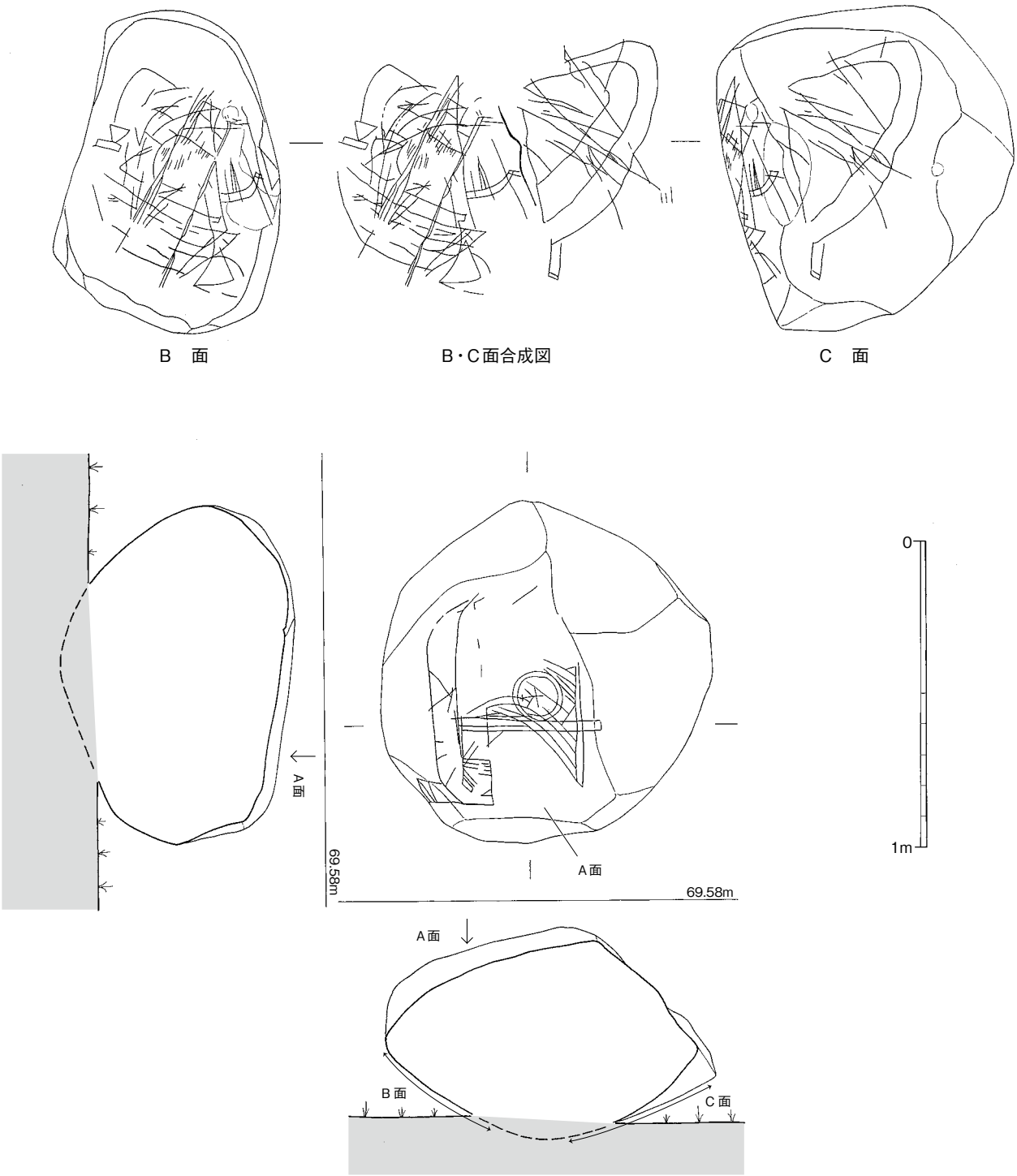


第 54 図　線刻石 1 A･B 面実測図・拓影（1/6）

ルな構図ではなく、複数の船が重なっている可能性もある。船は左側が尖り船首であろうか。右船尾はゴンドラ風である。胴部幅は20cmほどで、上縁部には帆柱状の垂線がいくつも立つが短く構造物としては把握できない。この垂線から10cm上に石頂部の稜があり、帆を描くカンバスが狭かったことも上半部が描かれなかった理由でもあろう。線の太さなどはＡ面と同じである。

線刻石２（第55～57図、図版31･32）

概要　最初に発見した線刻石１から東の里道を挟んで９ｍの標高68.7ｍの位置で発見し、線刻石２



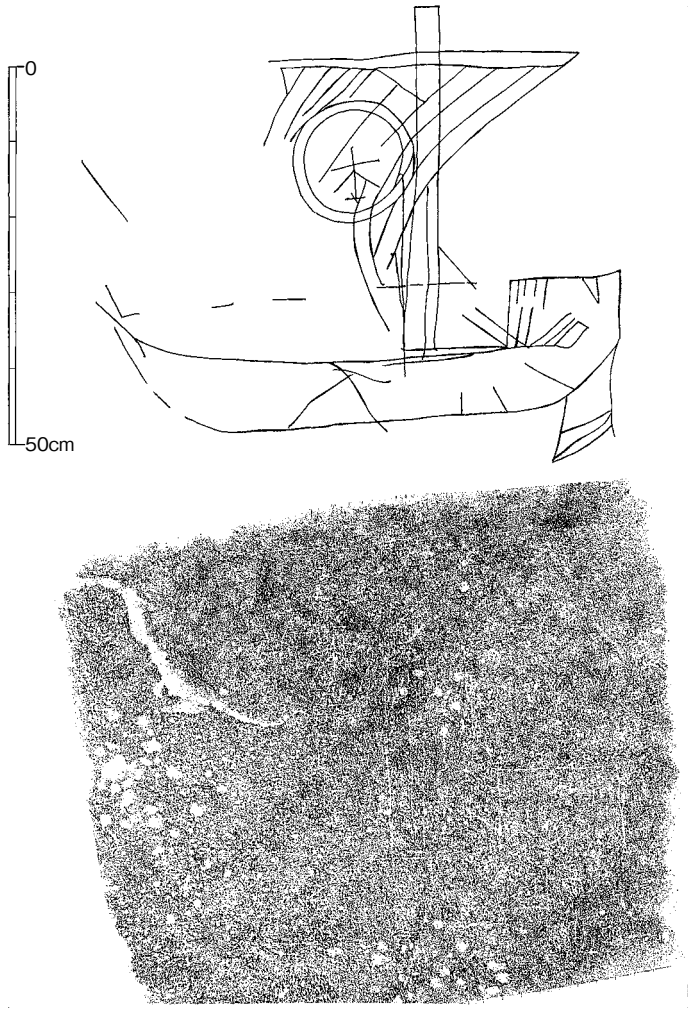
第55図　線刻石２実測図（1/20）

とした。発見時の線刻石は横位に座った状況で、平面は長さ1.2ｍ、幅1.1ｍの方円形であった。当初、西向き上面の船画（A面）のみと思っていたが、地中に埋もれた底面付近にも線刻があることが分かり、実測終了後観察のため東へ引き起こした。その際の計測では、長さ1.2ｍ、幅0.9ｍ、厚さ0.7ｍ、胴周り2.7ｍであった。重さは約1tという。底面は表土中に10cmほど埋没していた。安山岩の自然石で、加工はない。

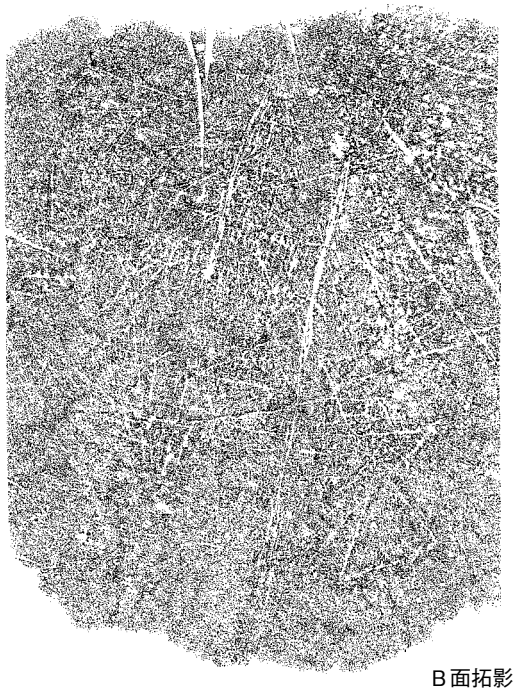
線刻石は5面体をなす扁平な大石で、うち3面に線刻画が描かれる。発見時上面にあった船画をA面とし、A面に対し底面にあたる面をB面・C面とした。ただ、B面画とC面画は個別に独立するのではなく、連続して描かれたようである。

以下、線刻石2の3面の線刻画について説明するが、第57図の実測図と拓影は船として見やすいように現場作成図を天地逆にしたもので、図面下段の図はB・C面の合成図であることを断わっておく。

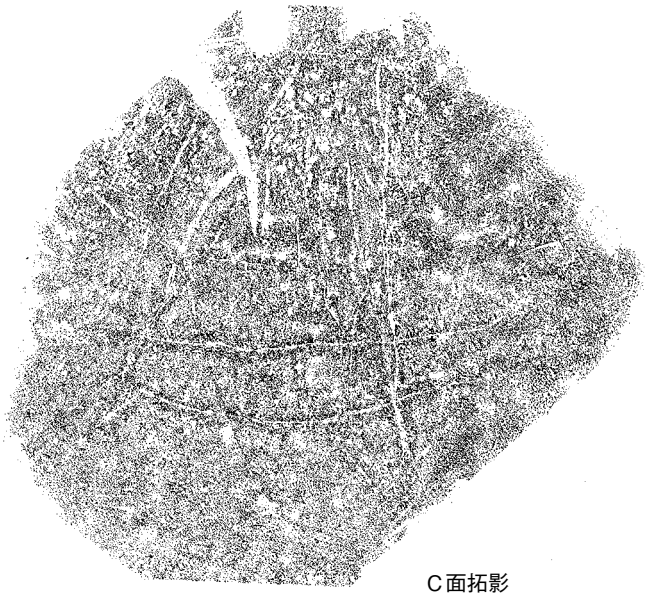
A面線刻画　A面は82×77cmの平滑面に帆を張った船が1艘描かれるが、上面であったため他の2面に比し線刻は風化し、見づらい。線刻は2～3mm幅と広いが彫りは浅い。船の全長は68.5cm、総高55cmで、胴部は上下二本線のみで表現され幅は10cmである。左端は細く尖り船首であろう。右端の船尾はゴンドラ風に立ちあがり幅広で、屋方風になる。船尾には台形状の舵が付く。胴部上縁右半に長さ47cm、幅3cmの太い帆柱が立ち、左に膨らんだ上端幅41cmの帆が描かれる。帆下半



第56図　線刻石2A面実測図・拓影（1/10）



B面拓影



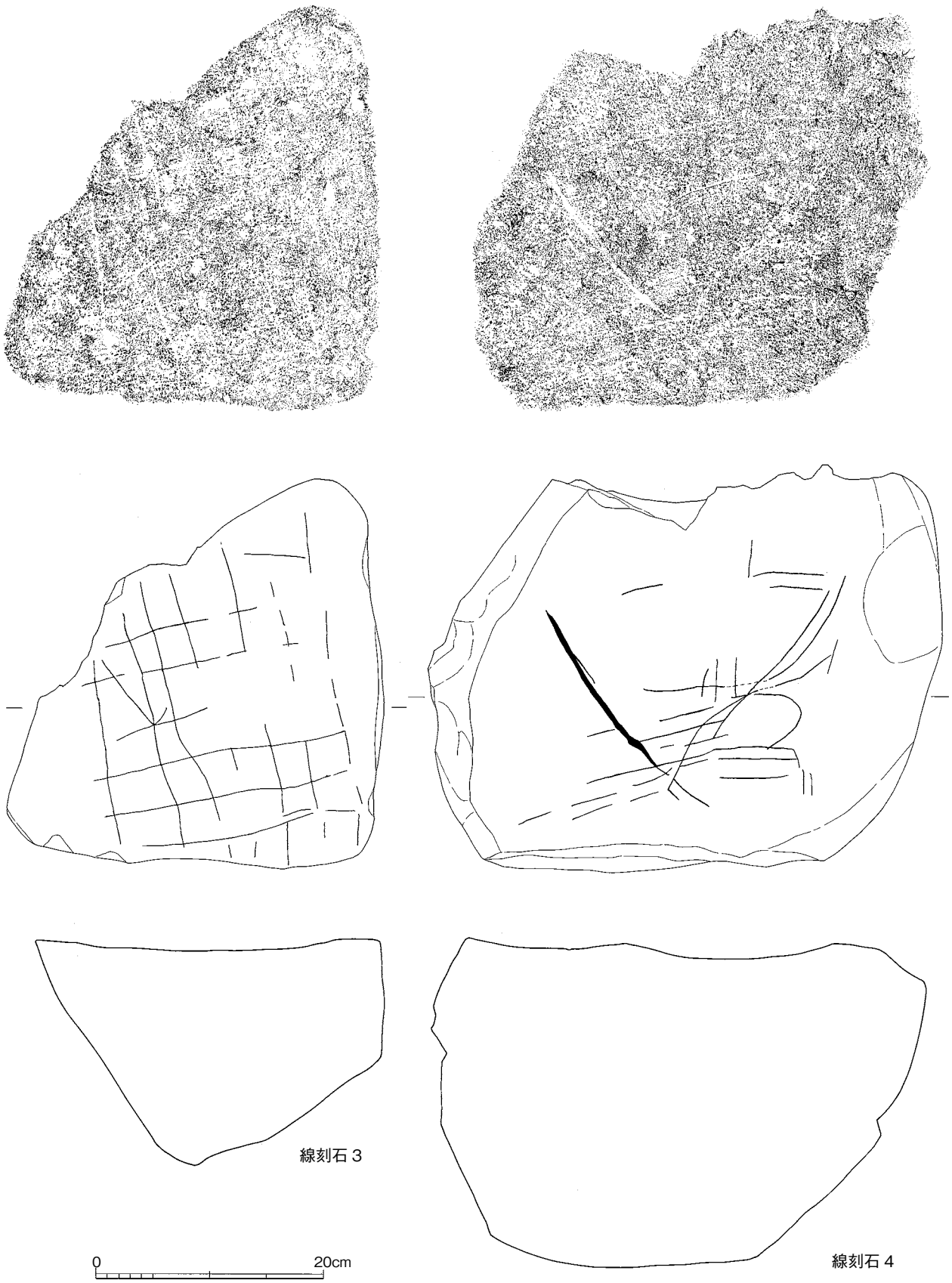
C面拓影

B面実測図

C面実測図

B・C面合成図

第 57 図　線刻石２B･C 面実測図・拓影（1/10）



第 58 図　線刻石 3･4 実測図・拓影（1/5）

は消えかかるが、中央には外径16cmの二重円の帆印があり、恐らく「木」と読める文字が円内に書かれている。文字長は6.5cmを測る。

B面線刻画　B面は地中に埋没していたためか風化が著しい。95 × 60cmの平滑凸面に描かれ、この位置での船は全長50cm、胴高15cmで、左向きに船首があり、船尾には三角形の大きな舵が付く。胴部には60cm超の帆柱らしき複線が2本15cm間隔で立つが、下端は船体を貫いている。帆柱周囲には左に膨らむ帆や操帆用の綱を表現する線もある。写実的なA面図と抽象的なC面図の中間的な表現の線刻画である。線刻の太さなどはA面と同じである。

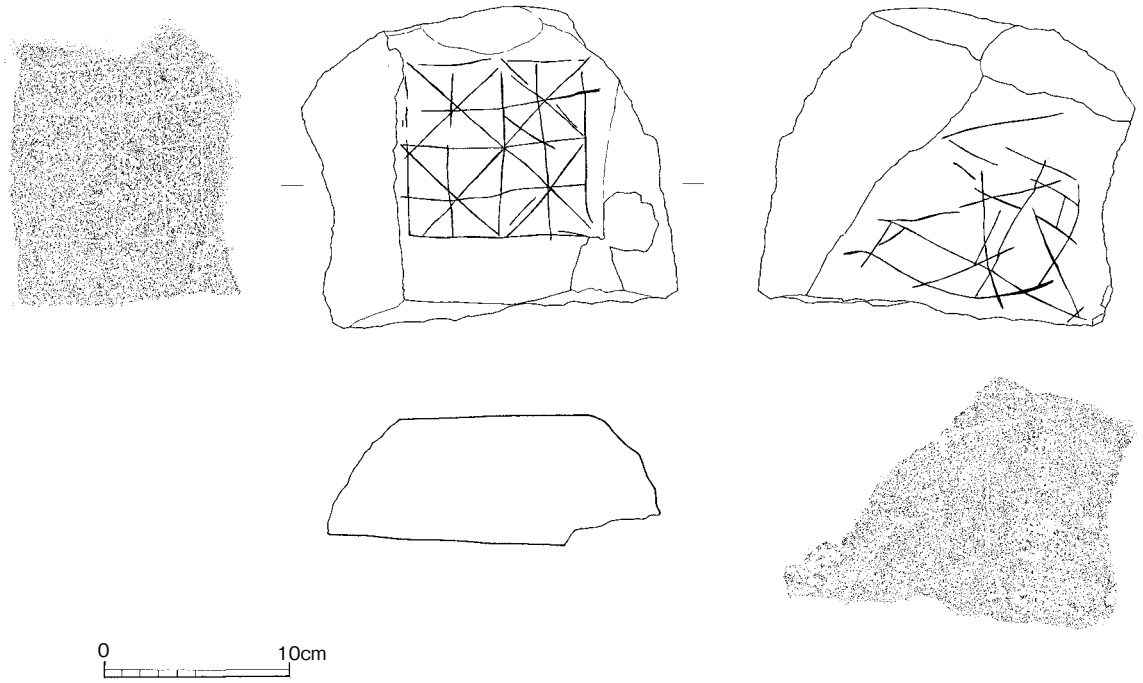
C面線刻画　C面は90 × 63cmの平滑凸面に線刻画が描かれ、他の2面に比し抽象的な表現である。この位置での構図は、右向きの船首が大きく反り返ったゴンドラ形の船に見える。とすれば左の船尾にあるのは舵であろうか。舵を除く船全長は72cm、総高70cm、胴高10cmとなる。胴部には帆や帆柱を表現するような軟弱な垂直線が10本近く立つ。線刻の太さはA面とほぼ同じである。また、B面とC面の境にも全長18cm、総高15cmの帆柱を立てたような小型ゴンドラ船が描かれている。

線刻石3（第58図、図版33）

線刻石3は標高67.8 m付近の里道に転がっていた。底辺0.42 m、高さ0.32 m、厚さ0.19 mの三角形板石で、断面は台形に尖り不安定である。灰白色の多孔質安山岩で、重さは30kg前後であろう。側面には新しい剥落面がある。石上面の平滑自然面に、25 × 21cmの外枠を描き、その中を縦横6～7本の線で区切って不整方形の格子目を作る。升目は6 × 6であろうか。ただ、図示した上・右辺は不鮮明である。線刻は幅1～2㎜で彫りは浅く、線も歪んでいる。

線刻石4（第58図、図版33～34）

5個の線刻石中最も低い標高60 mの斜面中腹道路用地境にて発見した（第28図）。側面には苔が生え半分埋没した状態であった。長さ0.42 m、幅0.34 mの方形板石で、厚さは0.29 mを測り、



第59図　線刻石5実測図・拓影（1/4）

重さは30kg前後であろう。黄灰白色安山岩の自然面に線刻しているが、側面の一部にはノミで割ったような黒灰色剥落面が4ヶ所ある。線刻は幅1㎜前後で、1本だけ4㎜幅の線が全体とは逆方向に引かれるが、風化度は変わらない。図柄は抽象的で、逆三角形の帆を張った船の印象だが、胴部は不鮮明である。船とすれば、全長約25㎝、胴部高4㎝で、逆三角形の帆は上端幅27㎝、上下17㎝を測る。

線刻石5（第59図、図版34）

線刻石2の北前面を発掘中出土した線刻石で、表土層から出土した。長さ0.18ｍ、幅0.16ｍ、厚さ0.07mの安山岩で、重量3.4kgを測る。台形をした板石の表裏二面に線刻がある、表A面とした平滑面には、一辺9.5㎝四方の正方形を縦横3本の直線で分割して4×4の升目とし、その升目に対角線を入れて各升を三角に区画した線刻石で、対角線格子文ともいうべき線刻石である。

裏面としたB面の線刻は、底辺16㎝、高さ13㎝の自然な三角面に描かれるが、凝視しないと気付かない。実測図は強調したものである。ただ、意識して見るとA面同様の構図に見える。外枠は9×9㎝で、方眼を切る線や対角線は途切れている。また、見方によっては全長13㎝、総高12㎝の三角胴体の船にも見える。線刻はA面より太いが浅い。

板石の表裏面は黄灰白色を呈する自然面で、図示した左辺と下辺は割れ口が灰色で新しいが風化は古い。自然石の二辺を割って方形に仕上げたものか。線刻は1㎜強で、彫りは深く明瞭である。

同じ格子文でも、線刻石3がフリーハンド状であるのに対し、この線刻石5表A面の格子文は定規で引いたような端正な線で、規格正しい構図の格子文線刻石である。

線刻石1取り上げ作業

4　中村西峰尾遺跡における自然科学分析

（1）放射性炭素年代測定

はじめに　放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素（14C）の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土壌、土器付着炭化物などが測定対象となり、約５万年前までの年代測定が可能である。

試料と方法　次表に、試料の採取箇所、種類、前処理・調整法および測定法を示す。

試料名	採取箇所	種類	前処理・調整	測定法
№1	上層，5-P2 土坑	炭化物	酸 - アルカリ - 酸洗浄	AMS
№2	36 杭付近，外郭土塁整地層下	炭化物	酸 - アルカリ - 酸洗浄	AMS
№3	上層，焼土坑	炭化物	酸 - アルカリ - 酸洗浄	AMS
№4	下層，土坑５東長方形土坑	炭化物	酸 - アルカリ - 酸洗浄	AMS
№5	下層，3'-P87 土坑	炭化物	酸 - アルカリ - 酸洗浄	AMS
№6	4-P3 土坑	動物骨	コラーゲン抽出，アルカリ洗浄	AMS

※ AMS：加速器質量分析法（Accelerator Mass Spectrometry）。

測定結果　加速器質量分析法（AMS）によって得られた 14C 濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素（14C）年代および暦年代（較正年代）を算出した。次表にこれらの結果を示す。

試料名	測定№（Beta-）	未補正 ^{14}C 年代（年 BP）	δ 13C（‰）	14C 年代（年 BP）	暦年代（較正年代）2 σ：95％確率
№1	359811	80 ± 30	-26.5	60 ± 30	Cal AD 1690-1730, 1810-1920, 1950-
№2	359812	2020 ± 30	-27.6	1980 ± 30	Cal BC 40 - AD 80
№3	359813	1220 ± 30	-26.1	1200 ± 30	Cal AD 720-740, 770-890
№4	359814	1230 ± 30	-24.9	1230 ± 30	Cal AD 690-880
№5	359815	1420 ± 30	-27.3	1380 ± 30	Cal AD 620-670
№6	360706	1260 ± 30	-24.4	1270 ± 30	Cal AD 670-780, 790-800

※① BP：Before Physics（Present），Cal：Calibrated，BC：紀元前，AD：西暦。

※②未補正 14C 年代：試料の 14C/12C 比から、単純に現在（AD1950 年）から何年前かを計算した値。14C の半減期は 5,730 年であるが、国際的慣例により Libby の 5,568 年を用いている。

※③デルタ δ 13 C 測定値：試料の測定 14C/12C 比を補正するための炭素安定同位体比（13C/12C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。試料の δ 13C 値を－ 25（‰）に標準化することで同位体分別効果を補正している。

※④ 14C 年代：δ 13C 測定値により同位体分別効果を補正して算出した年代。暦年代較正にはこの年代値を使用する。

※⑤暦年代（Calendar Years）：過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中 14C 濃度の変動および 14C の半減期の違いを較正することで、より実際の年代値に近づけることができる。暦年代較正には、年代既知の樹木年輪の詳細な 14C 測定値およびサンゴの U/Th（ウラン / トリウム）年代と 14C 年代の比較により作成された較正曲線（IntCal 09）を使用した。暦年代は、14C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した年代の幅を表し、ここでは信頼限界 2 シグマ σ（95％確率）で示した。較正曲線が不安定な年代では、複数の値が表記される場合もある。

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12=-26.5:lab. mult=1)

Laboratory number: **Beta-359811**

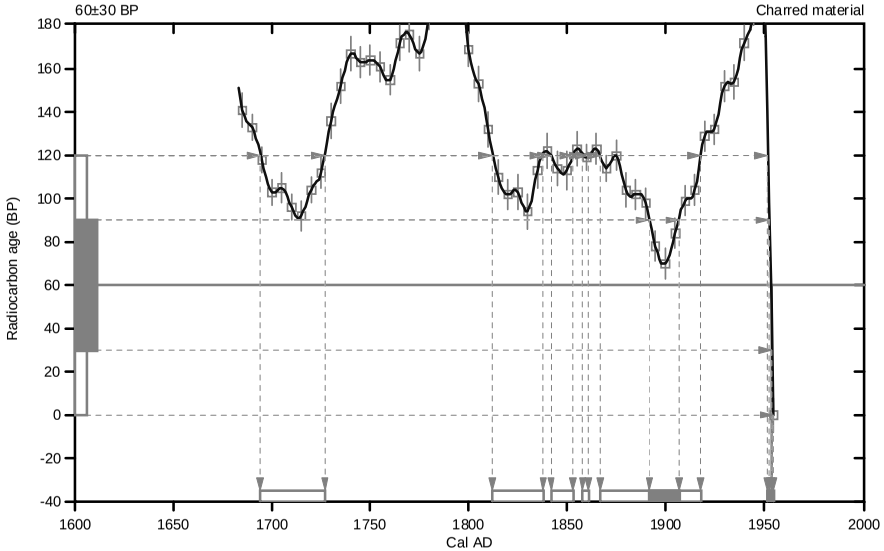
Conventional radiocarbon age: **60±30 BP**

2 Sigma calibrated results: **Cal AD 1690 to 1730 (Cal BP 260 to 220) and**
(95% probability) **Cal AD 1810 to 1840 (Cal BP 140 to 110) and**
Cal AD 1840 to 1850 (Cal BP 110 to 100) and
Cal AD 1860 to 1860 (Cal BP 90 to 90) and
Cal AD 1870 to 1920 (Cal BP 80 to 30) and
Cal AD Post 1950

Intercept data

Intercept of radiocarbon age with calibration curve: Cal AD Post 1950

1 Sigma calibrated results: Cal AD 1890 to 1910 (Cal BP 60 to 40) and
(68% probability) Cal AD Post 1950



References:

Database used

INTCAL09

References to INTCAL09 database

Heaton,et.al.,2009, Radiocarbon 51(4):1151-1164, Reimer,et.al, 2009, Radiocarbon 51(4):1111-1150, Stuiver,et.al,1993, Radiocarbon 35(1):137-189, Oeschger,et.al.,1975,Tellus 27:168-192

Mathematics used for calibration scenario

A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates
Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2):317-322

Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

4985 S.W. 74th Court, Miami, Florida 33155 • Tel: (305)667-5167 • Fax: (305)663-0964 • E-Mail: beta@radiocarbon.com

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12=-27.6:lab. mult=1)

Laboratory number: **Beta-359812**

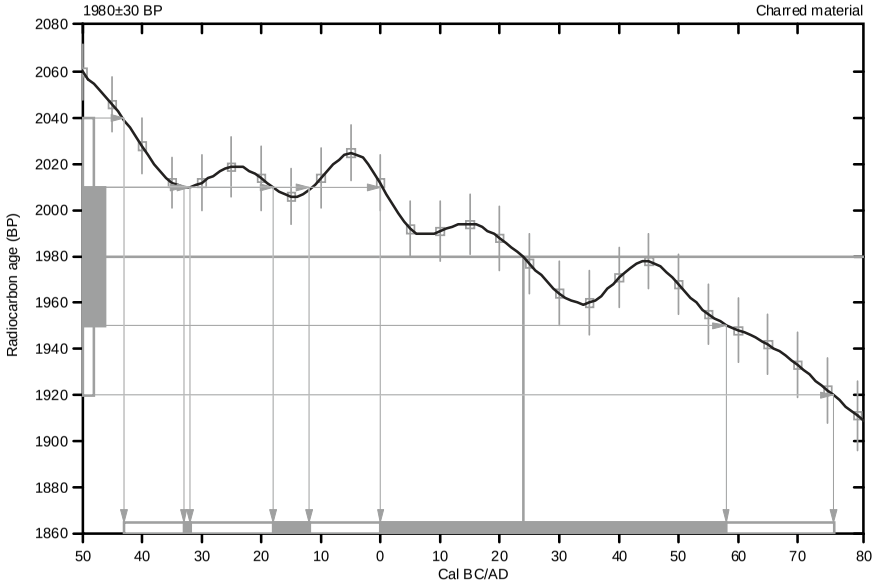
Conventional radiocarbon age: **1980±30 BP**

2 Sigma calibrated result: **Cal BC 40 Cal AD 80 (Cal BP 1990 to 1870)**
(95% probability)

Intercept data

Intercept of radiocarbon age with calibration curve: Cal AD 20 (Cal BP 1930)

1 Sigma calibrated results: Cal BC 30 to 30 (Cal BP 1980 to 1980) and
(68% probability) Cal BC 20 to 10 (Cal BP 1970 to 1960) and
Cal AD 0 to 60 (Cal BP 1950 to 1890)



References:

Database used

INTCAL09

References to INTCAL09 database

Heaton,et.al.,2009, Radiocarbon 51(4):1151-1164, Reimer,et.al, 2009, Radiocarbon 51(4):1111-1150, Stuiver,et.al,1993, Radiocarbon 35(1):137-189, Oeschger,et.al.,1975,Tellus 27:168-192

Mathematics used for calibration scenario

A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates
Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2):317-322

Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

4985 S.W. 74th Court, Miami, Florida 33155 • Tel: (305)667-5167 • Fax: (305)663-0964 • E-Mail: beta@radiocarbon.com

第 60 図　試料 1（左）·2（右）暦年代較正曲線

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12=-26.1:lab. mult=1)

Laboratory number: **Beta-359813**

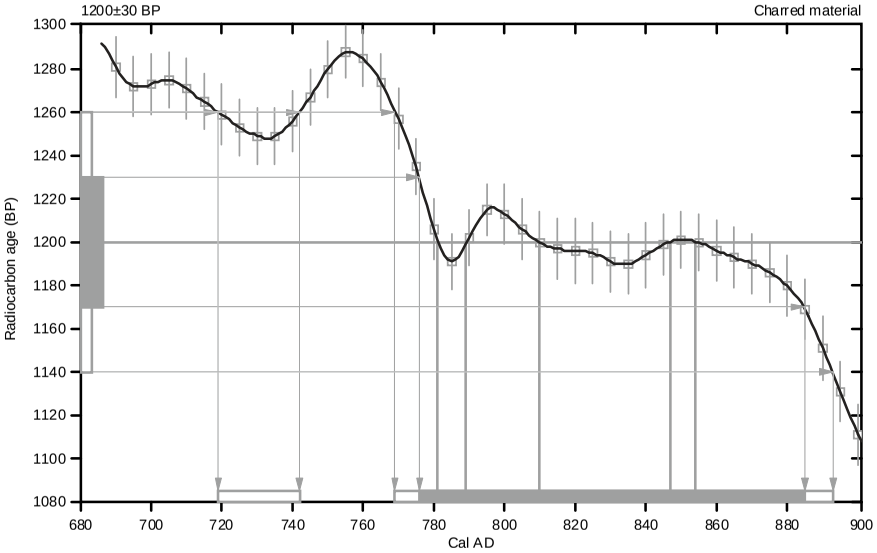
Conventional radiocarbon age: **1200±30 BP**

2 Sigma calibrated results: **Cal AD 720 to 740 (Cal BP 1230 to 1210) and**
(95% probability) **Cal AD 770 to 890 (Cal BP 1180 to 1060)**

Intercept data

Intercepts of radiocarbon age with calibration curve: Cal AD 780 (Cal BP 1170) and
Cal AD 790 (Cal BP 1160) and
Cal AD 810 (Cal BP 1140) and
Cal AD 850 (Cal BP 1100) and
Cal AD 850 (Cal BP 1100)

1 Sigma calibrated result: (68% probability) Cal AD 780 to 880 (Cal BP 1170 to 1060)



References:

Database used

INTCAL09

References to INTCAL09 database

Heaton,et.al.,2009, Radiocarbon 51(4):1151-1164, Reimer,et.al, 2009, Radiocarbon 51(4):1111-1150, Stuiver,et.al,1993, Radiocarbon 35(1):137-189, Oeschger,et.al.,1975,Tellus 27:168-192

Mathematics used for calibration scenario

A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates
Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2):317-322

Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

4985 S.W. 74th Court, Miami, Florida 33155 • Tel: (305)667-5167 • Fax: (305)663-0964 • E-Mail: beta@radiocarbon.com

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12=-24.9:lab. mult=1)

Laboratory number: **Beta-359814**

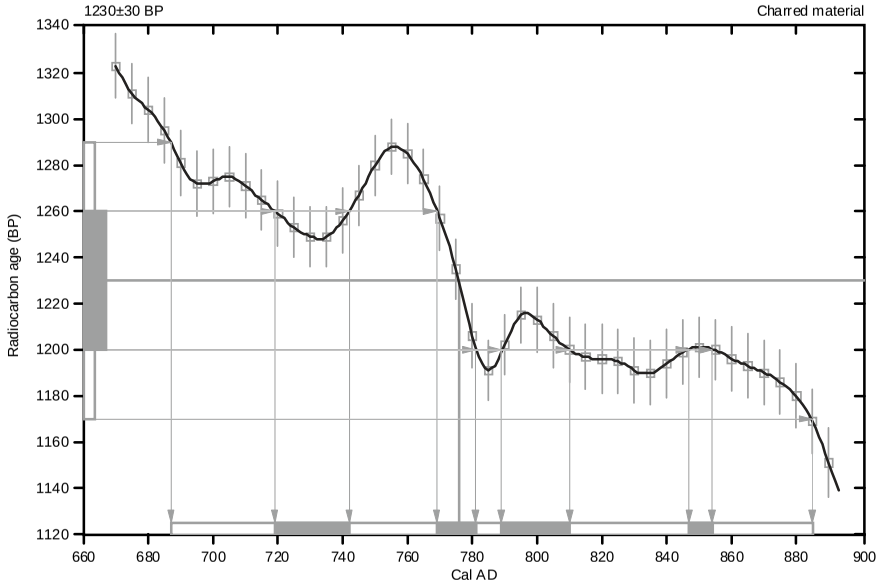
Conventional radiocarbon age: **1230±30 BP**

2 Sigma calibrated result: **Cal AD 690 to 880 (Cal BP 1260 to 1060)**
(95% probability)

Intercept data

Intercept of radiocarbon age with calibration curve: Cal AD 780 (Cal BP 1170)

1 Sigma calibrated results: (68% probability) Cal AD 720 to 740 (Cal BP 1230 to 1210) and
Cal AD 770 to 780 (Cal BP 1180 to 1170) and
Cal AD 790 to 810 (Cal BP 1160 to 1140) and
Cal AD 850 to 850 (Cal BP 1100 to 1100)



References:

Database used

INTCAL09

References to INTCAL09 database

Heaton,et.al.,2009, Radiocarbon 51(4):1151-1164, Reimer,et.al, 2009, Radiocarbon 51(4):1111-1150, Stuiver,et.al,1993, Radiocarbon 35(1):137-189, Oeschger,et.al.,1975,Tellus 27:168-192

Mathematics used for calibration scenario

A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates
Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2):317-322

Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

4985 S.W. 74th Court, Miami, Florida 33155 • Tel: (305)667-5167 • Fax: (305)663-0964 • E-Mail: beta@radiocarbon.com

第 61 図　試料 3（左）･4（右）暦年代較正曲線

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12=-27.3:lab. mult=1)

Laboratory number: **Beta-359815**

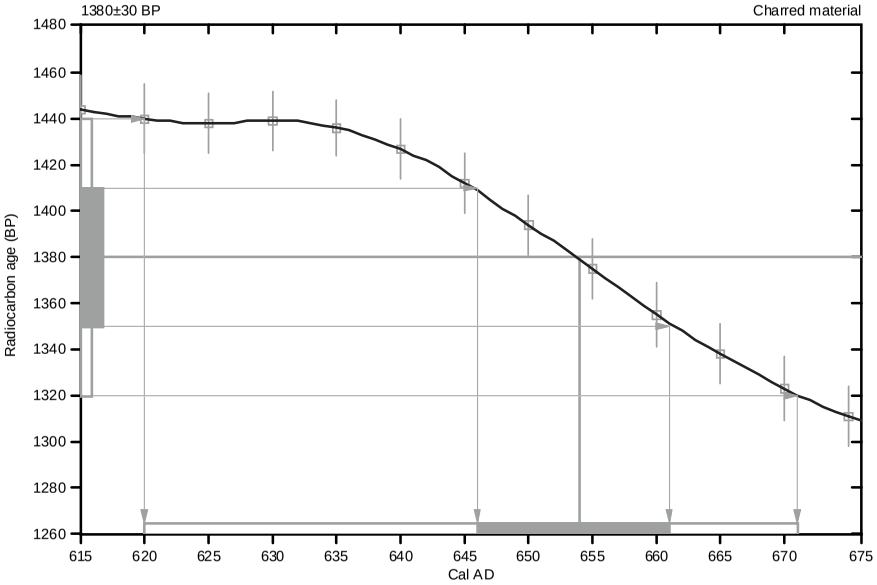
Conventional radiocarbon age: **1380±30 BP**

2 Sigma calibrated result: (95% probability) **Cal AD 620 to 670 (Cal BP 1330 to 1280)**

Intercept data

Intercept of radiocarbon age with calibration curve: Cal AD 650 (Cal BP 1300)

1 Sigma calibrated result: (68% probability) Cal AD 650 to 660 (Cal BP 1300 to 1290)



References:

Database used

INTCAL09

References to INTCAL09 database

Heaton,et.al.,2009, Radiocarbon 51(4):1151-1164, Reimer,et.al, 2009, Radiocarbon 51(4):1111-1150, Stuiver,et.al,1993, Radiocarbon 35(1):137-189, Oeschger,et.al.,1975,Tellus 27:168-192

Mathematics used for calibration scenario

A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates

Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2):317-322

Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

4985 S.W. 74th Court, Miami, Florida 33155 • Tel: (305)667-5167 • Fax: (305)663-0964 • E-Mail: beta@radiocarbon.com

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12=-24.4:lab. mult=1)

Laboratory number: **Beta-360706**

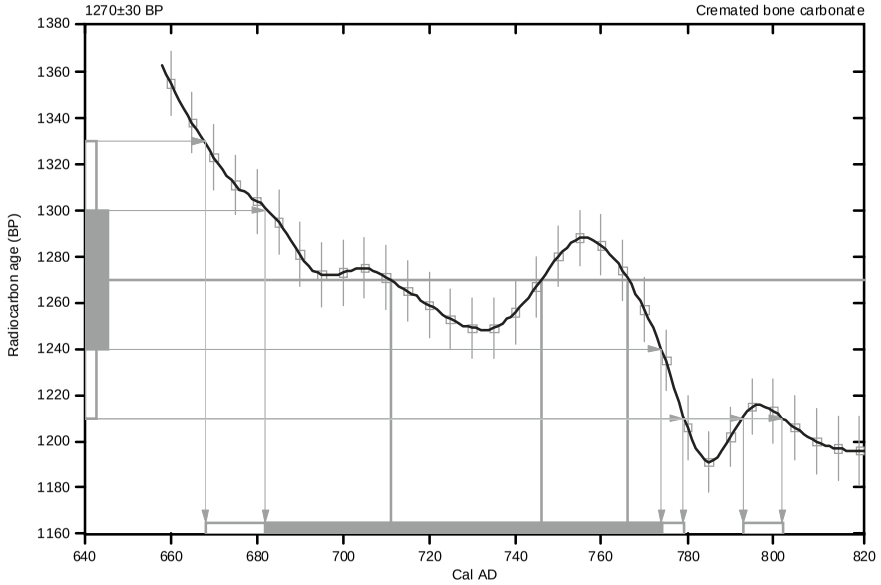
Conventional radiocarbon age: **1270±30 BP**

2 Sigma calibrated results: (95% probability) **Cal AD 670 to 780 (Cal BP 1280 to 1170) and Cal AD 790 to 800 (Cal BP 1160 to 1150)**

Intercept data

Intercepts of radiocarbon age with calibration curve: Cal AD 710 (Cal BP 1240) and Cal AD 750 (Cal BP 1200) and Cal AD 770 (Cal BP 1180)

1 Sigma calibrated result: (68% probability) Cal AD 680 to 770 (Cal BP 1270 to 1180)



References:

Database used

INTCAL09

References to INTCAL09 database

Heaton,et.al.,2009, Radiocarbon 51(4):1151-1164, Reimer,et.al, 2009, Radiocarbon 51(4):1111-1150, Stuiver,et.al,1993, Radiocarbon 35(1):137-189, Oeschger,et.al.,1975,Tellus 27:168-192

Mathematics used for calibration scenario

A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates

Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2):317-322

Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

4985 S.W. 74th Court, Miami, Florida 33155 • Tel: (305)667-5167 • Fax: (305)663-0964 • E-Mail: beta@radiocarbon.com

第62図　試料5（左）·6（右）暦年代較正曲線

所見　加速器質量分析法（AMS）による放射性炭素年代測定の結果、№1の炭化物では60 ± 30年BP（2 σの暦年代でAD1690 ～ 1730、1810 ～ 1920、1950年～）、№2の炭化物では1980 ± 30年BP（BC 40 ～ AD 80年）、№3の炭化物では1200 ± 30年BP（AD 720 ～ 740、770 ～ 890年）、№4の炭化物では1230 ± 30年BP（AD690 ～ 880年）、№5の炭化物では1380 ± 30年BP（AD620 ～ 670年）、№6の動物骨では1270 ± 30年BP（AD 670 ～ 780、790 ～ 800年）の年代値が得られた。№1や№4では暦年代の年代幅がかなり広くなっているが、これは該当時期の較正曲線が不安定なためである。

【参考文献】

Paula J Reimer et al., 2009 ‘IntCal 09 and Marine 09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP'. “Radiocarbon" 51.

中村俊夫「放射性炭素年代測定法と暦年代較正」『環境考古学マニュアル』同成社、2003年

（2）動物遺存体同定

はじめに　日本の国土は、火山灰に由来する酸性土壌に広く覆われており、高温多湿という気候からも動物遺存体の保存状態には恵まれていない。このため、ほとんどの遺跡では動物性または植物性の遺物は分解されて残っていない。遺跡から出土する動物遺存体は、例外的に消失を免れて取りあげられたものである。このような資料の蓄積により、その遺跡で生活していた人々の食生活や動物利用を解明する手がかりとなり、当時の自然環境やそれに適応しようとする人間の歴史を明らかにすることができる。

試料　試料は、4 － P3土坑から出土した動物遺存体である。写真図版に試料の写真を示す。

方法　試料を肉眼および双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生骨格標本との対比により同定を行った。

結果　結果は以下の通りである。

＜動物遺存体種名＞

脊椎動物門　Vertebrata

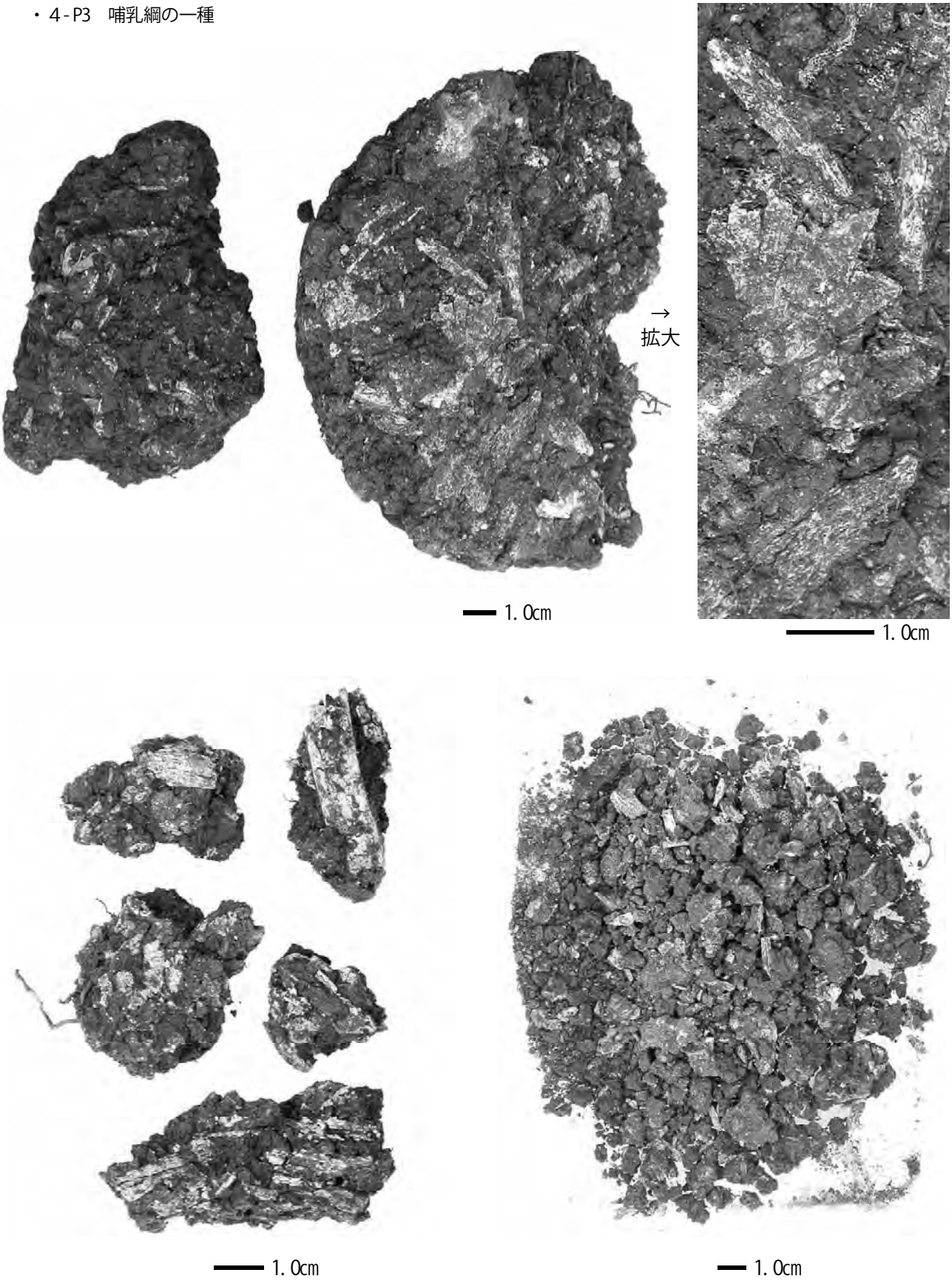
　哺乳綱　Mammalia

　　哺乳綱の一種　Mammalia fam., gen. et sp. indet.

所見　4 － P3土坑から出土した動物遺存体は、保存状態が悪いことから詳細な同定は困難であるが、骨質、大きさから人骨を含む大型哺乳類骨と考えられる。いずれも白色を呈しており、強く被熱した可能性が考えられる。

中村西峰尾遺跡の動物遺存体

・4-P3　哺乳綱の一種



第63図　中村西峰尾遺跡出土の動物遺存体

５　総括

（１）縄文時代の遺構と遺物について

上・下層の遺構や包含層などから出土した縄文土器は 20 余点の小片で、器形が復元できるものはなかった。そのうち 5 点が楕円形押型文土器で他は無文土器であった。図示した 3 点の押型文土器は、ともに小さい楕円文の横位方向の施文で、器壁は 1cm前後と厚い。無文土器も厚さ 1cm前後で、色調・胎土も押型文土器と変わらない。これら押型文土器は稲荷山式～早水台式相当の縄文時代早期中ごろの時期と考えられる。

少量の縄文土器に比し、剥片・砕片を含む石器の数は圧倒的に多量である。土坑など出土遺構が明確なものから表土や排土採取品まで数えると、実に 7,780 点にのぼる。製品としては、狩猟具としての 144 点と圧倒的に多く、そのうち縄文時代早期特有の基部の抉りが長方形をなす鍬形鏃が大半である。逆に加工･調理具のスクレイパーや石錐、環状石斧、凹石などは数点に過ぎない。また、石材別内訳では、純黒色の佐賀県腰岳産と思われる黒曜石が 5,672 点 73％と圧倒的で、次にサヌカイト 1,703 点の 22％が続き、安山岩 177 点、チャート・石英などその他は 198 点で 2％に過ぎない。さらに、指呼の距離にある大分県姫島産灰白色黒曜石は 30 点と極少である。まだこの時期には姫島産黒曜石への指向は希薄であったということであろう。

また、石器製作の素材となる石核はほとんどなく、剥片よりも砕片の方が圧倒的に多い。石器の製作ではなくその後半段階の作業を行っていたのであろう。剥片・砕片についてはさらに詳しい検討が必要である。なお、土器と石鏃を遺構面別に出土位置を落としたものが、上層の第 35 図と下層の第 41 図である。これによると、ほぼ調査区全域から満遍なく出土しているのが分かる。

一方、遺構としては、住居跡や屋外炉などの生活遺構がなく、土器の量も少ないこともから、定住的な居住地とはいえず、生活の場は丘陵下の低台地に求められるのであろう。他方、生産遺構の落とし穴と思われる深い円・方形土坑が尾根上で 11 基も発見され、石鏃出土数の多さと併せると、縄文時代早期の中村西峰尾遺跡は、狩猟活動の場所であったといえる。

（２）須恵器散布遺構について

方形区画内上層で出土した須恵器散布遺構の須恵器は、7 世紀末～ 8 世紀初頭の年代が考えられる。しかし、周囲にはその時期の遺構や、横穴式石室等の古墳の痕跡もなく、単独の出土であり、古墳墓前祭祀遺構との意義付けも難しい。一方、丘陵頂部にて発見された時期・性格不明の線刻石との関連も考慮しておかなければならない。

8 世紀を前後するこの時期は、古墳文化の終末期で律令国家への移行期でもある。さらに言えば、当豊前地方へ渡来人の進出と仏教文化の流入が始まる時期でもある。この時代の変革期にあって、今回発見した須恵器群は何の痕跡を物語るのであろうか。

（３）線刻石について

丘陵頂部にて 5 個の線刻石を発見した。いずれも東斜面里道に沿っての原位置を動いた状態での発見である。この辺に線刻石が動かされた理由があるのかも知れない。残念ながら、これら線刻石は年代比定と性格付けが未決着であるが、問題点を 2、3 挙げる。

線刻石を大きさから検討すると、石（以下、線刻石を石と略す）1･2 の移動困難な大形品、石 3･

4の移動可能な中形品、さらには携行可能な石5の小形品の3タイプに分けられる。大形品の石1には2面、石2にあっては3面に線刻があり、とくに、石2には3面の図柄がそれぞれ逆向きに描かれ、統一感がない。いずれにしても、大形品1・2は複数の面に線刻があり、石室内面を飾る装飾古墳の石材としては不向きである。また逆に、小形品の石5も板石で表裏2面に線刻があり、石室では使う場所が限られる。中形品は石室石材に適し、石室中位より上に積まれることになろうが、この個所にはあまり線刻は描かれない。

また、今回発見の石1・2同様に、複数の面に線刻した例も知られる。熊本県宇土半島は横穴式石室に船を描いた装飾古墳が多く存在するが、古墳の線刻石を城の石垣に転用したとされる宇土城三の丸出土の№3石材には2面に3艘の船が線刻され、「横穴式石室に用いられた石材としては、(中略）一方の船を正位置に置けば、もう一方の船は天地が逆になり、かなり不自然といわざるを得ない」と報告されている[(1)]。

いずれにしても、今回発見の線刻石は古墳石室に使われた可能性は低いと考えられる。ただ、隣町の上毛町（旧新吉富村）照日1号墳では横穴式石室の二次床面に石3～5のような線刻石使用の例が知られている。

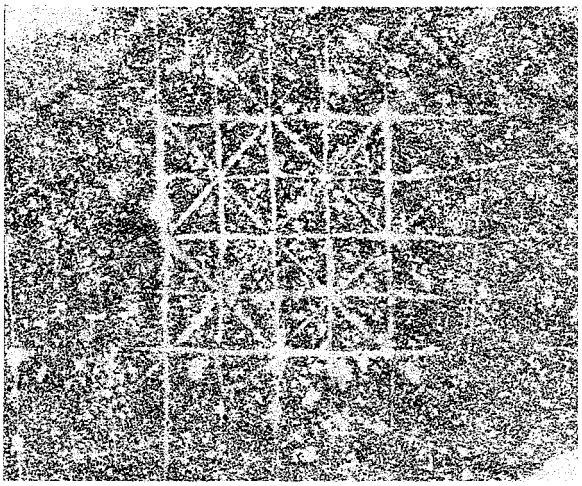
また、線刻図柄でいえば、石1・2の大形品は写実・抽象的に船を描き、石3～5の中小形品は格子文など幾何学文を描いている。少なくとも大形品と中・小型品は使い分けがあったのではなかろうか。さらには、同じ船でも石2A面のように帆印を掲げる新しそうな船もあり、すべてが同時期のものなのかも疑わしく、線刻石の年代比定を一層困難にしている。船図柄については、海運技術史からの検討も必要である[(2)]。

次に線刻図柄から検討する。船を描いた装飾古墳は全国各地で知られており、西山由美子氏作成一覧によると80基を数え、そのうち線刻画は50基弱で、九州での中心は長崎県壱岐島と熊本県宇土半島にあるという[(3)]。遠くは鳥取県でも11基ほどが知られている。福岡県内での船壁画は不明の1基を除き彩色画13基、線刻画5基で、地元豊前地区では至近距離の黒部6号墳がある。

黒部6号墳は複室の横穴式石室で、玄室左壁に帆柱や櫂を持った密集する5艘の船が、左玄門には大小2艘の船が、右玄門には靫かと思われる線刻画が描かれている。7世紀中葉の時期に比定されている。小田富士雄氏は「前面に広がる豊前海を航行する水運にかかわった被葬者の性格を示すもの」と解釈されている[(4)]。

当中村西峰尾遺跡が位置する周防灘に面する豊前・豊後には多くの古墳が存在するが、船を描いた線刻画古墳は前述の黒部6号墳と、当遺跡から55km離れた大分県国東半島北端の伊美鬼塚古墳の2例しかないのも興味深い。

また、線刻石3・5には格子文が描かれていた。格子文線刻は、大牟田市の倉永茶臼塚古墳群1号墳竪穴式石室の腰石や朝倉市小田茶臼塚古墳の腰石に、地元では前掲照日1号墳、上毛町山田1号墳、穴ヶ葉山1号墳などにもあり、照日古墳では、



第64図　富山市公卿石線刻拓影
（富山市考古資料館紀要より転載）

二次床面使用礫とは別の採取礫にも格子文が描かれていた。さらに、彩色ではあるが、近年発見された宮若市の損ヶ熊古墳は横穴式石室奥壁上半に赤で４×３の方眼を描き、縦横斜めの線で方眼の対角線としているという[5]。また最近では、小郡市花立山穴観音古墳横穴式石室の玄室・前門の６ケ所に格子文・斜格子文線刻画が描かれていたことが追認され、玄室・玄門に集中することから、報告者は、「死者の眠る墓室をこの呪術的図形で取り囲んで侵入者を寄せつけ」ないための「辟邪鎮魂のための敬虔な祈り」と解釈されている[6]。

一方、格子文線刻石は遺跡出土とは限らない。富山県では線刻石３・５そっくりの格子文線刻石が発見され、報告されている[7]。それによると、富山市本宮の立蔵神社境内に移築された公卿石と呼ばれる 1.86 m、幅 1.45 mの安山岩巨石の半折品で、この石上面いっぱいに６個の格子（升目）や、平行線などが描かれている。

最も明瞭な格子（64 図参照）は、「縦５本横５本の太い線による格子を描き、これで区画された４升目毎に、角を対角に結ぶ×印を加える。この線も格子と同様に太い。この４×４升目全体の大きさは、12.5㎝× 12.5㎝、升目は１辺 3.1㎝である」と報告されている。年代については明言されないが、中世以降を想定されているようで、巨石の「霊力を高めるために呪符的なゲーム盤文様を線刻したのではないだろうか」と述べられている。

富山公卿石の実物を見たわけではないが、地域の隔たり･作品の大小･年代不明などの違いはあっても、中村西峰尾遺跡線刻石５と富山例の方眼線刻文様はよく似ている。格子文線刻画解決の手懸りになれば、と思いここに紹介した。

以上、中村西峰尾遺跡出土線刻石は使用状況や目的・年代等について不明な点が多く、今一つ示唆するものがなかった。今後の検討課題も多い。

なお、小形品の石５を除く他の４個の線刻石は、豊前市教育委員会の配慮により豊前市埋蔵文化財センター玄関ホールに展示されている（110 ページ写真）。

（４）方形区画遺構について

発掘前の状況と地形測量図からの観察は方形区画遺構の項にて詳しく述べたが、ここでは、以下の３項目に分けて要約し、まとめとしたい。

①地形測量図から分かったこと

・方形区画遺構は、丘陵尾根頂部に、北半はコ字状に石垣基壇を築き、南は長さ 56 mの円周土塁で区切った３段の平坦面で構成される。
・平坦面と円周土塁との間には半径 25 m、幅８m、深さ 1.5 mの円周空堀がつくられる。
・方形区画遺構の規模は、南北長 114 m、東西幅 64 mで面積は 6,300㎡を測る。
・平坦面北半の上段面にも半径 15 ～ 16 mの低い円周の段がある。
・北の上段面円周コース面の標高は 69.75 m、南の空堀底標高は 71.35 mで、その高低差は 1.6 mと僅かである。東辺中央面は 70.75 m、西辺中央面は 71 mと高低差はあまりない。
・上段平坦面の東西二辺は 100 m弱の直線、南北二辺は半径 15 ～ 16 mの円周で、平面は長楕円形の走路状となる
・四辺がつくる長楕円形の走路は、テープによる略測では一周 222 mを測る。
・土塁の西半に基部を石で築いた幅１mほどの開口部がある。

・土塁開口部から南 20m の正面に一辺約 4 mのコ字状土塁が対峙している。

②発掘調査で分かったこと

・コ字状に三方を囲繞する石垣は、方形区画の境界と整地層平坦面の土留めを兼ねている。

・方形区画内上下層面での検出遺構は、8 世紀の須恵器散布遺構と縄文時代早期の落とし穴である。

・出土遺物は縄文時代早期の土器・石器と、8 世紀の須恵器で、それ以外は表土層からの出土が多い 18 世紀後半～近代の陶磁器である。

・上層面において、中近世の掘立柱建物などは検出されなかった。

・上層上段面で北周縁に沿った 10 間の柵列を検出した。この柵列は設置場所から方形区画と一体のものと考えられる。

③聞き取り調査から分かったこと

調査期間中、地元住民の方から競馬場に関する聞き取りを数回行った。

聞き取り 1　　豊前市中村在住の男性（昭和 6 年生）

・明治 34 年生れの父が山（筆者註：発掘をしている山のこと）には競馬場があったと言っていた。

・当時はまだ日豊本線は開通していなかった（筆者註：開通は明治 30 年）。

・小学生のころ「競馬んとこ」に遊びに行っていた。当時は平場で松茸狩りもした。

聞き取り 2　　築上町上ノ河内在住の女性（大正 11 年生）

・明治 30 年代生まれの父から「競馬んとこ」と聞いたことがある。

・旧椎田町浜宮や真如寺にもあったと聞いた。

・近年亡くなられた 90 代女性から、祖父が真如寺の競馬場を造ったという話をきいた。

聞き取り 3　　築上町上ノ河内在住の男性（昭和 5 年生）

・明治生れの父親が「馬とばし」を見に行っていたという。

・明治中頃のことか。戦時中で終わったのではないか。

・地元の人が娯楽のため馬を競わせていた。

・城があったという話は聞いたことがない。

・現地は檜林であったが、それは戦後のことで、子供のころは松茸狩りに行った

聞き取り 4　　豊前市中村在住の女性（昭和 10 年代生、旧土地所有者）

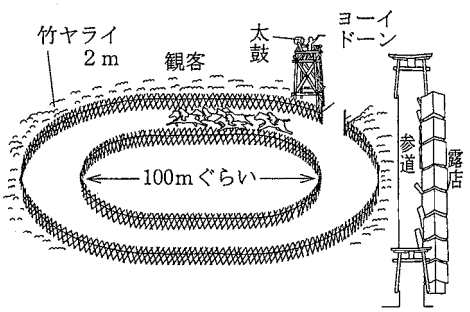
・明治 31 年生れの父から競馬場があったと聞いた。

以上が聞き取りの要旨である。いずれも 1 世代前であるが、親からの直接の口伝であり信憑できる話であろう。

それからすると、今回発掘調査を行った中村西峰尾遺跡の丘陵頂部にある方形区画遺構は、以下の理由により、明治時代中頃に作られた競馬場の跡と判断する。

イ、地元の言い伝えでは、明治時代に当該地では競馬が行われていたという伝承がある。

ロ、発掘前の現況では、方形区画遺構内の二辺をもつ長楕円形の平面は、一周約 200 mの走路の馬場



1 周500mぐらいといわれるが、はっきり分からない

浜宮の競馬

第 65 図　築上町浜宮の競馬
（椎田町史より転載）

と考えられる。

ハ、発掘調査で検出された柵列は、方形区画遺構の配置に沿ったもので、一体のものと考えられる。

さらには、近隣の市町村でも競馬あるいは流鏑馬行事が行われていた記録がある。『福岡県史民俗資料編』[8] では、みやこ町（旧豊津町）節丸菅原神社では 10 月のオクンチでヤブサミ（流鏑馬。馬とばせともいう）を奉納したとあり、築上町（旧椎田町）宇留津の須佐神社では、秋祭りにヤブサメ行事を行い、馬場は明治時代まではあったという。また、昭和 10 年代生れの地元男性からは、「旧豊津町役場にも競馬場があった。200 mほどの楕円形の土塁の外を走っていた」という話を伺った。近隣の築上町（旧築城町）小山田や上毛町（旧新吉富村）矢方にもあったという。

また、旧椎田町発刊の『椎田町史民俗編』[9] では、浜宮競馬として「大正五年ごろから昭和五年ごろまで、綱敷天満宮の例祭の時、前の広場で行われた。一周 500㍍ぐらいのコースに、2㍍ぐらいの高さの竹ヤライを作り、合図は太鼓でした。馬は農耕馬、くじ引きをひくと一等仔牛、二等鋤、鍬、三等鎌が当たった。各賞品は寄付で集めた。露店がたくさん出て賑やかだった」とあり、参考図も掲載されている（第 65 図）。

なお、参考までに福岡県編集の『福岡県統計書』から豊前市が属した築上郡の馬・牛飼育数を調べると、明治 16 年 2,163・660 頭、明治 30 年 2,721・1,738 頭、大正 10 年 2,075・2,150 頭、昭和 11 年 2,556・2,683 頭と多くの馬牛が飼われ、明治期には圧倒的に馬が多いのが分かる。

こうした馬を飼育し、農耕馬として使う農家の人達により地域毎に競馬が催される中で、常設の場としての競馬場が求められ、造られたものであろう。中村西峰尾遺跡で発見された方形区画遺構は正しく「1 周 200 m余の楕円形馬場をもった競馬場跡」であると推断する。ただ、今日のような近代競馬ではなく、娯楽を目的とした草競馬であったことは『椎田町史』が語る通りである。

なお、こうした草競馬場跡が全国各地に残っている。一例として、埼玉県東松山市妙安寺に残る競馬場跡について、小林梅次氏による報告を長文ではあるが一部引用する[10]。「観音様の縁日には前記三山（筆者註：埼玉県東松山市妙安寺・静岡県小山町円通寺・栃木県馬頭町馬頭院）の場合でも草競馬があり、縁日の盛り上がりはこの競馬がいやがうえにも盛んにしたことは事実で、その馬場が前記成安寺には、ほとんど原形のまま残っている。広大な境内の一角に池をめぐるコースになっていて、幅 2 メートル余、長さ 200 メートル弱ほどのもので、今でも除草など少しの手入れで使用できそうである。他の二山でも馬場跡の存在が伝承されている」と紹介されている。

あちこち探せば、まだこうした草競馬場跡の新たな発見がありそうである。今後多くの事例が増え、改めて検討されることを期待したい。

ちなみに、江戸時代末期の文久 2 年（1862）に外国人によって横浜で行われた競馬が洋式競馬の始めとされ、円形の馬場が造成されたという。また、明治 3 年（1870）の東京招魂社（現在の靖国神社）で競馬が行われ、これが日本人の手による近代競馬の発祥とされている。

（5） C 14 年代測定分析結果について

今回出土した炭化物のうち、遺構の年代を押さえられそうな炭化物を抽出してC 14 年代測定を依頼した。その結果報告は別項に掲載しているが、依頼者が期待したのとは異なる測定結果が報告された。依頼者が期待したものは、①競馬場の年代、②上・下層遺構面の年代、③ 外郭土塁の年代であった。試料 1 は近世～近代とおおむね妥当であるが、試料 2 の示す弥生時代の年代の遺構や

遺物の出土はない。他の4点はいずれも7世紀中ごろ～9世紀末の年代を示している。調査では、須恵器散布遺構の須恵器が7世紀末～8世紀初頭で、この範囲に収まるが、それ以降の遺構や遺物の出土もなかった。とくに、下層遺構面出土の炭化物は縄文時代早期の数値を期待していたので意外な分析結果であった。

【註】

(1) 高木恭二・木下洋介「宇土半島基部の線刻を有する古墳」『うと学研究』31号　宇土市教育委員会、2010年

(2) 帆印は、近世前期以降の莚帆から木綿帆への移行で普遍化したもので、民間廻船では大名船の家紋と紛らわしい屋号の船印は使用せず、黒の縦の線を基調とするものが主流をしめた、という（『国史大辞典』吉川弘文館、1991年）。また、江戸時代後期に関するかぎり「丸にやの字」といったような、多分に紋章的な帆印は使われていなかったと断定してさしつかえない、という指摘もある（石井謙治『図説和船史話』至誠堂、1983年）。

(3) 西山由美子『装飾古墳の展開』第51回埋蔵文化財研究集会発表要旨集、埋蔵文化財研究会、2002年

(4) 小田富士雄「「豊国」の装飾古墳」『風土記の考古学4　豊後国風土記の巻』同成社、1995年

(5) 小方良臣「筑前の装飾古墳」『考古学ジャーナル』№395、ニューサイエンス社、1995年

(6) 小郡市教育委員会、福岡大学考古学研究室『花立山穴観音古墳』小郡市文化財調査報告書第219集、2007年

(7) 岡田保造・古川知明「富山市本宮立蔵社境内公卿石にみる線刻符号」『富山市考古資料館紀要』第30号、富山市考古資料館、2011年

(8) 福岡県『福岡県史　民俗資料編　ムラの生活（下）』1988年

(9) 椎田町史編纂委員会『椎田町史民俗編』椎田町史編纂委員会、2005年

(10) 小林梅次「南関東における馬の民俗」『神奈川とその周辺における馬の民俗調査（1）神奈川・静岡篇』財団法人馬事文化財団、1994年

【参考文献】

根岸競馬記念公苑『明治・横浜・車馬のにぎわい』、1986年

馬の博物館『文明開化と近代競馬』、2009年

線刻石1現況（於　豊前市埋蔵文化財センター）

Ⅵ　中村山柿遺跡第 2 次調査の報告

1　遺跡の概要

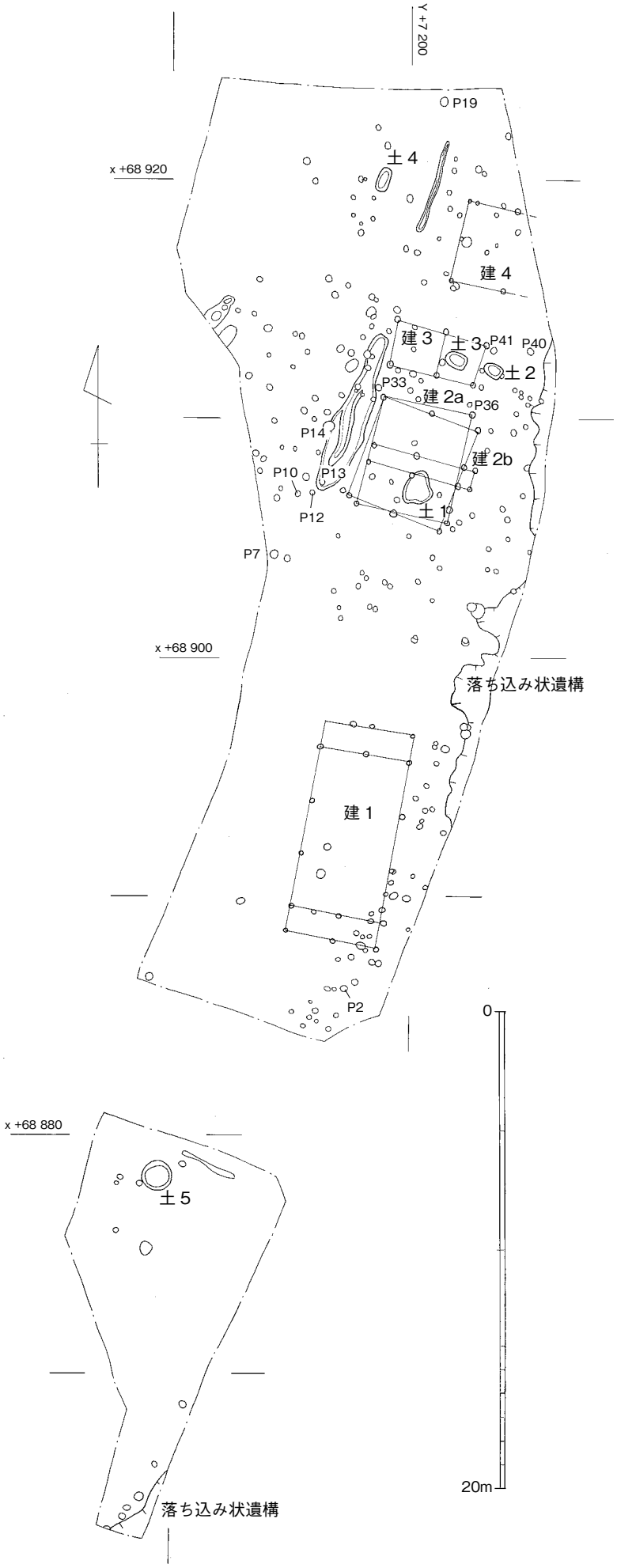
遺跡の立地　中村山柿遺跡は、豊前市の西端部から築上町の南部にかけて広がる尾根状丘陵と谷底平野の連続する地形の中にあり、谷底平野を流れる小河川である角田（すだ）川西岸の丘陵裾部に展開する段畑の最下段に立地する（第 25 図）。もとは丘陵東側裾部に広がる狭い緩斜面を形成していたと考えられる。

遺跡を取り巻く歴史　遺跡の北約 200m 付近で北西から南東に谷を横切るように走る国道 10 号線椎田バイパスの建設時には、縄文時代後期の集落跡である中村石丸遺跡（福岡県教委 1996）や、弥生時代後期・古代前期の集落跡である中村団後遺跡（福岡県教委 1994）が発掘調査され、古くから開発が行われたことが知られた地域である。

角田川の流域は中世になると角田荘に属したとされ、遺跡の対岸、直線距離で約 350m ほどのところに角田荘の中心地とも目される角田八幡神社がある。社伝には貞観元年（859）に当地の土豪により勧請されたとあるが、『宇佐宮神領大鏡』によれば角田荘は式年遷宮にあたる長元 4 年（1031）に宇佐宮が各地に散在していた御封田を交換して成立させた荘園とされること、また貞観年代というのも石清水八幡宮が勧請された年で各地の八幡宮がこの頃の勧請を社伝に記すことなどを考え合わせれば、八幡宮の勧請はおそらくは宇佐宮の荘園と化した 11 世紀頃の出来事であったのではないかと推測される（豊前市 1991）。平安時代に編集された『大鏡』によれば、中世の角田荘は「角田荘四至　東限大堺　南限山　西限上松　北限海」と記されており、その範囲に現在の築上町石堂・上ノ河内までを含んでいたことがわかる。また、大堺とは築城・上毛郡境を指すといい、角田荘がその西側に広がることから、当時は築城郡に含まれていたことは明らかで（豊前市 1991）、先述の福間菜切古墳群出土須恵器の特徴にも示されるように、築城・上毛郡境は時代によって揺れ動いていたのであろう。

また、角田八幡宮の南に隣接して則行城跡がある。元は関東下野国の御家人であり、源義経一派の征討に際し功を挙げ豊前に所領を得た宇都宮氏の分家筋とされる仲蜂谷氏の里城（居館）とされ、最近まで堀跡が残されていたという。仲蜂谷氏の居城は馬場城といい、角田西岸に南北に延びる丘陵の高所に築かれた城跡が今も残るほか、同じ丘陵の先端部には馬場城の出城である鳥越城も立っている（現在は遺構はほとんど残っていないとされるが、角田川に架かる橋にはいまも「城鼻」という地名が残されている）。遺跡の北には角田手永大庄屋屋敷跡があり、近世の石垣が今も残る（豊前市 2000）。

遺跡の概況　中村山柿遺跡は角田八幡神社の対岸にあり、圃場整備事業に伴い発見され、第 1 次調査が行われている（豊前市教委 2007）。平安時代末～鎌倉時代前半（12 ～ 13 世紀）のピット群が出土しており、報告では建物は復元されていないが中世を主体とした集落跡が広がっていたものと考えられる。遺跡の北側に点在し、同じく圃場整備事業に伴い発掘調査された中村ヒバル遺跡・中村屋敷田遺跡などとともに、中世角田荘を構成する集落跡と考えられる。今次調査区は 1 次調査の南西にやや離れた場所に位置するが、やはり第 1 次調査と同じく 12 ～ 13 世紀の掘立柱建物跡などからなる集落跡が出土した。



第 66 図　中村山柿遺跡第 2 次調査区遺構配置図（1/250）

２　調査の概要

遺跡の所在　中村山柿遺跡第２次調査地点は、豊前市中村 141-1･157-2 に所在し、第１次調査地点の南西約 100m ほどの場所に位置する。

調査の着手まで　今次調査は、東九州道の建設予定地内における埋蔵文化財の照会がネクスコ西日本株式会社中津工事事務所より福岡県教育庁総務部文化財保護課に対して行われたことを端緒とする。付近は当初より埋蔵文化財を包蔵する可能性が高い地点として、中津第７地点と仮称されてきたが、用地買収の進捗に伴い平成 21 年 10 月５～７日に角田川西岸の平地部から山裾にかけての試掘調査が行われた結果、平地部では削平が著しく遺構は残っていないものの、山裾の一部の区画についてはピットを中心とする遺構が確認された。これを受けて文化財保護課調査第二係により発掘調査が行われた。調査は小澤佳憲が担当し、平成 22 年 12 月８日より着手した。

調査地周辺の状況　現地は山裾部に開かれた帯状の水田のうち最も低い位置にあたり、田面の標高は約 23m をはかる。調査地の東側は道路を挟んで一段落ちていて標高は 21.7m ほどしかなく、また調査地の北側も里道を挟んで一段低く標高が 22m ほどで、いずれも集落が広がっていたとしてもすでに削平されたと考えられる。また、西側は丘陵斜面を這い上がるように４～５段の帯状の棚田が広がっていたが、いずれも試掘調査によって明確な遺構を把握することはできなかったため、調査区付近での集落の残りはよくないものと考えられる。

調査の進捗　以上から、調査区は試掘調査により遺構が確認された豊前市中村 141-1･157-2 の２筆の水田を対象として行った。12 月８日より重機を用いて表土剥ぎを行い、12 月 15 日より人力を用いた調査に移行した。地山は黄～白褐色粘砂質土でまれに小礫を含み、背後の丘陵と同様の地質であった。遺構埋土は暗～黒褐色粘質土のものが多く、比較的容易に認識することが可能であった。

検出の結果４棟の掘立柱建物と土坑、数多くのピット群を発見したため、順次遺構の掘り下げに入った。時には雪もちらつく寒さではあったが作業は順調に進み、明けて１月 11 日には遺構の掘り下げをすべて終了した。その後空中写真撮影、記録作成作業を経て、１月 20 日には調査をすべて終えることができた。

出土遺構・遺物　調査した遺構には掘立柱建物５棟、土坑４基、溝・ピット群があるほか、調査区東側の道路に沿って地形の落ちを確認した。出土遺物は土器・石器などが少量で、パンケースに２箱ほどであった。

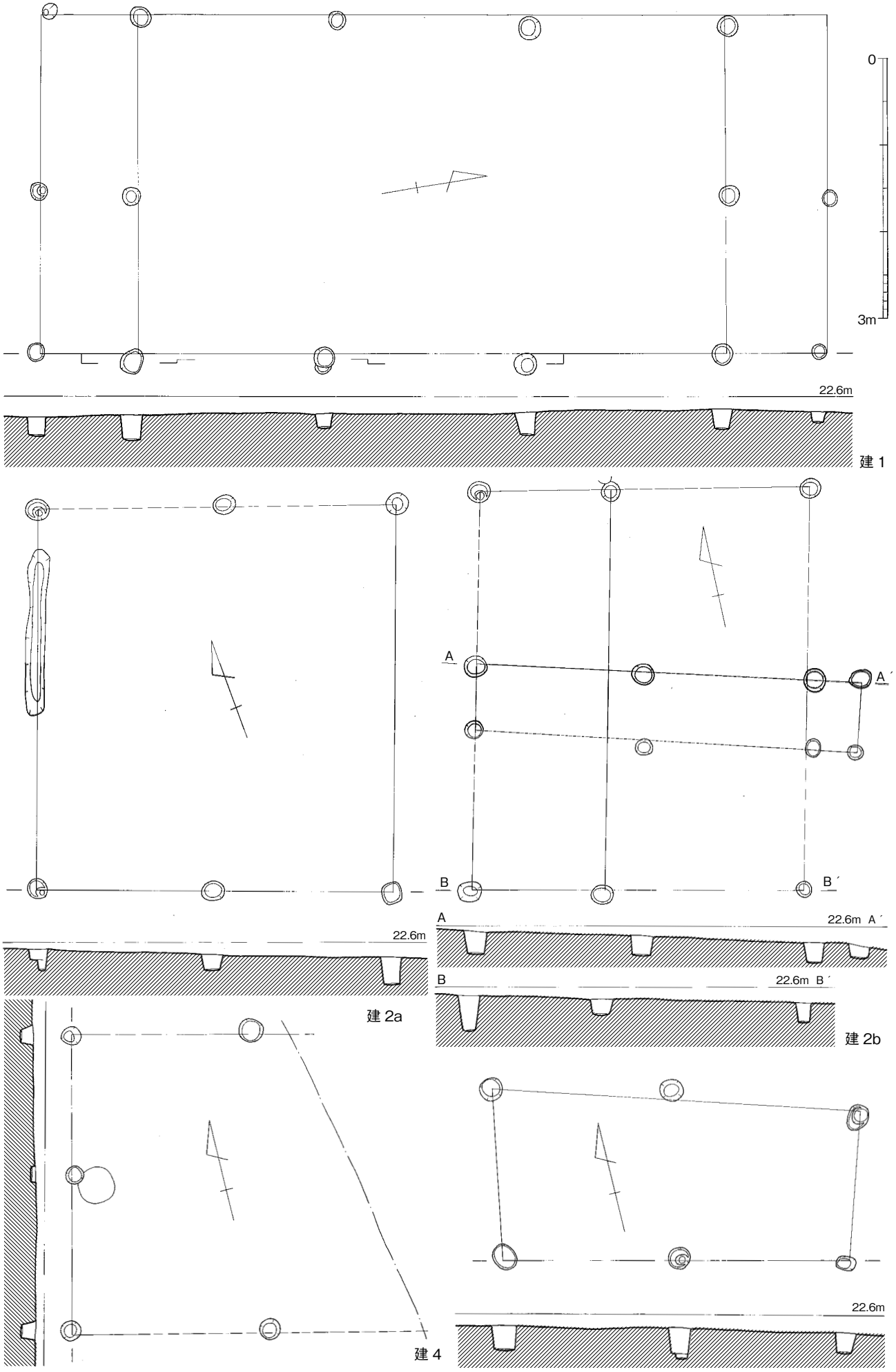
３　遺構と遺物

（１）概要（第 66 図）

調査地は南北に細長く延びた水田で、最大幅約 15m、長さ 60m ほどをはかる。北側 3/4 ほどと南側 1/4 ほどの間に幅 3m ほどの里道があり調査区が分断されたため、北側をⅠ区、南側をⅡ区として調査を行った。

地山は全体として東側にわずかに傾斜しているが、中程より西側は平坦になっていた。元々傾斜地であったのを水田耕作のために平坦にした際に、東側を盛土、西側を削平によりならした痕跡であろう。この結果、遺構の残りは調査区東半分の方がよく、主な遺構の大半は調査区中央から東側に分布する。

また、調査区の東端には道路に沿って不定形の落ち込みが連続していた。内部には人頭大の礫が



第 67 図　1 ～ 4 号掘立柱建物実測図（1/60）

多く包含されており、もとは石垣があったものが道路を整備する際に破壊されたものかもしれない。
発見された主な遺構は、Ⅰ区から掘立柱建物跡５棟・土坑４基・溝１条、Ⅱ区からは土坑１基、溝１条であった。以下、遺構の種別ごとに報告していく。

（２）掘立柱建物跡

Ⅰ区の全面にわたって数多くのピットが検出され、その中のいくつかは相互に組み合わさって掘立柱建物跡を構成していた。建物跡は４棟確認され、いずれも中央からやや東寄りにあるが、西側は削平が著しく、本来は西にも広がっていた可能性は高いと考えられる。建物跡に直接伴う出土遺物はないが、建物跡に復元できなかった数多くのピットからいずれも中世初期の遺物が出土しており、建物跡群もこれらと同じ時期の所産と考えてよいと思われる。

１号掘立柱建物跡（第 67 図、図版 43）

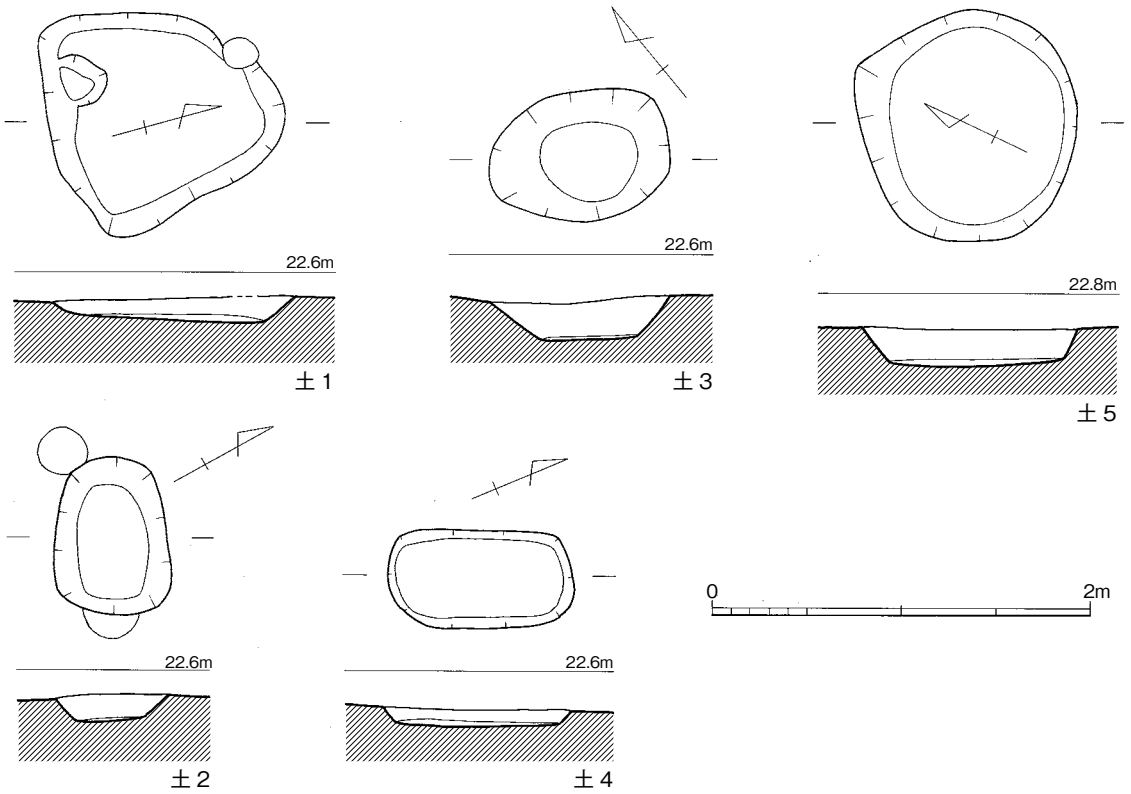
Ⅰ区南側で発見した。３間×２間の南北棟で南北に１間ずつの庇がつく。規模は桁行１間が約 220 ～ 225cmで総長が 675cm、梁行は１間が 180 ～ 202cmで総長が 390cm、庇の張り出しは 104 ～ 114cmをはかる。柱間寸法は比較的乱れていて、特に梁行は東側の１間がやや長く西側は短い、庇は南側が短く北側が長いといった傾向があるほか、柱の並びもやや出入りがある。柱穴の大きさはおおよそ直径 20 ～ 25cmほどで削平の少ない東側の柱列の方が径がやや大きい。遺存深さは浅く、せいぜい 30cm程度である。出土遺物はなく直接的に時期を示す手がかりはない。

２号掘立柱建物跡（第 67 図、図版 43）

Ⅰ区中央部で発見した。当初１間×２間の東西棟で南と東に庇がつく建物跡と認識していたが、調査中に周辺の柱穴の配置について再検討し、２間×２間で東に庇がつく建物跡と認識を改めた。ところが、報告書の作成中に柱の通りが悪く建物がうまく成立しないことに気づき、再度検討を行った結果、１間×２間の東西棟ながら南北の梁間が東西の桁行長とほぼ等しく、平面が正方形状を呈する建物跡（2a 号）と、２間×３間の南北棟でありながら梁行中央の間がせまく、やはり平面が正方形に近い形状を呈する建物跡（2b 号）の２棟が、ほぼ位置を重ね、一部の柱穴（の場所）を共有しながら建て替えられているという結論に至った。以下、この解釈のもとで２棟の建物跡それぞれについて報告する。

2a 号掘立柱建物跡　１間×２間の東西棟であるが、梁間（南北方向）の長さが桁行（東西方向）２間分の長さとほぼ等しく、平面形態が略正方形を呈する。規模は桁行が全長 410cmで１間が 200 ～ 210cmをはかり、梁行は１間で 460 ～ 480cmをはかる。梁行１間が桁行２間分の長さより短いことから、梁行の中央にもう１本柱が存在した可能性も考えたが、調査時には検出できなかった。ピットが建て込んでおり本来は存在したが確認できなかったものだろうか。そうであれば２×２間の建物跡となるが、決め手はない。

2b 号掘立柱建物跡　２間×３間の南北棟で、南北方向桁行の中央間が短いため、平面形状が正方形に近いやや長方形状を呈する建物跡。規模は桁行３間のうち南北２間が 160 ～ 200cm、中央間が 80cmをはかり、中央間の部分のみ東側に小さな庇がつく可能性がある。中央間は中心の２本が外側の柱と並行せずややずれているため、この部分のみが１間×２間の東西棟で東側に庇がつく、2b



第68図　1～5号土坑実測図（1/40）

号建物跡から独立した別個の建物跡である可能性も考えられるが、この場合の中央間部分の規模は、桁行が東西方向で192～198cm、梁行は74～80cmで、東側に付く庇部の張り出し長が約50cmほどとなる。なお、柱穴の埋土は2a･2b号建物を含めすべて共通していて、これを手がかりに建物跡を構成していた柱を区分けすることはできなかった。

なお、この建物に対する解釈は報告者も苦慮しており、ほかにいくつかの想定が可能なほか、本来調査区外（特に東側）に関連する柱穴などが存在している可能性もあり、新たな資料や解釈による見直しが必要であろう。出土遺物はなく直接的に時期を示す手がかりはない。

3号掘立柱建物跡（第67図、図版43）

Ⅰ区北寄りで発見した。2号建物跡と4号建物跡の間に位置する。1間×2間の東西棟で、梁行は170～198cm、桁行は1間が190～220cmで全長が400～424cmほどをはかる。柱間の距離は乱れていて柱の通りも悪く、大きくゆがんだ建物である。4号建物跡と大略並行に立つほか、2a号建物跡ともおおよそ並行する。出土遺物はなく直接的に時期を示す手がかりはない。

4号掘立柱建物跡（第67図、図版44）

Ⅰ区北東端部で検出した。現状では南北2間、東西1間のみが確認されるが、東側は調査区外に延びており、おそらく2間×2間以上の建物であろう。南北方向が1間160～180cm、全長340cmほどをはかり、東西方向は1間分のみだが210～230cmをはかる。やはり柱間距離にばらつきがある建物跡であり、柱穴も小さい。出土遺物はなく直接的に時期を示す手がかりはない。

（3）土坑

調査区からは4基の土坑が出土した。1～4号土坑はⅠ区にあって3号建物跡の近辺に集中しており、特に2～4号土坑は形状や規模が類似していて、同じ性格の遺構とも考えられるが、詳細は不明である。

出土遺物はごくわずかしかないが、一部の土坑から古代の遺物が出土しており、この頃に位置づけられるものであろうか。

1号土坑（第68図、図版44）

Ⅰ区中央やや北寄りで検出した。2号建物跡の柱の並びの中にあり、2b号建物跡の中央部にある幅の狭い柱の並びのうちの一つの柱穴に切られている。平面形態は複雑な形をしているが、深さが15cm程度しか残されておらず、本来はこれとはかなり異なった形状であっただろう。残存規模は長軸が120cm、短軸が100cm程度をはかる。出土遺物はなく時期は不明である。

2号土坑（第68図、図版44）

Ⅰ区北寄り、3号建物跡と重なる位置で検出した小型の土坑である。平面形態はややゆがんだ小判状を呈し、長軸約80cm、幅約60cmをはかる。残存深さは約20cmで底面はほぼ平坦である。埋土は一様で黒褐色粘質土からなる。

出土土器（第69図、図版46）

土師器（1）　1は土師器の甕である。口縁部付近のみが残る小片で、径や傾きにはやや自信がない。頸部が屈曲して口縁部は外反しながらわずかに湾曲する。古代に属するものか。

3号土坑（第68図、図版45）

2号土坑の東側に並ぶ、ほぼ同型・同大の土坑である。平面形態はややゆがんだ楕円形状を呈し、規模は長軸95cm、幅70cmほどをはかる。残存深さは約20cmで底面は平らである。埋土は2号土坑と共通し黒褐色粘質土である。出土遺物はなく時期は不明。

4号土坑（第68図、図版45）

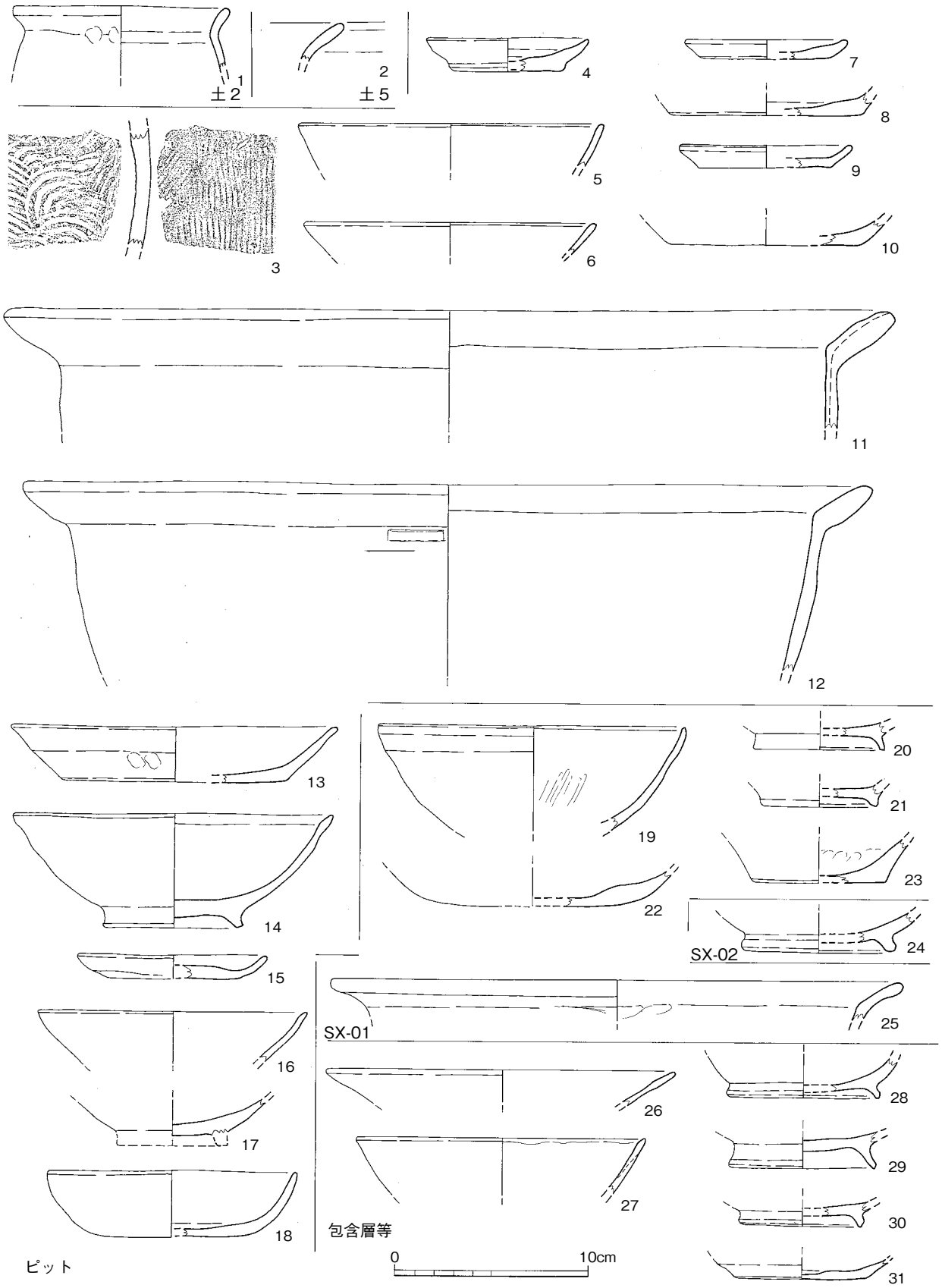
Ⅰ区北側、4号建物跡の西に位置する。平面形状はやや細長い小判状で、長軸100cm弱、短軸50cmほどをはかる。深さはかなり浅く10cm未満であり、大きく削平されているものとみられる。底面は平坦である。埋土は黒褐色粘質土からなる。以上の小土坑群は形状から土坑墓である可能性が考えられるが、それを裏づける資料はない。

出土土器（第69図、図版46）

土師器（2）　2は甕形土器の口縁部か。小片で径・傾きともに自信がない。外反して斜め上方に伸びる口縁部のみの残片で詳細は不明だが古代に属するものか。

5号土坑（第68図、図版45）

Ⅱ区北側で検出した。平面形態はゆがんだ円形で、直径は120cmほど、深さは20cmほどを測る。底面はわずかに船底状を呈する。埋土には若干の特徴があり、黒褐色粘質土を主体としながらも茶褐色粘砂質土（地山）のブロックが入ることから、一気に埋め戻された可能性がある。出土遺物は



第 69 図　中村山柿遺跡第 2 次調査出土土器実測図（1/3）

なく時期は不明。

（4）落ち込み状遺構（第 66 図、図版 42）

前述のように、Ⅰ・Ⅱ区のそれぞれ東側で、現在の道路に沿う形で不定形の落ち込みを検出した（第 66 図）。埋土は暗灰褐色粘砂質土を主体とし、大量の礫を包含しており、あるいは水田の東側を区画する石垣や溝などの施設が道路建設時に破壊され、埋め戻されたものとも考えられる。調査時には、Ⅰ区の落ち込みを SX － 01、Ⅱ区の落ち込みを SX － 02 としたが、一連のものであろう。形状も不定形であり、遺構についてはこれ以上詳細に報告することはしない。出土土器はいずれも中世のもので占められている。以下、出土遺物についてここで報告しておく。

Ⅰ区東端落ち込み（SX － 01） 内出土土器（第 69 図、図版 46）

土師器系土器（19 ～ 23･25） 19 は瓦器碗である。半球状に内湾しながら口縁部まで伸びる胴～口縁部片である。口縁部径は 13.0㎝をはかり、胎土は灰白色で硬質に焼成されている。器壁調整は外面と口縁部内面がナデ、胴部内面にはヘラミガキが認められる。

20 は土師質土器碗で、高台を有する底部の資料である。器形の全形は復元できないが、半球形の胴部を持つ。器壁は灰白色～灰橙色を呈しやや軟質で調整はナデ仕上げである。高台径は 6.8㎝をはかる。

21 は黒色土器で、内面のみが黒い、いわゆる黒色土器Ａ類である。外面の色調は明橙褐色で、調整は不明瞭だがナデの痕跡を確認できる一方明瞭なミガキ痕跡は認められない。高台部径は 6.2㎝である。

22 は土師質土器の坏である。底部のみ残存し、全体形状は不明である。底部はやや丸みを帯び、口縁部に向けて強く内湾しながら立ち上がる部分までが残る。胎土はやや軟質で灰白～灰黄白色を呈し、調整は全体にナデ仕上げ。

23 は壷形土器の底部、あるいは土師質土器坏または皿の底部であろうか。平坦な底部と明瞭に屈曲する胴底部境が残され、一見して弥生時代中期須玖式土器の壷底部にも見えるが、底部には糸切り痕跡があり中世の遺物と知られる。詳細は不明。

25 はやや大きめの甕形土器の口縁部片である。頸部屈曲部からわずかに外湾しつつ外に強く開く口縁部までが残る。器壁はナデ調整で、胴部内面には平たい工具を強くなでつけたような調整痕跡が認められる。口縁部径は 30.0㎝をはかる。

Ⅱ区東端落ち込み（SX-02）内出土土器（第 69 図）

土師器系土器(24) 24 は土師質土器碗で、高台を含む底部片である。高台の断面形状は太くて短い。焼成はやや軟質で胎土は内・外面とも橙黄色を呈し、調整はナデ仕上げ。高台部径は 8.0㎝をはかる。

（5）そのほかの出土遺物

遺跡から出土した多くのピットから、土器が合わせてビニール袋 1 袋ほど出土した。その大半は中世のもので、一部に古代のものが見られる。また、表土掘削時、遺構検出時、あるいは表採などでもやはり古代～中世の試料を多く採集した。いずれも本調査区に広がる遺構の所属時期を直接的

に示すものではないが、遺構出土土器が限られる以上これらを手がかりとして各遺構の所属時期を考えるほかないだろう。

ピット出土土器（第 69 図、図版 46）

須恵器（3） 3 は須恵器の大甕の胴部片である。小片で径・傾きともに不明である。内面に青海波紋タタキ、外面には並行タタキを施した後ナデ調整によりタタキ目を消す。古代の遺物であろう。Pit2 出土。

土師器系土器（4 ～ 18） 4･7･9･15 は土師皿である。いずれも器壁は摩耗しており調整は不明瞭だが、底部内・外面ともにナデ調整が見られる。またうち 9･15 の底部には糸切り痕が残る。4 は口縁部径 8.4 cmで Pit12 出土。7 は口縁部径 8.4cmで Pit7 出土。9 は口縁部径 9.2cmで Pit19 出土。15 は口縁部径 9.8 cmで Pit36 出土。

5 は黒色土器Ａ類の口縁部片である。やや内湾しつつ口縁部まで斜めに伸びる。器壁は摩耗しており調整は不明瞭だがナデ仕上げか。口縁部径は 16.0cm。Pit10 出土。

6･8･10･13･18 は土師質土器の坏で高台を伴わない。13 は底部が平坦で、鋭く屈曲して口縁部は外及しながら直線的に延びる。底部には糸切り痕を残し、器壁は灰褐色を呈し、調整は摩耗により明らかではない。口縁部径は 17.0cmをはかる。Pit33 出土。18 は底部は平坦だが胴部から口縁部にかけて緩やかに内湾するもので、底部径は境界が明瞭ではないが約 7cm、口縁部径は 13.2cmをはかる。底部は粘土紐による巻き上げ整形の痕跡が確認できる。器壁は内・外面ともに灰黄色を呈し焼成は軟質、全面にナデ調整が認められる。Pit41 出土。このほかは全形が不明なもので、6 は口縁部のみ、8･10 は底部のみが残る。いずれも器壁は明灰褐色を呈し表面調整はナデ仕上げ。6 は口径 15.2cm、8 は底径 9.8cm、10 は底径 10cmをはかる。6 は Pit13、8 は Pit19、10 は Pit27 出土。

11･12 は土師質の大型甕の口縁部片である。胴部はわずかに内湾しながら斜め上方に伸び、明瞭に外に屈曲して短く開く。胎土は橙褐色～暗褐色を呈し特に内面はススが付着したように黒色を呈する。胎土には黒雲母が多く含まれ、焼成は良好である。調整はナデで特に外面には平たい工具を強く押し当てた痕跡が認められる。11 は径 46.1cmをはかり Pit13 出土、12 は径 44cmをはかり Pit14 出土。

14･16･17 は土師質土器碗か。いずれも小片で径・傾きには不安がある。14 は比較的大きな破片で全形が復元でき、やや丸みを帯びた高台と半球形の胴部、短く外反する口縁部を有し、灰白色で軟質の胎土を持つ。調整は摩耗により不明瞭だが全体にナデ調整痕が認められる。口縁部径 16.8cm、高台部径 7.4cmをはかる。Pit36 出土。16 はわずかに内湾しながら斜め上方に伸びる口縁部のみが残る。灰褐色で軟質の胎土を持ち、器壁調整は全体にナデ痕跡が見られる。口縁部径は 13.8cmに復元した。Pit37 出土。17 は底部付近が残る資料で、高台部の形状は不明である。被熱により赤化し、外壁には剥離痕が多く見られる。口縁部径は 5.8cmほどに復元できよう。Pit40 出土。

包含層等出土土器（第 69 図、図版 46）

土師器系土器（26 ～ 31） 26 は器種不明だが甕、または土師質土器の坏口縁部であろうか。小片で傾きと径には不安が残る。器壁は薄く、ナデ調整にて丁寧に仕上げる。口縁部径は 18.2cmをはかる。

27･29･30 は黒色土器である。いずれも内面のみが黒い、いわゆる黒色土器Ａ類である。外面の

色調は明灰褐色～明橙褐色で、調整は不明瞭だがナデの痕跡を確認できる一方、明瞭なミガキ痕跡は認められない。27 は口縁部片で口縁部径は 15.2cmをはかる。29･30 は高台部を含む底部片で、高台部径は 29 が 7.6cm、30 は 6.4cmをはかる。29 の高台部断面形状が長細く、やや古い形状を示す。28 は土師質土器碗である。高台を有する底部片で半球形の胴部までが復元できる。器壁は灰白色を呈しやや軟質で調整はナデ仕上げ。高台部径は 8.0cmをはかる。

31 は土師皿である。口縁部を除く全形が判明する資料で、底部には糸切り痕跡が残る。

4　総括

中村山柿遺跡第 2 次調査では、平安時代末から鎌倉時代にかけての掘立柱建物からなる集落跡を調査した。第 1 次調査でも、掘立柱建物跡こそ発見していないが、数多くの柱穴とやはり古代末～中世前期の遺物が出土していることから、やはり同様の集落の一部を調査したと考えられている。いずれも、中世角田荘の成立前後の集落遺跡であり、おそらくは同一の集落の広がりの中に含まれるものとみられる。以下、今次調査の内容を振り返っておきたい。

今次調査で検出した主な遺構は、掘立柱建物跡と土坑である。直接的に所属時期を示す資料は多くはないが、遺構内から、あるいは遺構外から出土した土器の大半は中世に属するもので、一部古代後期のものも含んでおり、掘立柱建物跡の構造などからも、古代末～中世前期の集落の一部と見て間違いないだろう。

集落の立地を見ると､角田川から西側の丘陵にかけて標高を増す付近の丘陵裾部に立地しており、現在の集落が広がる付近と立地条件は共通する。1 次調査地はやや河川に近く低位河岸段丘上に立地していたが、今次調査地はそれよりもやや標高の高い丘陵裾部にあたり、洪水を避け、水田適地を耕作に確保しながら、集落を開発していった姿が復元できよう。

集落を構成する主な建物は掘立柱建物跡で、居住施設は掘立柱建物であったと考えられる。京築南部地域では、竪穴住居が古代の比較的遅い時期（9 世紀代）まで残存する現象が徐々に知られてきており、今回報告の中でも川内下野添遺跡などでそのような集落の姿が明らかにされている（後述)。しかし、中村山柿遺跡では竪穴住居跡は出土しておらず、本遺跡の成立時期である 11 世紀代には確実に掘立柱建物へと居住施設が移行していることがいえよう。

出土遺物の大半は小皿や椀などといった小型器種で、小片がほとんどであった。削平により浅い遺構の大半が失われ、この際に多くの遺物も失われたものとみられるが、それにしても残された遺物の構成が貧弱であり、1 次調査と比較しても舶来青白磁が見られない点でやや格差があるようにも見受けられる。中世角田荘の一部を構成する集落であり、角田八幡宮からほど近い箇所にあるとはいえ、付近は谷平野が面積を狭め、背後の丘陵が傾斜を増す地点にあたり、角田荘の中心部はより北側の低平地域に広がると見た方がいいのではなかろうか。そのように考えると、遺跡の対岸に位置するとされる中世の里城（館）である則行城や、角田荘の鎮守である角田八幡宮は、ともに集落の中では最も南側、つまり谷の最も奥側の一番標高が高い位置にあって、角田荘の村々を見下ろす立地にあったのかもしれない。周辺地域の歴史資料が増えるのを待って、検討を続けていく必要があろう。

なお、東九州道は中村山柿遺跡を南から北へ縦断するように破壊しており、付近の工事対象地はすべて試掘調査を行っているが、残念ながら遺構が見つかったのは今次調査地点のみであった。先

述したように、ほかの箇所では後世の削平により埋蔵文化財はすべて失われてしまった可能性が高い。ただし、南北に古くより残る家屋の下など、耕作等による削平が及んでいる可能性が少ない箇所については未だ埋蔵文化財が眠っている可能性もあり、今後の開発には注意が必要であろう。（小澤佳憲）

【参考文献】

豊前市教育委員会『豊前市内遺跡分布地図』、2000 年

豊前市教育委員会『中村山柿遺跡―県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ＸＩ（県営経営体育成基盤整備事業角田中部地区土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報）―』豊前市文化財報告書第 23 集、2007 年

豊前市『豊前市史　上巻』豊前市史編集委員会編、1991 年

福岡県教育委員会『中村石丸遺跡―福岡県豊前市大字中村字石丸所在縄紋時代遺跡の調査―』一般国道 10 号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告第 8 集、1996 年

福岡県教育委員会『団後遺跡・西一丁田遺跡・炭山遺跡―福岡県豊前市所在遺跡の調査―』一般国道 10 号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告第 3 集、1994 年

Ⅶ　松江黒部遺跡の調査の報告

１　遺跡の概要

周辺の環境　松江黒部遺跡は豊前市西端部に広がる尾根状丘陵と谷底平野の連続する地形の中にあり、西の角田（角田川）・東の川内（中川）の両地区に挟まれた丘陵上に位置する。角田地区・川内地区がそれぞれ谷を流れる河川の解析・堆積作用によって狭いながらも奥行きのある谷平野を形成しているのに対し、松江地区では谷筋を流れる舟入川の規模が小さいため流域の谷平野はほとんど発達していない。このため、松江地区の集落は丘陵に挟まれ、本来の海岸に面した狭い内湾部沿岸や丘陵末端部に刻まれた狭く短い谷部、あるいは地区の両側を遮る丘陵上を早くから開発してきた。

しかし、これらの丘陵の上は、古墳時代に営まれた墓地が広がる場所でもあった。遺跡の西隣の尾根上には先端部に黒部古墳群（豊前市教委 1979）、東側斜面に黒峰尾古墳群（豊前市 1991）が営まれて､開発による破壊を免れた古墳群の一部は今も集落の中に県指定（黒部古墳群）・市指定（黒峰尾古墳群）史跡として残されている。

また、舟入川が流れる小さな谷部に形成された内湾地形には今も地名・川名に「舟入」の語が残されている。背後の丘陵にある黒部古墳群では、市域では珍しい装飾古墳が見つかっており（黒部 6 号墳）、その線刻壁画の題材の一つとして大小の船が描かれていることは、この地が西側をのびる丘陵に遮られた天然の良港であったことを物語るかのようである。

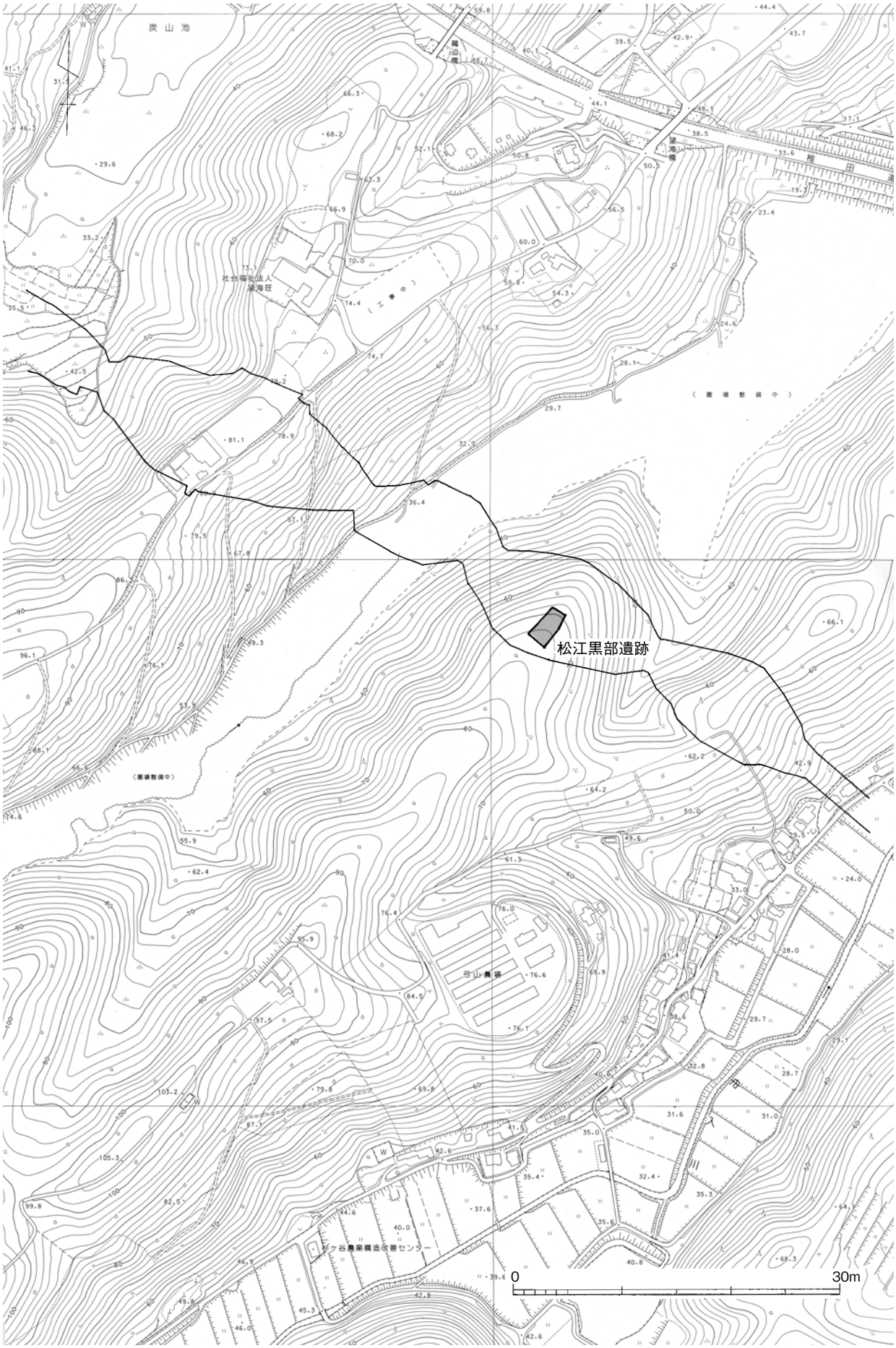
遺跡の立地　松江黒部遺跡は、舟入川を河口から約 1.2㎞ほどさかのぼった、黒部古墳群の乗る丘陵の東側に対峙する標高 90 ｍの丘陵の尾根線上の緩斜面に位置している。付近には周知の包蔵地はないが、西側丘陵の東側斜面上に展開すると想定される黒峰尾古墳群がすぐ近くまで埋蔵文化財の包蔵範囲を広げており、また調査範囲には直径 1m 前後の大石がまとまってみられ、谷を挟んだ南側丘陵上には、尾根に沿って線刻の装飾古墳を含む黒部古墳群が展開しているので（豊前市教委 2000）、本地点にも古墳の存在が想定されたことから、調査を実施することになった。

２　調査の概要

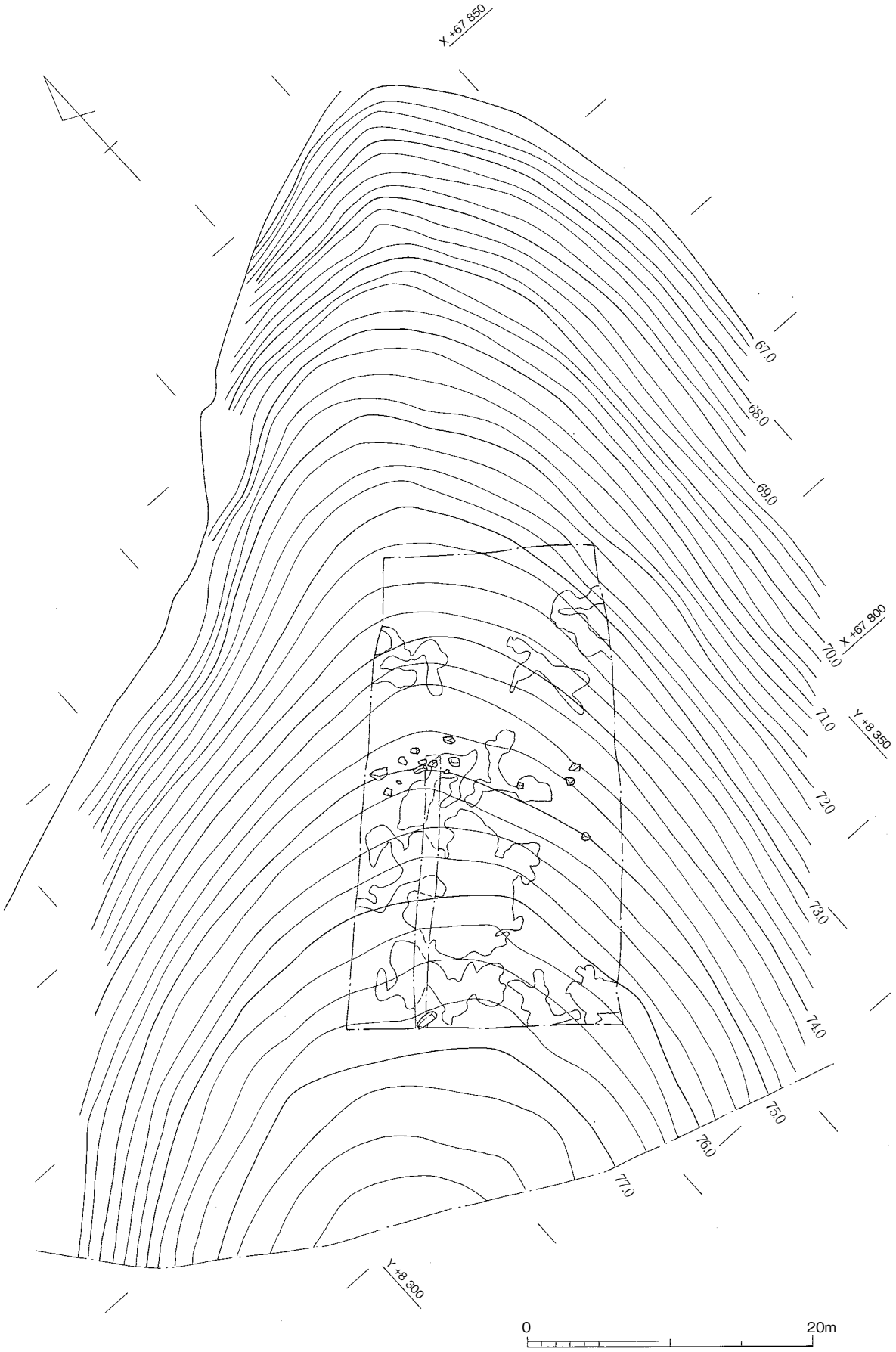
調査に至る経緯　松江黒部遺跡は豊前市大字松江 1823 に所在する。本地点の調査は、ネクスコ西日本（株）との定例会議の席上において、付近の用地買収と立木伐採が終了したとの連絡と、合わせて試掘調査により遺跡の有無について判断してほしい旨の依頼がなされたことをきっかけとする。これに先立って福岡県教育委員会総務部文化財保護課は、本地点を埋蔵文化財が存在する可能性がある中津第 12 地点としてネクスコ西日本（株）に提示しており、この地点名が調査の際にも採用されることとなった。

試掘調査は九州歴史資料館により平成 22 年 1 月 20･21 日に行われ、その結果丘陵斜面から頂部にかけてピットや溝状の遺構らしきものを検出した。これを受けて九州歴史資料館文化財調査室により発掘調査が行われた。調査は高橋章が担当し、藤島志考がこれを補助した。

調査の経過　調査においてはまず、平成 23（2011）年 7 月 14 日から周辺の地形測量および遺構検出を行った。地形測量の結果、明確な墳丘が検出されなかったため、8 月 3 日からバックホーで表土を剥いだ後、9 月 1 日から遺構検出を開始した。土坑や石材を抜き取ったようなピットを確認し



第 70 図　松江黒辺遺跡における発掘調査地点位置図（1/5,000）



第 71 図　調査区周辺地形図（1/400）

たが、掘削した結果いずれも明確な遺構とはならなかった。10月6日にラジコンヘリによる空中写真撮影を行い、10月12日に撤収した。

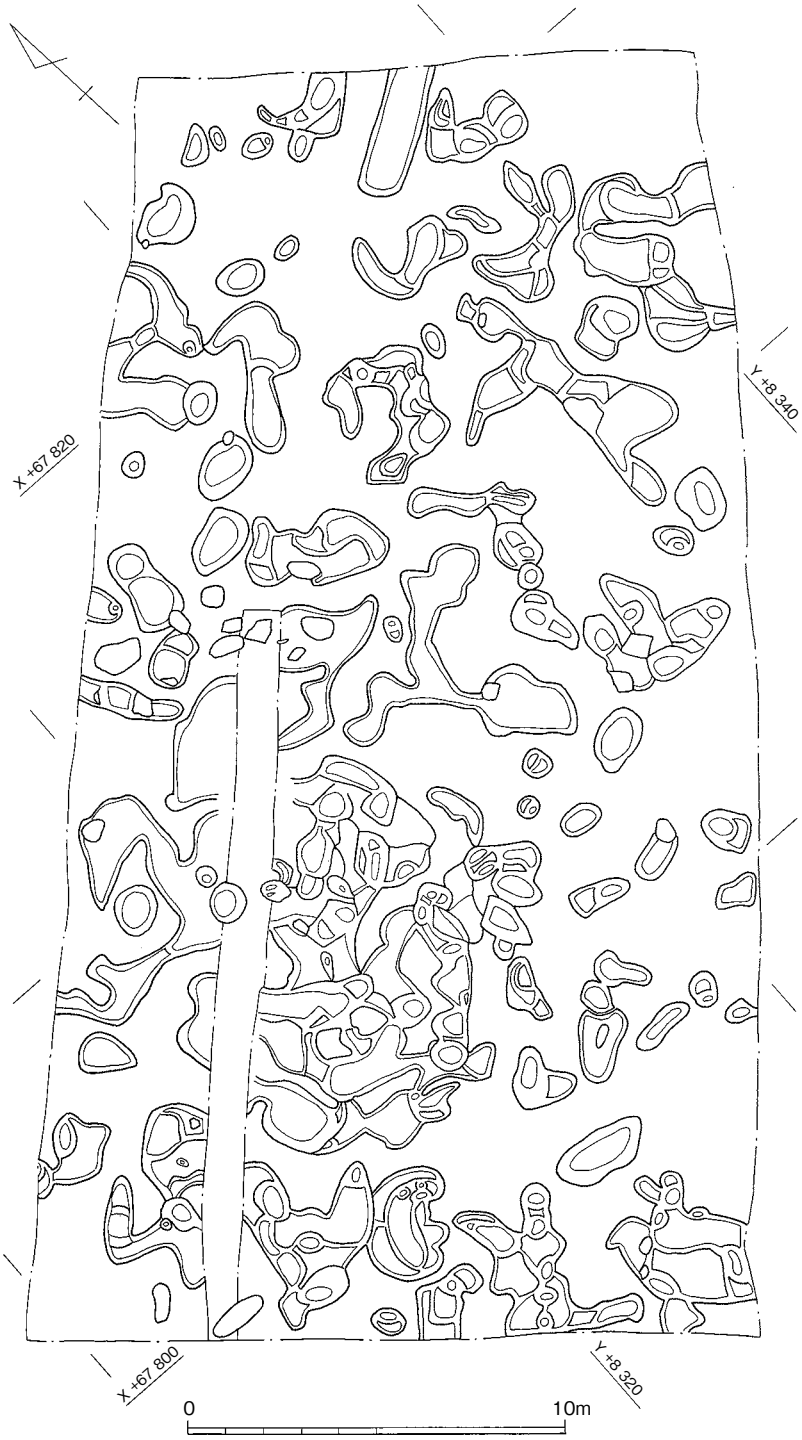
3　遺構と遺物

黄褐色粘質土の基盤層の中に黄灰色土が混在する部分を遺構埋土と考えたが、掘り下げてみたところ基盤層の一部であったことから、検出された遺構は小ピットのみである。遺物も出土しなかったので、特記すべきことがないので、図は掲載しない。

4　総括

今回の調査では、結果として遺構がほとんど検出されなかった。この調査区で本調査に踏み切ったのは、豊前市宇島港を築港する際、千束原古墳群の石室石材を採石目的で抜き取ったと言われていたためであり、石材の抜き取りの痕跡の発見が期待されたためという側面もあった。

残念ながらこのような痕跡は調査区では確認できなかったが、豊前市内にある墳丘の残存する古墳は、黒部古墳群、黒峰尾古墳群など数えるほどしか見つかっていないため、市内の各所に石材を抜き取られた未発見の古墳群が存在する可能性が高く、今後も注視するべきである。



第72図　松江黒部遺跡遺構配置図（1/200）

【参考文献】

豊前市『豊前市史　上巻』豊前市史編集委員会編、1991年
豊前市教育委員会『黒部古墳群』玄洋開発株式会社、1979年
豊前市教育委員会『豊前市内遺跡分布地図』、2000年

Ⅷ　川内下野添遺跡１・２次調査の報告

１　遺跡の概要

遺跡を取り巻く環境　川内下野添遺跡は豊前市の西側、川内地区に所在する。付近は南北方向に長く延びる尾根状丘陵とその間の小河川が形成した谷平野が連続する付近の最も東側に位置しており、遺跡は中川が形成するやや幅の広い谷状平野の西側丘陵裾部に立地する。中川流域は現在、鳥越・四郎丸・川内などの地区からなるが、小学校などの地名に残されるように、付近は中世山田荘の中核地域とされる。

周辺の遺跡　付近の開発の痕跡として最も早いものに川内楠木遺跡がある。ほ場整備に伴い調査されたもので（未報告）、縄文時代の集落跡とされる（棚田・坂梨 1996）。ほかに、古墳時代～中世の集落として川内南原遺跡などが知られ、あるいはやや上流の西岸丘陵斜面に古墳時代後期の横穴墓群としては市内唯一の例として知られる平原横穴墓群があり（豊前市 1991）、この頃すでに中川流域の開発が行われていたことを示している。

川内下野添遺跡の東約 400m には細長い低丘陵（現在山田小学校が乗る）があるが、付近は中世山田荘の中核地域と想定されている。現在この地には、山田荘の中核であった県社、大富神社が残されている。大富神社は、社殿によれば白鳳元年（671）の創建といい、当初は宗像宮であったがその後新たに八幡宮、住吉宮をまつったとされる（渡辺 1899）神社で、『神社由緒略記』には、藤原広嗣の乱（天平 12 年）（740）に上毛郡擬大領紀宇麻呂（八屋在住）が出陣し無事凱旋したことより宮殿・神門などを寄進したとあり、現在も行われている御神幸行列はこのときの凱旋を模しているという（渡邊 1981）。より信頼できる記録では、『日本三代実録』の中に「貞観二年冬十月三日卯、豊前国正六位上大富神に従五位下を授く」とあり（貞観 2 年は 860 年）、いずれにせよ平安時代の創建であることは疑いなかろう。

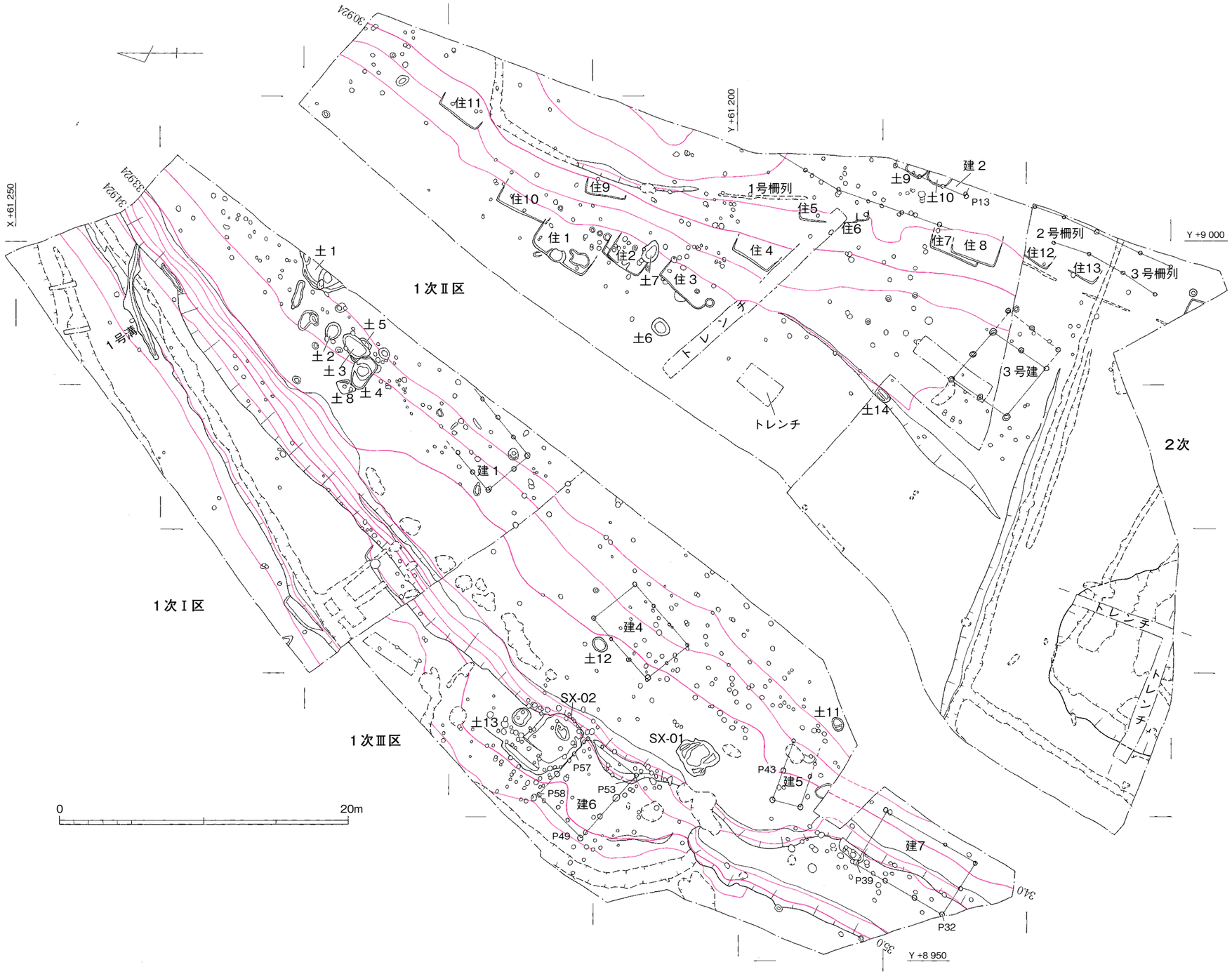
さて、中世山田荘の成立については不明な点が多いが、宇佐神宮（弥勒寺）の所領として数えられ（『弥勒寺所領注文』）、角田荘と同様に中世においては宇佐神宮の経営する荘園として発展していたのであろう（豊前市 1991）。この頃の遺跡として、やや上流域にある鳥越今井野遺跡がある（豊前市教委 2005）。平安時代後期～鎌倉時代の集落跡で、掘立柱建物跡や井戸などが見つかっている。今回報告する川内下野添遺跡も、やはり中世山田荘の一部を構成する集落と見てよかろう。

川内下野添遺跡　川内下野添遺跡は中川中流域西岸にあり、谷平野の西を画する尾根状丘陵の裾部から低位緩斜面にかけて広がる遺跡である。付近はこれまで埋蔵文化財包蔵地として周知化されていなかったが、東九州道の建設に先立ち試掘調査を行ったところ埋蔵文化財を発見し、調査に至ったものである。調査では掘立柱建物跡・竪穴住居跡・土坑などを検出し、平安時代から中世にかけての遺物が出土し、この時期の集落跡であることが判明した。

２　調査の概要（第 73･74 図）

調査に至る経緯　川内下野添遺跡は、豊前市川内 3434 周辺に広がる。この付近は、ネクスコ西日本（株）からの照会に対して福岡県教育庁総務部文化財保護課が埋蔵文化財が包蔵されている可能性のある地点として示した中津第 17 地点にあたる。用地買収の進捗に伴って平成 22 年秋にネクスコ西日本（株）から文化財保護課に対して試掘調査の依頼があったことから、同年 11 月 24･25 日

第 73 図　河内下野添遺跡における発掘調査地点位置図（1/5,000）



第 74 図　川内下野添遺跡 1･2 次調査区遺構配置図（1/300）

に丘陵東側斜面から谷平野の西半にかけての試掘調査を行い、丘陵東側斜面部において遺構を確認した（谷平野については遺構は全く確認されなかった)。ネクスコ西日本（株）は、谷の東側の丘陵部分の開削により発生した土を路線東側で盛土工事に用いたいという要望を持っており、そのために本地点を早めに大型ダンプが通行できるように仮設道路として整備したいと希望していた。この要望を受けて、文化財保護課では小澤佳憲を担当者として翌平成23年1月18日より仮設道路の範囲となる用地北側の発掘調査に着手した。これを第1次調査とする。

第1次調査の経過　現地はもと丘陵斜面であったものが耕地開発により数段の造成がなされており、とくに調査対象地の中央部には比高差が2mを越える崖があって、山側においてはかなりの削平を受けている可能性があった。そこで、調査においてはまず上段（西側）を南北に分けて反転調査し北側をⅠ区､南側をⅢ区とした。また重機による反転作業中に下段(東側)を調査することとし、これをⅡ区とした。地山は白～明黄褐色粘砂質土で付近の丘陵部と共通し、遺構埋土は暗～暗灰褐色粘砂質土で比較的区別は付けやすかったが、削平が著しく遺構の把握にはやや困難を伴った。調査は比較的順調に進捗し、2月4日にⅠ区の掘り下げ終了、図化と並行してⅡ区の調査を進め2月16日にはⅡ区の掘り下げを完了してⅠ区と合わせ空中写真撮影を実施した。その後再び上段に戻り反転作業を終えたⅢ区の調査に入り、3月11日には完掘して2回目の空中写真撮影を行い、続いて図化・後片付けを行い､作業員による現地作業を3月15日に終了した。その後埋め戻しを行い、3月末には第1次調査を完全に終了した。

第2次調査の経過　遺跡下段の南半部については、1次調査の時点ではまだネクスコ西日本（株）による買収が進んでおらず、発掘調査を行うことができなかった。しかし、1次調査の結果を見る限り遺構はさらに南側に広がっていることが予想されたため、この範囲については買収後に調査を行うということで協議が整っていた。

平成23年度秋になって､残された範囲の買収が終了したとの連絡がネクスコ西日本(株)よりあった。そこで、1次調査と同じく小澤が調査担当となり同年度冬に発掘調査を行った。同時に進めていたもう一つの調査現場との兼ね合いから、平成23年12月14日より表土剥ぎを先行させ、その後翌24年1月16日より作業員を雇用して作業を進めた。表土を剥いでみると、調査区の範囲は過去の水田開発によりかなり改変されており、山側（西側）は大きく削平されて遺構は全く失われている一方、谷側（東側）は盛土により保護されており、わずかではあるが遺構が残されている状況が確認できた。しかし、やはりこの範囲にも削平は及んでおり、竪穴住居跡を数棟発見したがいずれも深さは数cmでその大半が失われており、柱穴も多くが失われて、いくつかの柱の配列は確認できるものの明確な建物跡を指摘することは困難な状況であった。柱の配列については、一部を柵列として報告したが、調査区外に広がって、あるいはすでに失われた柱穴と組み合って掘立柱建物跡を形成していた可能性は否定できない。

また、調査区南側で谷状の落ちを検出した。谷の西側を流れて中川に流れ込む支流が調査区の南側をはしっていたものとみたい。

以下、1次調査･2次調査と分けて調査成果を述べていくが、2次調査においては遺構番号は1次調査に後続する番号を付しているので注意されたい。

３　１次調査出土の遺構と遺物

（１）竪穴住居跡

Ⅱ～Ⅲ区の中央から東側にかけて計 11 棟の竪穴住居跡を検出した。いずれも等高線に主軸方向を直交させる。削平が著しく、規模が判明するものは 1 棟もない。1･2 号竪穴住居跡は出土土器から 9 ～ 10 世紀頃のものと考えられ、他も同時期のものと考えたいが出土遺物が少なく断定はできない。なお、4 号以下の 8 棟の竪穴住居跡は、空撮の翌日に降った雨により地面が変色したことにより初めて把握できたもので、埋め戻しの日程が迫る中急いで調査を行ったため、個別遺構写真の撮影を省略せざるを得なかった。ご理解いただきたい。

1 号竪穴住居跡（第 75 図、図版 52）

Ⅱ区やや北東寄りで検出した。西側（斜面上位）の辺の中央にカマドを持つ。東側（斜面下位）半分が削平で失われ、残存部分でも深さ約 5㎝程度以下ときわめて残りが悪い。住居跡の幅は 4.3m ほどをはかる。主柱穴を探そうとして床面に多くのピットを掘削したが、ほとんどはシミ状の地山の汚れで遺構とならず、主柱穴にふさわしい位置・配置を持つものははっきりとしない。

カマド（第 75 図、図版 52）

北西辺の中央に作り付けカマドを検出した。奥壁をわずかに住居壁ラインより奥に掘り込む形で掘りあげたが、下層にあった小ピットの埋土に影響されてこのような形に掘りあげてしまった可能性があり、本来は奥壁と壁延長ラインがほぼ一直線上になるものではあるまいか。袖はやや明るい色の粘質土を使って袖から直角に伸ばし、火床を囲むように湾曲させる。左袖のみ袖の半分ほどを寝かせた石で構築し、またこれとは別に先端部に立石を配しており、右袖には石材は痕跡を含めて見当たらなかったが、右袖の方が壊された程度が大きく本来は存在した可能性もあろう。

カマドの幅は内法で 70㎝ほど、袖の伸びは約 60㎝を測り、床面は一段低く掘り下げられていた。明確な灰層は伴わない。左袖の配石の内側はよく火に焼けて赤変していた。カマドの内部に支脚用の土器やピットは認められない。出土土器から、9 世紀後葉代前後の遺構であろう。（小澤佳憲）

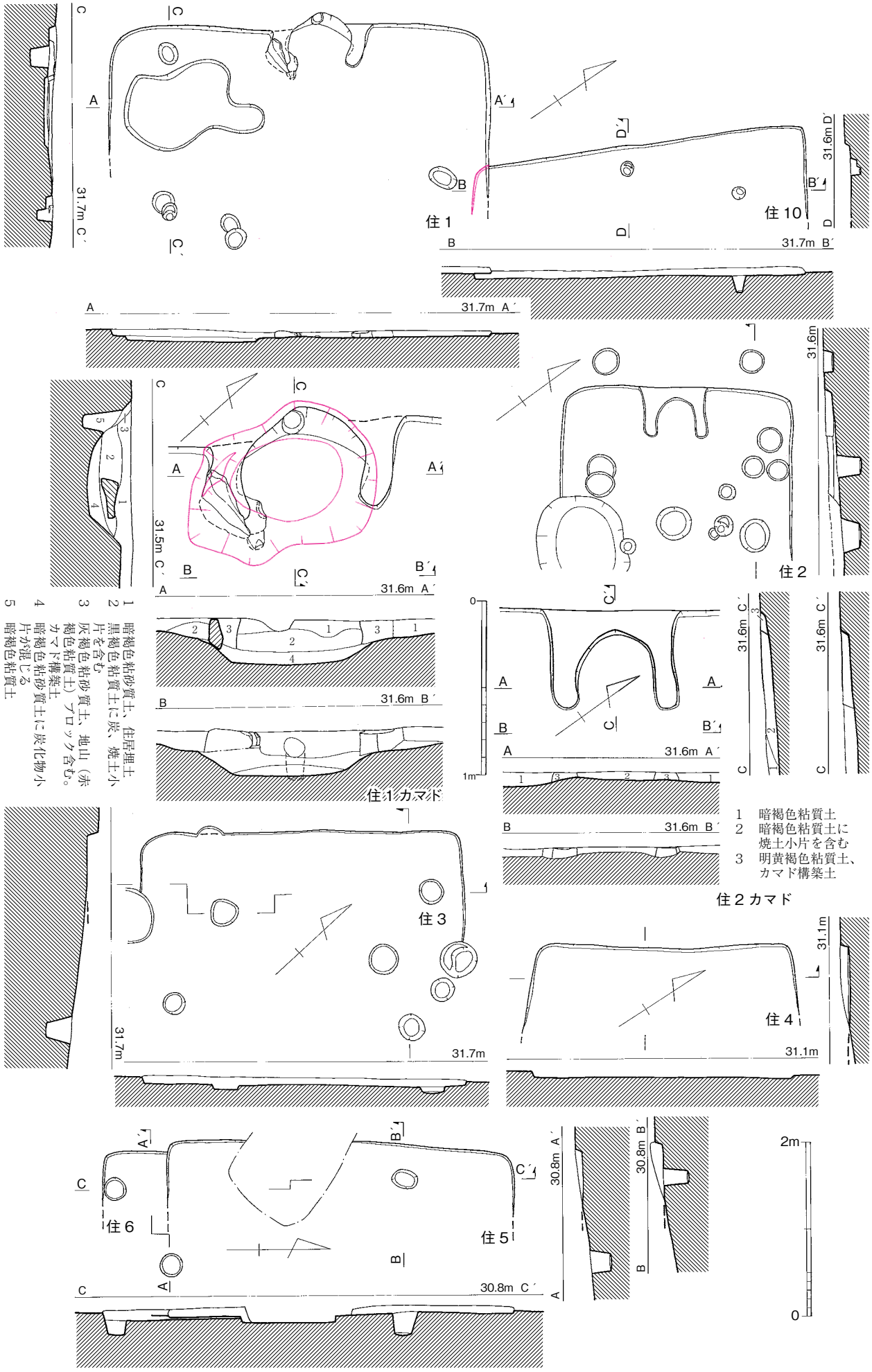
出土土器（第 82 図、図版 59）

土師器系土器（1 ～ 3）　1 は土師質土器甕。頸部から「く」の字状に開く。内外面にナデ、外面にユビオサエを施す。口径 25.0㎝。2 は土師質土器碗で、内外面にナデ、底部内面にヘラ状の工具で回転ナデを施す。底径 6.4㎝。3 は黒色土器 A 類の碗で、高台から開いて一度屈曲し、やや内傾して立ち上がる。外面にナデを施す。底径 7.9㎝。2･3 は高台が退化しておらず､古代後半期の資料か。

陶磁器（4）　4 は灰釉陶器の椀か。緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反し端部に稜をもつ。外面体部下半にはヘラケズリ、そのほかは回転ナデ仕上げ。胎土は黄緑白色で、灰緑色の釉薬が点々と残る。内外面の底部付近には施釉しない。口径 14.6㎝。9 世紀後半～ 10 世紀前半に属する資料か。（細石朋希）

2 号竪穴住居跡（第 75 図、図版 52･53）

Ⅱ区やや北寄りで検出した。1 号住居跡の南に方位をおおよそそろえて隣接する。削平により斜面下方が半分程度失われ、東西方向の規模はわからない。南北幅は 2.6m をはかり、小型の住居跡である。1 号住居跡と同じく北西壁の中央部にカマドを作り付ける。また、主柱穴もやはりはっき



第 75 図　1 ～ 6･10 号竪穴住居跡実測図（1/60）、1･2 号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

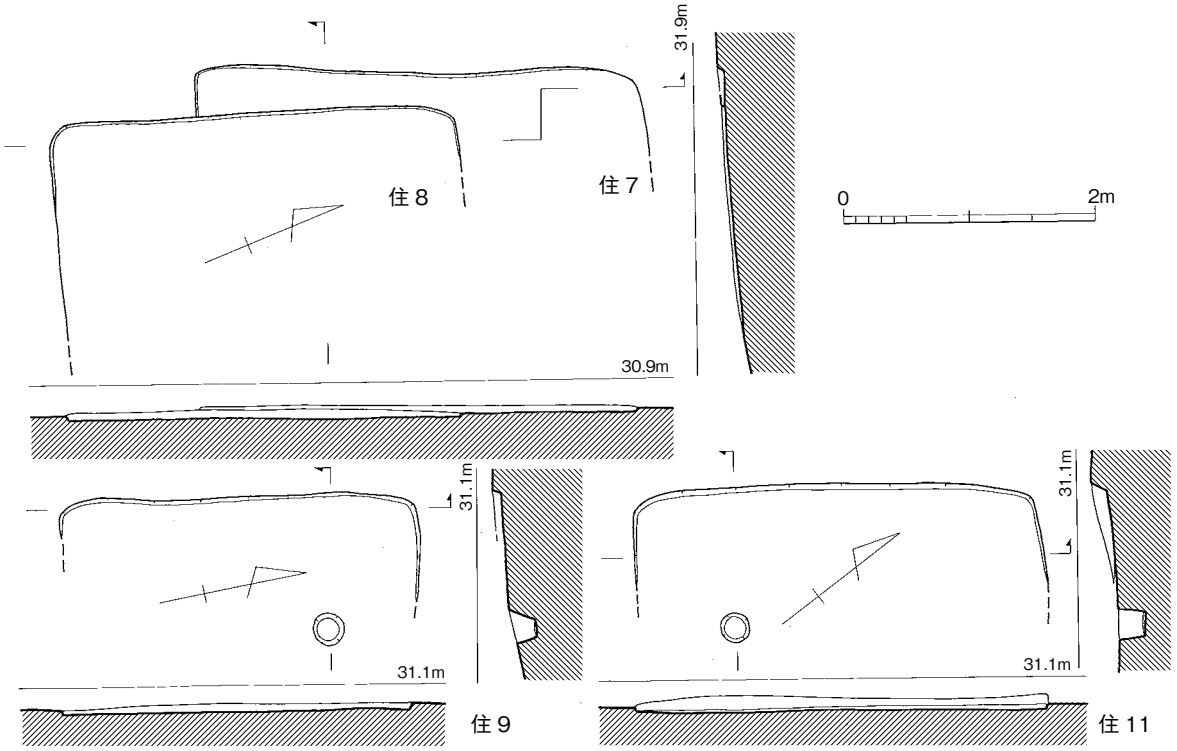
りしたものは見つけられなかった。7号土坑と切り合い関係にあり、7号土坑が後出する。
カマド（第5図、図版53）
北西辺の中央に付く。壁の内側に接して袖が作られており、内接型と呼ぶ（福岡県教委2006）。カマド構築土は地山よりやや明るい粘質土で、おそらく地山の深いところから採取したものではないかと思われる。カマドの幅は内法で約40㎝、奥行きは55㎝と小型のカマドである。埋土の下層に炭化物をやや多く含む層が見られたが焼土面は形成されていない。カマドの内部に支脚を建てるピットや支脚用の土器は確認されなかった。（小澤）
出土土器（第82図）
土師器系土器（5）　5は黒色土器A類の椀。端部が丸い八の字状の高台をもち9世紀代の資料か。体部内面にミガキがわずかに確認できる。胎土に0.1㎜程の黒雲母を含む。底径7.6㎝。（細石）

3号竪穴住居跡（第75図、図版53）
2号住居跡のさらに南側で検出した。やはり斜面下方側の半分以上が削平により失われている。南北幅のみ判明し、3.66mほどの規模をはかる。床面に主柱穴を探すためにやや無理をして土質の違うとみられるところを掘り下げたが、その大半は遺構ではなくシミ状の土の変色部分であったとみられすぐに地山が露出した。なお1～3号住居跡については住居外にも多くのピットがありこれらを主柱穴と考えて検討してみたが、いずれも規則的な場所に並ぶとは考えられず断念した。竪穴部から排出された土を竪穴部の周囲に盛り上げた土堤の上から主柱穴を掘り下げているとすれば、削平深さは相当なものになったと思われ、こうしたことが主柱穴が検出できない要因の一つとも考えられるが、この遺跡において検証することはできなかった。出土土器はなく時期は不明。

4号竪穴住居跡（第75図）
Ⅱ区のほぼ中央部、3号住居跡の東に位置する竪穴住居跡である。やはり斜面下位が削平により失われ、斜面上位の幅1m弱のみが残される。住居跡の規模は南北幅のみ明らかで、3.15mほどをはかる。床面には明瞭な主柱穴は存在しない。出土土器はなく時期は不明。

5号竪穴住居跡（第75図）
Ⅱ区の東より、4号住居跡のさらに東で検出された住居跡である。削平により東壁と南北壁の2/3以上が失われており、西壁も一部を試掘時のトレンチによって破壊されている。規模は南北幅で約3.94mほどをはかる。深さはせいぜい数㎝程度しか残されておらず、このため当初の遺構検出では地山のシミ状の変色と考えていたが、清掃後の降雨で地面がはっきりと変色し、北西コーナー部がきれいに把握できたため竪穴住居跡と判断した。床面から小ピットが検出されたが住居跡に伴うものかどうか定かではない。また、16号住居跡を破壊している。出土土器はなく時期は不明。

6号竪穴住居跡（第75図）
5号住居跡の南側にあり、これに大きく破壊されている。削平により東側の大半を失っており、検出できたのは南西コーナー部付近のみであった。床面からは南壁沿いに小ピットを検出しているが、この住居に伴うものかは定かではない。出土土器はなく時期は不明。



第 76 図　7 ～ 9･11 号竪穴住居跡実測図（1/60）

7 号竪穴住居跡（第 76 図）

Ⅱ区南端部で検出した。8 号住居跡と切り合い、大きく破壊されている。削平により東側の大半を失っており、南壁も一部 8 号住居跡により破壊されている。規模は南北幅のみ判明し、3.56m をはかる。床面からピット等は検出されていない。出土土器はなく時期は不明。

8 号竪穴住居跡（第 76 図）

Ⅱ区南端部で、7 号住居跡と切り合いながら存在する。7 号住居跡の南側にあってこれを破壊して作られている。斜面下方にあたる東壁は完全に失われていて、規模は南北幅のみが判明し約 3.22m をはかる。床面からピット等は検出されていない。出土土器はなく時期は不明。

9 号竪穴住居跡（第 76 図）

Ⅱ区北東寄りで検出した。1 号住居跡の西側に位置する。斜面下方が大きく削平されて全体の 1/3 程度しか残っていない。南北幅がかろうじて判明し、約 2.8m と小型の住居跡である。床面からはピットが 1 基検出できたが、深さは浅めで主柱穴ではない。出土土器はなく時期は不明。

10 号竪穴住居跡（第 75 図）

Ⅱ区北寄りで 1 号住居跡に隣接して検出された。東壁が削平により完全に失われているほか、南壁も後出する 1 号住居跡に破壊されているが、1 号住居跡よりも床面がわずかに深かったために一部がかろうじて残されており、これによって南北幅が 3.78m ほどに復元できる。床面から小ピットが 1 基検出されたが浅くこの住居跡に伴うものではなかろう。出土土器はなく時期は不明。

11 号竪穴住居跡（第 76 図）

Ⅱ区北隅で検出した。住居跡の東半分以上が削平により失われており、南北幅のみ計測できるが、それによれば住居跡の規模は 3.24m の幅をはかり小型の住居跡である。床面からは小ピットが 1 基検出されているが住居跡に伴うものかどうか定かではない。出土土器はなく時期は不明。

（2）掘立柱建物跡

2 ～ 7 号掘立柱建物跡（3 号建物跡を除く）は、いずれもピットが数多く分布する個所にあり、また傾斜のある中での調査で柱穴が並ぶかどうか判断が付けにくく、急ぎの調査の中でその存在に気づけなかった。1 号建物跡を除きいずれも整理時にその存在に気づいたため、個別写真が撮影できなかったのは遺憾であった。また、3 号建物跡も 1 次調査区と 2 次調査区の間にまたがり、個別写真の撮影ができなかった。出土土器は限られており所属時期の否定は困難だが、古代に属するものであろう。

1 号掘立柱建物跡（第 77 図、図版 53）

Ⅰ区南東隅で検出した。把握できた柱穴のみからは 1 間× 3 間の南北棟に復元できるが、特に斜面中～上位で柱穴の遺存状況がかなり悪く、実際には 2 間× 3 間（＋ α）の構造を持つものではないかと推測される。調査できた 1 間× 3 間の規模を見ると、桁行は 1 間 1.64 ～ 1.80m ほどでやや幅があり、3 間分が残る東側の桁行全長は 5.1m の規模を持つ。梁行は南側で計測すると 3.66m をはかり、仮に間に柱が 1 本あるとすると 1 間分の幅は 1.83m ほどの幅で桁行 1 間分と近い数字となる。柱穴の土層には柱根の跡が認められた。出土土器はなく時期は不明。

2 号掘立柱建物跡（第 77 図）

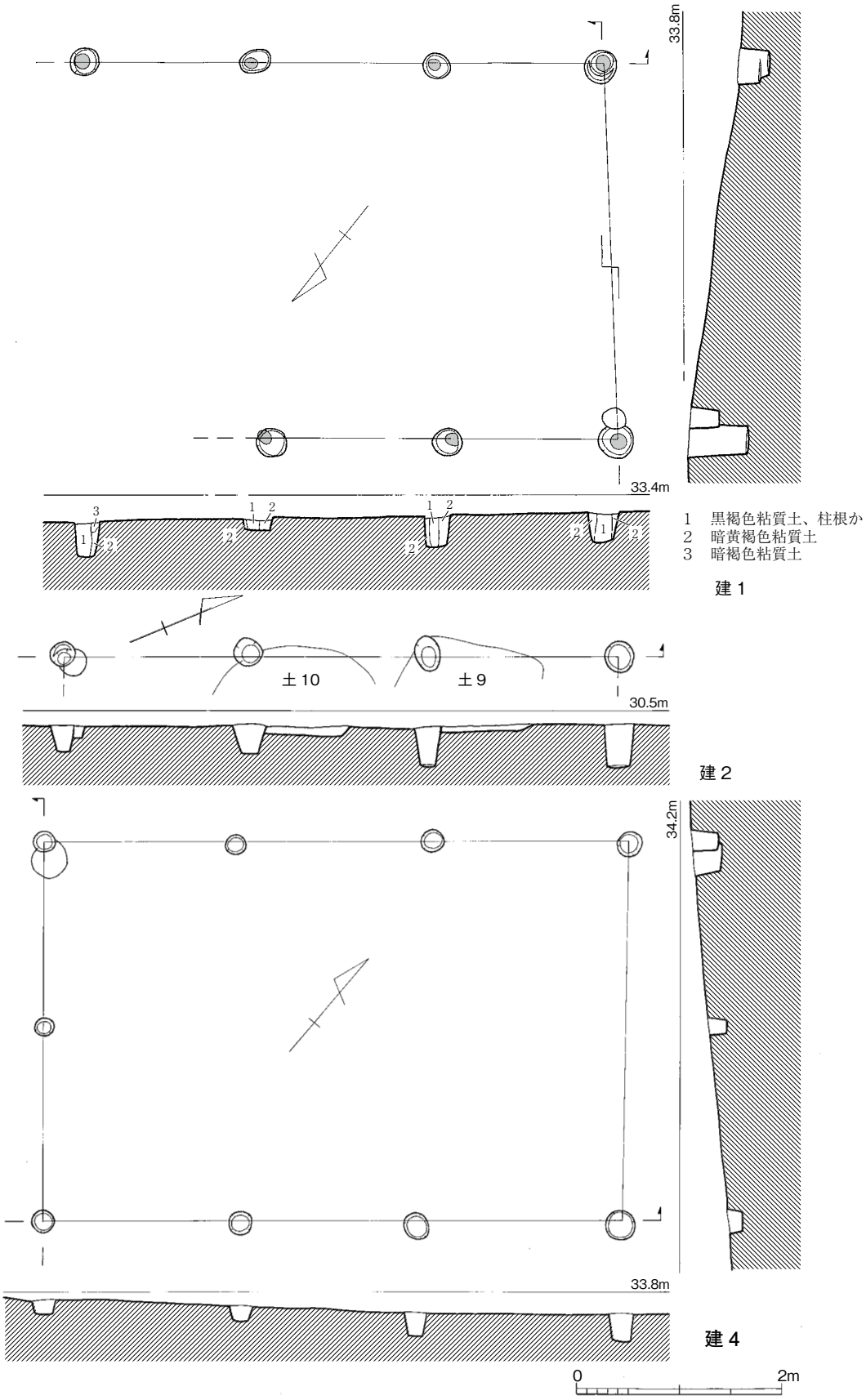
Ⅱ区の南東端部で確認した。9･10 号土坑と切り合いを持ち、9 号よりも古く 10 号よりは新しい。建物と言っても 4 本の柱が一直線に並んだだけのものであり、建物ではなく柵列とすべきかもしれないが、柵列にしては直線に等間隔に並んでいたため、東側の調査区外に広がる建物の一部を検出したものとしてここで報告する。柱間距離は 1.76 ～ 1.84m で、本遺跡出土のほかの建物と比べても整然とした配列である印象を受ける。出土土器から古代後半に属するか。（小澤）

出土土器（第 82 図）

土師器系土器（6）　6 は土師質の甕で、外反気味に開き口縁部に至る。口径 27.2㎝をはかる。（細石）

3 号掘立柱建物跡（第 79 図）

1 次調査Ⅱ区南端部と 2 次調査東北端部にかけて検出された。1 次調査において調査区隅に 4 本の柱が並ぶことに気づいた。柱穴はほかの掘立柱建物に比べて太く、また柱痕も確認されたため、大型の建物を期待したが、2 次調査区ではこれにふさわしい柱穴がなかなか見つからず苦慮した。またⅠ区で検出した柱穴の多くには直径 10 ～ 15㎝ほどの柱痕が残っていたが、当初柱痕のみを検出し、これを柱穴と思い先に掘りあげてしまったため、土層の図化はできなかった。この建物跡は、当初は 2 間× 2 間の側柱建物として想定したが、図上で周辺のピットの並びを再確認し、2 間× 3 間の南北棟である可能性も捨てきれないと判断し、両方の形がわかるように図示している。



第 77 図　1･2･4 号掘立柱建物跡実測図（1/60）

2 間× 2 間の側柱建物跡とすると、平面形態は平行四辺形で東西方向がやや長く、これを桁行とすると、桁行長は北が 1.17m ＋ 1.16m で 2.33m、南が 1.09m ＋ 1.22m で 2.31m をはかり、梁行長は東が 1.07m ＋ 1.21m で 2.21m、西が中間柱穴が失われていて 2.11m をはかる。なお、現状では側柱建物跡であるが、全体的に柱穴が浅く、中央の柱穴が削平で失われている可能性が高く、この場合は 2 間× 2 間の総柱建物跡に復元できよう。

2 間× 3 間の建物跡の場合、上記にさらに南側にもう 1 間延びることになるが、この場合中間柱の柱筋が通らないので、疑問がある。出土土器はなく、時期は不明。

4 号掘立柱建物跡（第 77 図）

Ⅲ区北東側の低い位置で検出した建物跡である。2 × 3 間の規模を持つ側柱建物跡である。規模は桁行が 5.64 ～ 5.68m、桁行一間はほとんどが 1.90m と規格性が高いが、南側の 1 本のみやや位置が悪く、規格性を損ねる。梁行は両側とも 3.70m をはかり、梁間一間は西側のみ中間柱穴が残っていて 1.80m･1.90m をはかる。柱穴は比較的浅く、一部の柱穴が失われる。出土土器はなく時期は不明。

5 号掘立柱建物跡（第 78 図）

Ⅲ区南東側で検出した。1 間× 2 間の東西棟として復元したが、整理中に気づいたものであり、柱の並びも悪くやや疑問が残る。規模は桁行北側の柱列で 4.40m をはかり柱間距離は 2.20m で等しい。南側の柱列は柱穴がそろわない上に柱筋も通らないが、柱間距離は 2.20m でそろっている。梁行は西が最も広く 1.98m、中央がやや狭くなり 1.92m をはかる。出土土器はなく時期は不明。

6 号掘立柱建物跡（第 78 図）

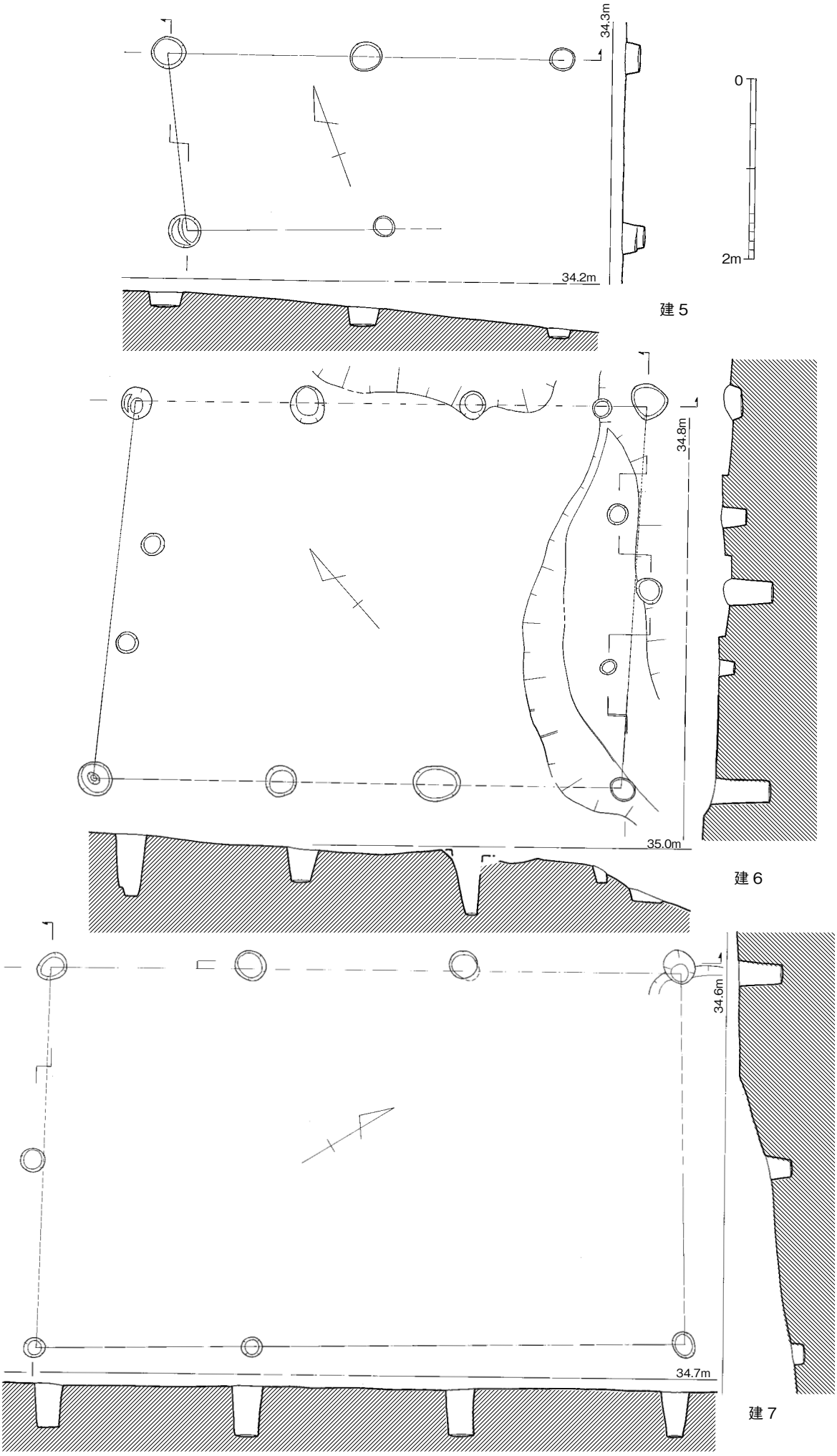
Ⅲ区中央西寄りで検出した。1 間× 3 間または 2 間× 3 間の東西棟と想定される。柱穴のうち 1 本が SX － 01 と切り合い関係を持つ。桁行方向の柱列は柱穴の規模や並び、柱間距離などが比較的そろっているが､梁行方向の柱列は不揃いで位置も悪い。ここでは､梁行 2 間とした場合の柱穴（南側のみ 1 本）と、梁行 3 間とした場合の柱穴（両側に 2 本ずつ）をともに示したが、いずれも柱間距離が一定せず柱の通りも悪いため疑問が残る。あるいは本来この建物跡は東西にさらに延びるもので、ともに削平により柱穴が失われたため規模がわからないとも考えられよう。以上から、建物跡の規模は桁行方向と梁行の総長のみを示す。桁行長は北側が 5.68m、南側が 5.86m をはかり、南側柱列がやや長い。柱間距離は 1.80m ～ 2.10m までやや幅があるが総じて 9.5m 前後のものが多い。梁行は柱筋がややずれて建物全体の形がわずかに平行四辺形状を呈し、梁行長は東側が 4.24m、西が 4.20m とほぼ等しい。出土土器から古代末～中世前半に属するか。（小澤）

出土土器（第 82 図）

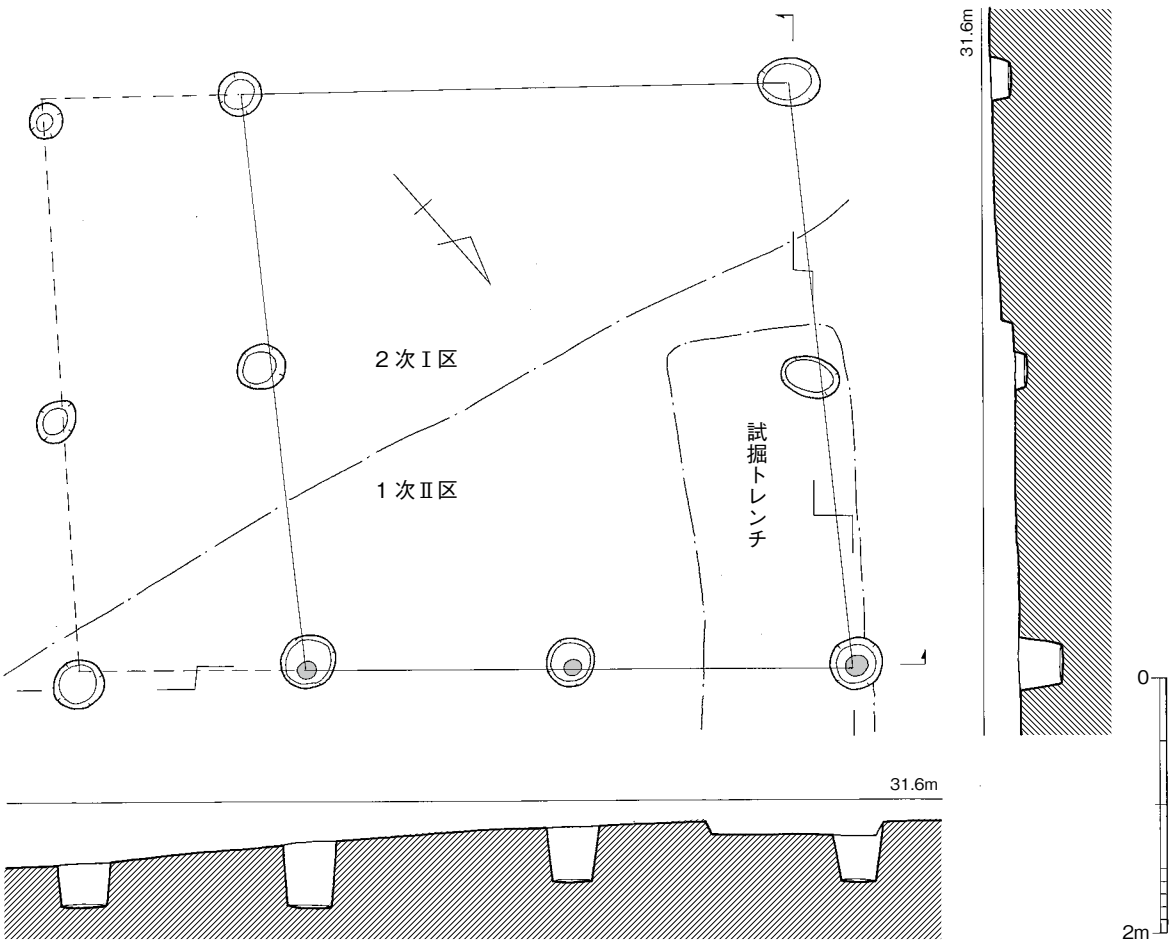
土師器系土器（7）　7 は土師質の坏。坏部は内湾し､底部は平坦。内外面にナデを施す。底径 9.0㎝。（細石）

7 号掘立柱建物跡（第 78 図）

Ⅲ区南隅で検出した 2 間× 3 間の側柱建物跡で、南北棟である。ほかの建物跡と同様一部の柱穴



第 78 図　5 ～ 7 号掘立柱建物跡実測図（1/60）



第 79 図　3 号掘立柱建物跡実測図（1/60）

が削平により失われていたが、残された柱穴の配置は比較的規格性がある。規模は桁行全長が東側の柱列で 7.20m、西側で 7.0m をはかり、桁行の柱間距離は 2.0 ～ 2.4m をはかる。梁行長は北側で 4.05m、南側で 4.22m をはかり、南側のみ判明する梁行方向の柱間距離は 2.08 ～ 2.14m ほどをはかる。柱穴の深さは丘陵上位にあたる東側ほど残りが悪く、西側では約 25cmほどが残される。（小澤）

出土土器（第 82 図）

土師器系土器（8）　8 は土師質土器の碗の口縁部～胴部片。緩やかに湾曲し口縁部に至る。体部外面に横方向へのミガキ、口縁部に回転ナデを施す。単位は看取できないが、質感から内面にもミガキを施している可能性がある。色調は内外ともに明黄褐色で土師質であるが、一部黒褐色の色素が付着する。口径 14.0cm。（細石）

（3）土坑

土坑群のうち 9･10 号土坑については、竪穴住居跡のところで述べたように当初の検出では見つけられず、全体に清掃をかけて空撮した後の降雨で土の色が変色し、はじめて土坑が存在することが判明したものである。従って両遺構については個別写真が撮影できなかった。ご了承願いたい。

1 号土坑（第 80 図、図版 54）

Ⅰ区中央東寄りで検出した半分以上が東側の調査区外に広がっており全形は不明だが、おそらく長楕円形状を呈するものか。長径 3.6m、短径は不明だが 2.8m 程度か。壁は比較的垂直に近く掘ら

れ、深さはおおよそ 0.8 ～ 1.0m ほどをはかり、床面には凹凸がやや見られる。土層はレンズ状堆積の状況を示すが下層は比較的短期に埋没したものであろう。出土土器はなく時期は不明。

2 号土坑（第 80 図、図版 54･55）

1 号土坑の南東側でいくつかの土坑が集中している。このうちもっとも北寄りに位置する土坑である。平面形態はほぼ円形で、直径約 1 ～ 1.2m ほどをはかる。かなり削平されており深さは 20cm ほどしかない。出土土器はなく時期は不明。

3 号土坑（第 80 図、図版 55）

2 号土坑の南に隣接する。4･5 号土坑を破壊しており新しい。平面形状はゆがんだ長楕円形で、長径 2.0m 前後、幅は 1.3m ほどをはかる。底部は舟底状で深さはきわめて浅い。埋土は暗灰褐色粘砂質土で一様である。出土土器から古代末～中世初期の遺構か。（小澤）

出土土器（第 82 図、図版 59）

土師器系土器（9･10） 9･10 は黒色土器 B 類の碗。緩やかに内湾し口縁部に至る。9 は端部が丸く断面半円形の低い高台を貼り付け、径 0.1㎜程の黒雲母や透明な鉱物をわずかに含む。黒灰色で口縁部周辺は白灰色。口径 16.2㎝、底径 7.2㎝、器高 6.0㎝。10 は径 0.2 ～ 1.0㎜程の黒雲母や透明な鉱物を多く含む。灰褐色で外面口縁部は暗灰褐色。口径 16.4㎝。（細石）

4 号土坑（第 80 図、図版 55）

3 号土坑の西にあり、3･5 号土坑に切られており 3 基の土坑の中で最も古く位置づけられる。平面形状は長楕円形で中央部が一段低い。長径は約 2.4m、短径は 1.5m をはかる。深さは 20㎝以下で浅い。出土土器から、古代末～中世初期の遺構か。（小澤）

出土土器（第 82 図、図版 59）

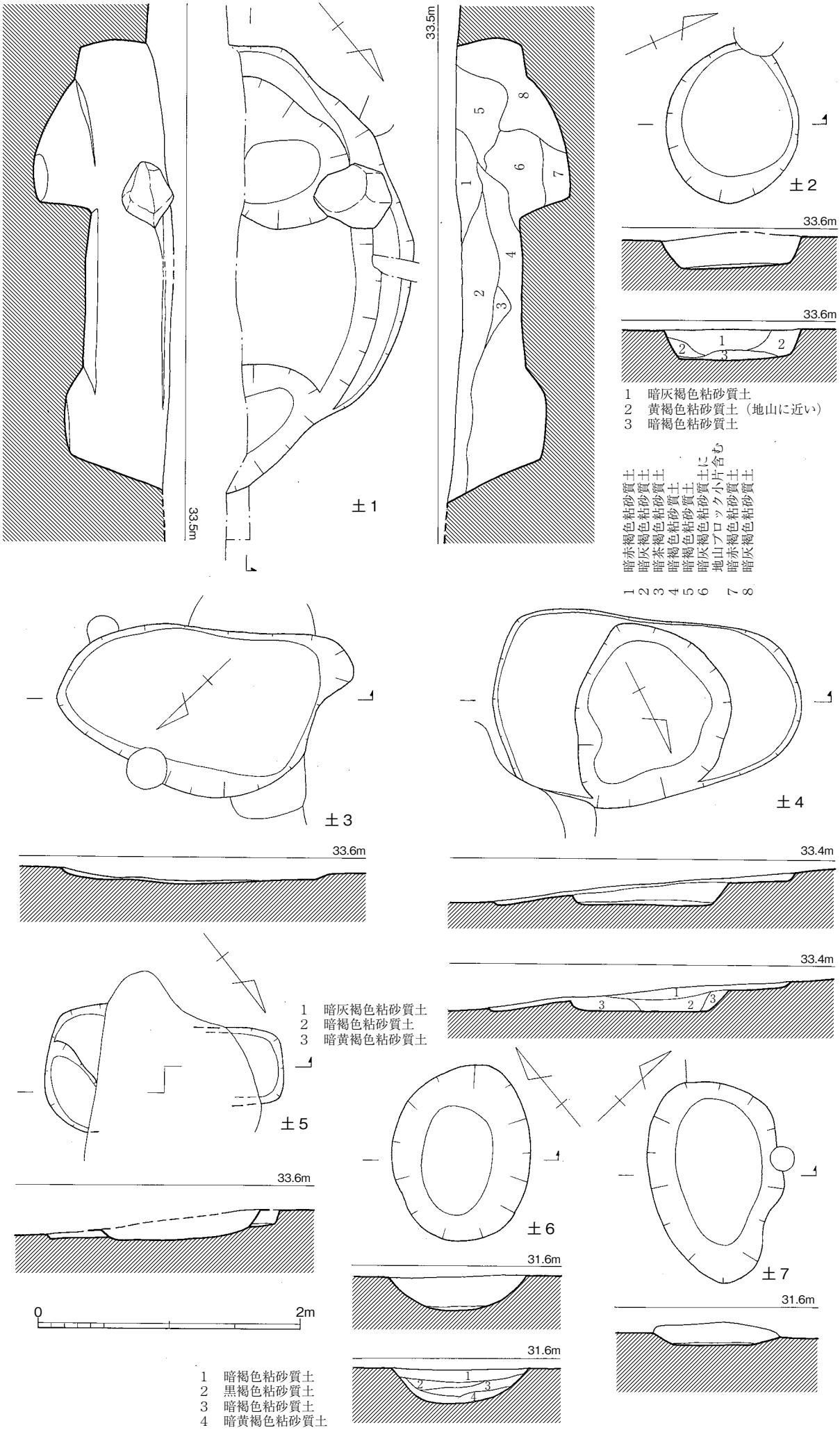
土師器系土器（11 ～ 13） 11 は黒色土器 B 類の碗。断面半円形の低い高台を貼り付け、緩やかに内湾し口縁部に至る。径 0.2 ～ 1.0㎜程の黒雲母や透明な鉱物を含む。内外面灰橙褐色で、口縁部周辺は黄褐色。口径 15.2㎝、底径 7.2㎝、器高 5.2㎝。12 は土師質土器の碗。断面台形の高台をもち、緩やかに立ち上がる。底径 8.4㎝。13 は瓦器碗か。端部が丸い断面三角形の高台を貼り付け、一部潰れる。底部外面にナデを施す。径 0.2㎜程の黒雲母や透明な鉱物をわずかに含む。底径 7.2㎝をはかる。（細石）

5 号土坑（第 80 図、図版 56）

3 号土坑とほぼ重なる位置にあり、3 号土坑に切られ 5 号土坑を切る。細長い隅丸台形状を呈し、長軸が 3 号土坑とほぼ直交する。規模は長軸が 2.8m、最大幅は 0.9m ほどをはかる。深さは 20㎝程度で浅い。出土土器から古代末～中世初期の遺構か。（小澤）

出土土器（第 82 図）

土師器系土器（14） 14 は黒色土器 B 類の碗。体部形状はやや直線的。調整痕は確認できない。体部は緑灰色、口縁部は内面及び外面下方が黄白色、外面上方が暗灰色。口径 16.2㎝。（細石）



第80図　1～7号土坑実測図（1/40）

6 号土坑（第 80 図、図版 56）

Ⅱ区中央西寄りに位置する。平面形状は楕円形状を呈し、長軸 1.3m、短軸 1m 程度の規模をはかる。深さは浅く 30㎝弱であるが、付近は調査区の中で最も大きく削平されている部分であり、本来はもっと深かったであろう。出土土器はなく時期は不明。

7 号土坑（第 80 図）

6 号土坑の東側にあり、2 号住居跡と切り合いこれに後出する。平面形態はゆがんだ長楕円形状で、長軸 1.5m、短軸 1m ほどをはかる。深さはきわめて浅く 15㎝弱しか残っていない。埋土は暗褐色粘砂質土で分層できない。出土土器はなく時期は不明。

8 号土坑（第 81 図、図版 56）

Ⅰ区中央やや東寄りで密集する土坑群の一つである。4 号土坑の西側に隣接する。平面形態は不整形であるが深さがきわめて浅いため遺構の底の部分だけが残ったものと考えられ本来の全形は不明である。埋土は暗灰褐色粘砂質土で固く締まる。出土土器はなく時期は不明。

9 号土坑（第 81 図）

Ⅱ区南東部隅で検出した。10 号土坑と隣り合い、ともに 2 号建物跡により破壊される。全体の半分ほどが調査区内にあり、残りは調査区外に広がるため全形は不明だが、方形プランか。一辺の長さが 1.2m ほどをはかる。深さはきわめて浅い。出土土器はなく時期は不明。

10 号土坑（第 81 図）

9 号土坑の南に隣接して検出された土坑である。やはり半分以上が東側調査区外に広がり、全体形状は不明だが、平面略円形状を呈するものか。残存部分の形状は半円形で、直径は約 1.7m ほどをはかる。出土土器はなく時期は不明。

11 号土坑（第 81 図、図版 57）

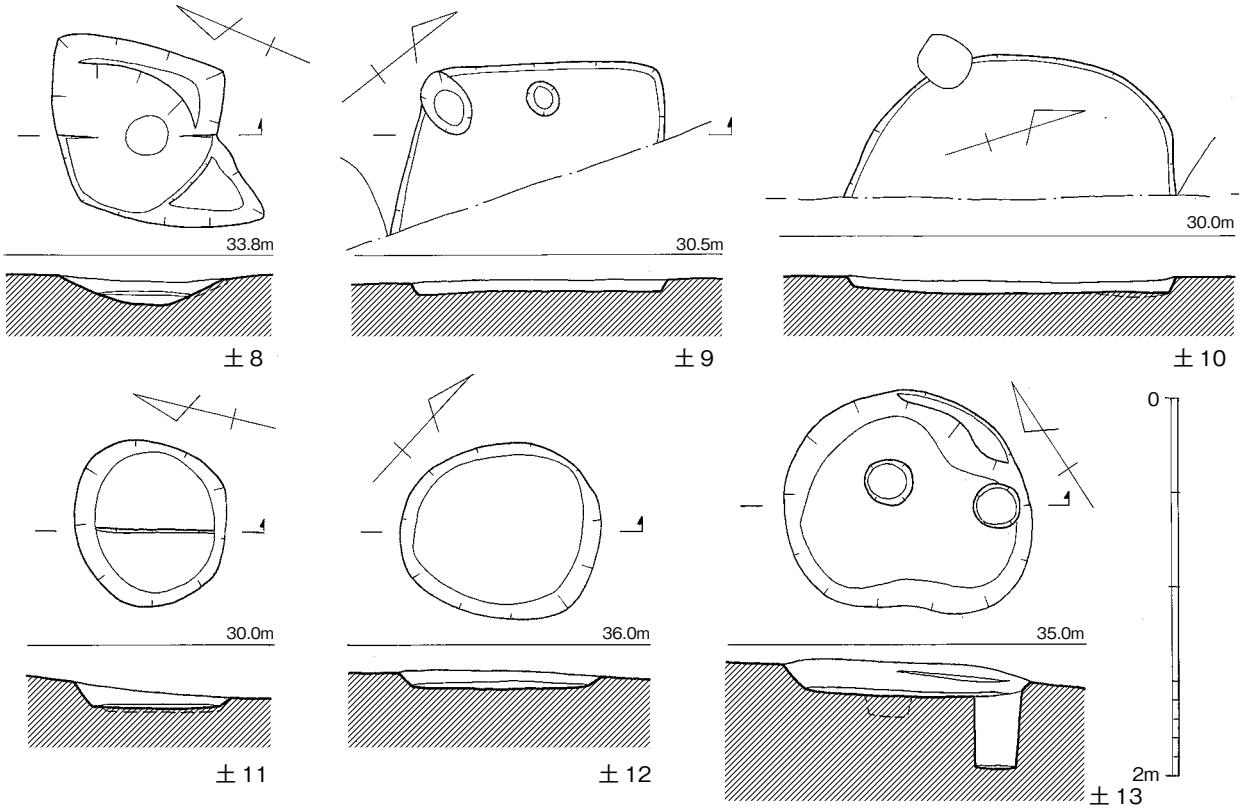
Ⅲ区南寄りの東側で検出した焼土坑である。平面形態は略円形で直径は 0.8m ほどを測り、深さは約 15㎝ほどが残されていた。底部には炭の小片が 1㎝ほどの厚さでまんべんなく堆積していたが、不注意によりそのうち半分については掘りすぎて失われてしまった。炭化物より上層の埋土は暗灰褐色粘砂質土である。出土土器はなく時期は不明。

12 号土坑（第 81 図、図版 57）

Ⅲ区中央北寄りで検出した。平面形状は略円形を呈し、直径は 1.1m ほどをはかる。検出した時点で深さが数㎝しか残っておらず、かなり削平を受けているのであろう。埋土は暗灰褐色粘砂質土で分層できない。（小澤）

出土土器（第 82 図）

土師器系土器（15 ～ 17）　15 ～ 17 は黒色土器 B 類の碗。15･16 は口縁部が、17 は高台を含む底部が残る。15･16 はやや直線的に開いて口縁部に至る。調整痕は看取できない。胎土に径 0.2㎜程の



第81図　8～13号土坑実測図（1/40）

黒雲母や透明な鉱物をわずかに含む。色調はそれぞれ、15は口縁部から下に、外面が暗緑灰色・緑灰色・白灰色で、内面が緑灰色・白灰色・黒灰色。口径16.4cm。16は口縁部から下に、外面が灰緑色・黄味がかった白灰色で、内面が緑灰色・白灰色・黒灰色。口径15.4cm。17は厚めの底部が下方に膨らみ、断面台形の高台を貼り付ける。調整痕は看取できない。黒灰褐色。底径7.8cm。（細石）

13号土坑（第81図、図版57）

Ⅲ区中央やや北寄りで検出した。12号土坑の西側に位置する。平面形状はゆがんだ楕円形で、長径が1.15m、短径が1.1mほどの規模をはかる。床面は平坦で、底部に二つの小ピットを検出したがこの土坑に伴う遺構かどうかは不明である。深さはピット以外の箇所で約15cmを測る。埋土は上層と下層の2層に分けられ、上層が暗褐色粘砂質土、下層が灰褐色粘質土からなる。上層には炭化物や焼土の小片がわずかながら含まれていた。出土土器から中世初期の遺構か。（小澤）

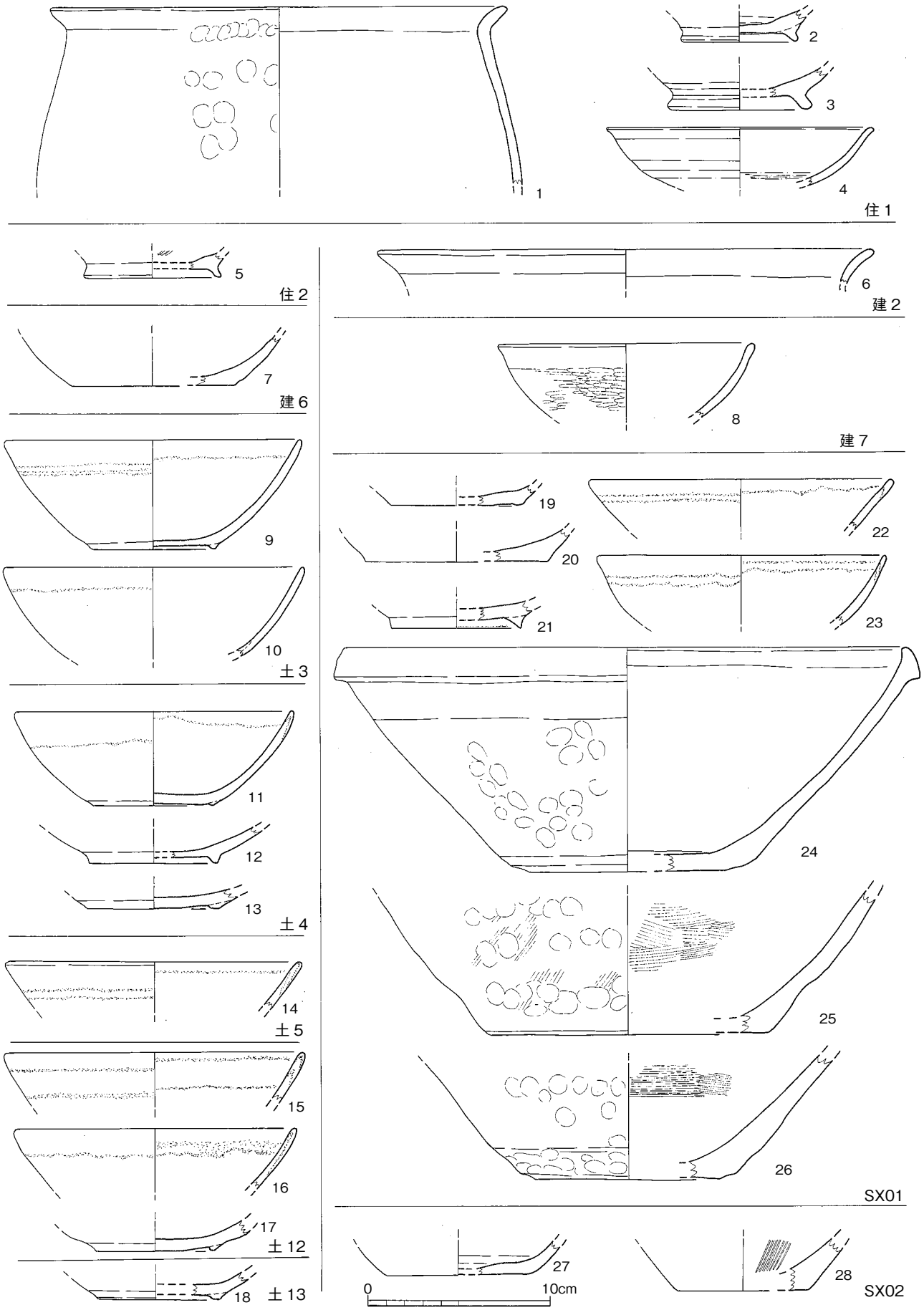
出土土器（第82図）

土師器系土器（18）　18は瓦器碗。断面台形の高台を貼り付け、底部外面及び高台にはナデを施す。内面及び高台・底部外面が灰緑色、外面は灰白色。底径7.4cm。（細石）

（4）溝跡

1号溝（第74図）

Ⅰ区北側で検出した。調査区の最上段にあり、弧状に曲がりながら8mほど延びる。おそらく両端ともに削平により失われたものとみられ、全形は不明である。埋土は暗褐色粘砂質土からなり、



第 82 図　川内下野添遺跡第 1 次調査各遺構出土土器実測図（1/3）

一様である。出土土器はなく時期は不明。

（5）柵列

Ⅱ区南東端部付近で検出した。ピットが2条の列になって延びており、当初これらを柵列と考えたが、うち東側の列については柱穴の大きさがやや大きく並び方も直線的で、掘立柱建物跡の一部である可能性を考えてこれを2号建物跡として報告した。西側の柱穴列については、間隔が不定で配列も直線的でなく、柱穴の規模が小さいことなどから柵列として調査した。ただし、後に調査した2次調査区では、やや距離が離れるがこれらの2つの柱穴列に対応するような柵列状遺構が見つかっており、2号建物跡として報告したものも柵列であった可能性も残る。

1号柵列（第74図）

調査区の東側を旧地形の等高線に平行するように延びる。ピットが多く集中する付近であり列状に多くのピットが重複しているが、ほぼ等間隔に並ぶとすれば2.3～2.7m間隔で5本の柱穴が並んだ様子が復元できる。柱穴の深さはいずれも数cm～15cm程度である。出土土器はなく時期は不明。

（6）性格不明遺構

SX－01（第74図、図版58）

Ⅲ区の中央やや南寄りで検出した。平面形態は不整形で南北に幅の狭い段を持つ。床面は凹凸があるがおおよそ舟底状を呈する。深さは最も深いところで20cm弱であった。出土土器から、中世の遺構であろう。（小澤）

出土土器（第82図、図版59）

土師器系土器（19～23） 19は土師質土器の皿。平坦な底部には糸切り痕が残る。体部外面にナデを施す。底径7.0cmをはかる。20は土師質土器の坏。平坦な底部はやや突き出し、立ち上がりの屈曲が強い。内外面にナデを施す。底径10.0cm。21～23は黒色土器で碗B類である。径0.1～0.5mm大の黒雲母や透明な鉱物を含む。21は断面三角形の高台をもち、付け根にナデを施す。内面及び底部外面が黒灰色、体部外面は白灰色を呈する。底径7.2cm。22は直線的に開き口縁部に至る。口径16.6cm。23は内湾し、外面にナデを施す。口径15.8cmをはかる。22･23は体部が黒灰色で口縁部が白灰～灰褐色を呈する。

須恵器系陶器（24～26） 24は須恵質の鉢である。平坦な底部から屈曲し直線的に口縁部に向かい伸びる。口縁端部は上下に大きく肥厚し、「く」の字状に近い縁帯を形成する。口縁部内・外面に回転ナデを施し、体部外面には口縁部周辺を除いてユビオサエ、底部外面にはハケメを施す。器壁は青灰色で口径32.0cm、底径10.7cm、器高12.2cmをはかる。14世紀前半の資料か。25･26は瓦質の鉢。平坦な底部から屈曲し直線的に立ち上がる。いずれも焼成不良で、色調にひどく斑がある。外面は緑味を帯びた黄褐色、内面は白灰色・黒灰色。25は底部外面及び体部内外面にハケメ、外面はその上に列状のユビオサエを施す。底径15.2cm。26は体部内面にはハケメ、外面は列状のユビオサエを施す。底径10cm。（細石）

SX－02（第74図、図版58）

Ⅲ区中央西よりに位置する。調査区の最上段にあり、6号建物跡の北に隣接していて一部の柱穴により破壊されている。平面形態は大略長方形で、南側は段造成時に削平され失われている。深さは最も深いところで約20cmほどを測り、底部にはやや凹凸が見られる。付近には多数のピットが分布しており、本遺構を切るものも本遺構に切られるものもあった。本遺構に伴うものを探したが、ピットの分布に規則性はなく本遺構との関連性は明らかではない。出土土器から中世の遺構と考えられる。（小澤）

出土土器（第82図）

土師器系土器（27・28）　27は土師質土器の坏の底部片。内外面にナデを施す。径0.5～1.0㎜程の黒雲母や透明な鉱物を含む。底径7.8㎝。28は瓦質土器の擂鉢か。底部から強く屈曲して立ち上がる。内外面にナデを施し、内面に櫛目と思われる深めの条線をもつ。径0.1～4.0㎜程の石英や黒雲母を含む。底径7.2㎝。（細石）

（7）そのほかの出土遺物

ピット出土土器（第83図、図版60）

調査区内からは、建物跡や柵列などを構成しない多数のピットが出土した。本来は何らかの構造物を構成した遺構の一部であったものであろうが、調査ではこれを明らかにすることはできなかった。いくつかのピットから土器が出土しているが、そのほとんどは中世初期の遺物であり、これらのピットの所属時期もその頃であろう。（小澤）

須恵器・須恵器系陶器（2･7）　2は須恵器系陶器の鉢か。平坦な底部から強く屈曲し立ち上がる。体部は内外面に回転ナデが施され、底部はヘラ切り。外面にはヘラの抜き取り痕など成形時の工具痕が残る。灰白色。底径10.8㎝。Pit7出土。7は須恵器の鉢。平坦な底部から強く上方に屈曲する。体部は直線的で、内外面に回転ナデを施す。底径10.6㎝。Pit28出土。

土師器・土師器系土器（1･3～6･8～15･17･18）　1･6･9･11･17は黒色土器碗で、1･6･11が内面を黒色化したA類、9･17が内・外面を黒色化したB類である。いずれも胎土に径0.1㎜程度の黒雲母や透明な鉱物を含む。うち1･6･11･17が高台を含む底部片、9は全形がわかる資料である。1はPit5出土で、端部の丸い高台を八の字状に貼り付け、底部は下へせり出す。体部外面及び高台外側に回転ナデ、内面にヘラミガキを施す。6はPit25出土で、端部の丸い八の字状に外反する高台を貼り付け、底部はやや下方へせり出す。外面に回転ナデ、内面にヘラミガキを施す。底径7.0㎝。9はPit33出土で、緩やかに内湾し口縁部に至る。内外面にナデを施す。口縁部が黒緑褐色で体部は摩耗が激しいが所々緑褐色を呈する。口径17.0㎝。11はPit35出土で、端部の丸い断面三角形の高台を貼り付け、底部は下方にせり出す。外面にナデ、内面にミガキを施す。外面白緑褐色、内面黒緑褐色。底径5.8㎝。17はPit54出土で、平坦な底部に端部が丸い断面三角形の高台を貼り付け、底部の内外面にナデを施す。黒灰褐色。底径6.0㎝。

3･5･13･18は土師質土器碗である。3･5は口縁部の、13･18は高台を伴う底部付近の資料である。3はPit14出土で、器壁が薄く、外反する口縁をもつ。内外面に回転ナデを施す。口径13㎝。5はPit24出土で、口縁はやや外反気味に開き内外面にナデを施す。胎土に径0.2㎜程の黒雲母をわずかに含む。口径16.4㎝。13はPit40出土で、端部が丸い断面三角形の高台を貼り付ける。内外面にナデを施す。底径6.2㎝。18はPit59出土。底部は突出し中央が凹んで高台状になる。内外面に回転

ナデを施す。底径 10.5cm。

4･8･12 は土師質土器の皿。平坦な底部をもつ点で共通し、4 は屈曲して口縁は外反する口縁に至るが 8･12 は口縁部に向かって短く内湾する。4 は Pit21 出土で、内外面に回転ナデ、底部は回転ヘラケズリ後にナデを施し、口径 14.0cm、底径 11.0cm、器高 1.1cm。8 は Pit30 出土で、内外面にナデを施し口径 8.3cm、底径 5.5cm、器高 1.6cm。12 は Pit36 出土。底部と体部の境に段が廻る。内外面にナデを施す。口径 9.3cm、底径 6.6cm、器高 1.8cm。

10･14 は土師質土器の甕。ともに「く」の字状の頸部から開く口縁部は肥厚しつつ口縁部に至る。内外面にナデを施す。胎土に径 0.1 ～ 1.0mm程の黒雲母や透明な鉱物を多く含む。10 は口径 30.0cm で Pit34 出土。14 は口径 24.6cmで Pit42 出土。

15 は土師質土器の釜。体部上方から垂直に伸びる受け部をもつ。内外面にナデを施す。口縁部外面～受け部暗青灰色、体部外面暗褐色、内面明褐色。口径 34.6cm。Pit42 出土。

陶磁器（16） 16 は龍泉窯系青磁碗の小片。内面は無文で、外面に蓮弁文と思われる凹凸をもつ。釉薬は小片の内外面全体に 0.2mm程で厚めに施す。淡青緑色。Pit50 出土。13 世紀中頃～ 14 世紀初頭。（細石）

Ⅲ区黒色包含層出土土器（第 83 図、図版 60）

Ⅲ区南西側の SX － 02 付近では、検出面直上に黒褐色粘砂質土からなる遺物包含層が形成されていた。この層は水田開発に伴い形成されたと思われる段を埋積して堆積しており、堆積のタイミングは近世以降と考えられるが、出土した遺物はすべて古代～中世初期の遺物である。（小澤）

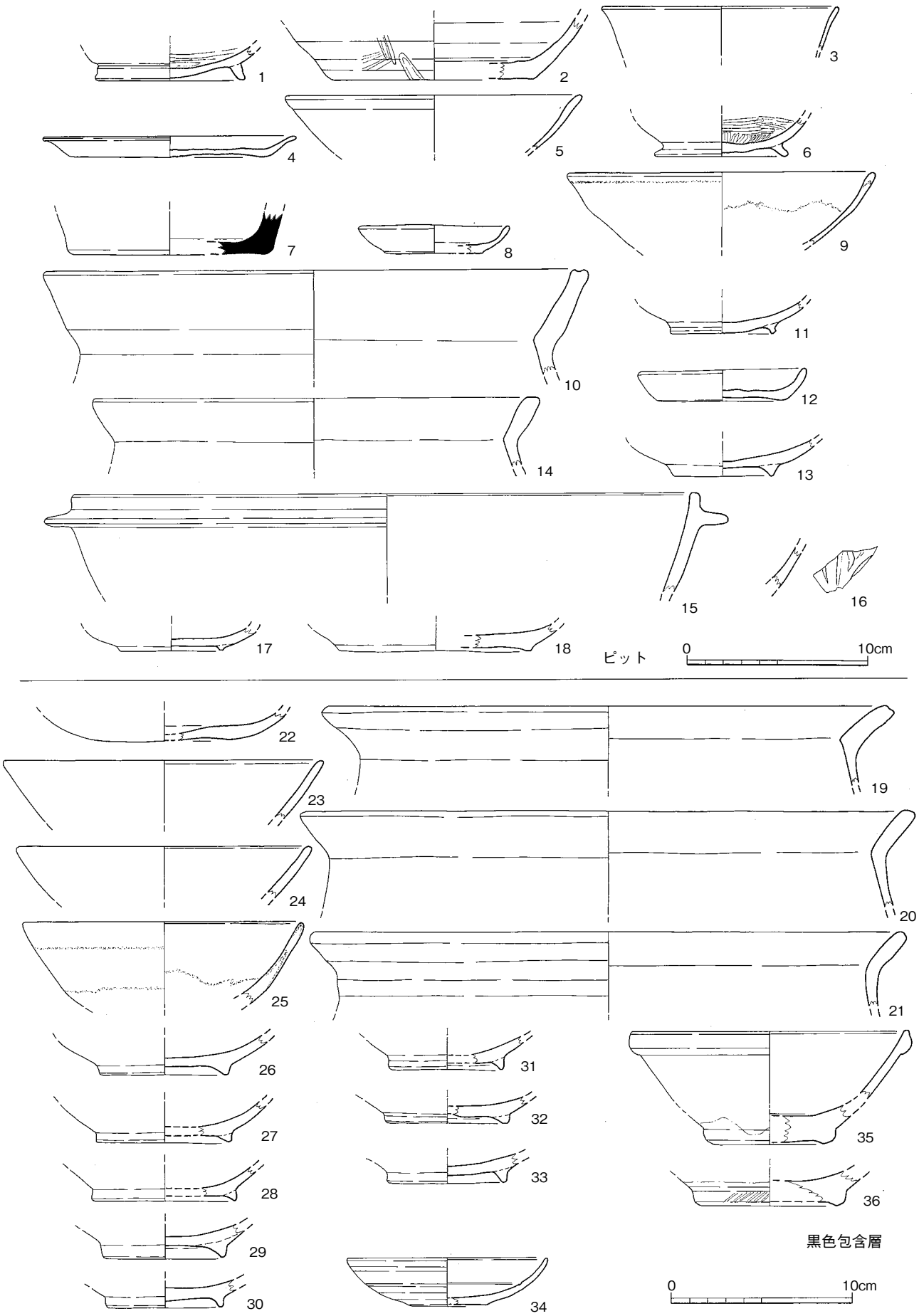
土師器系土器（19 ～ 22） 19 ～ 21 は土師質土器の甕。口縁部は肥厚し外反気味に開き、胎土には径 0.2 ～ 0.5mm大の黒雲母や透明な鉱物を含む。19 は口縁端部が面をなす。調整痕は看取できない。口径 31.6cm。20 は内外面にナデを施す。口径 34.1cm。21 は外面にナデを施す。外面が緑褐色で、内面が白褐色。口径 33.0cm。22 は土師質の坏か。底部から緩やかに弯曲し立ち上がる。内外面にナデを施す。径 0.2 ～ 0.5mm程の黒雲母や透明な鉱物をわずかに含む。

23･33 は黒色土器 A 類の碗。23 はやや直線的に開いて口縁部に至る。調整痕は看取できない。口径 17.6cm。33 は外面白緑褐色、内面暗灰緑色。底径 6.6cm。

24･26 ～ 32 は土師質土器の碗。24 は体部がやや直線的に開き口縁部に至る。口径 16.2cm。26 は底部に端部が丸く断面三角形の高台をもち、付け根にナデを施す。底部内面には部分的に暗褐色の色素が付着する。底径 7.4cm。27 ～ 30･32 はいずれも端部の丸い断面三角形あるいは台形の高台をもち、内外面にナデを施す。27･28･29･32 は白黄褐色を呈し、断面内側が黒灰色。底径は 27 が 7.5cm、28 が底径 8.0cm、29 が底径 7.0cm。30 は外面に暗褐色の色素が付着する。外面が緑褐色、内面が白黄褐色で底は 6.5cm。32･33 は断面台形の高台を貼り付ける。31 は端部の丸い高台を貼り付ける。内外面にナデを施す。底径 6.4cm。32 は底部内の一部に暗褐色の色素が付着する。底径 7.0cm。

25 は黒色土器 B 類の碗。体部下半から緩やかに内湾しつつ立ち上がり口縁部に至る。内外面にナデを施す。径 0.2 ～ 1.0mm程の黒雲母や透明な鉱物をわずかに含む。色調は口縁部から下に外面が緑灰色・黄褐色・緑灰色、内面が黄褐色・緑灰色。

陶磁器（34 ～ 36） 34 は白磁皿。底部はわずかに突出し、内湾して上げ底状になる。体部は内湾しつつ立ち上がり、体部内面に一条の沈線が廻る。釉薬は内面全体と口縁部～体部外面に 0.1mm以

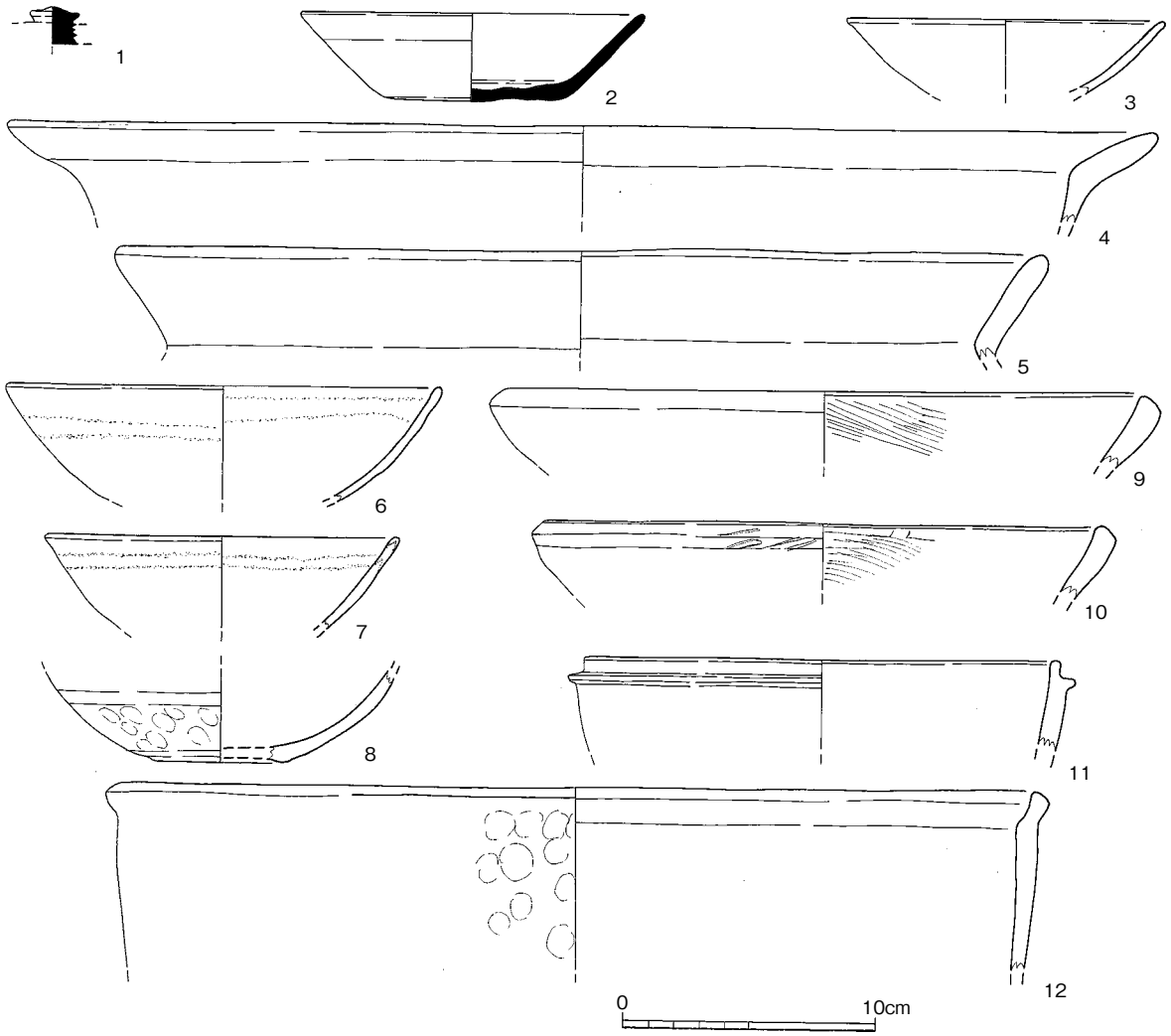


第 83 図　川内下野添遺跡第 1 次調査ピット・Ⅲ区黒色包含土層出土器実測図（1/3）

下で薄く施され、内面に貫入がある。体部外面に回転ナデを施す。施釉範囲は黄味を帯びた緑白色、胎土は黄白色。口径 11.0cm、底径 4.0cm、器高 2.7cm。35･36 は白磁碗。底部の器肉は厚く、高台内部の刳りは浅い。35 は体部が直線的に立ち上がり肉厚な玉縁口縁へ至る。内面の屈曲部には鈍い沈線が廻り、内面全体と外面口縁部～体部に 0.2mm程の厚さで施釉する。全体に貫入がみられ、特に体部外面は青色化し気泡が残る。底部外面に回転ナデを施す。胎土は黄白色で、施釉範囲は緑味を帯びる。口径 15.5cm、底径 7.2cm、器高 6.2cm。36 は内面に明瞭な沈線を廻らす。底部外面と高台周辺を除き内外面に 0.1mm程の厚さで施釉する。体部下半に回転ナデ調整を施し、高台外側には斜線状の調整痕が残る。施釉範囲は薄青緑色、胎土は青味がかった白緑色。底径 8.4cm。白磁はいずれも 11 世紀後半～ 12 世紀前半の資料である。（細石）

1 次調査区包含層等出土土器（第 84 図）

上記のほかに、調査時に出土した遺物がビニール袋 2 袋ほどある。遺構検出時に特定の遺構の埋土中以外から出土したものや、調査中に表採したものなどである。すべて古代～中世の遺物である。



第 84 図　川内下野添遺跡第 1 次調査包含層等出土土器実測図（1/3）

（小澤）

須恵器（1･2）　1 は坏蓋のつまみ部。2 は坏。平坦な底部から屈曲し直線的に口縁部へ開く。内外面に回転ナデを施す。口径 13.6cm、底径 7.0cm、器高 3.5cm。

土師器（3 ～ 5）　3 は土師器の碗。器壁は薄く、わずかに内湾し外反気味の口縁部に至る。内外面にナデを施す。口径 12.6cm。4･5 は土師質の甕の口縁部片。4 は頸部から外反気味に開き、口縁部は肥厚する。径 0.2 ～ 0.5mm程の黒雲母や透明な鉱物を多く含む。胎土・色調が Pit42 出土土器と酷似。口径 45.2cm。5 はおそらく頸部で「く」の字状に屈曲するもの。径 0.2 ～ 0.5mm程の黒雲母や透明な鉱物をわずかに含む。

土師器系土器（6 ～ 8･11･12）　6･7 は黒色土器 B 類の碗。わずかに内湾し口縁部に至る。胎土には径 0.1 ～ 1.0mm程の黒雲母や透明な鉱物を多く含む。器壁は黒灰色を呈し、口縁部は上から暗灰色・白灰色を呈す。6 は口縁部内面にナデを施す。口径 17.2cm。7 は調整痕が確認できない。口径 14.0cm。

8 は瓦器碗。断面半円形の低い高台をもち、内湾し立ち上がる。内外面にナデ、体部外面の下半にユビオサエを施す。白灰色。底径 5.8cm。

11 は土師質土器の釜。体部から垂直に突出する受け部をもち、そこから伸びる口縁部は厚みを減じる。内外面にナデを施す。径 0.5 ～ 1.5mm程の石英をわずかに含む。外面白緑褐色、内面白黄褐色。口径 18.8cm。12 は土師質土器の甕。頸部は窄まらず屈曲して外に開き、内湾気味の口縁部を形成する。口縁部外面にナデ、体部外面にユビオサエを施す。径 0.2 ～ 1.5mm程の黒雲母や透明な鉱物を含む。口径 37.1cm。

須恵質土器（9･10）　9･10 は須恵器系陶器の鉢か。口縁部は肥厚する。外面及び口縁部内面に回転ナデ、また内面にハケメを施す。9 は体部外面に指紋が確認できる。白青灰色を呈し、口径は 23.0cm。10 は外面暗青灰色、内面緑灰色である。口径 26.4cm。（細石）

4　2 次調査出土の遺構と遺物

（1）竪穴住居跡

2 次調査区内でも 2 棟の竪穴住居跡と思われる掘り込みを検出した。ただし、1 次調査区で検出したものと同様、著しい削平を受けていて全体形が不明であるほか、残存深さもせいぜい数cm程度で、また主柱穴もはっきりとせず、本当に竪穴住居跡なのか確証は得られなかった。また、遺構があまりにも浅いため写真撮影を断念せざるを得なかった。

12 号竪穴住居跡跡（第 85 図）

調査区の東端近くにある。方形住居跡の南西側のコーナー部分のみを検出した。残存幅は南北が 0.82m、東西が 0.35m ほどである。また、深さも非常に浅く数cmしか残されていない。コーナー部近くから浅いピットを検出したが本住居跡に伴うものではない。出土土器はなく、所属時期は不明である。

13 号竪穴住居跡（第 85 図）

12 号住居跡の南側で検出した。12 号と同様に方形住居跡の南西コーナー部のみを検出し、残存

幅は南北が 1.95m、東西幅が 0.75m ほどである。出土土器はなく所属時期は不明である。

（2）土坑

14 号土坑（第 85 図、図版 62）

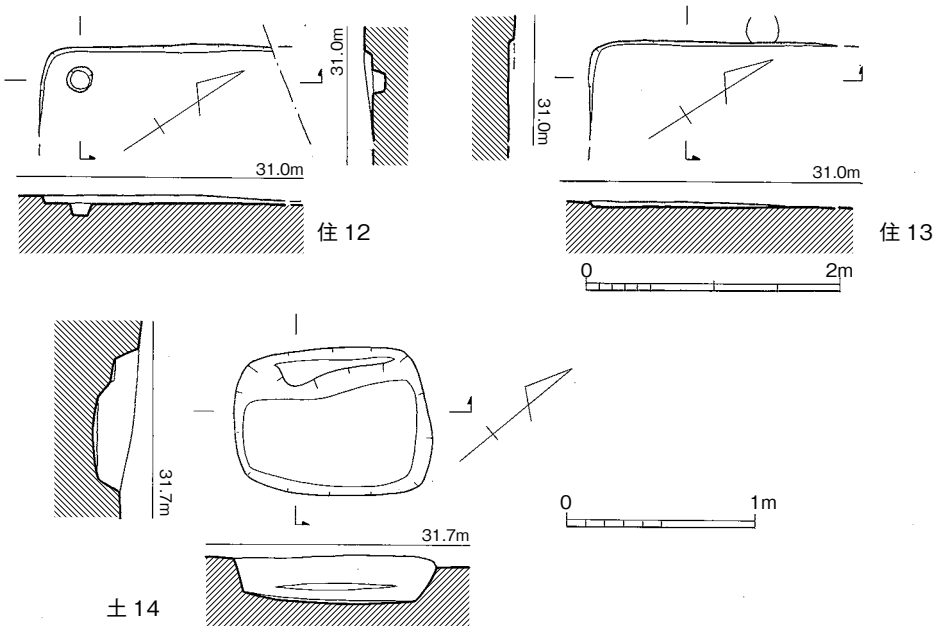
調査区の北側端部で検出した。平面は隅丸長方形で長軸 1.05m、短軸 0.8m ほどの規模をはかる。底部には長軸方向に一段の段が見られる。埋土は暗黄褐色粘砂質土でほかの土坑よりもやや明るく地山に近い。土坑内からは姫島産黒曜石の握り拳大の塊が出土したが、整理の際に紛失してしまった。埋土や出土遺物から、ほかの遺構とは異なりやや古いもので、おそらく縄文時代後期から弥生時代にかけてのものではないかと思われるが確証はない。

（3）柵列

調査区の東側境界線に添う方向に 2 条の柵列を検出した。当初は建物跡を構成する柱穴と考えていたが、配列が不規則な上に 2 列の柱穴の位置が対応せず、建物跡ではなく柵列と判断するに至った。別個の番号を付して報告するが、2 列はペアになって通路を区画していた可能性もある。また、先述のように 1 次調査Ⅱ区で検出した 1 号柵列の方向に延びており、2 号柵列が 1 次調査 1 号柵列につながる可能性もある。さらに、通路状の区画を形成していたとすれば、3 号柵列は 1 次調査 2 号建物跡とした柱列に接続する可能性もある。

2 号柵列（第 74 図）

調査区東側に並んで南北に延びる 2 本の柵列のうち西側のものである。やや弧状に 4 本の柱が配列されている。柱穴の大きさは小さくすべて直径が 20㎝内外のものばかりである。柱間距離は 2.5 ～ 2.7m で規則性が高い。出土遺物はなく時期は不明。



第 85 図　12･13 号竪穴住居跡実測図（1/60）、14 号土坑実測図（1/40）

3号柵列（第74図）

2号柵列の東側に、同じく等高線に沿うように大略南北方向に延びる柵列である。5本のピットが並んでおり、柱間距離は3.3mとやや広い3－4本目間をのぞきいずれも2.3～2.5mである。柱穴の直径はやはり20cm以下のもので占められる。出土遺物はなく時期は不明。

（4）谷状落ち込み

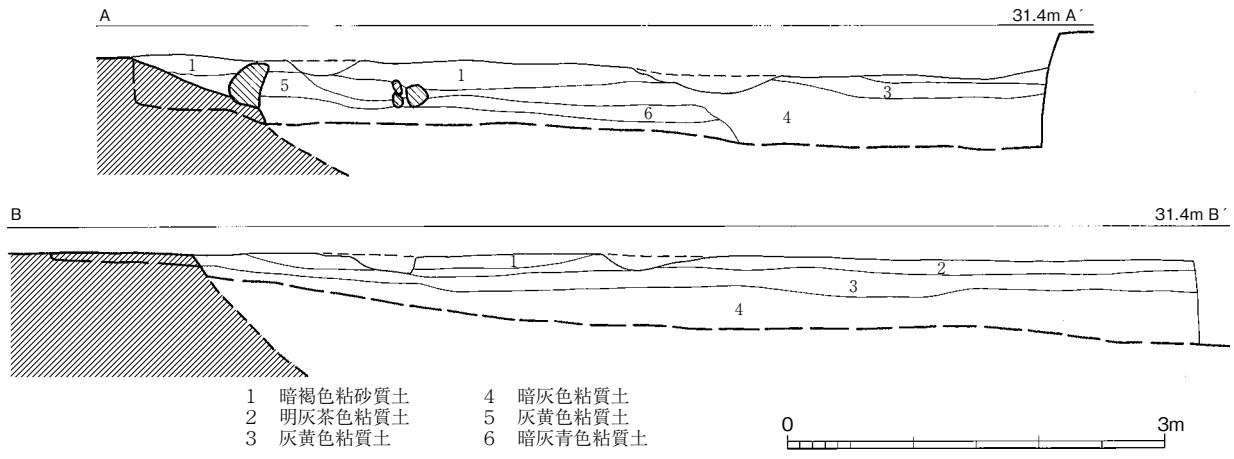
調査区の南西部で谷状の落ち込みを検出した（第74･86図、図版61･62）。付近は水田耕作のための平坦部を造成する際にかなり山側まで削平しており、かなり奥の地山と考えられる岩石が顔をのぞかせていた。中川の東岸を流れる支流が調査区南側で貯水池に引き込まれており、この付近は丘陵に挟まれた深い谷を形成している。今回検出した落ち込みはこの谷部を流れ出した支流により形成されたものとみられる。ほ場整備以前に小さな貯水池が存在したのかもしれない。

埋土は6層に分層して示したが、ほ場整備の時に埋め立てられたと思われる1～3層と、それ以前に埋没した4～6層に大きく分けられ、4～6層は粒子の細かい粘質土から形成されていた。静かな淡水状態で徐々に埋没したのであろう。トレンチ中からは数点の遺物が出土したが、整理時の手違いにより遺構検出時、あるいは包含層出土の遺物と混ざってしまった。ただし、いくつかトレンチ内から出土したことが記憶に残っているものがあり、それらについては出土遺物の報告において触れたい。なお、4層中からガラス瓶が出土した（第87図－9）。近～現代に属する遺物であり、この谷部が近代～現代初期においても存在したことを示す。ほかに黒曜石片、古代の盤、12世紀の青磁、近世陶器などがあり、遺物の性格も所属時期も多様である。恐らく谷状地形がゆっくりと埋積する間に北側の集落から流入したのであろう。

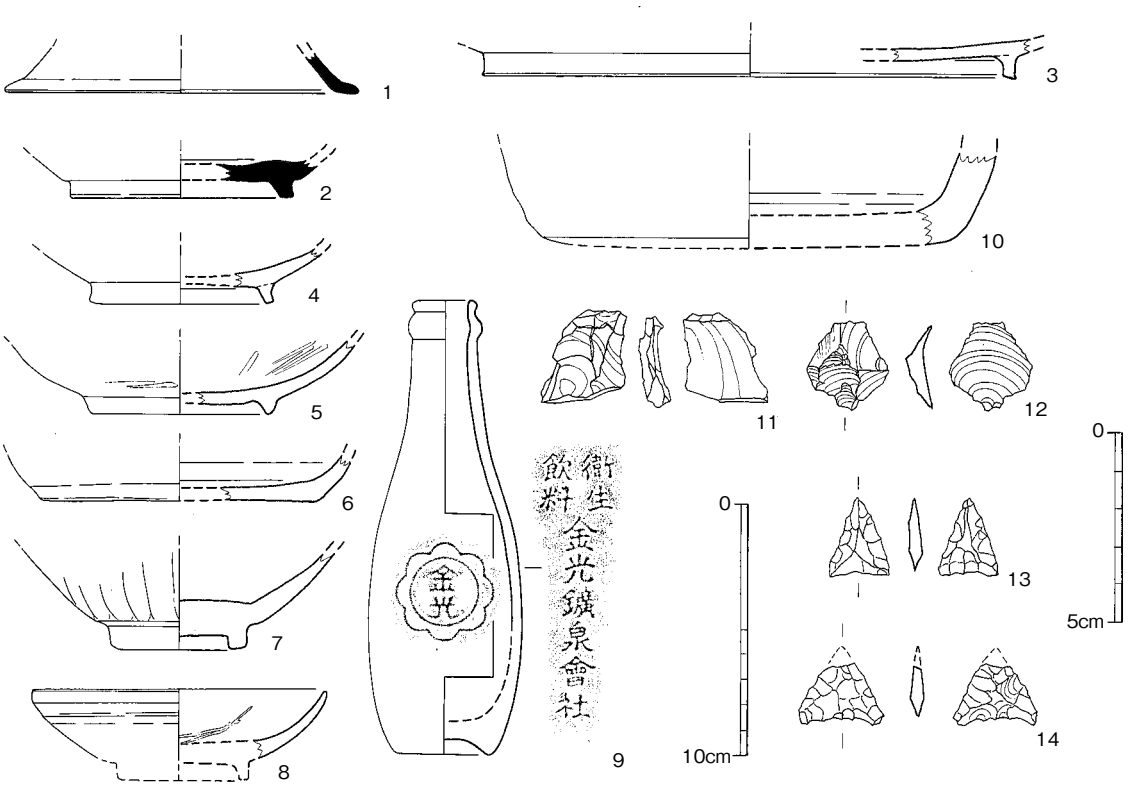
（5）第2次調査の出土遺物（第87図、図版63）

第2次調査においては、ビニール袋1袋ほどの土器が出土した。そのうち、遺構から出土した遺物は上述の土坑出土の黒曜石塊（紛失）のみで、ほかは検出時に、あるいは谷状落ち込み部に設定したトレンチから出土した。トレンチ内出土の遺物については上述のとおりである。

須恵器(1･2)　1は高坏の脚部であろうか。脚部径は約14cmに復元したが小片のため確実ではない。



第86図　西側落ち込み部トレンチ土層図（1/60）



第 87 図　川内下野添遺跡第 2 次調査区出土遺物実測図（1 ～ 10 は 1/3、11 ～ 14 は 1/2）

軽く外に開きつつ素直に収める形状をもつ。2 は坏身の高台部片である。坏底部は平坦で、口縁にむけて明瞭に屈曲する部分まで残る。高台径は約 8.8cmを測る。高台は短く、やや外に開きながらまっすぐ伸びる。いずれも 8 世紀代の資料であろう。

瓦器（3･5）3 は盤である。高台部から底部にかけてが残存し、高台径は約 20.8 センチを測る。底部は平坦に伸びる。胎土は暗茶褐色だが器壁は全体に黒褐色に変色しており、特に外側は炭素が吸着して黒色を呈する。5 はいわゆる黒色土器である。高台を持つ椀で、器形は半球形状を呈し、高台の断面形状は三角形状を呈して低い。内・外面ともに磨耗により判別しづらいが全体にヘラミガキを施し、外面は黒灰色、内面は黒色味を帯びず灰褐色を呈する。高台径は約 7.0cm。

土師質土器（4･6）　4 は坏または椀であろう。身部は半球形を呈し、高台は短くやや開く。内・外面ともに丁寧なナデ仕上げを施しており、外壁は灰褐色、内壁は黄褐色を呈する。6 は土師質の小皿である。底面は回転糸切り痕をよく残し平坦で、身部はやや湾曲する。底径は 11.0cmを測る。

陶磁器（7･8）　7 は青磁で、龍泉窯系の椀である。高台は短く直立し、外面には連弁を浮き彫りにする。胎土は白黄灰色で、外面に暗緑色の釉を厚く掛け、高台部は剥ぎ取る。高台径は約 5.4cmを測る。太宰府分類（太宰府市教委 2000）では龍泉窯系椀Ⅰ -6b 類に分類され、12 世紀中頃～後半の指標土器とされる。8 は波佐見焼の小皿である。高台部～底部は失われ、緩やかに湾曲しながら短く立ち上がる口縁部のみが残る。見込みに暗緑色の線が数本入る。胎土は黄灰色で、その上にやや緑味がかった白色の釉がかかり、高台部付近は施釉されない。近世の遺物である。

ガラス器（9）　9 はガラス瓶である。ほぼ完存し、器高は約 17.8cm、最大径は約 6.0cmほどを測る。型成型で合わせラインが見られる。いずれもエンボスで片面に「衛生飲料　金光鑛泉會社」、もう片面には中央に「金光」と入った円と八弁の花文を組み合わせたマークを付す。色調は青味がかった透明色（いわゆるガラス色）で、器壁の内部には細かな気泡が多く含まれる。機械による型合わ

せ成型導入後の昭和初期のものではないか。

石器・石製品（10 ～ 14） 10 は滑石製の石鍋である。胴底部境のごく小さな破片であるが、底部径を約 16㎝に復元した。外面には煤がよく残る。11 は姫島産黒曜石製のスクレイパーと判断したが、剥片かもしれない。石質はやや悪くヒビも入っていて割れ方に一部不定形な部分がある。片面が一枚の大きな剥離で取られ、反対の面を細かく打ち欠いて一側面に刃部を作り出すように見える。重量は 3.5g をはかる。12 は剥片または石錐であろうか。腰岳山黒曜石製と見られ、片面が一枚の大きな剥離で形成されている。刃部等の形成は確認できない。重量約 1.7g。13 はサヌカイト製の鏃である。略二等辺三角形で抉りは不十分であり全体に作りが甘い感じを受ける。全長 2.1㎜、最大幅 1.6㎜を測る。14 は姫島産黒曜石製の鏃である。先端部が一部欠損しており全長は推定 2.1㎝程度、幅は 2.2㎜程度を測り抉りは未発達である。稜も未発達でつくりが甘く、おそらく弥生時代の製品であろう。重量は 1.1g をはかる。

以上の出土遺物のうち、3･7 ～ 9･12 は間違いなく谷状落ち込み部のトレンチから出土した遺物である。ほかの遺物のうち石鏃二つは検出中の出土であった。

5　総括

川内下野添遺跡では、古代（9 世紀後半以降）～中世（13 世紀）の集落跡を調査した。主たる遺構として竪穴住居跡と掘立柱建物跡がある。

一般に古代の集落は 7 世紀から 8 世紀にかけて居住施設が竪穴住居から掘立柱建物へと移り変わっていくことが知られるが、豊前地域ではしばしば 9 ～ 10 世紀段階においてもカマドを有する小型の竪穴住居跡が営まれる例が散見される。かつて、このような施設については、小規模であること、主柱穴が明瞭でないこと，同時期に居住用の施設と考えられる掘立柱建物跡が併存することなどなどを理由として、これを「カマド屋」（煮炊き専用の施設）と考える向きもあった（豊前市教委 1991）。本遺跡でも、竪穴住居跡と掘立柱建物跡とが共存しており、先学の指摘のとおりカマド屋と理解する余地はある。しかし近年、永久遺跡（豊前市教委 1999）などで、8 世紀後半～ 9 世紀代の集落において、カマドを伴うごく小型の住居跡のみから構成され、掘立柱建物が伴わない集落の事例が知られてきた（小澤 2012）。こうした事例を踏まえれば、本遺跡で検出したような 9 世紀～ 10 世紀代の小型の住居跡が、本当に居住用の施設ではないのか、慎重な検討が必要であろう。

本遺跡では、出土遺物が限られていて個々の遺構の所属時期を明確にすることができないため、竪穴住居跡と掘立柱建物跡が同時併存するのか、それとも時期的な前後関係にあるのかを明らかにできなかった。したがって、カマドを伴う小型の竪穴住居跡が居住施設なのかそれとも調理用の専用施設なのかを判断することは難しい。しかし、わずかな出土遺物からは、竪穴住居跡の方がやや古く、掘立柱建物跡がこれよりも新しく位置づけられる可能性がある。そうであれば、竪穴住居を主体とする 9 ～ 10 世紀代の集落から、古代後半のどこか、おそらく 10 ～ 11 世紀代において、掘立柱建物を主体とする集落へと移り変わりながら存続した遺跡として評価できる可能性もあり、注意を払っておきたい。

出土遺物の中には、10 世紀に位置づけられる灰釉陶器や、13 世紀頃に位置づけられる青・白磁など、希少な遺物も散見される。集落の存続時期から、中世に成立した荘園である山田荘の成立前段階からこの地に定着し、山田荘の成立に際して何らかの影響を受けて程なく廃絶した可能性も考

えられ、山田地区の歴史を考える上で貴重な資料となりうる。今後の調査に期待したい。

【参考文献】

小澤佳憲「豊前地域の集落－古墳時代後期から奈良時代にかけての一考察－」『第 61 回埋蔵文化財研究集会発表資料集』埋蔵文化財研究集会実行委員会、2012 年

太宰府市教育委員会『大宰府条坊ＸＶ―陶磁器分類編―』太宰府市の文化財第 49 集、2000 年

棚田昭仁・坂梨祐子「新発見の縄文時代集落遺跡　豊前市大字川内所在の川内楠木遺跡について」郷土文化誌『青豊』第 7 号、1996 年

福岡県教育委員会『日詰遺跡―福岡県久留米市田主丸町田主丸豊城所在遺跡の調査―』一般国道 210 号浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第 24 集、2006 年

豊前市『豊前市史　上巻』豊前市史編集委員会編、1991 年

豊前市教育委員会『豊前市内遺跡分布地図』、2000 年

豊前市教育委員会『青畑向原遺跡・永久遺跡―県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 4（豊前市大村・青畑地区及び黒土西部地区）―』豊前市文化財報告書第 12 集、1999 年

豊前市教育委員会『鬼木四反田遺跡（遺構編）【河原田遺跡群Ⅳ】・鳥越今井野遺跡―県営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ　県営農村活性化住環境整備事業黒土西部地区及び県営担い手育成基盤事業山田地区土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』豊前市文化財報告書第 20 集、2005 年

渡邊晴見『豊前地方史』葦書房（有）、1981 年

渡辺重春・渡辺重兄「豊前志」、1899 年（『豊前志』（大日本地誌大系 43）雄山閣、1971 年による）

Ⅸ　大村上野地遺跡

１　遺跡の概要

遺跡を取り巻く環境　豊前市西部の丘陵地帯の東に隣接して、開けた台地がある。天地山丘陵から北に延びた埋没丘陵であり､現在の大村集落が広がる。付近は平安時代に編纂された辞典である『和名類聚抄』に記載された古代の地名「炊江郷」に比定されるが、この炊江郷は正倉院文書に残る大宝２年（702）に編纂された戸籍の断簡に見える「加目（自）久也里」と考えられており、古代において渡来系の姓を持つ人々が多く住んでいた地域として知られる。

地域の歴史　大村地区における開発の歴史は古く、最も古い資料は天地山丘陵東麓で発見された青畑向原遺跡出土の旧石器資料まで遡る（豊前市教委 1999)。後期旧石器時代～縄文時代草創期の資料がまとまって出土しており注目される。

縄文時代～弥生時代のまとまった資料は今のところ発見されていないが、古墳時代に入ると大村石畑遺跡などで集落の展開が見られる（豊前市教委 2007)。古代には現在の 10 号線バイパス付近に通る官道沿いの地域として開発が進んでおり、同じく大村石畑遺跡などで奈良時代の集落が見つかっている。

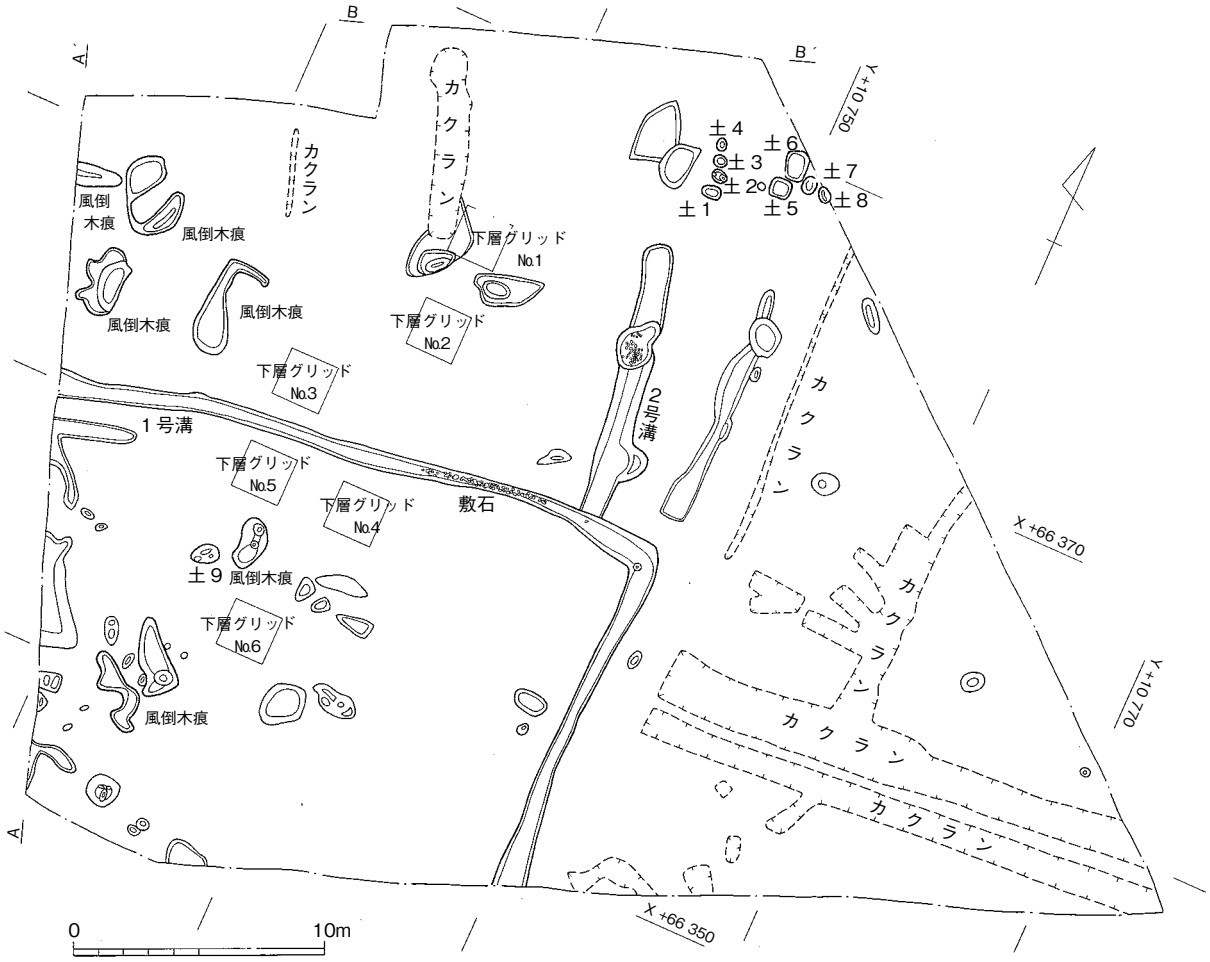
中世に入ると現在の大村小学校付近に大村城が築かれた。大村城は豊前宇都宮氏の支族である山田氏の本城とされ、貞和年間（14 世紀中頃）に築かれ、天正 15 年（1587）に黒田孝高により滅ぼされた。大村地区の集落内には、現在も三叉路や鉤手状の道路が多く、大村城が機能していた当時の地割りを継承している可能性があるという（豊前市教委 2007)。また大村小学校の周囲では、大村天神林遺跡の調査で中世の遺構が多く出土し、大村城の一部が明らかになっている（豊前市教委 2009)。大村上野地遺跡は天地山丘陵から延びる台地の東側に浅い谷を挟んで南北に延びる荒堀台地の西側緩斜面上に位置する。立地条件は良好で、遺跡の北東には周知の埋蔵文化財包蔵地として荒堀城跡があり（豊前市 2000、未調査につき詳細不明)、また東側約 100m では同じく東九州道の建設に先立つ試掘調査により新たに終末期群集墳が発見され話題を呼んだ。

２　調査の概要

調査に至る経緯　大村上野地遺跡は豊前市大字大村 2213-1･2214-4･2214-5･2222-1 に所在し、標高は 34 ～ 35 ｍをはかる。周囲には周知の埋蔵文化財包蔵地はなかったが､台地上で立地条件が良く、また開発が進行していないために付近の埋蔵文化財の包蔵状況はほとんど明らかになっておらず、このため福岡県教育庁総務部文化財保護課がネクスコ西日本（株）中津工事事務所に対して示した路線内において埋蔵文化財を包蔵する可能性のある地点のうち中津第 25 地点として示されていた。用地買収の進捗に伴い平成 22 年 10 月 28 日、同 11 月 9･10 月に福岡県教育庁総務部文化財保護課が付近の試掘調査を行い、そのうち一部について埋蔵文化財の包蔵を確認したため、翌平成 23 年度当初より九州歴史資料館によって発掘調査が行われた。調査は高橋章が担当し、藤島志考がこれを補助した。

調査の経過　平成 23 年 4 月 25 日にバックホーによる作業ヤード整備から行い、4 月 27 日には表土剥ぎを始めた。5 月 13 日から土坑や溝の掘削を始め、6 月 3 日には調査区南側排土上から全景写真を撮影した。6 月 14 日には下位の遺構・遺物の有無の確認のため調査区西側に２×２ｍグリッ

第 88 図　大村・荒堀地区の調査区位置図（1/5,000 ）



第 89 図　大村上野地遺跡遺構配置図（1/300）

ドを７つ設定し、掘り下げをはじめたが、いずれも検出されなかった。6 月 30 日に埋め戻しを終了し、調査を完了した。

３　遺構と遺物

検出遺構の概要　遺構は、調査区の東西・南北に溝が各１条、北東部に土坑が８基、南西部に土坑が１基検出された。

（1）土坑

１～４号土坑は調査区の北東部に位置し、南北方向に一列に並ぶ。5 ～ 8 号土坑は 1 ～ 4 号土坑の北側に隣接する土坑のまとまりである。

1 号土坑（第 91 図、図版 65）

平面プランは隅丸長方形をなし、長軸 78cm、短軸 56cm、深さ 50cmを測る。土坑内からは動物の骨片が確認されたが、ほかに出土遺物がなく時期不明。

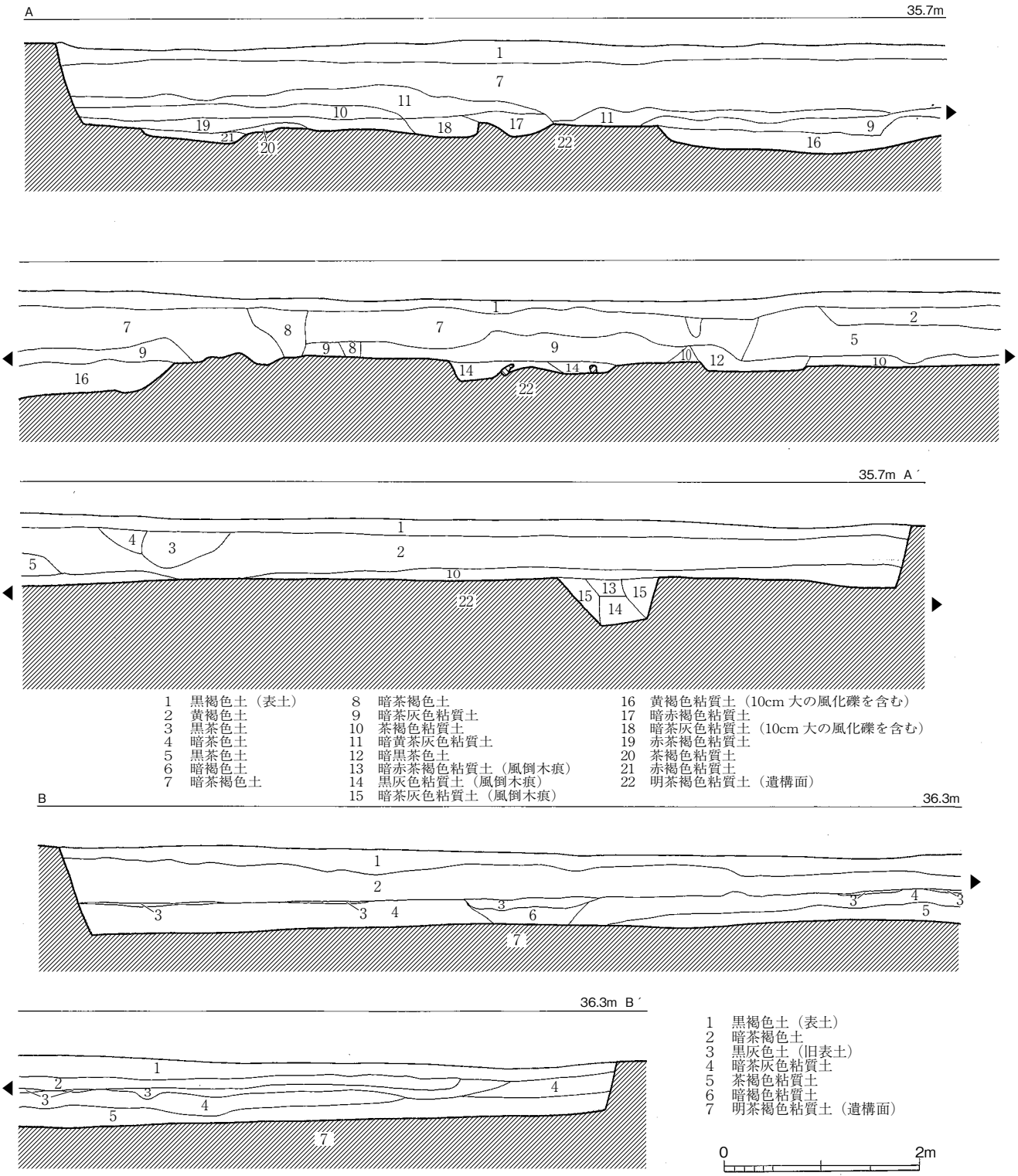
2 号土坑（第 91 図、図版 65）

平面プランは円形をなし、長軸 60cm、短軸 58cm、深さ 32cmを測る。土坑内からは動物の骨片が

確認されたが、ほかに出土遺物がなく時期不明。

3 号土坑（第 91 図、図版 65）

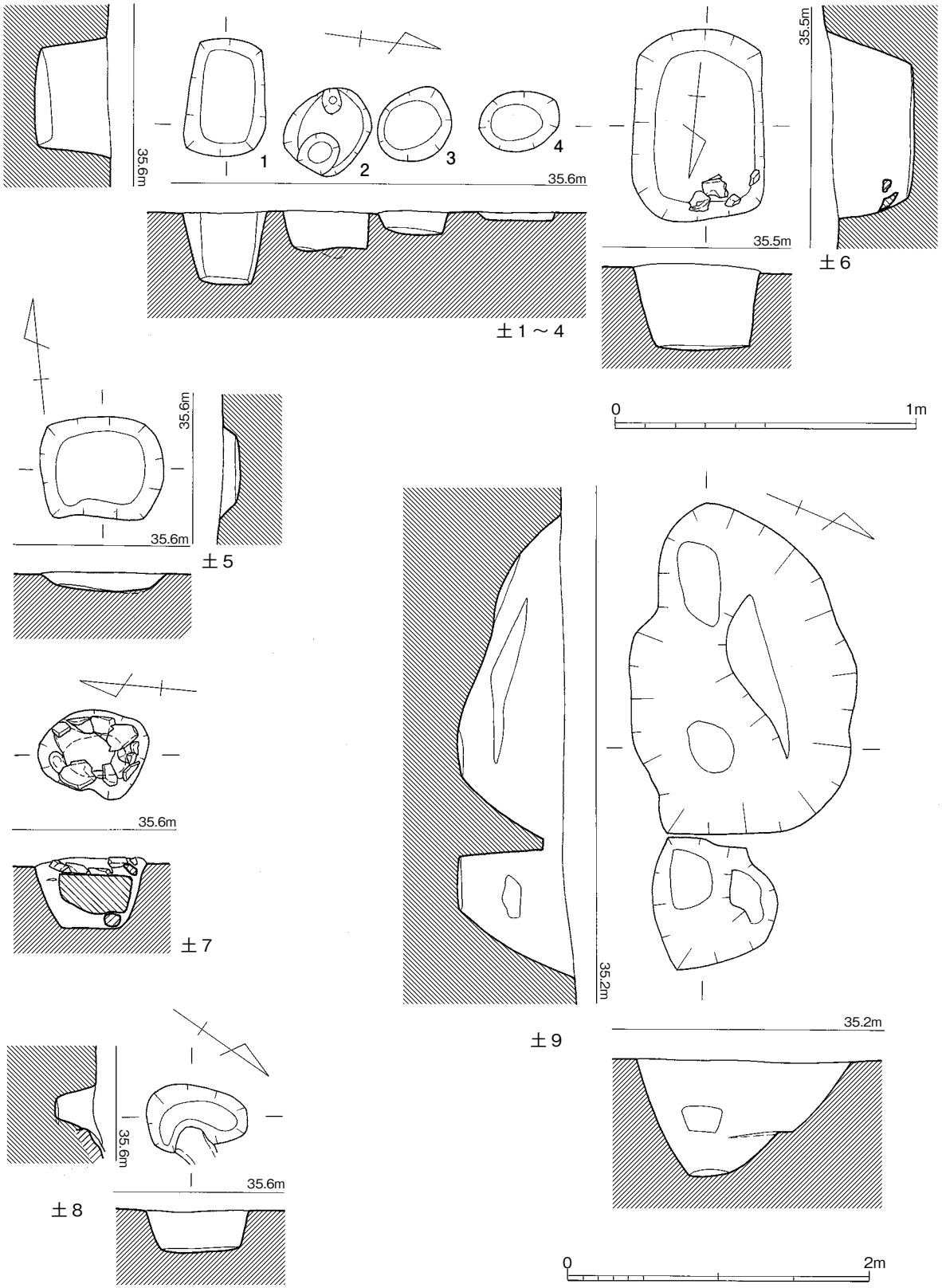
平面プランは円形をなし、長軸 49cm、短軸 50cm、深さ 17cmを測る。土坑内からは動物の骨片が確認されたが、ほかに出土遺物がなく時期不明。



第 90 図　調査区壁土層図（1/60）

4 号土坑（第 91 図、図版 65）

平面プランは楕円形をなし、長軸 40cm、短軸 53cm、深さ 5cmを測る。土坑内からは動物の骨片が確認されたが、ほかに出土遺物がなく時期不明。



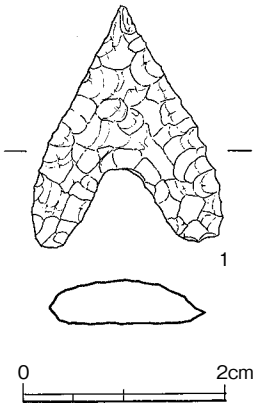
第 91 図　1～9 号土坑実測図（1/40）

5 号土坑（第 91 図、図版 65）

平面プランは隅丸方形をなし、長軸 70cm、短軸 80cm、深さ 14cmを測る。土坑内からは遺物の出土は確認されず、時期不明。

6 号土坑（第 91 図、図版 65）

平面プランは隅丸方形をなし、長軸 127cm、短軸 87cm、深さ 55cmを測る。土坑内には礫が見られたのみで、遺物の出土は確認されず、時期不明。



第 92 図　9 号土坑出土遺物実測図（5/3）

7 号土坑（第 91 図、図版 65）

平面プランは楕円形をなし、長軸 73cm、短軸 60cm、深さ 47cmを測る。土坑内には多量の礫が見られたのみで、遺物の出土は確認されず、時期不明。

8 号土坑（第 91 図、図版 65）

平面プランは楕円形をなし、長軸 66cm、短軸 54cm、深さ 28cmを測る。土坑内には礫が見られたのみで、遺物の出土は確認されず、時期不明。

9 号土坑（第 91 図、図版 65）

調査区南東部に位置する。平面プランは、長い楕円形をなし、断面は摺鉢状をなす。長軸 1.1m、短軸 78cm、深さ 37cmを測る。土坑内から打製石鏃が 1 点出土した。

遺物（第 92 図、図版 66）

打製石器（1）　ガラス質安山岩製の打製石鏃で、逆ハート形に近い形状をなし、先端は尖らせている。両面加工だが、背面は大きな剥離面を残す。風化が著しい。

（2）溝跡

1 号溝（第 89 図、図版 66）

東西方向および南北方向に L 字状に伸びる。全長は東西方向に 24.5m、南北方向に 14.5m を測り、幅 60cm、深さ 20cmを測る。東西方向に延びる溝の底部に、一部礫を敷き並べる。遺物の出土はなく、時期不明。

2 号溝（第 89 図、図版 64）

南北方向に延び、1 号溝につながる。全長は 11.2m で、幅 1m、深さ 5cmを測る。北端から 3.5m 程南に向かった位置に全長 2m の土坑状のくぼみがあり、底部に礫を敷き詰める。深さは 18cmを測る。遺物の出土はなく、時期不明。

4　総括

（1）遺構について

本調査区では今回、9 基の土坑を検出したが、いずれも性格は不明である。1 ～ 4 号土坑は、南

北方向に一列に並び、一連のものと考えられる。5～8号土坑は礫の出土量が多く、人為的に礫を投げ込んだようである。1·2号溝についてはなんらかの区画溝の可能性があるが、時期が特定できず、これ以上言及するだけの材料はない。

（2）大村上野地遺跡の打製石鏃について

今回出土した遺物のうち、唯一図化に耐えるものは9号土坑の打製石鏃で、本調査区から南に500m向かった青畑向原遺跡に類似する形状・材質の資料が出土している。青畑向原遺跡の石鏃は主に腰岳産、姫島産黒曜石を用いたものが多いが、一部周辺で採集できる安山岩を使用している。本例も、おそらく周辺で採集した石材を用いて製作されたものと考えられる。

今回の打製石鏃の発見は、縄文時代資料の分布範囲を、本調査区から青畑向原遺跡までを含めたなだらかな丘陵上全体に広げることになった。周辺の縄文時代の集落遺跡には、岩岳川中流の狭間宮ノ下遺跡、角田川左岸の中村石丸遺跡、中川左岸の川内楠木遺跡などがあり、いずれも主要河川に沿った河岸段丘上に立地している。しかし、本調査区の周辺には主要な河川が見当たらない。狩猟活動に伴い集落から遊離した可能性もあるが、異なる立地の集落が存在する可能性もある。今後の発見を期待したい。

（3）下層グリッドについて

豊前平野では旧石器時代の資料がまとまって出土した遺跡が少なく、金居塚遺跡、青畑向原遺跡のみでみられる程度である。本調査区が旧石器時代の良好な資料が多く出土した青畑向原遺跡と同丘陵上に位置し、なおかつ500mほどしか離れていないことから、調査区内に2m × 2mのグリッドを設定し、遺物の出土がないかを確認したが、石器などの遺物の出土は確認されなかった。今後の周辺調査に期待したい。（藤島志考・秦憲二）

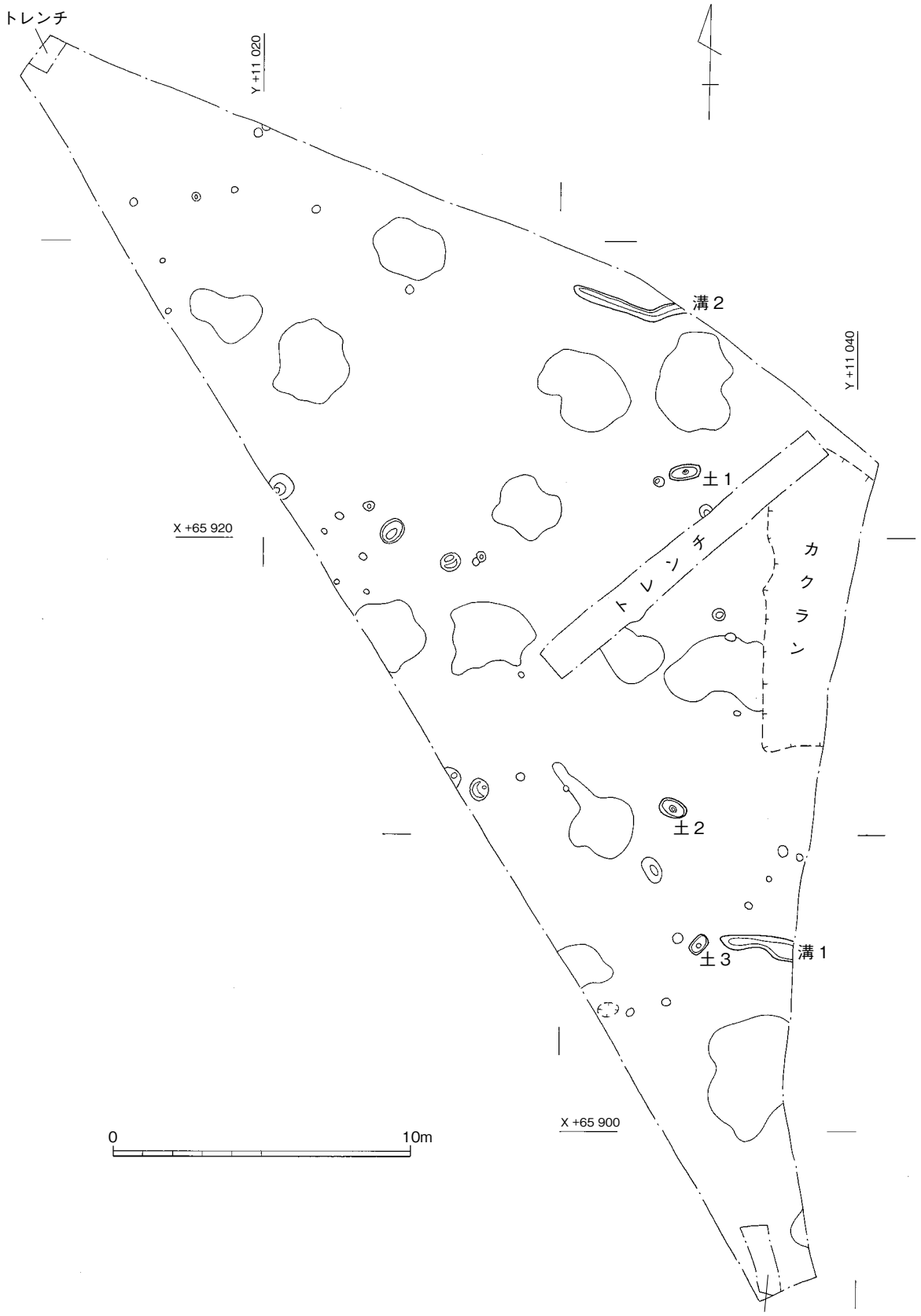
【参考文献】

豊前市教育委員会『県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告Ⅲ　豊前市横武・千束地区（3)』豊前市文化財報告書第7集、1991年

豊前市教育委員会『青畑向原遺跡・永久遺跡―県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書4（豊前市大村・青畑地区及び黒土西部地区）―』豊前市文化財報告書第12集、1999年

豊前市教育委員会『大村石畑遺跡―県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ（県営担い手育成基盤整備事業大村青畑地区土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書）―』豊前市文化財報告書第22集、2007年

豊前市教育委員会『大村天神林遺跡―県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅢ（県営担い手育成基盤整備事業大村青畑地区土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書）―』豊前市文化財報告書第26集、2009年



第 93 図　荒堀山田原遺跡第 1 次調査区遺構配置図

X　荒堀山田原遺跡

1　遺跡の概要

遺跡の立地環境　犬ヶ岳山系国見山から北に広く張り出した丘陵地帯は、豊前市の西側に広く展開しているが、その最も東部には、天地山丘陵を含むいくつかの尾根状丘陵が塊をなしている。そのうち、天地山丘陵群の東端に位置する尾根状丘陵は、西を鈴子川、東を城根川という、いずれも北流して周防灘に注ぐ小河川によって画されて、南北に細長く延び、その末端部は高さを減じて平野内に舌状の台地を形成している。この舌状の台地（荒堀台地）は南北に細長く発達していて、現在の地名では荒堀と呼ばれる地域の中心部を形成し、谷部との比高差が比較的低く地勢もなだらかで、広く畑地として利用されている。

荒堀台地の西側には，同様に天地山丘陵から延びる舌状の台地である大村台地が広がる。また、東側にもやはり荒堀台地と同様に、小河川によって区画された南北に細長く延びる舌状の台地群（野田台地・大村台地・千束原台地など）が連続して展開しており、いずれも古くから人々の生活の場を提供してきた。

地域の歴史　荒堀台地上の最も古い生活の痕跡は旧石器時代にさかのぼり、混入資料ではあるが荒堀大保遺跡でナイフ型石器が出土している（豊前市教委 1999）。西に隣接する大村台地の南側には、豊前市で唯一といっていい、旧石器時代のまとまった資料を出土した遺跡として知られる青畑向畑遺跡（豊前市教委 1999）もあり、旧石器時代人にとって付近は生活環境が良好だったとも考えられ、荒堀台地上にこのころの遺跡が広がる可能性は高い。

縄文時代の明らかな遺跡は知られないが、弥生時代後期～古墳時代の遺跡として荒堀石棺墓群が知られる（豊前市 2000）。現在包蔵地として周知化されている範囲は丘陵東側の谷部であるが、東九州道の建設工事が行われる際に付近を試掘調査した限りでは、低湿地となっていて遺跡の立地条件としては好適ではない。西側の荒堀台地東斜面か、あるいは東側の野田台地先端部の西斜面に存在するのかもしれない。ほかに荒堀台地上では遺跡の存在は知られていないが、西に隣接する大西丘陵では中大西遺跡・上大西遺跡など（豊前市教委 1990）、またさらにその西にある千束丘陵では大西遺跡（豊前市教委 1988）・西ノ原遺跡（同じく東九州自動車道建設に先立って福岡県教育委員会・豊前市教育委員会により調査が行われた。現在整理中）など、付近には弥生時代後期から古墳時代にかけての遺跡が多く調査されており、荒堀台地上にも該期の遺跡が存在する可能性は高いといえよう。

古墳時代以降の遺跡は、上述の上大西遺跡・西ノ原遺跡などのほか、現在の国道 10 号線バイパス沿線でも多く調査されている。荒堀中ノ原遺跡（古墳時代後期・古代前期）・荒堀車地遺跡（古墳時代末～古代前期）では、古墳時代後期から古代にかけての継続的な集落の痕跡が見つかった（豊前市教委 1991）。両遺跡は丘陵の東側斜面と西側斜面に隣接して立地するが、古墳時代における集落の存続時期はわずかに異なり、前者が古墳時代後期、後者が古墳時代末の集落跡とされており、前者から後者への集落の移動が想定されている。荒堀中ノ原遺跡では総柱の掘立柱建物跡（高床式倉庫）を多く伴い注目される。また、今回報告する地点から約 100m 南東ではやはり東九州道の建設に先立つ発掘調査により終末期群集墳が新たに発見されている（平成 23 年度に豊前市教育委員会により発掘調査が行われた。現在整理中）。

古代においては、現在の国道10号線バイパス付近を東西に官道が延び、付近の開発はさらに進んだ。上述の荒堀中ノ原遺跡・荒堀車地遺跡では古代に入り再び集落が営まれるほか、荒堀雨久保遺跡・荒堀大保遺跡など（豊前市1993）で古代の集落跡が検出されている。

中世には西で隣接する大村地区で城館が発達したことがよく知られる一方、荒堀地区の歴史は未だ明らかな部分は少ない。中世の遺跡として、荒堀台地の中央部に荒堀城跡が比定されている（豊前市2000）。殿屋敷・上屋敷などの小字が付近に残り、室町期の城館跡とも推測されるが、詳細は不明である。

2　調査の概要

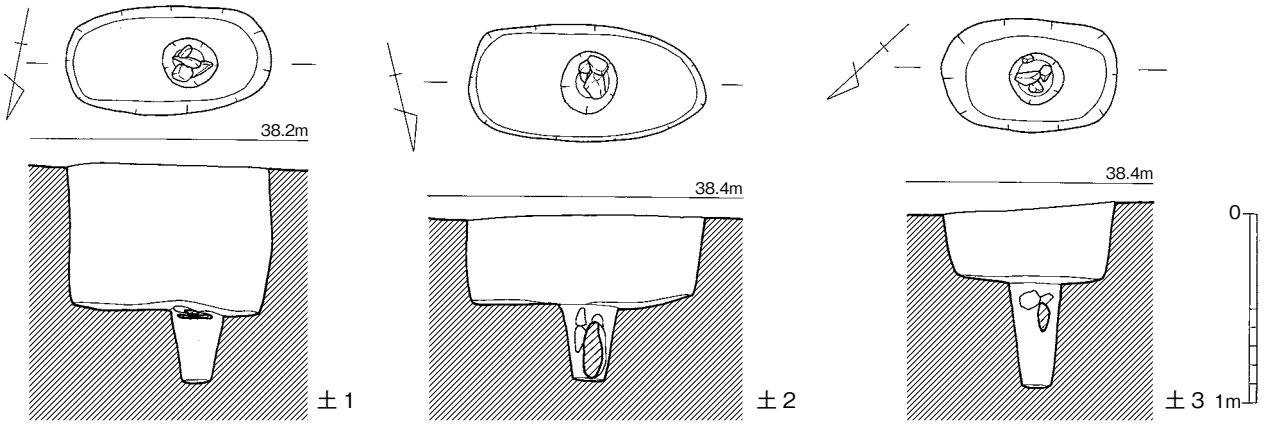
調査に至る経緯　今回報告する荒堀山田原遺跡は、台地の東側緩斜面上に位置する。北側約1kmの同じ台地上には荒堀城跡が、南約100m付近には荒堀石棺墓群がそれぞれ周知の埋蔵文化財包蔵地として知られ、地形から見ても遺跡立地の好適地であり、文化財部局から開発側に事前に示された東九州道建設予定地内の埋蔵文化財包蔵地点番号では中津第26地点として挙げられていた。

用地買収の進捗に伴い開発側から埋蔵文化財の有無に関する試掘調査依頼が平成22年秋に文化財部局に対してなされ、福岡県教育庁総務部文化財保護課では平成22年10月27日に付近の試掘調査を行った。その結果、遺物の出土こそないものの、小ピットや溝などの存在が確認され、時期は不明ながら埋蔵文化財が包蔵されていることが明らかになった。

この地点は、高圧電線が東西方向に走っており、その鉄塔の一本が東九州道の建設予定地内に立てられており、道路建設工事に先立って鉄塔を横にずらす必要が生じていた。本地点が鉄塔をずらす地点としても計画されており、その工事は道路部分の工事に先駆けて行われる必要があった。従って、調査は急がれたため、急遽同年11月25日より文化財保護課調査第二係の小澤佳憲が発掘調査を行った。

調査の経過　調査地付近の表土は約20～30cmほどと浅く、重機を用いて表土剥ぎを行ったところ赤黄褐色粘質土からなる地山を比較的良好な状態で検出した。12月2日より作業員を雇用して遺構検出作業を行ったところ、地山には多くの風倒木痕が見られ、それらを切るように少量のピットと溝、土坑が3基検出された。

遺構が少量のため調査は急速に進み、12月8日にはすべての遺構を完掘して空中写真撮影を行っ



第94図　1～3号土坑実測図（1/40）

た。遺構の掘り下げと並行して図化を進めており、翌 12 月 9 日には作業員を用いた調査をすべて完了し、埋め戻しを行って 12 月 21 日にはすべての現地作業を終了した。

なお、調査区の東には農道が走っているが、その付近が丘陵の裾部にあたり、試掘調査でもこれより東では低湿地となっていて遺跡が広がらないことを確認している。また、北側隣接地は過去に土取りが行われているようで調査地点より一段低く、遺構は全く確認できなかった。さらにその北でも耕作のために地山を深く掘り下げていて遺構の存在は認められなかった。以上から、本遺跡がさらに広がるとすれば西側の斜面上位方向ということになろうが、斜面上位ほど過去の耕作等による削平が著しく、残存状況は不良であろう。

調査成果の概要　今回の調査で検出した遺構は、土坑 3 基、溝 2 条のほか少量のピットである。出土土器は全くなく、遺構の所属時期は不明である。

3　遺構と遺物

（1）土坑

1 号土坑（第 94 図、図版 68）

調査区中央東寄りにあり、主軸を東西方向にとる平面隅丸長方形の土坑である。規模は長軸が約 110cm、幅が約 55cmを測る。壁はほぼ垂直で深さ約 80cmを測り、床面は平坦で中央やや西寄りに直径 35cmほどのピットを穿つ。ピットの深さは 40cmほどあり、その上位には拳よりやや大きな礫をいくつか配していた。おそらく、ピットに木柱を立ててその根を石で固定し、木柱の先端をとがらせるなどして獣を捕らえた落とし穴と考えられる。出土遺物はなく所属時期は不明である。

2 号土坑（第 94 図、図版 68）

調査区南半にあり、主軸を東西方向にとる、平面が不整楕円形状を呈する土坑である。規模は長軸約 125cm、幅は約 60cmを測り、深さは 50cm弱が残存する。壁はほぼ垂直で床面は平坦であり、床面のほぼ中央に直径 30cmほどのピットを穿つ。ピットの深さは 40cmほどで内部に拳大～小児頭大の礫を詰めている。1 号土坑と同じく落とし穴であろう。やはり出土土器はなく所属時期は不明。

3 号土坑（第 94 図、図版 68）

調査区南半にあり、主軸を北西－南東方向にとる、平面が隅丸長方形を呈する土坑である。規模は長軸約 95cm弱、幅は約 60cmを測り、深さは 40cm弱が残存する。壁はほぼ垂直で床面は平坦であり、床面のほぼ中央に直径 30cm弱のピットを穿つ。ピットの深さは 55cmほどをはかり、その内部の上位に拳大よりやや大きめの礫を詰める。やはり落とし穴であろう。出土土器はなく所属時期は不明。

（2）溝跡

1 号溝（第 93 図、図版 67）

調査区南半で検出した。3 号土坑の東側より始まり、調査区の東側に延びている。幅約 60cm、深さは 20cmほどを測る。出土土器はなく時期は不明。

2 号溝（第 93 図、図版 67）

調査区北東部で検出した。大略東西方向に約 4m ほどが調査でき、さらに北東側の調査区外に延びる。調査区内では「く」字状に曲がり、幅約 50cm、深さは 20cmほどを測る。出土土器はなく時期は不明。

4　総括

今回の調査で検出した主な遺構は、落とし穴状遺構である。付近では落とし穴状遺構の調査例はあまり多くないが、今回の土坑は底部に杭を立てるための小ピットがあり、おそらく縄文時代に属するものではなかろうか。

土坑はいずれも主軸を大略東西方向にとり、調査区内でほぼ南北に列状をなしている。落とし穴状遺構はしばしば等高線に沿って列状に並ぶ例が見られ、本例も同様のものとみたい。ただし、数が少なく間隔も広く開いていて、やや異質な点もある。本地点やその周囲は後世の削平が著しく、すでに失われた遺構も多くあるものとみられるが、今後の周辺地域の調査を待って遺構の性格を再検討する必要があろう。

【参考文献】

豊前市『豊前市史　考古資料別冊』豊前市史編纂委員会編、1993 年

豊前市教育委員会『大西遺跡』豊前市文化財調査報告書第 5 集、1988 年

豊前市教育委員会『県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告Ⅱ　豊前市横武・千束地区（2)』豊前市文化財報告書第 6 集、1990 年

豊前市教育委員会『県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告Ⅲ　豊前市横武・千束地区（3)』豊前市文化財報告書第 7 集、1991 年

豊前市教育委員会『青畑向原遺跡・永久遺跡―県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 4（豊前市大村・青畑地区及び黒土西部地区）―』豊前市文化財報告書第 12 集、1999 年

豊前市教育委員会『豊前市内遺跡分布地図』、2000 年

図　版

1　石堂大石ヶ丸の氷室
調査着手前（南東から）

2　完掘した氷室跡（南東から）

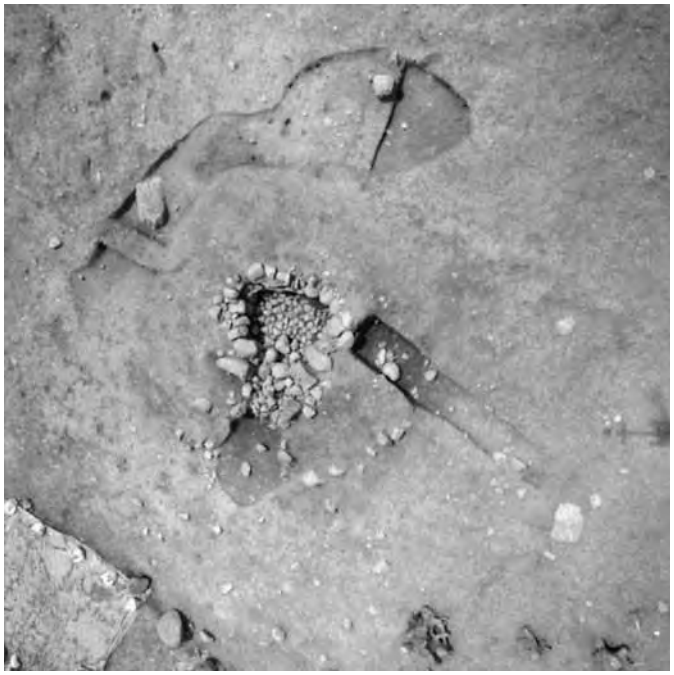
3　氷室跡完掘状況近景
（南東から）

図版２

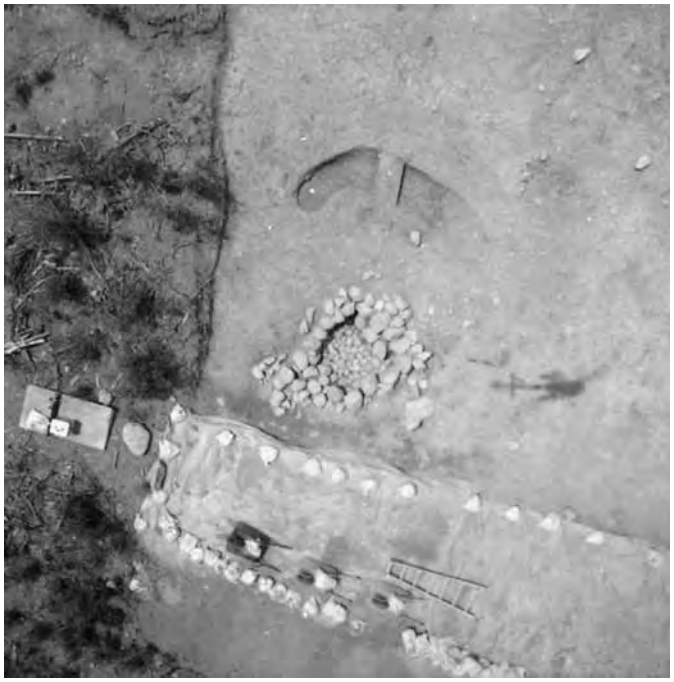
１　福間菜切古墳群第２次
調査地遠景（南東から）

２　調査区近景（東から）

１　８号墳完掘全景（上が西）



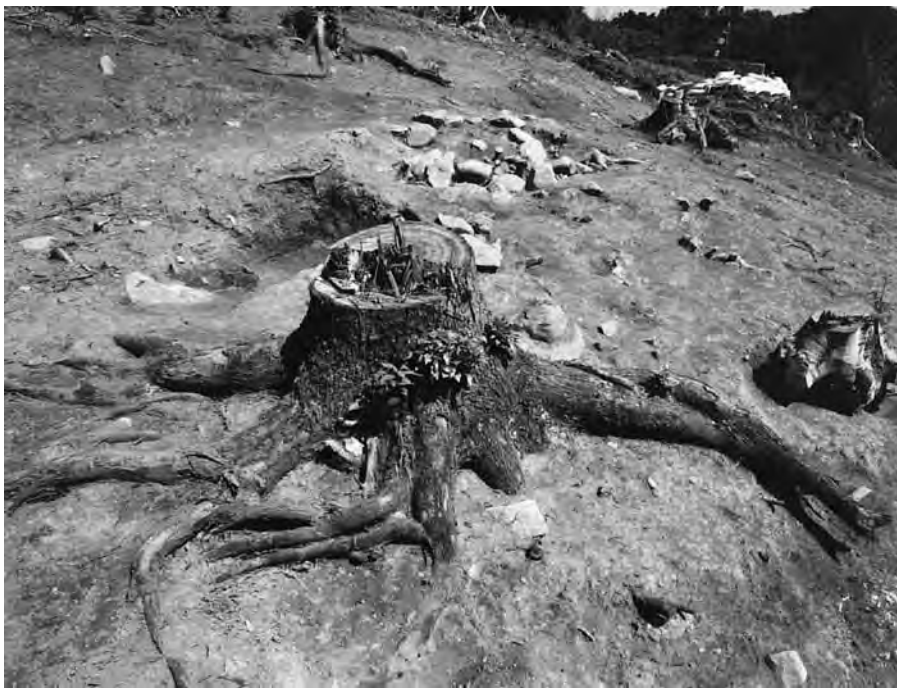
２　９号墳完掘全景（上が西）



３　10 号墳完掘全景（上が西）

図版４

１　調査区全景（西から）



２　８号墳検出状況（西から）

３　８号墳石室・閉塞検出状況（南東から）

１　８号墳完掘状況（南東から）

２　８号墳玄室完掘・遺物出土状況　（南西から）

３　９号墳検出状況（東から）

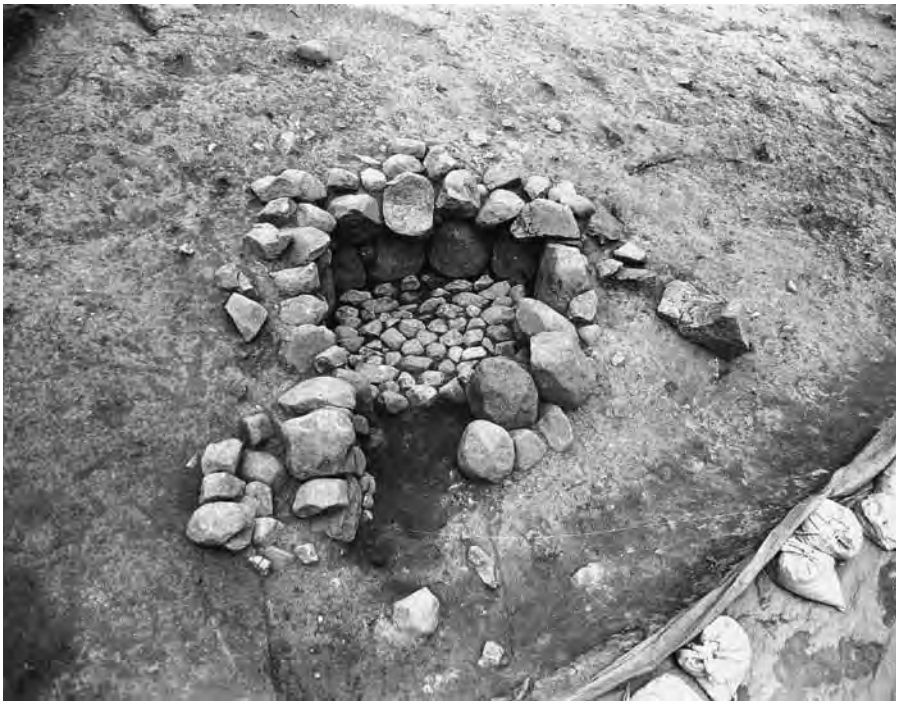
図版６

１　９号墳石室・閉塞検出状況
（東から）

２　９号墳完掘状況　（東から）

３　９号墳玄室完掘状況（南西から）

1　10 号墳石室・閉塞検出状況
（東から）

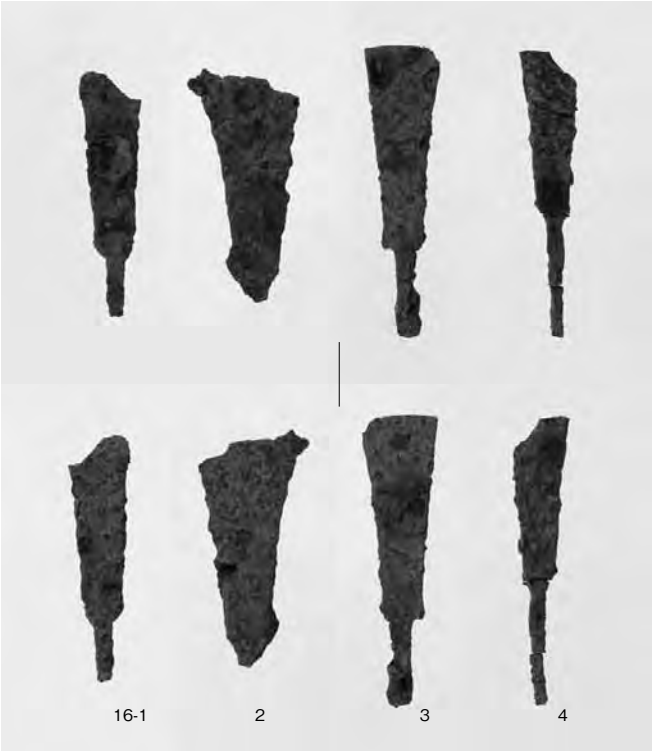


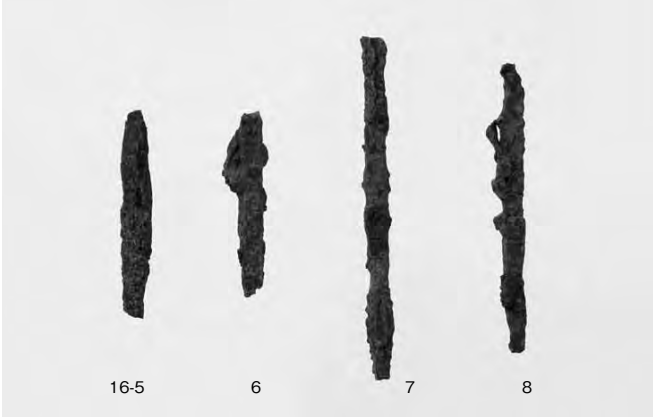
2　10 号墳完掘状況　（東から）

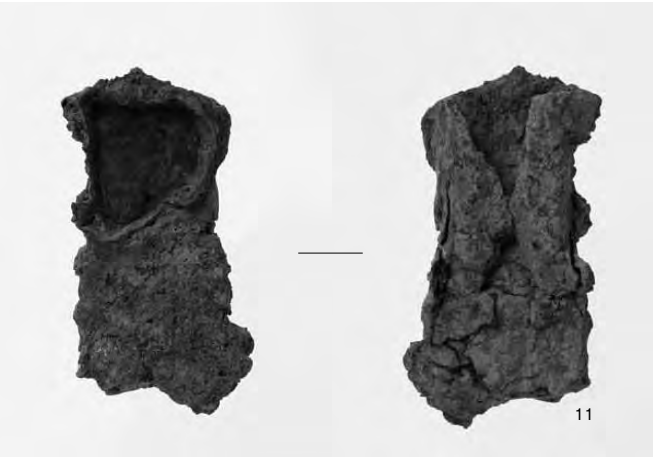
3　10 号墳玄室完掘状況
（北から）

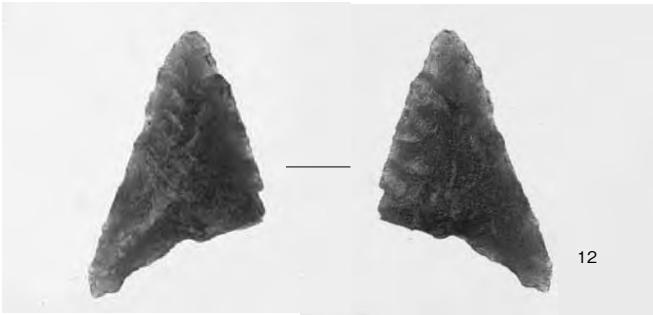
図版 8

福間菜切古墳群第２次調査出土遺物その①





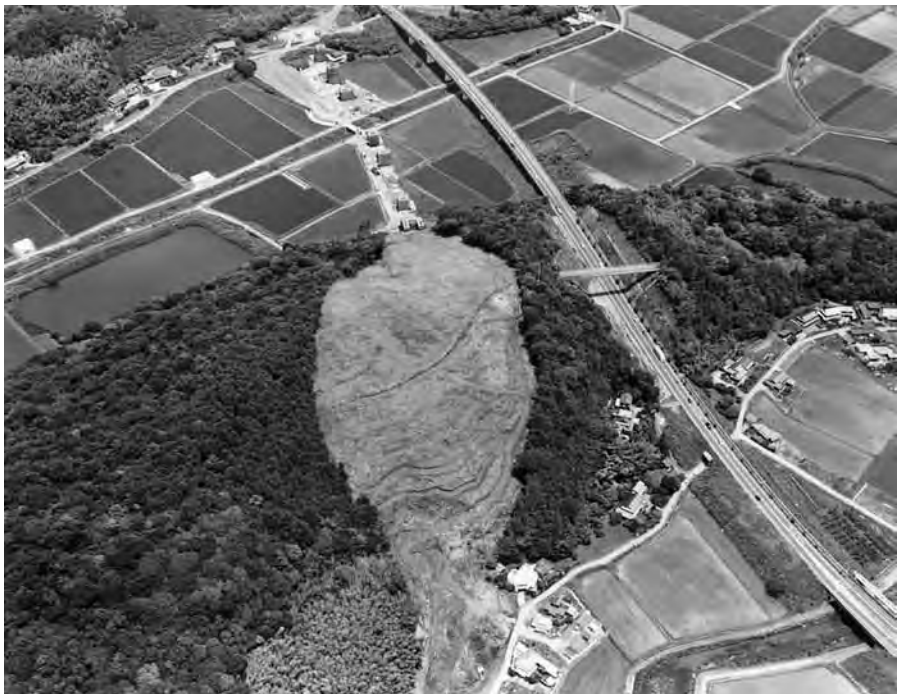




福間菜切古墳群第 2 次調査出土遺物その②

図版 10

1　中村西峰尾遺跡上空より豊前市街地をのぞむ（南西から）



2　調査地周辺地形（東から）

3　調査地周辺地形（上が北）

1　遺跡より大分県姫島・国東半島方面をのぞむ（南西から）

2　調査地遠景（北東から）

3　調査地遠景（東から）

図版 12

1　調査着手前遠景（北から）

2　調査着手前遠景（北東から）

3　調査地前遠景（北西から）

1　調査着手前全景
（北東から）

2　調査着手前全景
（北から）

図版 14

1　上層遺構（北東から）

2　上層遺構拡大
（北東から）

1　第 1 トレンチ全景
（南から）

2　第 10 トレンチ全景
（北から）

3　第 10 トレンチと
外郭土塁（東から）

1　第 14 トレンチ全景
（東から）

2　第 8 トレンチ土層
（西から）

3　基本土層（東から）

1　北石垣（発掘前東から）

2　東石垣（発掘前北から）

3　北石垣（発掘前西から）

図版 18

1　北石垣北東隅石
（北東から）

2　北石垣中央部
（北から）

3　北石垣断面（西から）

1　円周土塁（東から）

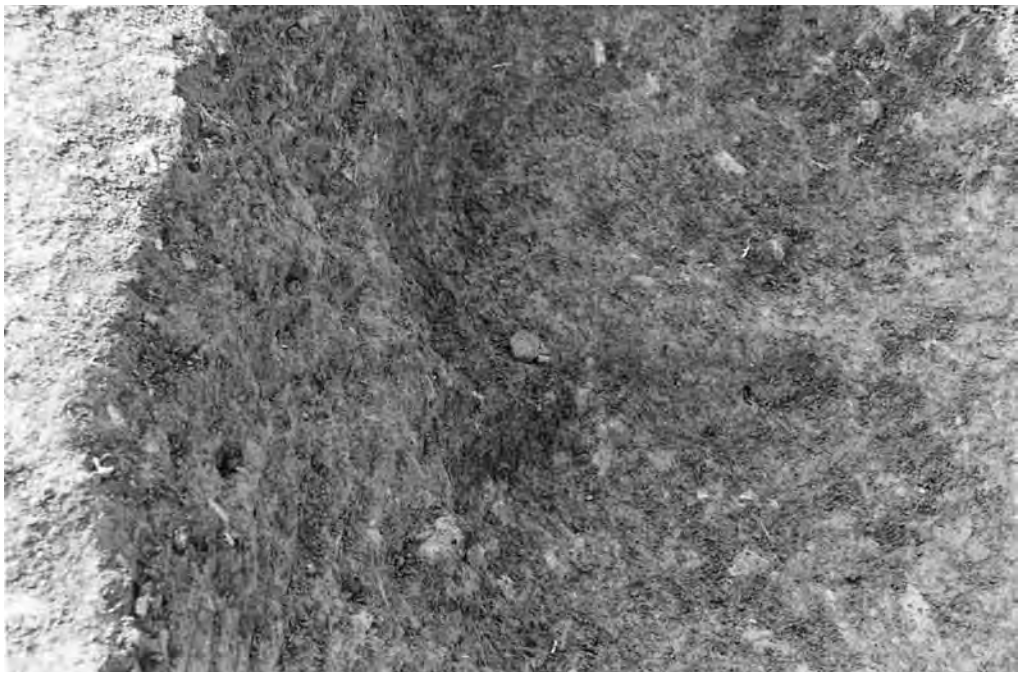
2　円周土塁開口部
（南から）

3　空堀（西から）

1　外郭土塁
（発掘前南から）

2　外郭土塁土層
（北から）

3　上層全景（北東から）



1　１号土坑縄文土器
出土状況（東から）

2　２号土坑（北から）

3　３号土坑（西から）

図版 22

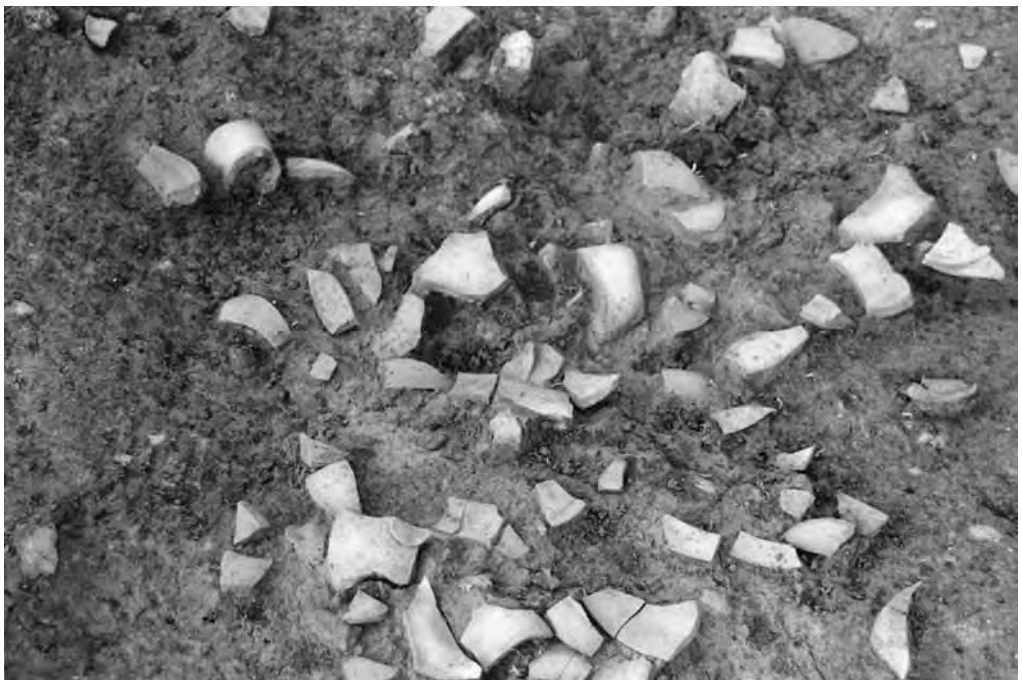
1　４号土坑（西から）

2　柵列（東から）

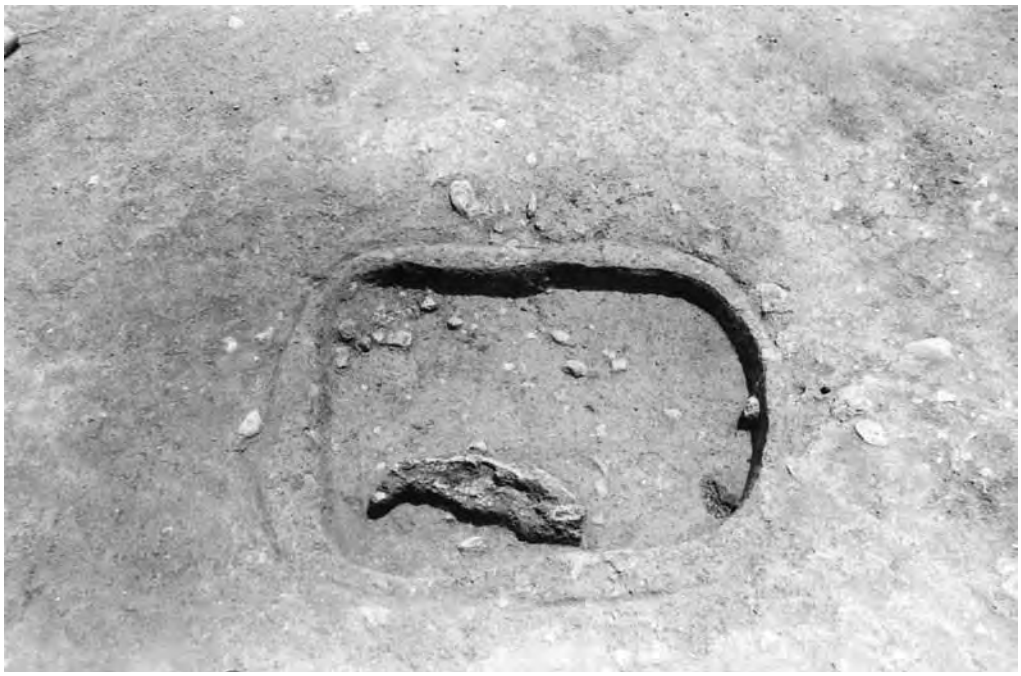
3　柵列柱穴４（東から）

1　須恵器散布遺構
（北から）

2　須恵器散布遺構拡大
（北から）



3　須恵器集中部
（南から）



1　焼土土坑（西から）

2　下層調査風景
（北西から）

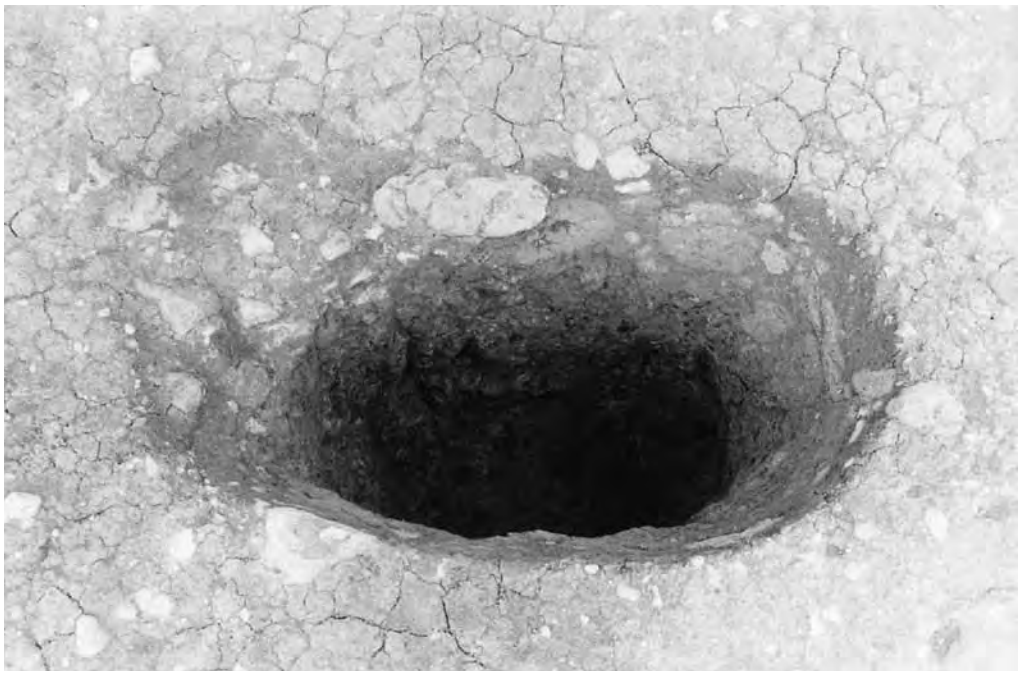
3　下層調査状況
（北から）

1　下層遺構全景
（上が南西）

2　下層遺構拡大
（上が南西）

1　５号土坑（東から）

2　６号土坑（東から）



3　７号土坑（東から）

1　8号土坑（東から）

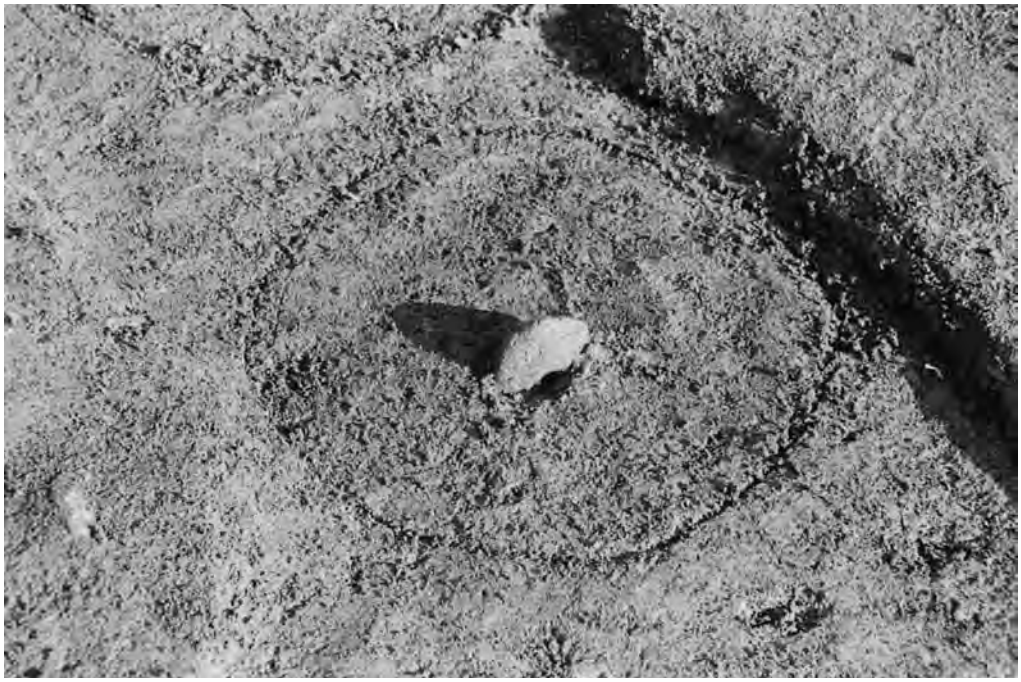
2　9号土坑（東から）

3　10号土坑（西から）

図版 28

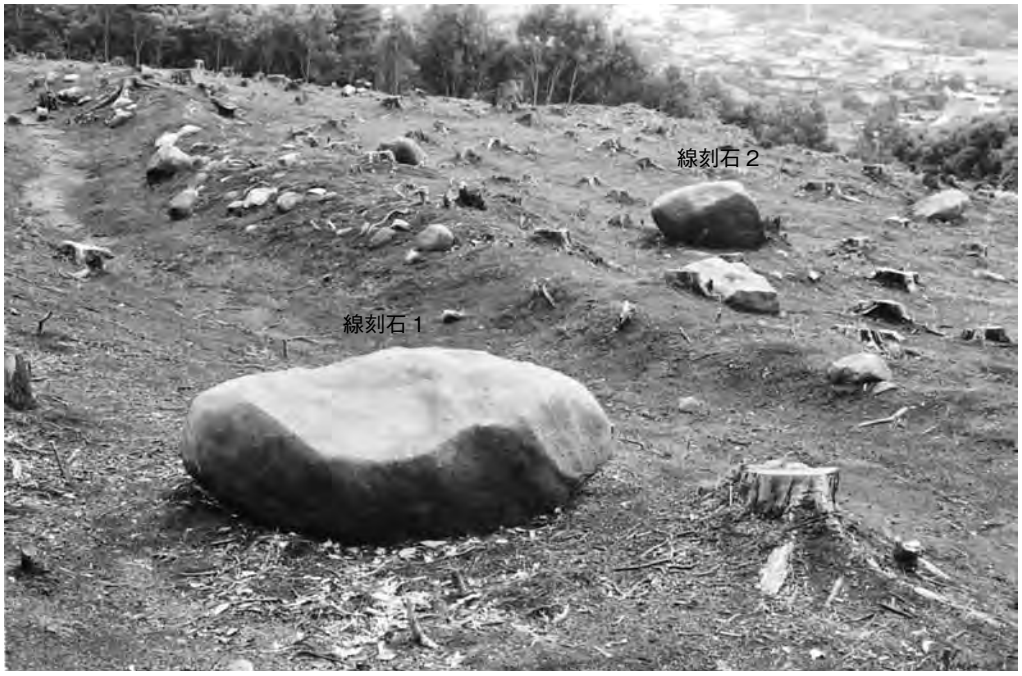
1　11 号土坑（南から）

2　集石土坑（東から）



3　環状石斧出土状況
（西から）

1　獣骨出土状況
（西から）

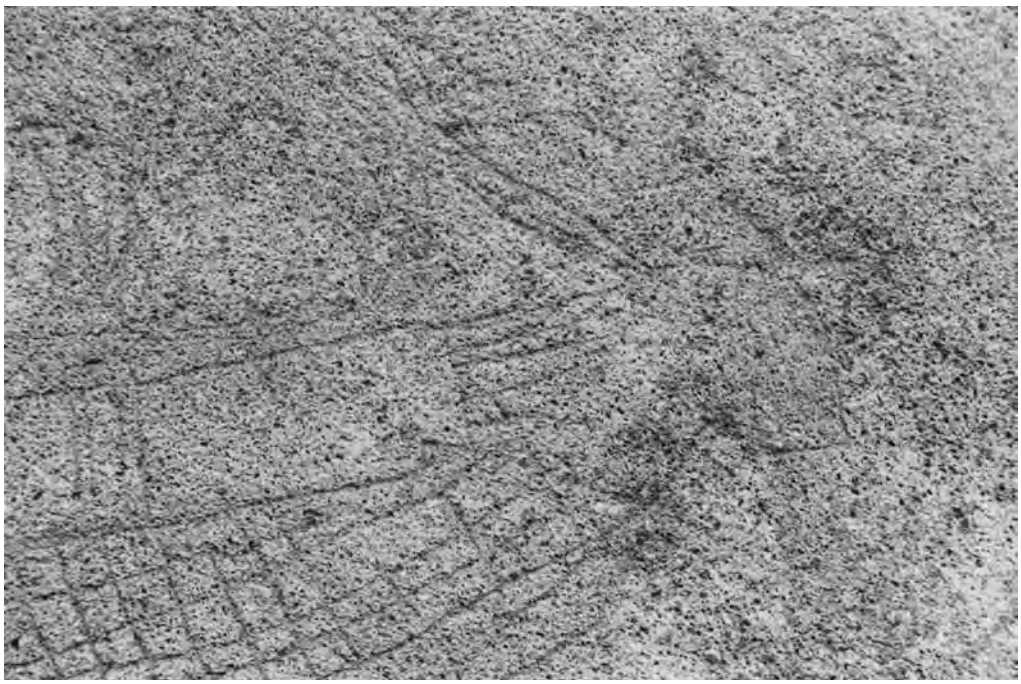


2　線刻石１･２発見状況
（南から）

3　線刻石１全景
（南から）

1　線刻石 1A 面

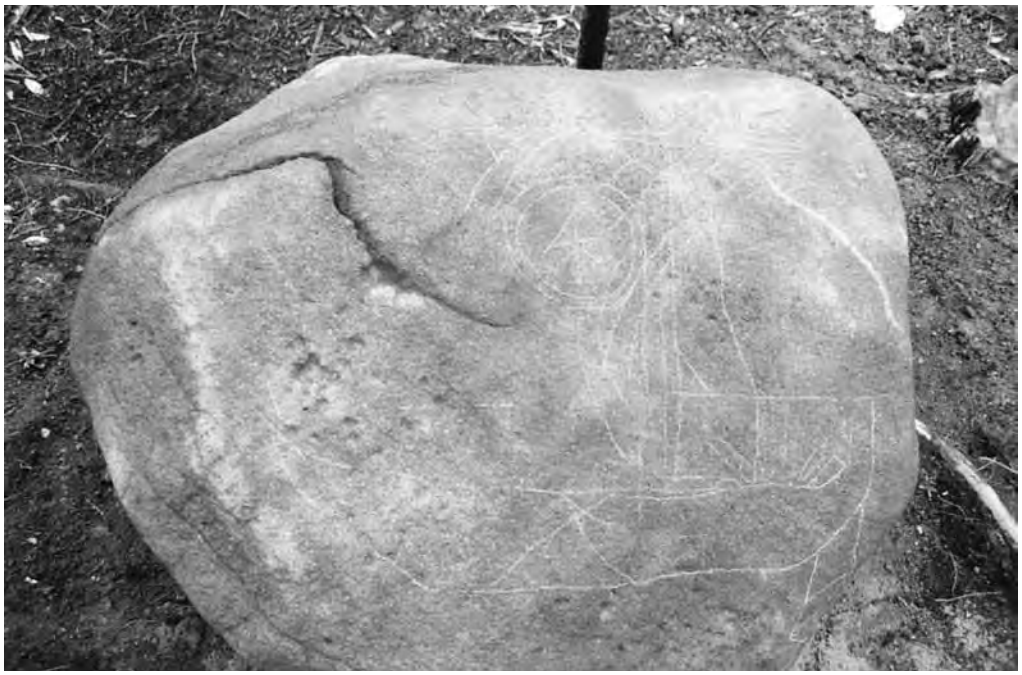
2　線刻石 1A 面大船



3　線刻石 1A 面大船舵部分

1　線刻石 1B 面

2　線刻石 2 全景
（西から）



3　線刻石 2A 面

1　線刻石 2B･C 面

2　線刻石 2B 面

3　線刻石 2C 面

1　線刻石 3

2　線刻石 3 拡大

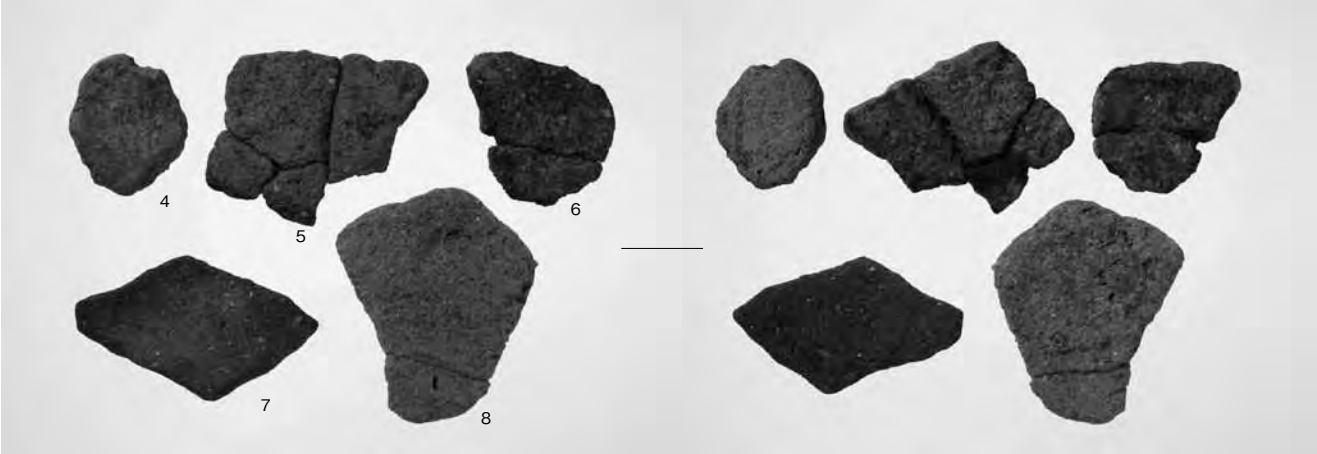
3　線刻石 4

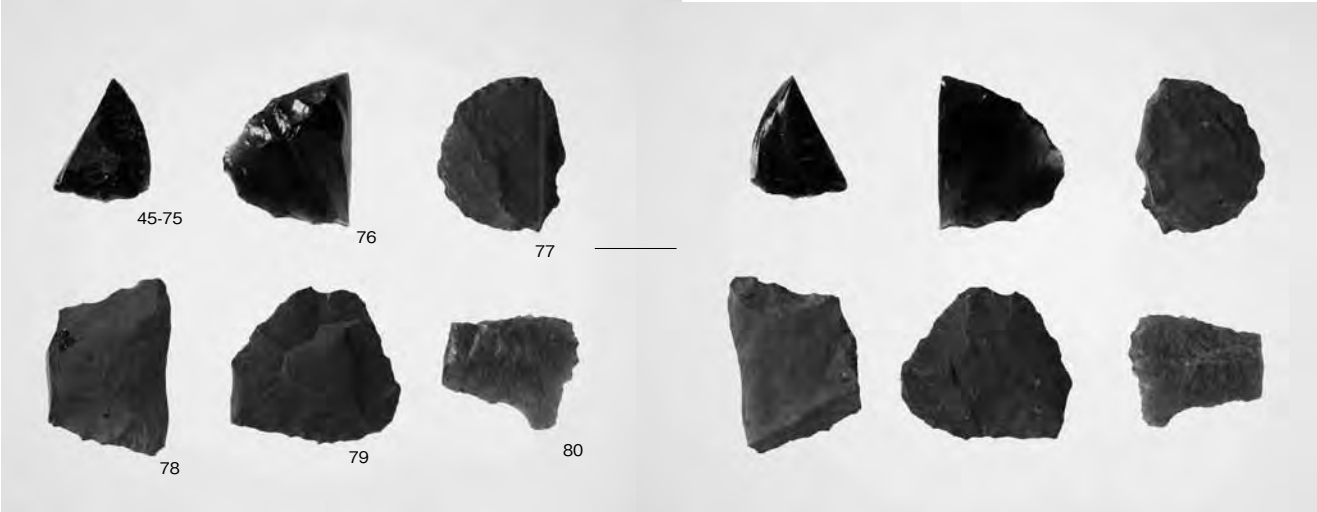
図版 34

1　線刻石 4 拡大

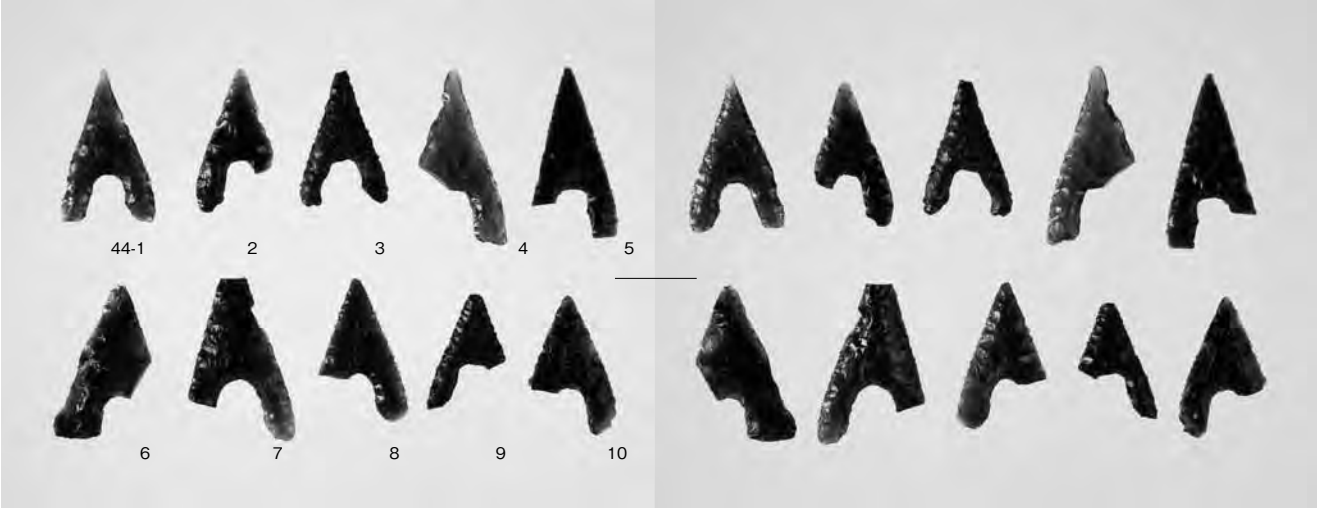
2　線刻石 5 表面

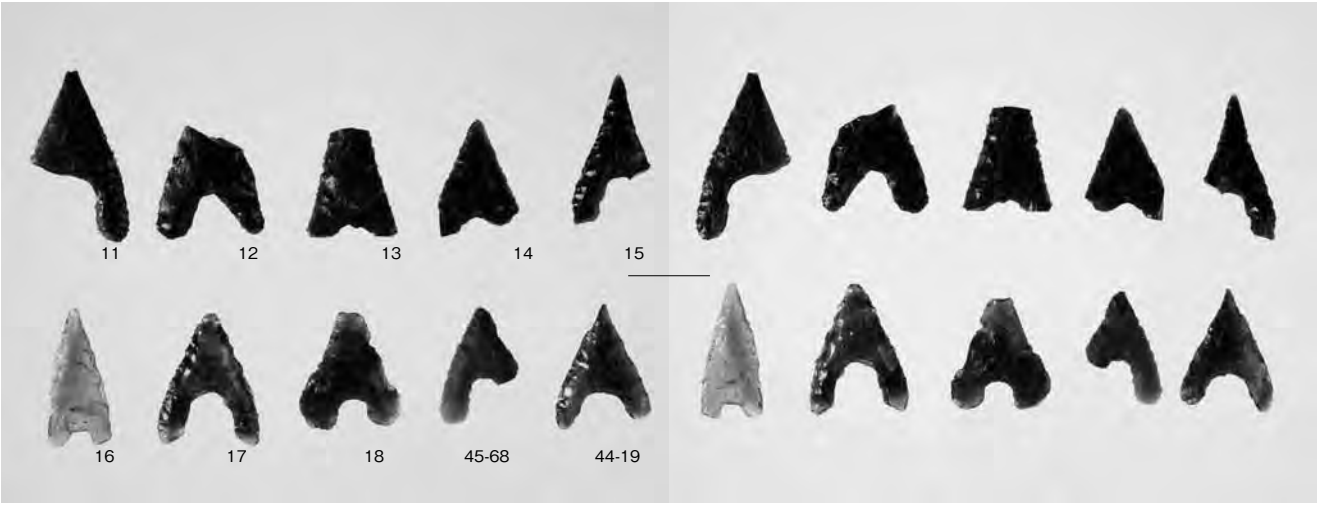
3　線刻石 5 裏面

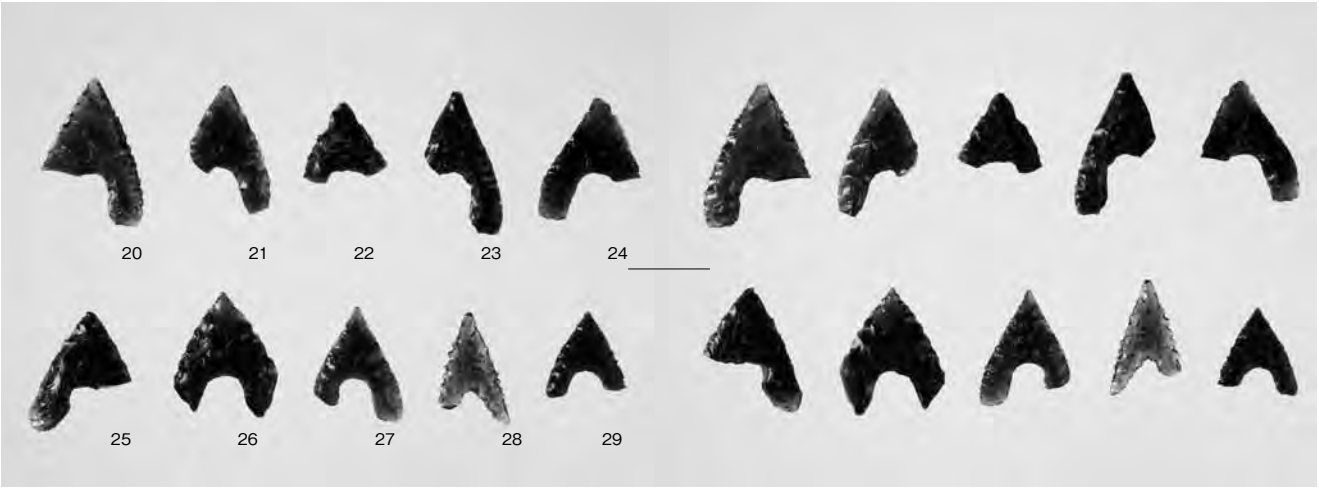


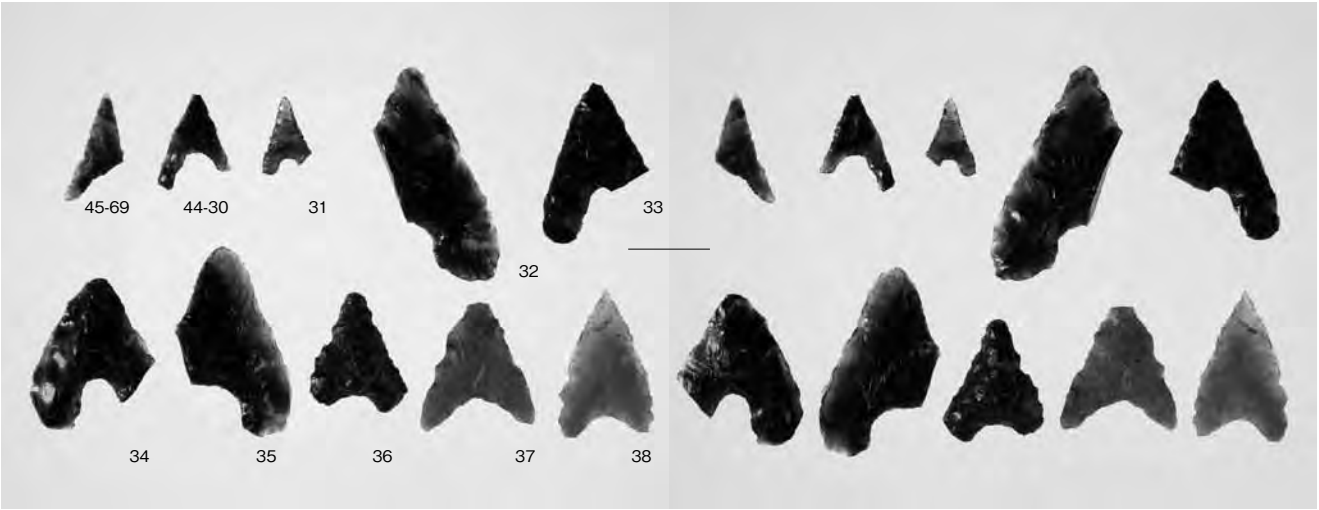


中村西峰尾遺跡出土縄文土器・石器①

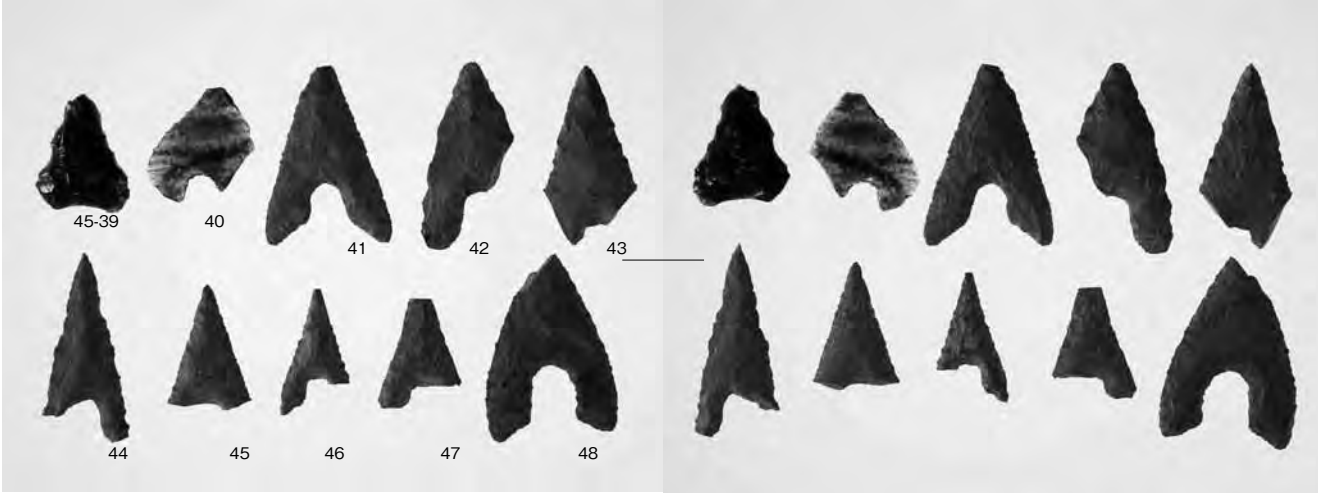


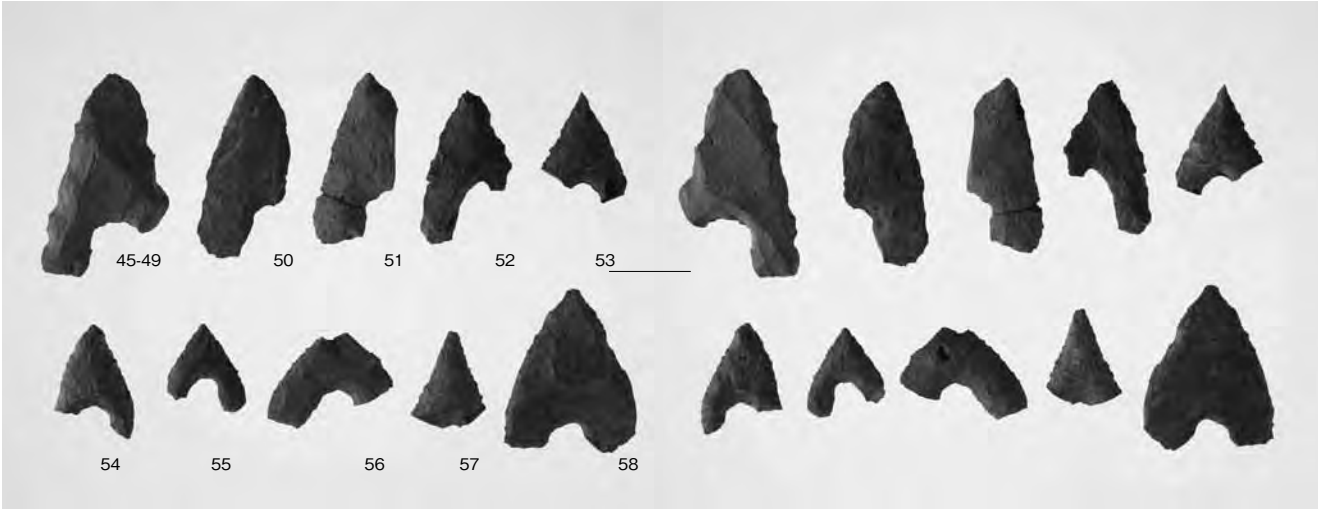


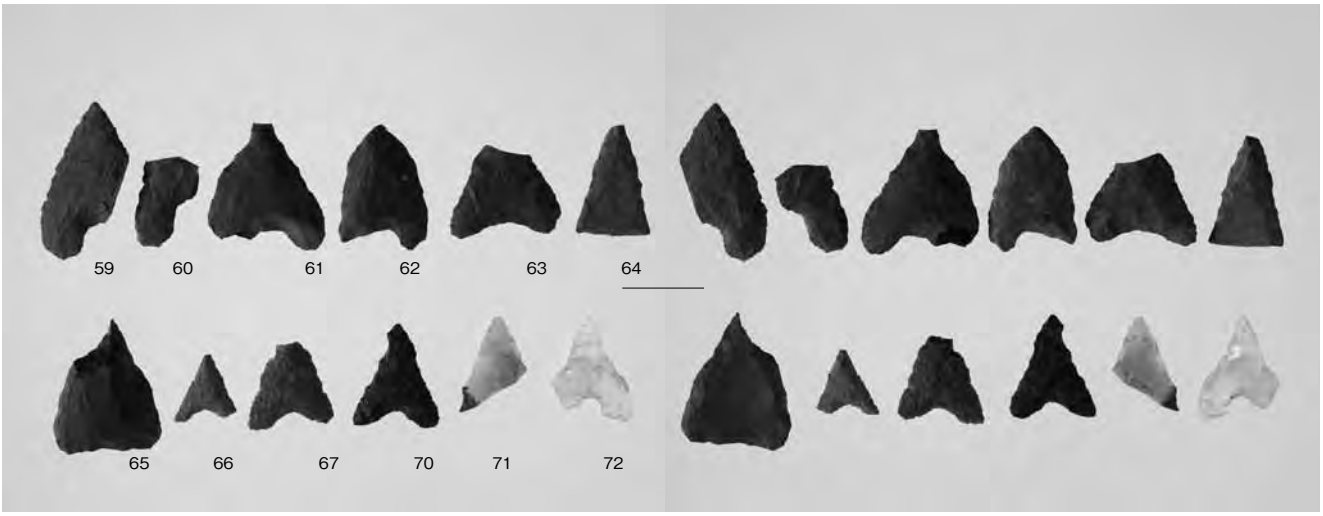




中村西峰尾遺跡出土石鏃①

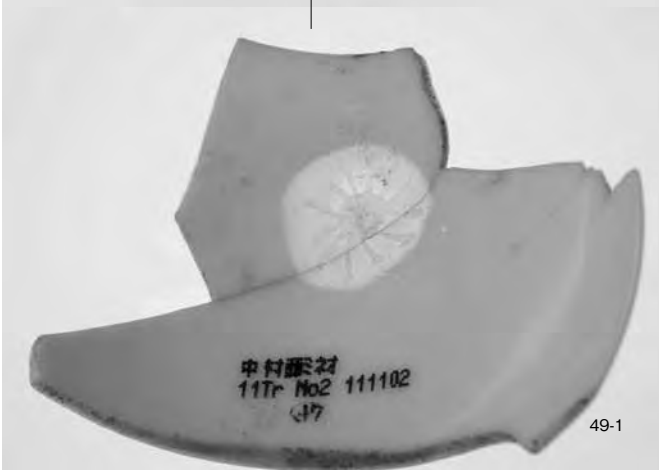


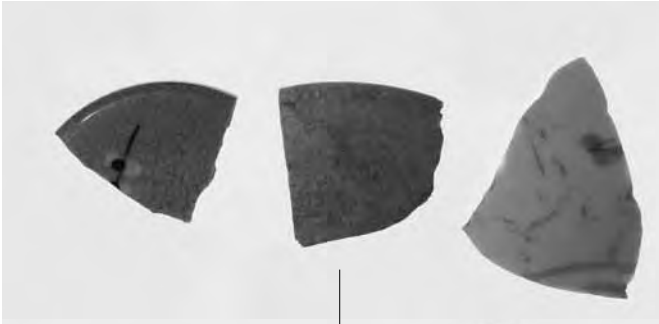


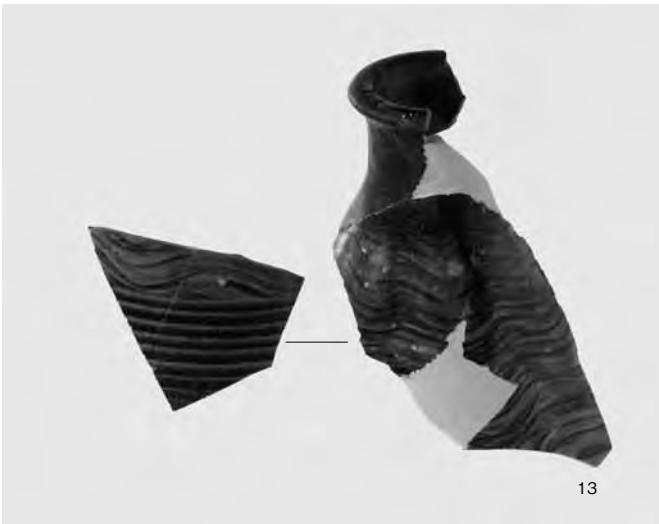


中村西峰尾遺跡出土石鏃②、石器②

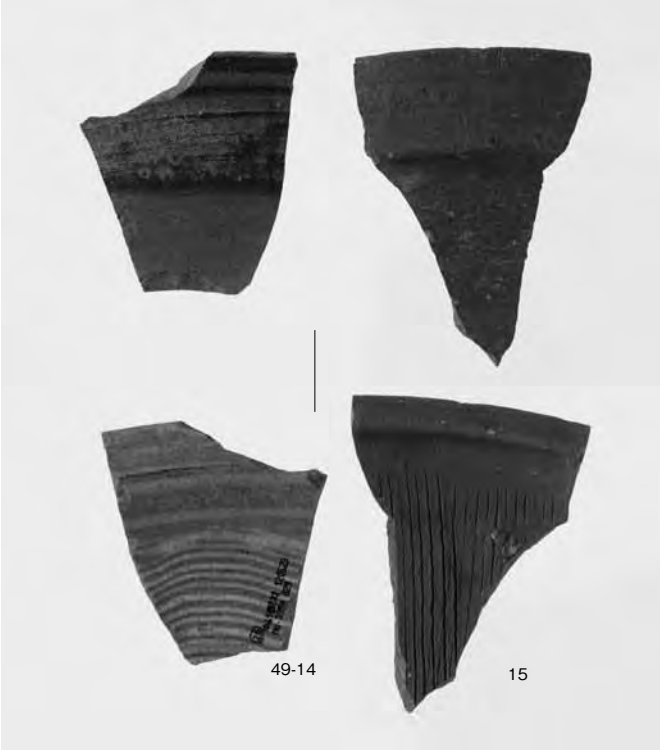
中村西峰尾遺跡出土須恵器

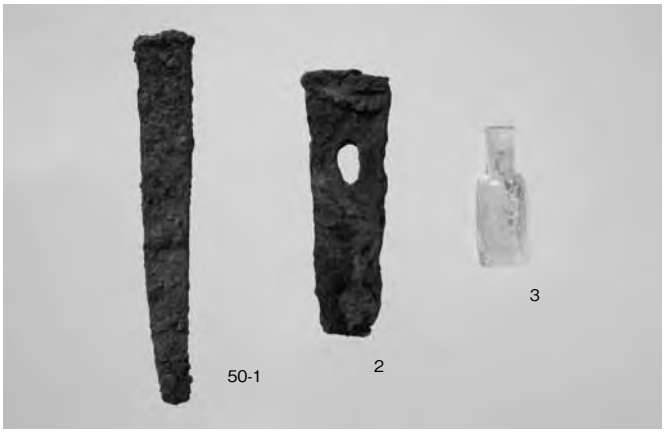


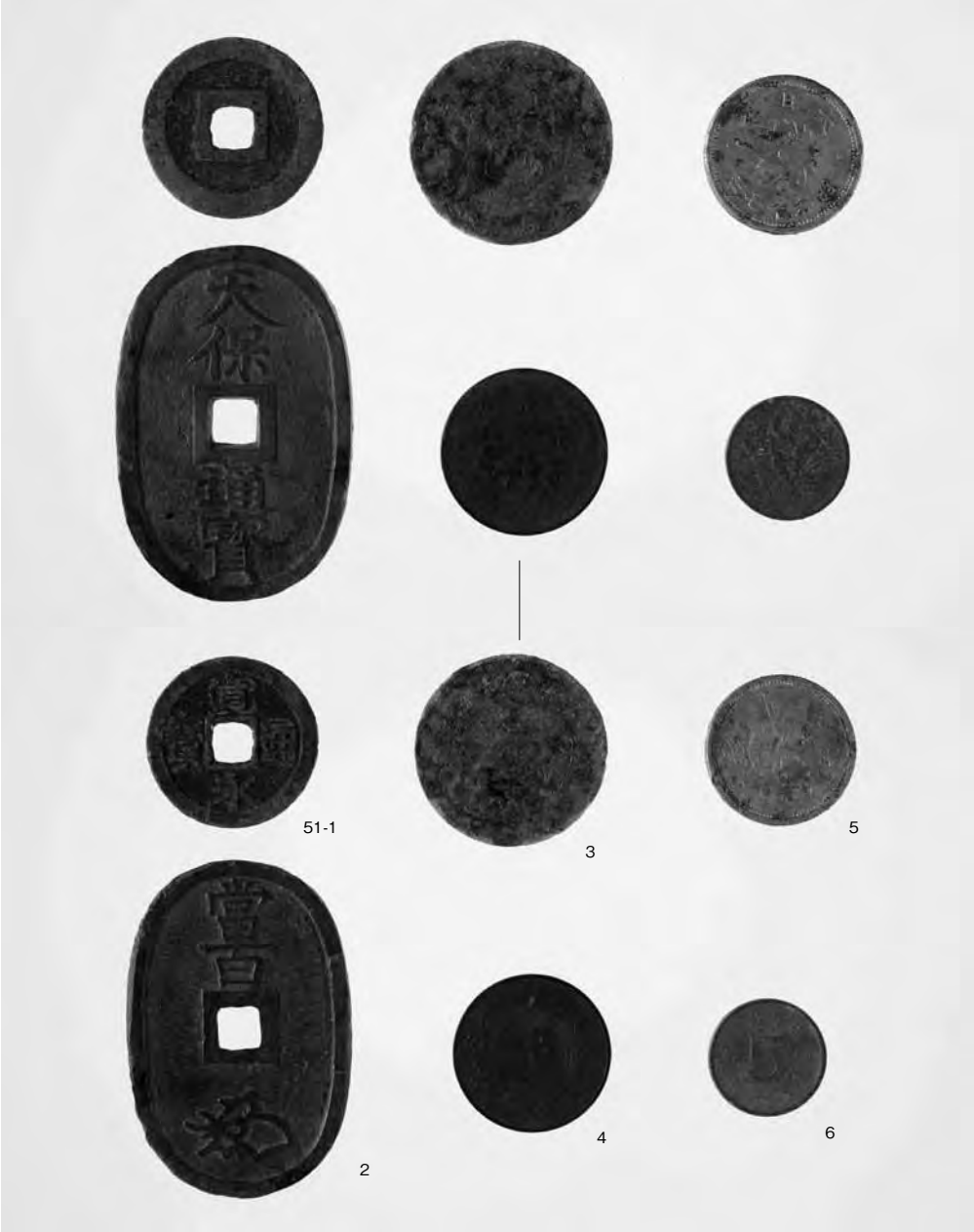




中村西峰尾遺跡出土陶磁器①







中村西峰尾遺跡出土陶磁器②、鉄・ガラス製品・銭貨

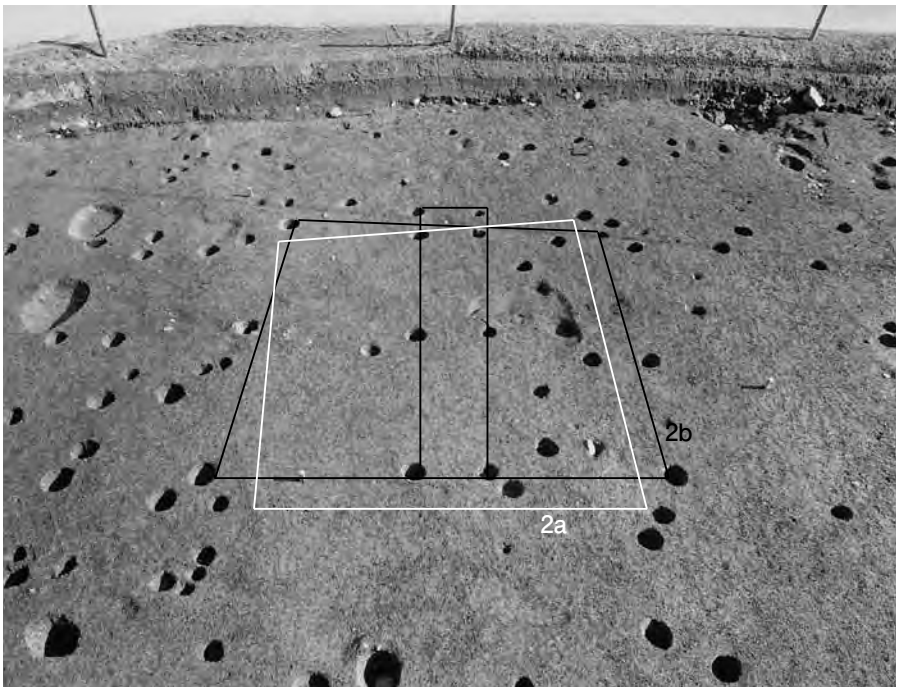
1　中村山柿遺跡第２次
調査地遠景（南から）

2　調査区近景（東から）

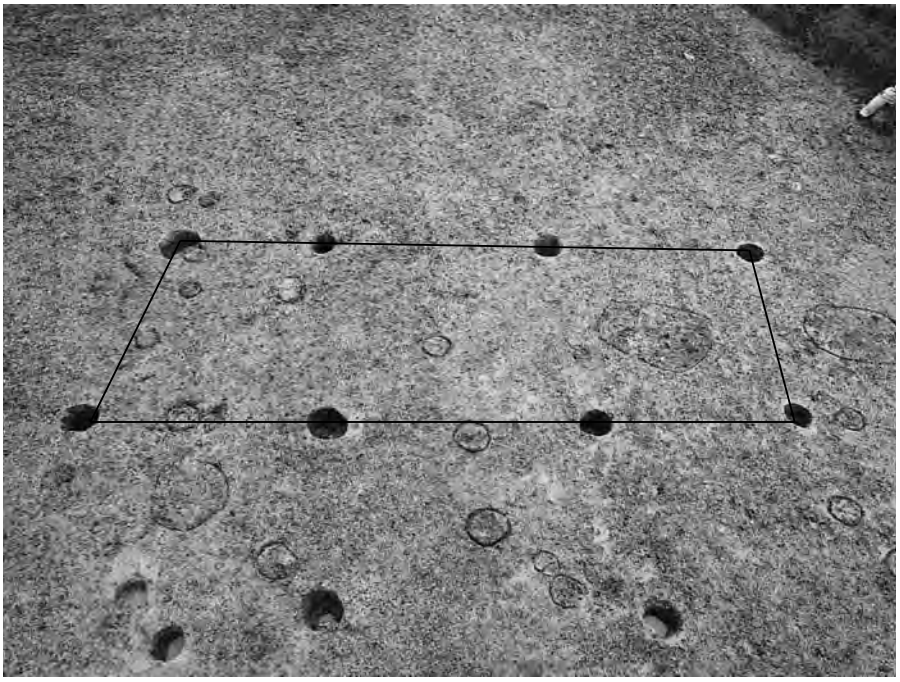
1　Ⅰ区全景（東から）

2　Ⅱ区全景（東から）

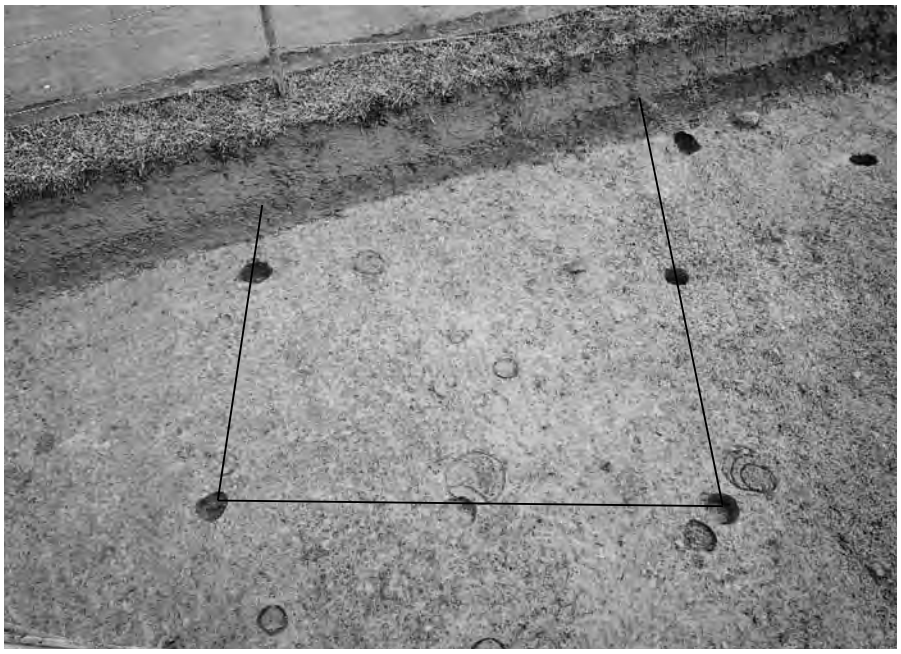
1　１号掘立柱建物跡（西から）



2　２号掘立柱建物跡　（西から）



3　３号掘立柱建物跡（南から）

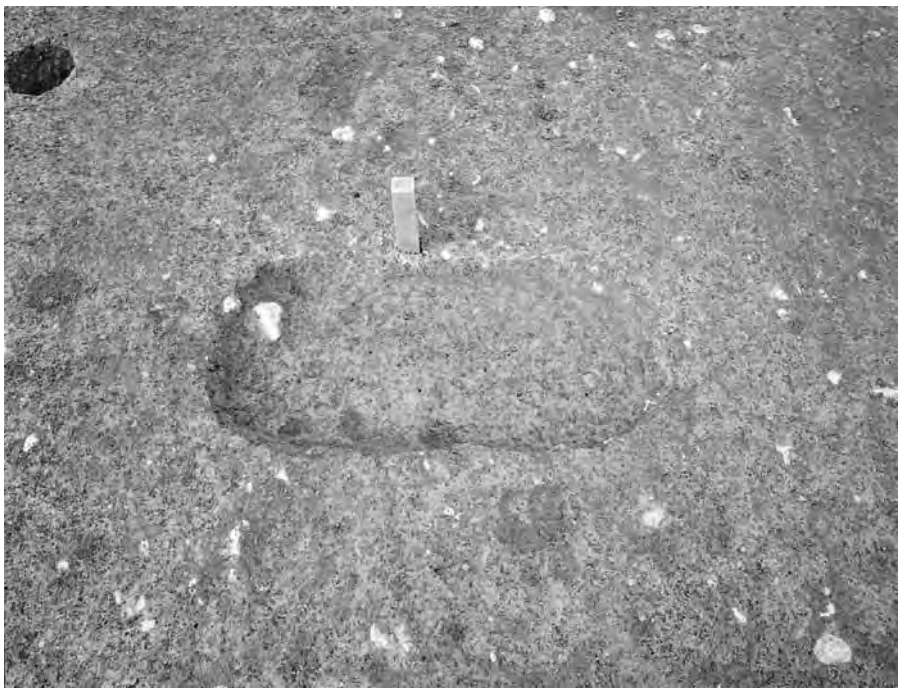


1　４号掘立柱建物跡（西から）

2　１号土坑　（東から）

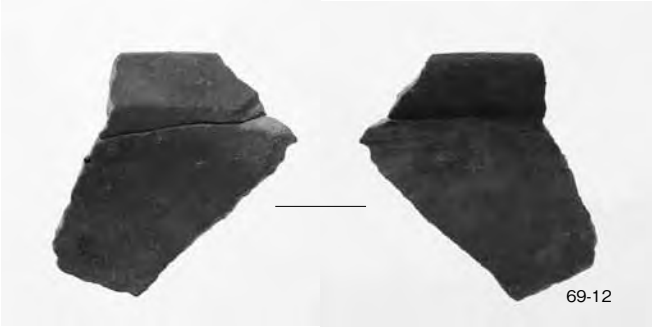
3　２号土坑（北から）

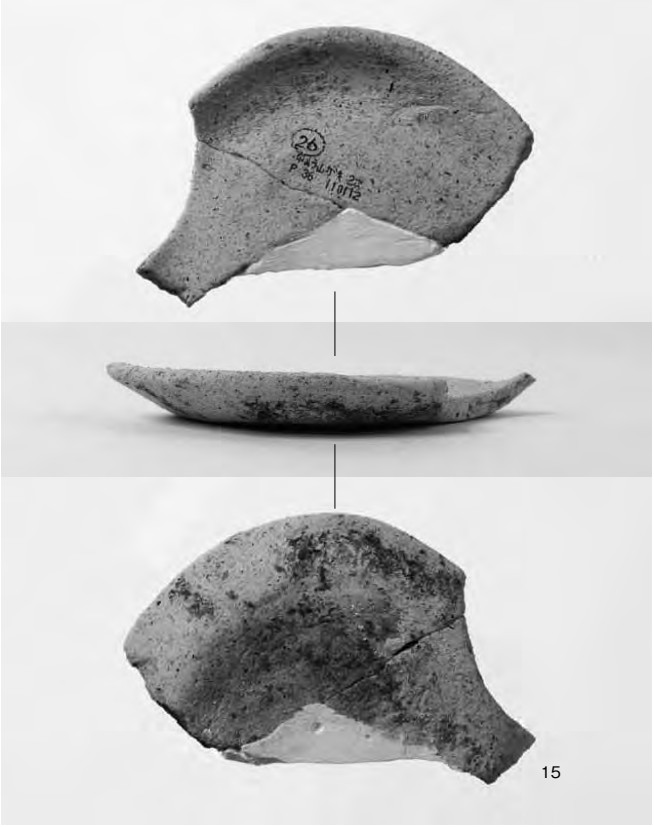
1　３号土坑（北から）



2　４号土坑（東から）

3　５号土坑（東から）





中村山柿遺跡第 2 次調査出土遺物

1　松江黒部遺跡全景
（上空から）

2　同上（北西から）

3　調査区全景（上空から）

川内下野添遺跡 1･2 次調査区全景
（合成－上が北）

1　川内下野添遺跡の
立地環境（南から）

2　川内下野添遺跡の
立地環境（東から）

1　1 次調査Ⅰ・Ⅱ区（上が北）

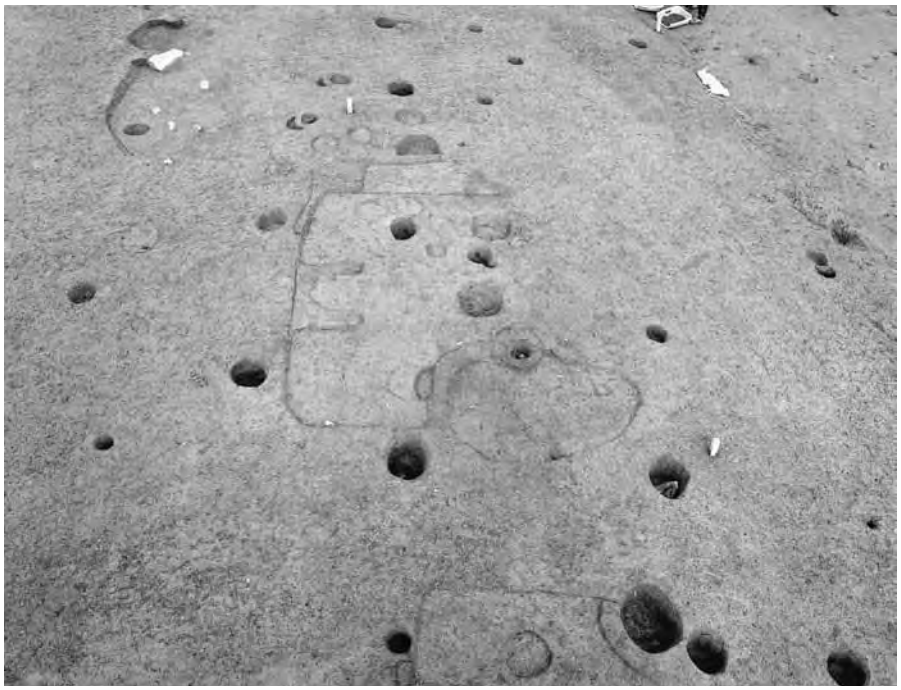
2　1 次調査Ⅰ区（上が北）

1　1次調査Ⅱ区（上が北）

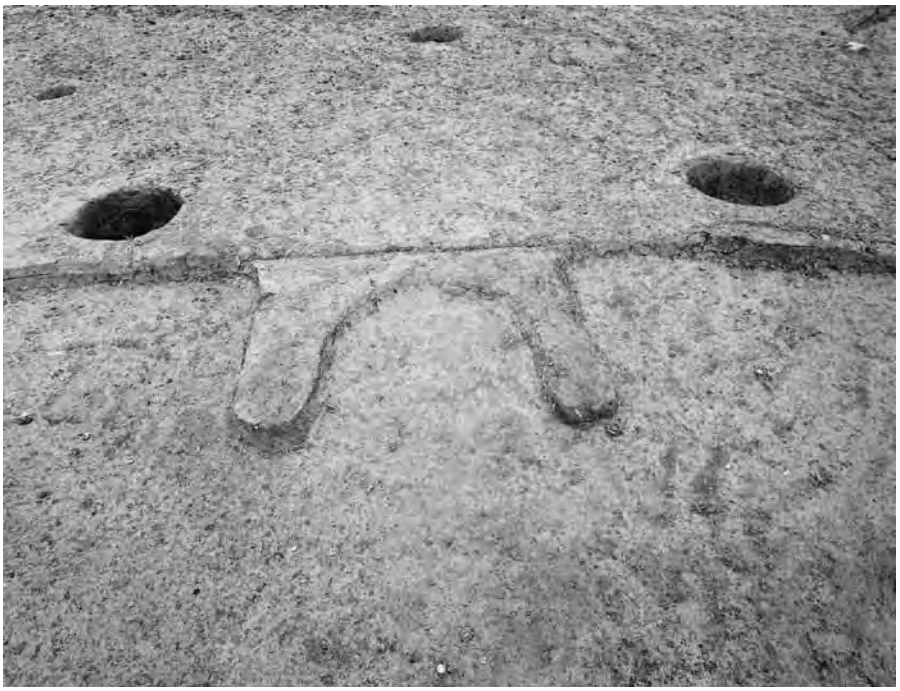
2　1次調査Ⅲ区（上が北）

1　1 号竪穴住居跡（南西から）

2　1 号竪穴住居跡カマド
（南東から）



3　2 号竪穴住居跡（南西から）



1　２号竪穴住居跡カマド
（南東から）

2　３号竪穴住居跡（南東から）

3　１号掘立柱建物跡（東から）

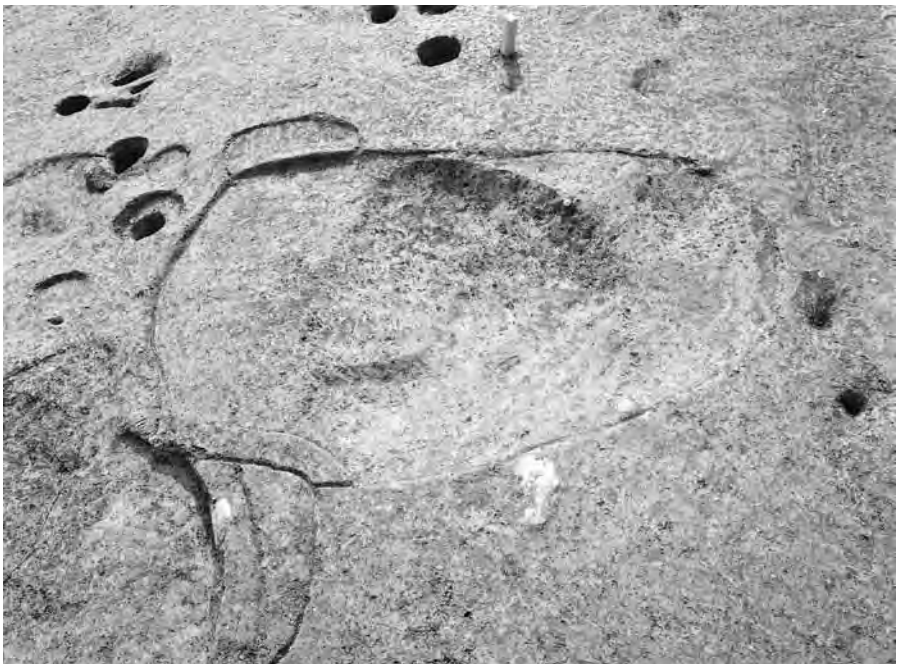
1　１号土坑（東から）

2　１号土坑土層（西から）

3　２号土坑（北から）

1　２号土坑土層（南西から）

2　３号土坑（南東から）



3　４号土坑（北東から）

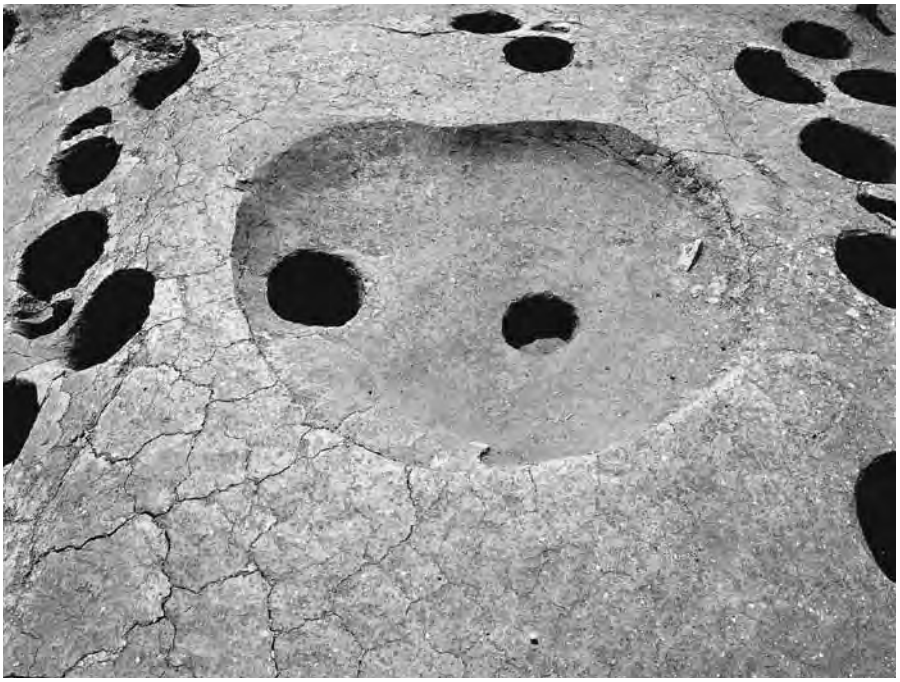
1　5 号土坑（北から）

2　6 号土坑（南西から）

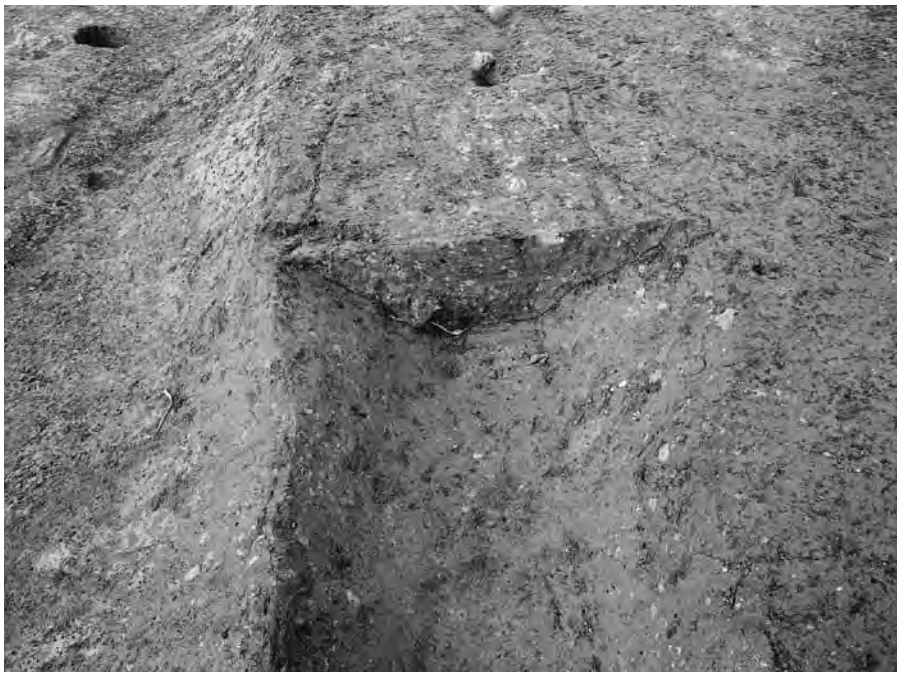
3　8 号土坑（南から）

1　11 号土坑（北から）

2　12 号土坑土層（南西から）



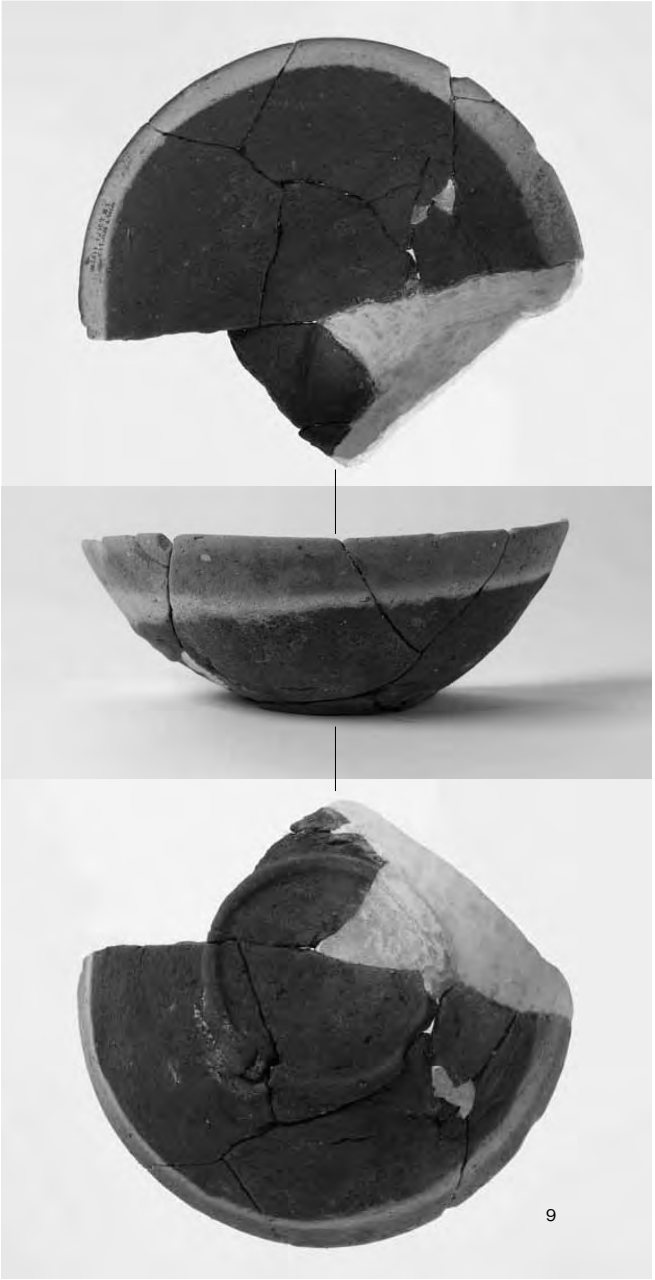
3　13 号土坑（北から）

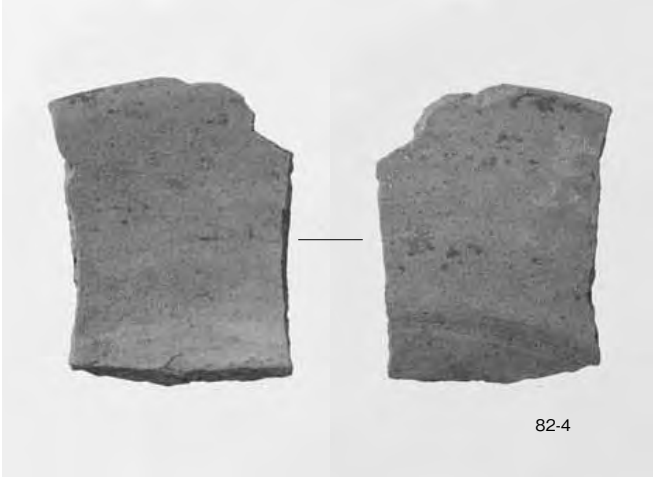


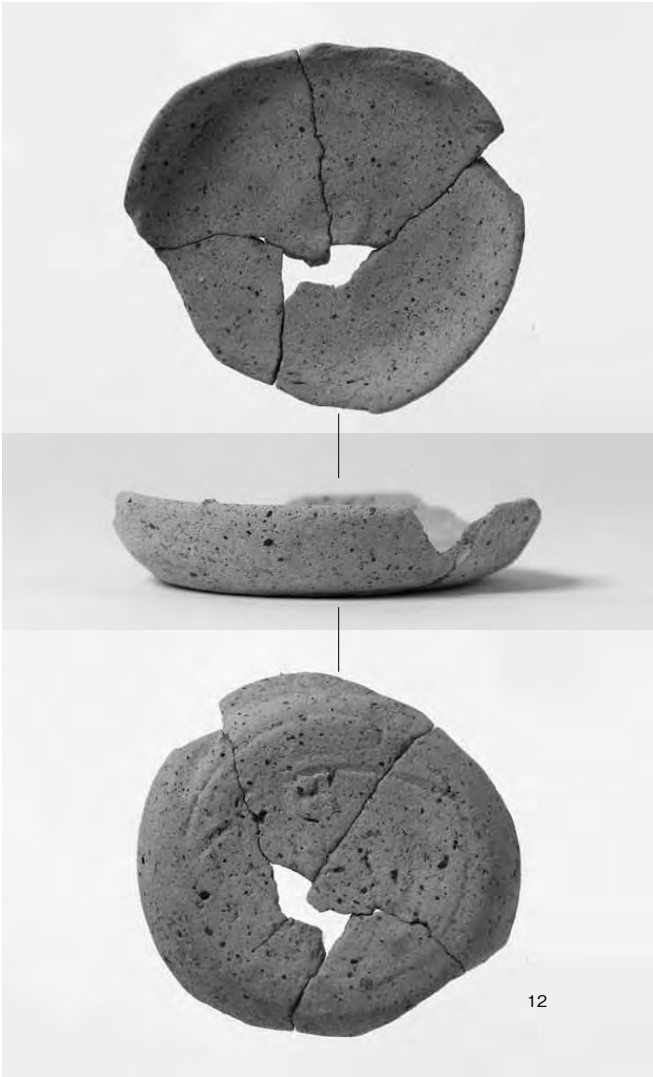
1　1 号溝土層（北東から）

2　SX － 01（北東から）

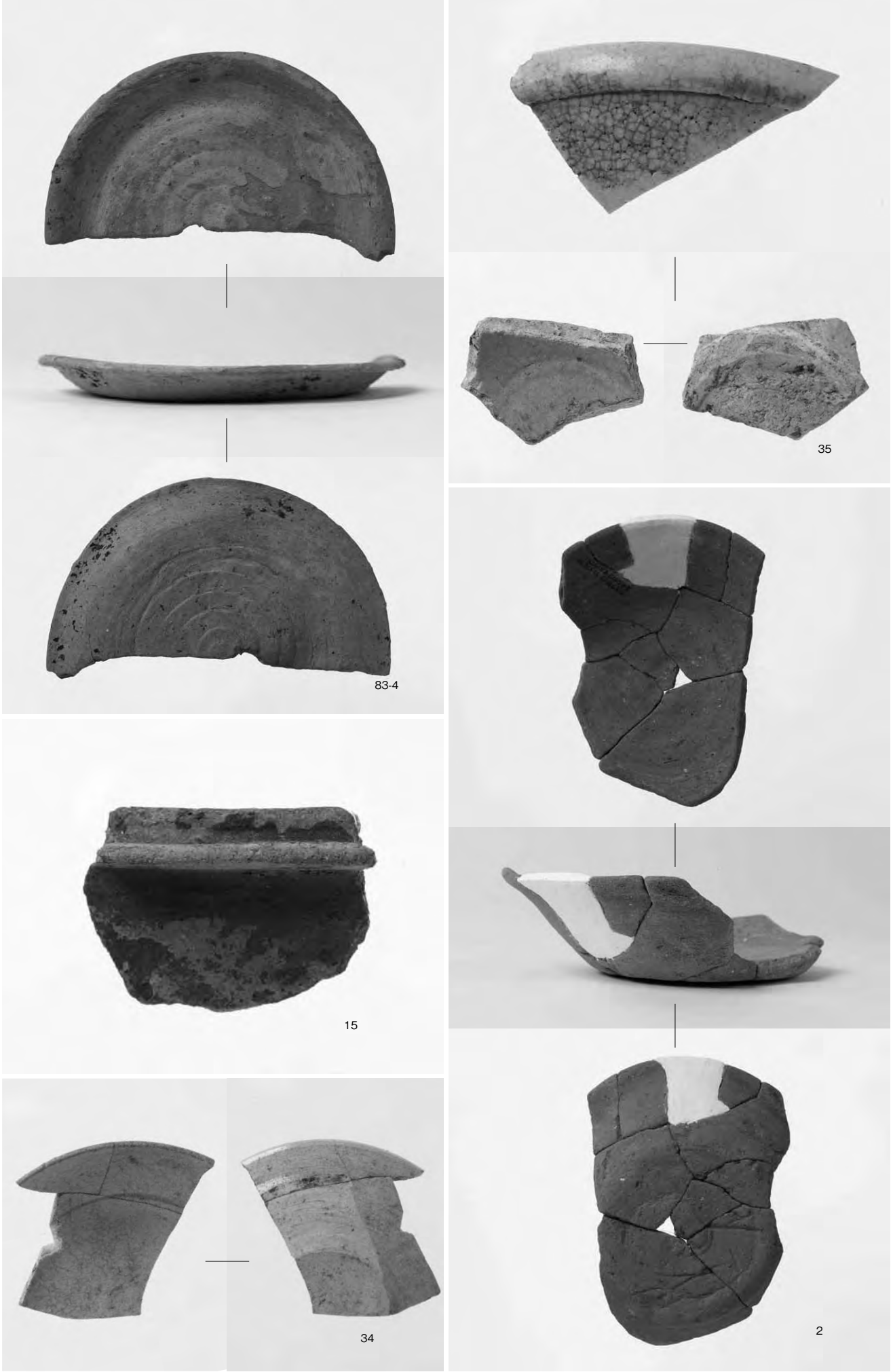
3　SX － 02（南東から）







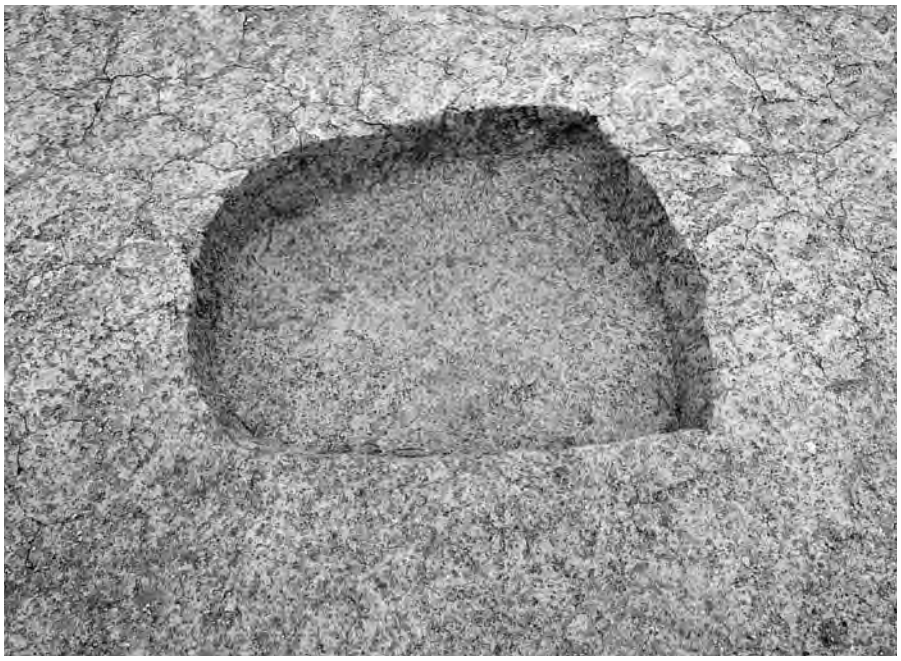
川内下野添遺跡第 1 次調査出土遺物その①



川内下野添遺跡第 1 次調査出土遺物その②

1　２次調査区（西から）

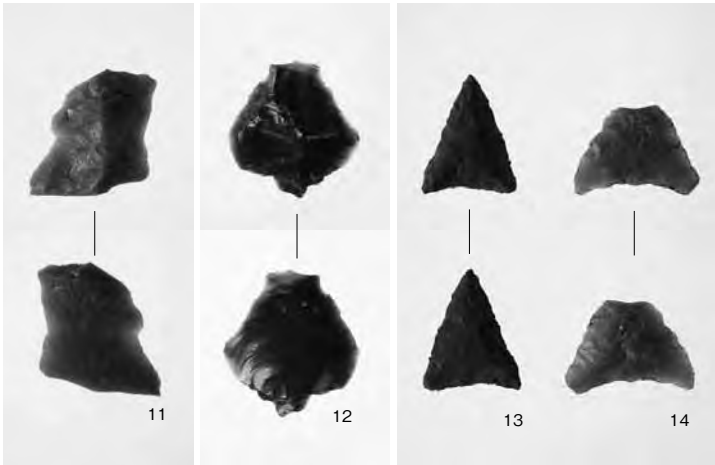
2　調査区全景
（上が西）



1　14 号土坑（東から）

2　谷状落ち込み内 1 号トレンチ
土層（南西から）

3　谷状落ち込み内 2 号トレンチ
土層（西から）



川内下野添遺跡第２次調査出土遺物

1　大村上野地遺跡全景
（北から）

2　調査区北壁土層（南から）

3　調査区西壁土層（東から）

4　同上２（東から）

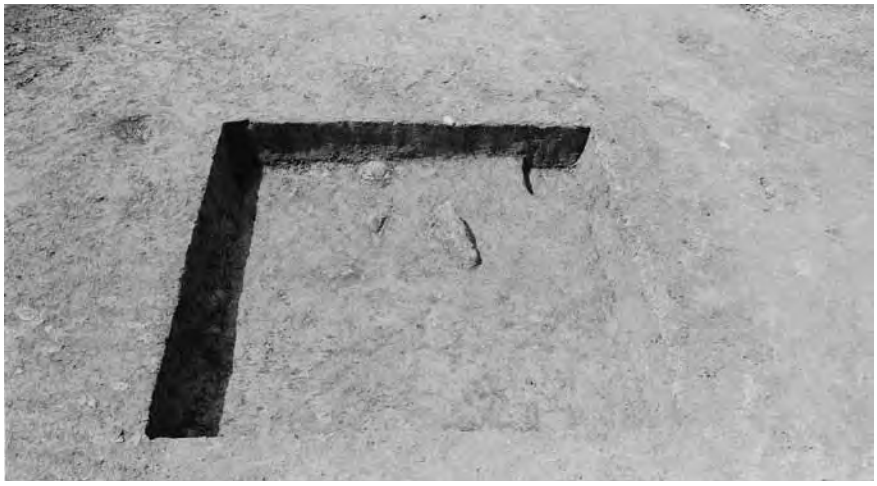
1　1～4号土坑（西から）

2　5～8号土坑（東から）

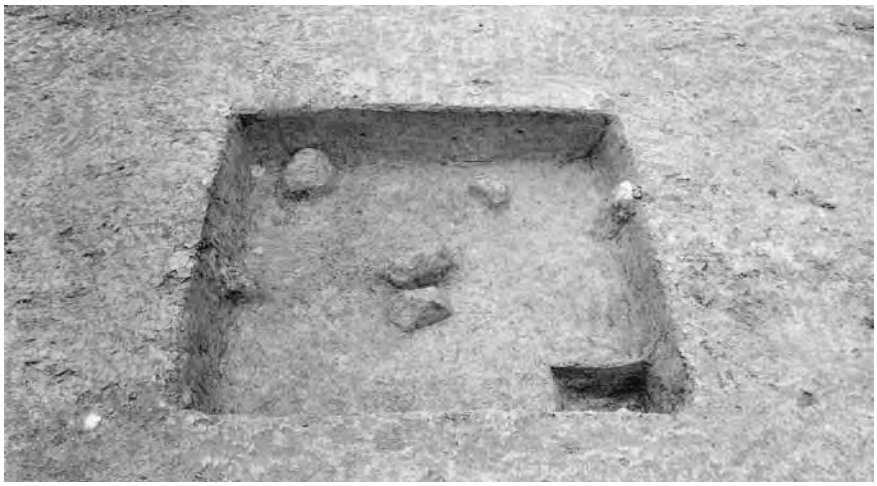
3　9号土坑（西から）

1　1 号溝（東から）

2　下層グリッド 4（南から）



3　下層グリッド 5（西から）



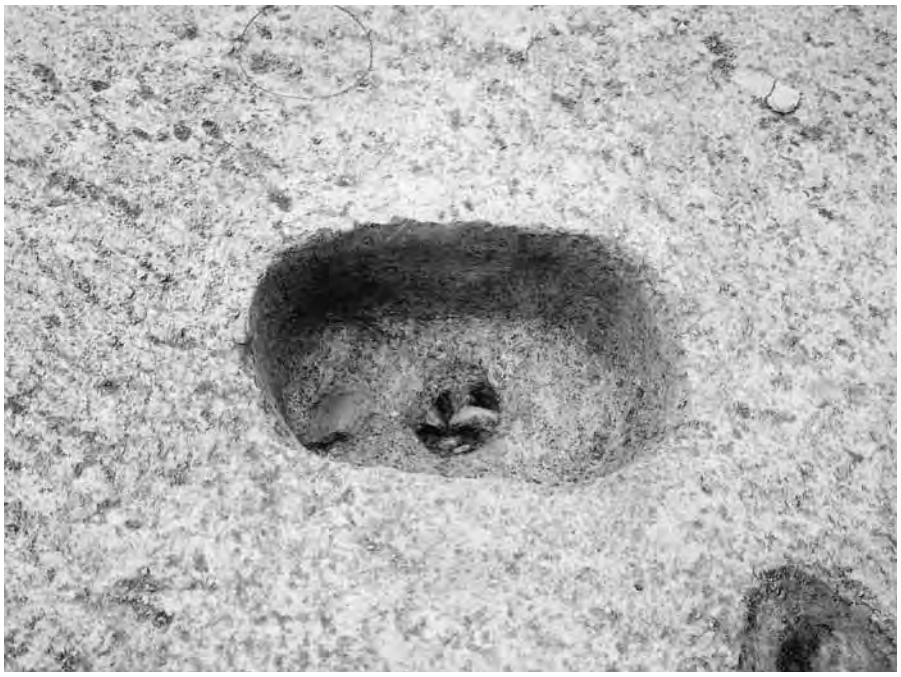
4　下層グリッド 6（西から）

5　遺跡出土石器

1　荒堀山田原遺跡の立地環境（東から）

2　荒堀山田原遺跡の立地環境（南西から）

3　調査区全景（上が西）



1　1 号土坑（南東から）

2　2 号土坑（北から）

3　3 号土坑（北から）

報告書抄録

ふりがな	いしどうおおいしがまるのひむろ、ふくまなきりこふんぐん２じ、なかむらにしみねおいせき、なかむらやまがきいせき２じ、しょうえくろべいせき、かわちしものぞえいせき１・２じ、おおむらうえのじいせき、あらほりやまだばるいせき
書名	石堂大石ヶ丸の氷室、福間菜切古墳群２次、中村西峰尾遺跡、中村山柿遺跡２次、松江黒部遺跡、川内下野添遺跡1･2次、大村上野地遺跡、荒堀山田原遺跡
副書名	福岡県築上郡築上町・豊前市所在の遺跡
シリーズ名	東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	15
編著者名	小澤佳憲（編）、新原正典、秦憲二、城門義廣、藤島志考、大森真衣子、細石朋希
編集機関	九州歴史資料館
所在地	〒818 － 0118　福岡県小郡市三沢 5208 － 3　（Tel：0942-75-9575,　Fax：0942-75-7834） HP：http://www.fsg.pref.fukuoka.jp/kyureki/
発刊年月日	2014 年（平成 26 年）3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
いしどうおおいしがまる 石堂大石ヶ丸の氷室	ちくじょうぐんちくじょうまちいしどう 築上郡築上町石堂 156-8	40647	－	33°37'55"	131°4'1"	20110920～20110926	200㎡	高速道路建設
ふくまなきり 福間菜切古墳群２次	ちくじょうぐんちくじょうまちいしどう 築上郡築上町石堂 1835-1、1836-1	40647	940130	33°37'50"	131°4'18"	20100525～20100824	1000㎡	高速道路建設
なかむらにしみねお 中村西峰尾遺跡	ぶぜんしなかむら　ちくじょうまちうえのかわち 豊前市中村 289-1、291-2、292、295、297-1、298-6、299-1、築上町上河内 721-3	40214	－	33°37'25"	131°4'35"	20091221～20100330	15000㎡	高速道路建設
なかむらやまがき 中村山柿遺跡２次	ぶぜんしなかむら 豊前市中村 141-1、151-1	40214	150014	33°37'17"	131°4'39"	20101208～20110120	700㎡	高速道路建設
しょうえくろべ 松江黒部遺跡	ぶぜんししょうえ 豊前市松江 1823	40214	－	33°36'42"	131°5'24"	20110901～20111012	600㎡	高速道路建設
かわちしものぞえ 川内下野添遺跡１次	ぶぜんしかわち 豊前市川内 3434、3435-3、3436-2、3447-1、3451	40214	－	33°36'22"	131°5'48"	20110118～20110315	3100㎡	高速道路建設
かわちしものぞえ 川内下野添遺跡２次	ぶぜんしかわち 豊前市川内 3450	40214	－	33°36'20"	131°5'48"	20111214～20120309	500㎡	高速道路建設
おおむらうえのじ 大村上野地遺跡	ぶぜんしおおむら 豊前市大村 2213-1、2214-4･5、2222-1	40214	－	33°35'52"	131°6'57"	20110425～20110630	1100㎡	高速道路建設
あらほりやまだばる 荒堀山田原遺跡	ぶぜんしあらほり 豊前市荒堀 128-2	40214	－	33°35'39"	131°7'8"	20101125～20101221	1000㎡	高速道路建設

所収遺跡名	種別	おもな時代	おもな遺構	おもな遺物	特記事項
石堂大石ヶ丸の氷室	生産	近世～近代	氷室	なし	氷室出土
福間菜切古墳群２次	埋葬	古墳時代後期～飛鳥時代	群集墳	須恵器・鉄器 土師器	鉄鏃・鉄斧ほか出土
中村西峰尾遺跡	集落	縄文時代前期	土坑	縄文土器	―
中村山柿遺跡２次	集落	平安時代後期～中世前期	掘立柱建物跡	須恵器・土師器 陶磁器	―
松江黒部遺跡	その他	不明	ピット群	なし	遺跡の性格不明
川内下野添遺跡１次	集落	平安時代～中世	竪穴住居跡 掘立柱建物跡	須恵器・ 瓦器・陶磁器	青磁・灰釉陶器出土
川内下野添遺跡２次	集落	平安時代～中世	竪穴住居跡	瓦器・陶磁器	青磁出土
大村上野地遺跡	不明	不明（縄文時代か）	土坑	打製石器	遺跡の性格不明
荒堀山田原遺跡	生産	不明（縄文時代か）	落とし穴状土坑	なし	―

調査の概要	**石堂大石ヶ丸の氷室**	時期不明の氷室を１基調査した。
	福間菜切古墳群	7 世紀後半前後の小円墳を３基調査した。
	中村西峰尾遺跡	縄文時代前期の土坑・ピット群を調査した。
	中村山柿遺跡２次	中世初期の集落を調査し、掘立柱建物跡４基などを検出した。
	松江黒部遺跡	時期不明のピット群を調査した。
	川内下野添遺跡 1･2 次	古代（9 世紀）～中世初期（12 世紀）の集落を調査し、竪穴住居跡 13 基、掘立柱建物跡７基などを検出した。
	大村上野地遺跡	時期不明の土坑・ピットを調査した。
	荒堀山田原遺跡	時期不明（縄文時代か？）の落とし穴状土坑を３基調査した。

福岡県行政資料	
分類番号 ＪＨ	所属コード 2117104
登録年度 25	登録番号 008

石堂大石ヶ丸の氷室、福間菜切古墳群第２次、中村西峰尾遺跡、中村山柿遺跡第２次、松江黒部遺跡、川内下野添遺跡第１･２次、大村上野地遺跡、荒堀山田原遺跡

―福岡県築上郡築上町・豊前市所在遺跡の調査―

東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告（15）

平成 26 年 3 月 31 日

発行　九州歴史資料館

〒 838-0106　福岡県小郡市三沢 5208-3

印刷　片山印刷有限会社

福岡県小郡市祇園１丁目 8-15